

# 奇譚クラス

新しい風俗文献誌

11月号



11-NOVEMBER'66

奇譚クラブ

昭和四十二年十一月号

定価 三五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



11月号 ¥ 350



アルバム「美しい縛しめ」第九集

「女性刑罰拷問特集」『西洋篇』

革具に拘束される女 略号「美9」 一部 一〇〇〇円 (共)

完成ノ好評発売中！

「女性刑罰拷問特集」日本編「略号美5」の姉妹篇として、待望の「革具に拘束される女」特集のグラフィック写真集をここに完成いたしました。真白で豊かな肉づきの女体が、黒光りのする革具、或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられるさまを七十二枚の大小の鮮明なるフォトによって、とつくりとごらんいただけます。

内容  
○T型に縛られた女正面像(くさり、尾錠付革具使用)△三葉  
○皮張椅子に拘束された女(手枷革具くさり付、首、胸、腕、脚、膝、足首固定革具使用)△二葉  
○革製猿轡、革箱口具使用(全身細縄縛、革箱口具使用)  
○皮張椅子に固定仰臥させられた女性のアップ△二葉  
○黒覆面(革製)並に黒革褲(チヤック付)着用、両前手錠及び黒革褲單獨着用△四葉  
○黒革猿轡、首絞め股間括り  
○両手、膝、足首拘束△五葉  
○電気椅子に固定された女死刑囚△四葉  
○口腔検査△三葉  
○女死刑囚の生体実験△一葉  
○黒革覆面直操着用に前後手錠立姿の女△一葉  
○並に同じ姿にての各種ポーズをとる女△五葉  
○革製猿轡、首輪、股間並に膝固定立柱括り前手錠△二葉  
○全身革具に固定される女の正面背面仰臥姿△十二葉  
○貞操帯着用にて黒革製長椅子に仰臥固定される女△四葉  
○牛革製箱口具、股絞め、股間固定全身拘束に呻く女△五葉  
○首輪、両手枷、両足枷を鎖で繋かれた女△一葉  
○牛革具に拘束された女性の正面背面側面各種姿△七葉  
○首輪、両手枷、両足枷に鎖をつけられて引回される女△三葉  
○貞操帯を着けた女△二葉  
以上

限定版グラフィック印刷M結集版アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇〇〇円(送50円) 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラフィック写真集

待望久しく、今回初めて刊行されるM派ばかりの限定版グラフィック写真集です。今迄熱心なファンの方々が強く要望されていたのが、従来例ではM傾向の需要が極端に細いので、刊行を躊躇しておりました。初の試みとして企画したものであります故、どうか一冊お求め下さい。全部M傾向のものばかり結果しております。今迄、本誌の男性モデル募集に応じたきた男性モデル諸氏を駆使して、それらM男性が女王様に奉仕し飼育される生体のかずかずを豊富な写真資料によって提供します。いずれも本限定版写真集刊行のために特に撮影したものに、更にM傑作フォトの秘蔵版を収載したもので、未発表の作品ばかりです。印刷部数が限定されており、早割、売切れになります。一旦売切れになりますので、本集の再版は不可能です。御承知下さい。

内容

○女御主人様の素足の脂を丹念に舌舐めさせて頂く奴隷男  
○女御主人様が御手ずから奴隷男を縛りあげて弄ぶところ  
○飼犬の男に、女御主人が足の股に食物を挟んで与えているところ  
○そのあとで、足の指を舐めさせているところ  
○首輪をした犬男が、くさりを女御主人様に握られているので、どうにもならず、さんざんに足蹴にされて罵られていくところ  
○女御主人様に縛られて、その上淫囃されているM男  
○女御主人様の大きなお尻の上で呻いている哀れな男の表情  
○女御主人様の激しいムチの下で苦痛に喘ぐ男の恍惚境地  
○二人の女御主人様から、いたぶられる幸福なMモデル志願者  
○女御主人様を背中に乗せて這いずり回る男奴隷  
○女御主人様の飼犬飼育ぶりと調教ぶりABC  
○女御主人様のSぶり発汗と犬男のMぶり発汗  
○女御主人様の豊満な柔肌の重圧に包まれる男奴隷  
一 等々

アルバム「美しい縛しめ」第十集 完成

責められる美女百態

一部 一〇〇〇円(共) 略号「美10」

特アト紙グラフィック印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

「出演モデル」 ○一宮百合子 ○東浦ひかる ○美木乃々子 ○増田みゆき ○木村洋子 ○大塚啓子 ○絹川文代 ○山原清子 ○長野良子 ○玉田美佐子の十名の美女

ビチビチとした若鮎のような美しいモデル達の柔肌に厳しく掛った縄目。これらすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びました。いずれも未発表の力作ばかりです。この一冊にて十名の美女モデルの緊縛姿態一〇〇ポーズが、皆さまのお手元に届くのです。特製アト紙に対する極鮮明なグラフィック印刷の女体緊縛のフ

美しき縛しめ「第十集」責められる美女百態内容

全身緊縛首攻めの場面(東浦) 縄でくぐる豊麗な女身(東浦) 足首で引回される女(東浦) ムチ打ちに悶えぬ女(東浦) 少女羞らしいの緊縛裸像(一宮) 剥がされたパンティ(一宮) 豊麗な無理に晒される(美木) Pタイに転がされる(美木) 逆さ吊りの緊縛女体(増田) インナーベルト縛り(増田) M女性の陶酔の表情(木村) 瘦身に縄にくびれる(木村) 脚線美も露わな女体(美木) 立木の枝から逆さ吊り(木村)

色づいた乳首を晒す(大塚) 全裸後手縛り豊満女体(玉田) 二の腕に喰い込む紐(木村) 鏡に写す縛られた裸身(大塚) 縄目と猿轡にあぐら(東浦) 全裸後手足首連繫縛り(玉田) 長髪をアップにして(長野) 華麗な刺青裸身強縛り(山原) 後手縛りに空ろな表情(木村) 後手縛りに喰い込む縄目(山原) 後手縛りの美女裸体(絹川) 諦観の若々しい裸身(一宮) 片足吊りにあぐら女体(大塚) 後手吊りに喘ぐ全裸身(東浦) 緑の柱に晒された女(玉田)

女ドレイの品定め(大塚) 強烈股間縛りに泣く女(東浦) 初めての縛りに恥じる(一宮) 隣室に見た驚異の縛り(大塚) 乳房の巨大なる縛り(山原) 吊りを嫌がるモデル嬢(玉田) 真紅の腰巻でポーズ(山原) 驚つかみにされた黒髪(東浦) 麻縄縛りにのびた女体(大塚) 開孔器による鼻責め(大塚) エビ責めに耐えぬ女(東浦) 豊麗な黒帯に托して(長野) 雪白の柔肌を晒す縄目(大塚) 人身御供の緊縛全裸像(大塚) 股間縛りに投げ出す脚(一宮) エビ縛りに苦悶の表情(大塚) 伸びやかな二本の脚線(一宮) 滑車後手吊りの準備(大塚) 竹に拘束された洋子嬢(増田) 雑家の縁に縛られた女(大塚) 離れ白肌を晒す全裸身(絹川) 身動きできぬ後手縛り(大塚) 腰巻を剥ぎとられる(木村) 大の字逆さ吊り女体(増田) 美しい裸身からむ(美木) 若肌の手首を晒して(一宮) 浴室の荒縄縛りにあぐら(山原) 股間縛りと腰縄縛り(木村) 緑色の庭を背景にして(大塚) 立木で両手吊りにあぐら(大塚) 縄の反応とその表情(一宮) 強烈縛りである弓反り(大塚) 麻縄は豊かな肌を括る(東浦)



☆特殊趣向の最新撮影フォト分譲品☆

ゴム衣とゴム猿轡

大手札三枚一組 略号△なと 四〇〇円  
木村洋子

ヌメヌメとした総ゴムの黒色ズボンと上衣を全裸の女体に無理強いに着せ、口にはゴム手袋で猿轡を噛ませ、全身黒紐でぐるぐる巻きにしたゴム責めフォト。

ゴム衣緊縛悶悦姿

大手札五枚一組 略号△なへ 六〇〇円  
木村洋子

素肌にくっつき、密着したゴム臭いゴム雨衣、その上を黒紐でぎゅぎゅ締めつけられ、黒光りのする全身をくねらせながら、軋転として悶えに悶えぬ。

黒ゴム衣後手縛り

大手札三枚一組 略号△なほ 四〇〇円  
木村洋子

全身総ゴム製黒色雨具に包まれた全裸の女体は、汗にヌルヌルにまみれながら、両腕は背後にまわされ、両手首から胸にかけて厳しく縛しめに泣く様後手を中心。

首枷手枷に泣く女

大手札三枚一組 略号△みき 四〇〇円  
美木乃々子

極度の拘束を両首と手にはめられた乃々子嬢は、そのつぶらな瞳からぼろぼろと涙を流して、この屈辱

の姿態と不自然な姿態の強要に耐えきれずして泣くのであった。

六尺褌のはじらい

大手札五枚一組 略号△ふけ 六〇〇円  
横尾峯子

十月号のサロン楽我記の末尾に掲載した褌姿が彼女である。白晒六尺褌の前袋もあらわに、きりりと締めあげられた可憐な表情の彼女が全身に羞じらいをあらわす。

双臀に喰い込む褌

大手札五枚一組 略号△ふく 六〇〇円  
横尾峯子

可愛い二つの尻を割って、ぐいと喰い込んだ六尺褌の魅力的な場面を中心に彼女の女らしく色気のあるプロポーションと顔面の表情とをキャッチしました。

前袋をさらす羞恥

大手札五枚一組 略号△ふか 六〇〇円  
横尾峯子

前垂れのない六尺フンドシの締め具合は、前をつき出したポーズによって、ふっくらとふくらんだ前袋がフンドシ愛好の彼女にとって一層恥しく感ずるのだった。

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円

木村洋子 略号△めあ 五〇〇円  
愛玩用の牝犬は御主人様の命令に従って、のびのびと人様の調教を受ける牝犬の調教は至って面白い。

たのしい足舐め

大手札四枚一組 略号△めく 五〇〇円  
木村洋子

御主人様の汗ばんだ塩からい足指、足の裏をペロペロ舌を伸ばして舐めさせて頂く牝犬は、身も心も御主人に心服して一段とマゾ的心理が昂揚して楽しい。

足舐めを強要する

大手札四枚一組 略号△めゆ 五〇〇円  
木村洋子

手綱を引き締めて首輪につなぐれた牝犬の口を引き寄せ、足の指のまたの汚れや足の裏の汚れを舌の先でペロペロと舐めて清浄させる快さは又何をかいわんや。

足舐め訓練の牝犬

大手札四枚一組 略号△めや 五〇〇円  
木村洋子

御主人様の足を上手にお舐めするのには、牝犬に対して、このように、いろいろの訓練を施す必要がある。その有様を興味的に描いた牝犬の訓練風景の一コマ。

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円

木村洋子 略号△めえ 五〇〇円  
部屋の中で飼っている人間の言葉の通じる牝犬を馬に引いて、這いまわし、コップの水を飲ませ、怪をペロペロ舐めさせ、思いのままに愛玩する楽しさは又格別である。

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 略号△あひ 四〇〇円  
一宮百合子

美しい足の持主、百合子嬢のく字に曲った足指の表情を両足首を縄で縛って強調した。最高に絞った絞りで皮膚の微細な質感に至るまで刻明に再現したフォト。

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 略号△あは 四〇〇円  
一宮百合子

縛り上げられた両足首の美しい表情をさまざまな角度から写した三十数枚の写真の中から百合子嬢の若々しい特徴を最もよく表現したものの三枚を選びました。

足を縛られる快味

大手札三枚一組 略号△あふ 四〇〇円  
一宮百合子

殊更足にだけ狙いをつけてカメラを向けると、多くの女性は羞らを見せるものです。一宮百合子も極度の羞恥を爪先に見せて、それが一層の美しさと色気を現しているばかりでなく快感をさえ覚えているのだ。



昭和四十一年十一月号

＜第20卷第11号・通刊第220号＞

奇譚クラブ 11月号 目次

◇奇クサロン

貴一郎て女ル一隆画○死  
 めい浩斗斗を検集霊  
 フれ21彦彦志室珍(12)ハ  
 ズみ○(20)願井診ハリ  
 オト○(18)し並台の祟  
 ト……部可(18)秒ツケ  
 ……一○新案責……編  
 ……女……具……集  
 ……の……女……部  
 ……妊(19)の生……だ  
 ……婦より首千小野田映……案  
 ……シリ○ハ夫青順画通信……井  
 ……ズ代婦北1716女編……垂  
 ……理部M斗生○拷問着……砂  
 ……フ○ふん女相摸……路  
 ……オ(18)んどし裸女血斗模……(9)  
 ……カ月○みたどし尿女血斗模……○  
 ……女……導尿される女血斗模……「  
 ……のせりと市やっ高生へのあこがれ……  
 ……増田喜朝立ち……病  
 ……ブレ代司……小  
 ……レイ通信(22)……院  
 ……信……新妻の……に  
 ……○沼田青市竹

△ 本文 ▽

鬼六談義	三文マニヤ文士	団	鬼六
続・跨がる女性	鞍	良人	(26)
痴人の糧	刺青	山本	一章
「七人の花嫁」	牧	高志	(42)
SMカメラ・ハント	(飯塚千鶴子の巻)	辻村	隆
「妖精のたわむれ」	中康	弘通	(54)
切腹研究夜話	西条	操	(71)
長篇サディズム小説	(三)		(76)
心傷たむ遍歴	△女囚ミシュリーヌ▽		
△女相撲物語▽	花の女斗美たち(9)	奮斗士好太	(92)

のおと・あと・らんだむ  
 〈八〉……………千草 忠夫…  
 (104)

モッキンバード……………三原 寛……………(110)

〔告白〕 幼時よりの遍路……………中島 久夫……………(118)

妖奇譚小説 燕巢秘譚……………河津 安春… (124)

SM 諷刺小説 あるスター……………町陽一……………140

マニヤのメモ 映画その他雑感……………黒井 珍平…(山)

侏儒玄想 (こびとふあんたじ) ……夜乃探郎… (15)

あちから脱獄人小説……………黒田  
素……………(15)

連載小説花と蛇 (續篇第二十三回) …… 鬼六 …… 16

齊藤 暉雨 八ノ目  
早木 夢二 (32)

「別稿」2……………保藤久人……………(199)

完結夜話 三本のこより……………島田 啓子……………191

奇譚雜談  
「夜の徒然草」……………中宮  
栄……………(196)

旅館に御注意……………栗瀬  
長……………(200)

小説「天国と地獄」……………岡田 咲子……………207

創作 00の女 …… 山口 広 …… 22

久人フレイ日記の一節より……………高岡 久人……………29

春涉き口には――悪女の手紙(三)……  
 福集 邪異三 (47)  
 春日 久文 (2)

讀者通信



# ☆増田みゆき夫人妊娠七カ月作品分譲

## 待望の妊婦フォト撮影

十月号の奇クサロン『編集部だより』にて発表しました通り、増田みゆき夫人が妊娠されました。七月一日で五カ月、八月一日で六カ月、九月一日で七カ月に入りました。その夫人の妊婦の撮影を実施しました。すでに臨月腹に近づいたこと、大きくなったこと、臨月まで各月に亘って撮影の上、マニアの皆様に分譲したいと思っております。増田御夫妻の快諾を得ておりますので、ここに第一回作品として七カ月の魅力的な妊娠腹のフォト発表を試みました。鮮明な印画紙焼付の妊婦写真を御鑑賞下さい。

## 膨隆七カ月腹鑑賞

大手札五枚一組

六〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

七カ月にしては予想外に膨れ上った便々たる腹部を鮮鋭なピントのレンズによって正面、側面とカメラアングルを変えて十分マニアの方に鑑賞して頂きます。

## 七カ月腹の妊娠線

大手札五枚一組

六〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

むくれ上った臍を中心として、

まんまるく膨くらんだ腹部に、あざやかな妊娠線がありありと見受けられるのを、絞りきったレンズで刻明に印画紙に再現しました。

## 豊かな乳房と腹部

大手札四枚一組

五〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

むっくりと盛り上った乳量も見事な乳房とドツジボールのようにまんまるい腹部に狙いをつけて、これこそ妊婦の乳房と腹部だと、その特徴を殊更誇張しました。

## 後手縛りの妊婦

大手札四枚一組

五〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

乳房の上下から二の腕を括り更に両手首を背後で縛り上げると、一層腹部が突き出されて大きく見える痛々しい妊婦縛りの貴重な文献資料として提供します。

## 全裸身妊娠腹鑑賞

大手札二枚一組

三〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

便々たる腹をでんと突き出して一糸まとわぬ裸身をさらけ出した鑑賞用妊婦みゆき夫人の全身を各角度から皮膚のヒダに至るまで刻明に描写しました。

## 首枷手枷の妊婦

大手札三枚一組

四〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

肩で息をする妊婦に、厚い桎梏の首枷手枷をはめた、奇妙で異常な晒し者に対して非情なカメラアイは執拗な視線を、舐めるようにみゆき夫人の全身に這わした。

## 七カ月妊娠腹大写真

大手札四枚一組

五〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

見事にふくれ上ったボールのような七カ月腹を手にとるように目の前で眺めると同じ身近かきで、貴重な腹部を大写真で、妊婦ファンの方々にごらんに入れます。

## 乳房強調菱縄縛り

大手札四枚一組

五〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

お腕を伏せたような乳房のポリウムを更に一層増すため縄で締め菱縄を形成すれば、異常に膨くれた腹部の上で双の乳房がむんむんと弾みをつけて威容を誇る。

## 膨満腹部強調縛り

大手札四枚一組

五〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

半球型の腹部のまわりに縄を掛け背後から回ってきた縄で締めあげると、腹がしばられるように突

き出て、一層その大きさを見事にせりだしてくるのだった。

## 緊縛猿轡妊婦虐待

大手札五枚一組

六〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

上半身はきびしい高小手縛りに加えて豆しぼりの猿轡が七カ月の妊婦の口に噛まされる。只さえ息苦しい妊娠中なので大きな腹を波うたせて喘ぐのだった。

## 妊婦腹誇張しぼり

大手札四枚一組

五〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

単なる妊婦フォトではなくて、巨大に膨れあがった妊婦腹に惨酷な縄目を加えることに興味を抱かれる方に捧げるために縄目と大きな腹部に狙いをつけました。

## 動物的妊婦の生態

大手札四枚一組

五〇〇円

増田みゆき

略号Aにひく

万物の霊長たる人類の女が、最も動物的になる妊娠中の記録を、まゆみ夫人に代表して貰って四種のポーズに収めました。生々しい妊婦の生態を御鑑賞下さい。◎以上発表しました通り今月の新版十二組は二度と得難いまゆみ夫人の初産の詳細な記録です。必ず貴重な資料として珍重されることと思ひます。





## 死 霊 の 崇 り

編 集 子

昭和十八年秋、私は南方派遣占領地軍政要員として、赤道直下の南の島に赴任していた。現地語が話せるところから、治安警察民情産業などの調査のため、朋輩と二人で長期出張を命ぜられ、四十日に亘って県庁郡庁郷町村役場の視察を終えてOYAという或る小さな町へ到着した。密林の強行軍で二人とも疲れ果てていた。

しかし、この町には日本人は誰一人住んでいなかった。嘗て白人の官吏が住んでいたというバンガローへ泊ることにした。百米四方緑の芝生をめぐらした中央に

瀟洒な白壁の建物があり、そのまわりには目ざめるようなカンナの花が咲き狂っていた。

三十人は入れそうなホールに食事を運ばせて二人で夕食をとり、ブリヤンの樽に貯めた天水でマンデーをした。食事の世話が終ると連れてきた現地民官吏に通訳や人夫、それにこの郷庁の役人は挨拶もそこそこに帰っていった。窓から眺めると国旗掲揚台から一人の男(多分郷庁から派遣された下級官吏だろう)が日の丸の旗を下しているところだった。

嘗てはあの旗竿にユニオンジャ

ツクの旗が翻っていたのだと思うと感慨無量だった。私達はその屋敷を見て回り、それぞれ一番立派な向い合せの部屋に陣どった。英本国から運ばせたのだろうか、どっしりとした重厚なダブルベッドが部屋の片隅にあった。スプリングのよくきいたマットに寝た。

暫くして私は急に得体の知れない陰気なムードに襲われた。そして外部で人の話し声のような或は開き戸が風にあふられているような物音が聞えてきた。私は軍刀を腰に、拳銃の安全装置をはずして廊下へ出た。向いの部屋の朋輩に訊ねると、彼も怪しい物音を聞いたという。二人で物音のした渡廊下へ向った。渡廊下から空を見上げたが、晴れた夜空には星が銀砂を撒いたようにきらめいているばかりで、そよとも風はなかった。

渡廊下の先は、一段下って料理人、ボーイ、下男下女など使用人の宿舎であるが今は誰も住んでいないので、各部屋はびったりと扉を閉ざしたままである。何の異常もないので、寝室へとって返えして横になると、再び先と同じような怪しい物音がする。二人で再度階下の部屋部屋に至るまで調べたが何の異常もない。しかし、各人の部屋へ帰ってみると、再びあの異妖な人声と物音がする。

余りにも気味が悪いので、互いに誘いあって一つのダブルベッドで寝たが、あの不気味な物音は依然として止まなかった。

寝苦しい一夜が明けた翌朝。広間へ朝食を運んでいた一人のジョングスを物蔭へ呼んで「夜中に変な物音がしたが此の家に何にかあるのか」とマライ語で尋ねた。その男の返事が「やっぱり Hantu が出ましたか」だったのには驚かされた。よく聞いてみると、前に住んでいた白人が、自分の妾にしていた中国人の娘を邪魔にして騷り殺しにして以来、夜になると変な物音がするようになったというのである。何故昨夕のうちにそれを言わないのだと叱ったら、日本人の旦那だから、お化けも出ないだろうと思ったと笑っていた。

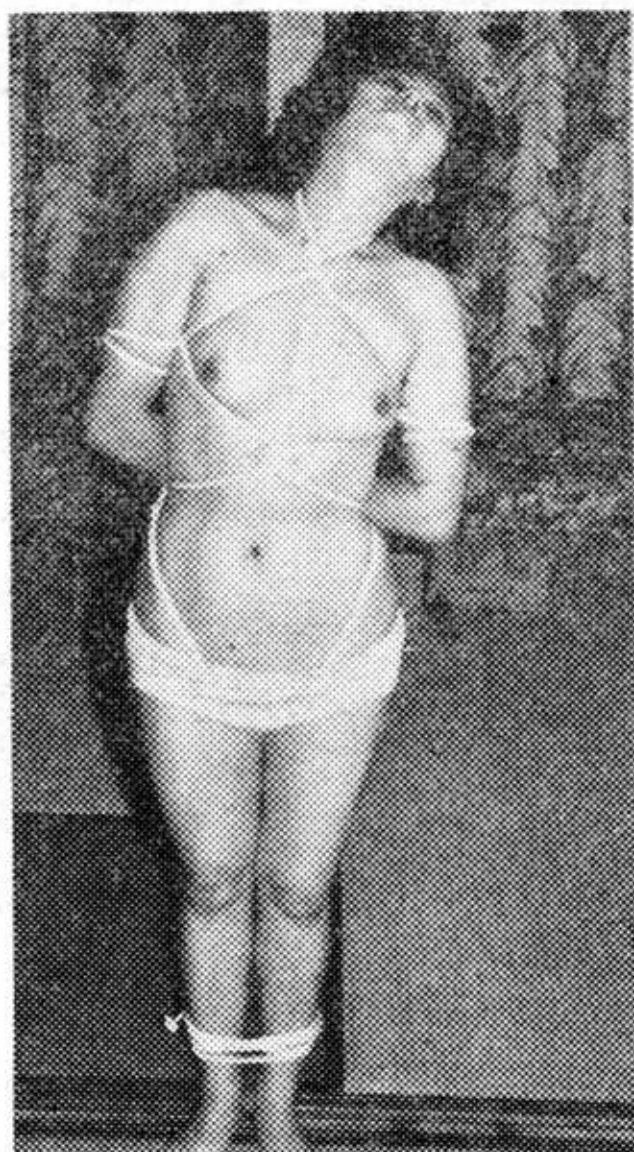
その娘がどんな殺され方をしたのか、その白人はどうなったか、聞いてみなかったが、何ら関係のない日本人官吏である私達にまで娘の死霊が公平に、妖異を見せてくれたのには、いささを途惑った感じだったが、それにしても、二十何年も経った今でも、ありありとその時の事を覚えている。



「宴」  
うたげ

その一

夏目 高



八月初旬私達夫婦は二二時間余の汽車の旅を経て北陸のある町にS夫婦を訪問しました。駅頭にはS氏が出迎えてくれることになっています。「手にカメラを持っている」という連絡のとおりS氏は背広姿で肩からカメラをさげてホームに立っていました。手にカメラを持つというありふれた指定でしたが二年余にわたる文通によって私の脳裏には既にはっきりS氏のイメージが焼きついており、特急列車から降りたホームの混雑の中でも一目で見つけ出すことが出

来ました。S氏の方でも同様らしく私達は何の躊躇もなく挨拶を交わすことが出来たのです。

この地方は異状低温とかで気温が低く、連日三五度を超す暑さの土地から来た半袖開襟シャツ姿の私達夫婦には本当に涼しく感じられました。

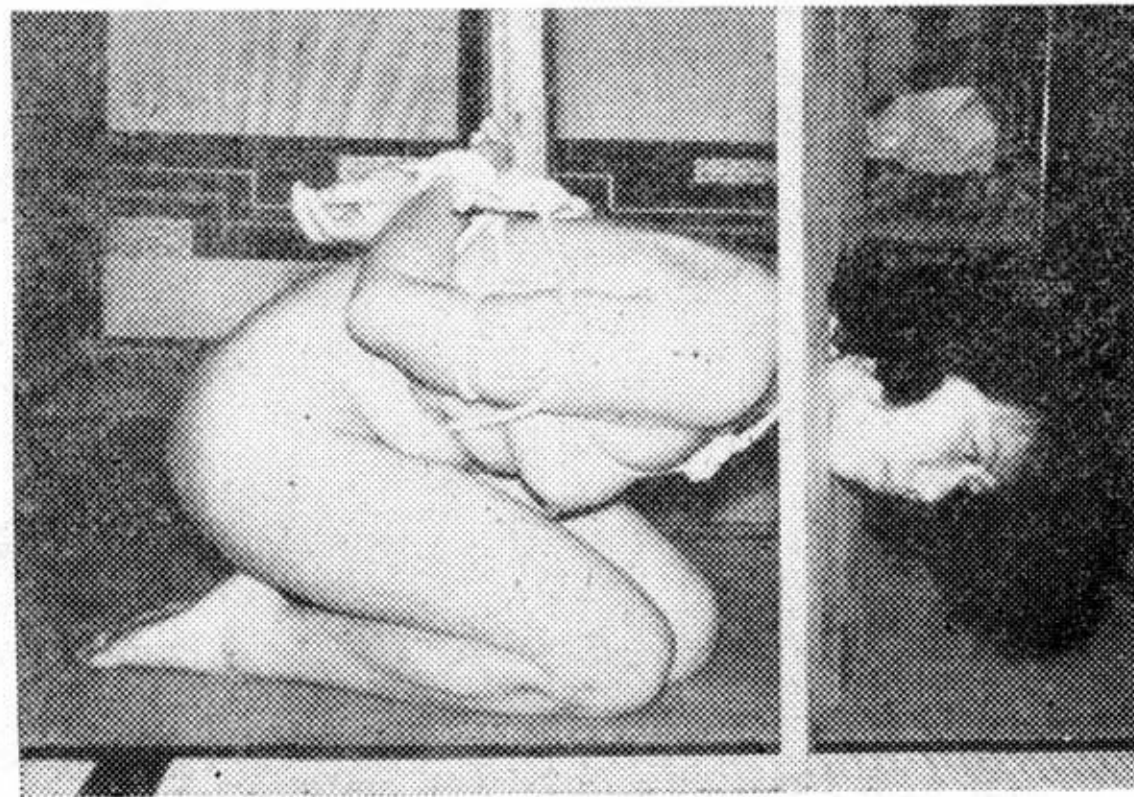
駅からタクシーで約十五分、メーターは四二〇円を指していました。私達がS氏宅の玄関を入りますとS夫人がにこやかに出迎えてくれました。私の妻と同年輩の夫人（後に聞いたところでは生年月

日も妻と二日しか違いませんでした）は、これ迄のプレーフォトの交換で充分承知していたのですが期待していた通り屈託のない明るい顔立、ナイーブな髪形、大きな丸い目が印象的な美人でした。

長い心置きない文通の為か私達は初対面の挨拶から交わす言葉は少ないながらもすっかり打ち解け私自身も余所の家にお邪魔しているという気持ちも少なく、入浴、夕食と続く間にS氏の二人のお嬢ちゃんともすっかり仲良しになりました。しかしながら、この間、私とS氏は今夜これからのSMプレーについて、まだ一言も打合せをしていないのです。

私達夫婦がS氏宅を訪問するについてはいろいろの起伏がありました。S氏が手紙の中で二組の夫婦による交換プレーの構想を（宴）と題

して長いストーリーにまとめて書いて来られたのは、もう一年近くも以前のことでしたらうか。当時私は単なる構想として面白く読みそれに対して私も同じテーマで交換プレーをまとめてS氏に送りました。この当時は私自身これが実現されるなどとは思っていません







# 僕のイメージ画集「ハリツケ」

室井亜砂路

白々と可憐な裸身を晒して鴨居にハリツケられている綾（アヤ）は、十六の春、親の借金のカタに泣く泣く行儀見習とは表向き、内実は妾（メカケ）奉公で、この質屋の家へ住込まされ

それ以後私とS氏の文通はこの（宴）を中心に発展し、やがて何とかして実現出来ないものであるうかという方向に進みました。そして今年の六月に入ってから、S

氏の方の都合も考えて、いよいよ私達夫婦がS氏宅を訪問するということにしばって検討することになったのです。

ところが、ここで問題となるのは妻の意見であり、これが一番重要なポイントになるのです。単なる緊縛プレーでさえ、なかなか思い切れなかった妻に交換プレーを押しつけることは無理かと迷っている内、日時の切迫などからS氏に最終的な返事を求められたのです。私としてもS氏との間にこれまでお互いの気持が盛り上り、S氏夫妻の人柄もおぼろ気ながらわかった以上躊躇すべきでないと考え、逡巡する妻の意見を抑えて実現に踏み切ったのでした。（S氏の方でも同様、夫人の逡巡があったことを聞きました）

ここで簡単にS氏と私の間に交わされた宴計画（交換プレー）について簡単に説明しますと、二組の夫婦が隣合った二つの部屋に別れ（この場合、旅館の隣合った部屋を想定します）それぞれ自分の妻を全裸にした上、軽く後手に縛り、その上に浴衣を着せて腰紐を結び両部屋の間でお互いに妻を交換するのです。そしてそれぞれ相手の奥さんを伴って自分の部屋

にもどると後はその奥さんを対象に一对一のプレーに入るのです。カメラによる撮影は勿論のこと、雰囲気によってはSEXにまで及ぶことも覚悟しなければなりません。この場合、体内への射精だけは避けるという唯一つの制限がつけられています。ですからそれ以外の縛り、吊り、処刑、責め等は男性のリード次第ということになり、一定の時間が経過すれば二組が一部屋に集り女二人の連縛も考えられているのです。

そして、この宴計画の実現が決定された前後のS氏からの手紙には第一夜、第二夜、第三夜と別々のプログラムの概略が書き送られて来ました。

S氏宅に落ちついた私達は、お互いにすっかり打ち解け合ったとは云うものの流石にプレーについては云い出し難く、私も進行をS氏に一任した気持で茶の間のテレビドラマを追っていました。やがてお嬢ちゃん達も寝静まり、S夫人が入浴を終え、午後十時を少し過ぎた頃、S氏がつと立上って私の傍に来ると耳許で小声で囁きました。

（未完）



## サロソ楽我記

辻村 隆

(第二十九回)

妊婦ファンの待望久しき、増田みゆき夫人が妊娠した。七月に入って妊娠五カ月という、増田喜代司さんからの連絡と共に若干のフォトが送られてきた。

彼の文によると、妊娠四カ月の終りに悪阻の発作にかなり襲われそれにつれて嗜好も変ってきて、判っきり彼女の妊娠をしたということだった。妊娠四カ月まではさして目立たなかったが、五カ月に入って少し膨らみを覚えてきてフォトになると思って直ちに撮影を開始したらしい。送ってきたフォトは、腹部を前と横から撮ってあって、おへその辺りにビニールテープを貼りつけて月日と妊娠月をマジックインクで書いてあった。

この調子で六カ月から十カ月まで順序を追って毎月撮ってゆき、臨月までの記録を発表したいと云っていた。出産予定日は来年の一月三日頃だそうであるが、危うくヒノエウマを避けて翌年に廻したあたり、仲々芸が細かい。

臨月が十二月であるだけに、危ない橋渡りであるが、かねてのお

約束通り、もう少しみゆきのおなかが大きくなったら、いつでもカメラ・ハントに来て下さいと書いてあった。これでどうやら、瀬沼四郎氏等にもお約束が果せそうである。妊娠中のみゆき夫人の御無事を心より祈ると共に、又とない得がたいチャンスに遭遇した喜びに、私は早速折返し彼あてに返事を書いて、あれこれとアドバイスすると共に、妊娠フォトの継続した、緊縛のプレイフォトを依頼した。彼は彼なりに、妻の妊婦シリーズを書くつもりですといっているが、大いに期待している。

× × ×

「花と蛇」の続篇で、タイトルを換えて「骨まで縛って」という団鬼六氏シナリオの映画が大阪でやっていると連絡があつて、早速覗きに行くつもりだったのが、雑用に取り紛れて、明日こそはと思ううち終ってしまった。続篇と銘打つても、全く新しいものだそう縛りも最後のシーンにチョッピリという話。

箕田氏を誘って、打合せのあと

見にいったのは「拷問」と「裏切りの季節」の二本立。前者は前回に引続き小森白監督のパートカラーで新日本拷問史のサブタイトルがある。三つの物語りから構成されていて、第一話は人柱の宙吊りと女問者の凄惨な逆吊り、宙吊りのはりつけと釜ゆでが出てくる。第二話はキリシタン哀話で吊りの蛇貴め、女牢名主の吊り責め鞭打ち、最後は股裂きの刑。第三話は姦通もので男女の吊り責め、耳、鼻、両手、両足、胴斬りのバラバラと刑罰の責めがカラーで網羅してある。箕田氏と並んで固唾をのんで唸った。奇クファンにとっては見逃せぬ一篇である。

「裏切りの季節」は若松孝二プロの所謂エロダクシオンものだが、純然たるSM映画だ。何でも元日活の助監督を起用して作つたらしいが、その種の映画にしてはストリー難解。

ピンク映画ではかなり売れている谷口朱里を全裸にして、ほんの数秒だがデルタ地帯をストリートに瞬間パツと見せる。ベトナム帰りの報道員が仲間を裏切り、仲間の女から復讐をうけて自滅するというストーリーだが、後手足縛り水責め、宙吊りなど、緊縛シーン

## 編集部だより

○十月号に引続いて今月号の印刷の上りを見てみると、用紙がよくなったせいで殊に写真が鮮明になった。せいぜい、これからは本文中の写真の掲載を豊富にしたい。

○好評のカメラ・ハントでは、可愛い小悪魔のひとり一宮百合子をハントした「涙のしたたり」のハントに成功したと辻村氏から連絡を受けた。多分次号十二月号の誌上を飾れることと思う。

○△男性モデル募集Vの応募者が多くて、一々お返事を出し、お逢いすることも叶わぬまま、一応自分の間打ち切ることにする。いずれ新しく募集する必要のあるときは誌上で広告する故宜ろしく。

○最近投稿が非常に多く、嬉しい悲鳴を挙げているのだが、度々のお願ひにも拘らず依然として横書き原稿の多いことはどうしたわけか。読者通信では文句なしに没にしているのだが、告白なんかで惜しい作品が混っているのは残念である。

○読者通信といえ、近頃は投稿が多くて毎月文選したまま、棒組





&lt;妊婦フォト&gt;

綾研二提供

がふんだんに出てくる。『拷問』がそのものズバリの責めの連続なので、少々影が薄かったが、これだけを見た場合結構SMファンは堪能するだろう。

エロダクシオンも制約が多く、最近急激にSMに活路を見出し始めた。若松監督の次回作『胎児が密輸するとき』も、SMに終始する作品だそうだが、その傾向大い

に結構としても、やがてそうしたSM路線がにらまれ出すと、そのトバッチリで奇クもソバツエを喰うのでないかと恐れる。痛し痒しの風潮である。

### 短歌「検診台」 高村初子

うなだれて縄尻引かれてもだえつつ検診台に引き立てられぬ

検診とつげられいたく身もだえぬいかにもがけど無駄と知りつつ

一切の着衣はがれてうしろ手にいましめられつつ検診のため

不気味なる足のせ台の前に立つ後手のまま頬染めている

きれぎれに洩れくる悲鳴検診をうくる娘かわれはおののく

無理強いにかかえあげられあさましき姿にされる検診台に

腰おおう布みながれもだえつつ検診体位にくくられゆきぬ

もがくとも無益と知れどあらがいぬ検診台にのせらるるとき

あきらめて台にのぼれど突き出たる足のせ台に顔をそむけつ

つきいでし足のせ台の間よりみだらの視線肌につき刺す

みの組み置きが溜ってくる始末である。冗漫なものは削除したりして出来るだけ件数を多く載せたいと考えている。しかし読者通信は広告ではないので金員を添えて是非にと言われる方があっても御希望にそい得ないことがあるので、この点御諒解願っておく。

○十月号にて本誌増頁に際し、愛読者の方々から、内容について種々の進言を受けた。いずれ順次実現してゆきたい。その他モデル嬢の後援会とか座談会、或は撮影会などの御希望があったが、現在実施しているもの以外、新しく誌上に広告するという企画はない。目下のところ、雑誌内容の充実と確実な発行を第一目標としたい。

○編集者に対する面談、文通のお申込みが甚だ多く、極力御希望に応えるよう精一杯努力してはいるのだが、なにしろ件数が余りにも多すぎるため、充分御期待にそえないことをお詫びしたい。

○秋冷の候を迎えて、いよいよ写真撮影の好シーズンである。本誌協力の美女モデルの応援を得て、素晴らしい作品を続々作成しようとする写真部も張りきっている。いづれニューフェイスの新しい姿態が誌上にお目見えするだろう。



女の下着

栗瀬 長

「ガードルが、なかなかはずれなくって困っちゃった」

「道理でやけに長いと思ったよ。もれちゃっただろ」

「いやーん、馬鹿。ほんの少し」「それみろ、我慢しすぎるからだぞ」

ガールフレンドとドライブした折、おしっこというから、人気のない林の中でしてしまえとすすめたのに、恥づかしいといって、とうとう次のドライブインまで我慢してしまった折の会話である。

女が靴下を何で止めるかということとは、なかなか重大な問題らしい。駅の柱のかけで、ビルの谷間の、一寸ひっこんだ所で、スカートの下に、そっと手をやって、ごそごそかみこんでいる女は、さがってきってしまった靴下どめを一生懸命直しているの図だ。かといって、あまり靴下どめをきつく締めてしまうと、血行を悪くするばかりか、温泉や銭湯に入った時はつきりと太股にゴムのあとがついてしまう。

そこでガーターで靴下をつるわ

けだが、あの出っ張っている大きなお腹を、形よく引っ込ませてみせるために、更にコルセットをはくわけだ。それを一緒にやってしまおうというので、ガードルを使うのだが、靴下どめとコルセットが一緒になっているので、どうしても大急ぎの時、容易にはずれなくなってしまう。

「少し洩らしちゃったのよお」と相成るわけだ。

そこで考案されたのが三角パンティという代物だそう。胸の入る部分と、太股の入る二つの部分と同じ大きさに出来ているから、どこからはいてもかまわない。

而も、一番汚れる部分は、きまつているから、これをくるくるまわしてはけば、三回の洗濯が一回で済む。若し、裏がえしに使用すれば何と六回分だというから恐れ入る。いささか不衛生な話だが、パンティマニアなら垂涎おくあたわざる所だ。

女の子のパンティは、普通ゴムで胸の部分と太股の部分がピッチリと締めつけられているのがあたりまえだ。ゆるゆるしていたんでは気持ち悪からうし、大体スタイルが悪くなる。にもかかわらず、案外、ゆるんでいる場合が多いという。

太股が太すぎると、立ったり座ったりする時痛いので、少しゆるめておくのだそう。逆にやせすぎの子は少しぐらいゆるんでもめんどくさいというので、別にわざわざゴムをつめようともしないらしい。

ヒップの大きな子は踏んで用を足す際にパンティの上げ下しで、どうしても胸の部分がゆるんでしまう。スタイルを気にしながらも、どうにもままならぬものらしい。

ところが、太股の部分のゆるみには面白い現象があるらしい。というのは左側太股の部分がゆるんでいるというのだ。つまり、おしっこをする時、下すのがめんどくさだとばかり、右手でぐいと引っ張

僕のイメージ画集

室井亜砂路



ってするからたまらない。色気のない話だが男だってその通り、女の子だけが、全部下すとは限らない訳だ。

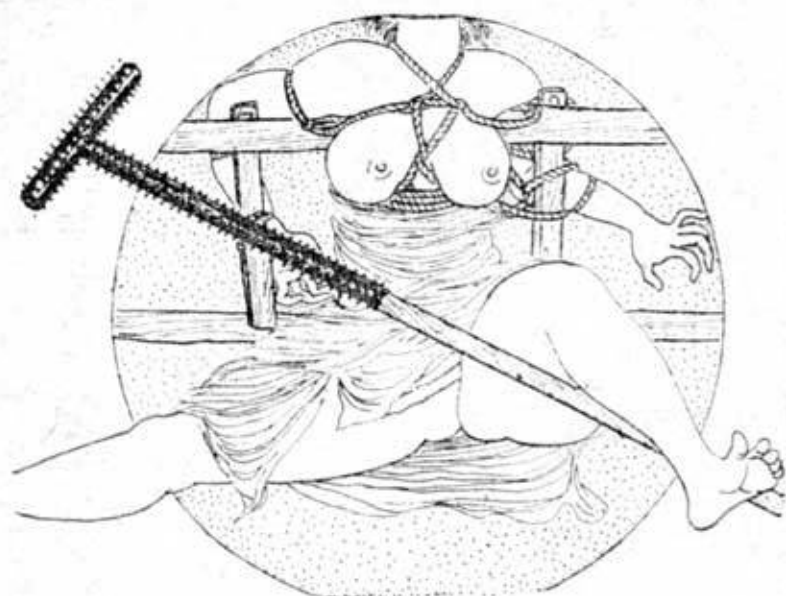
右の太股の部分がゆるんでいる子は、ボーフレンドとの関係がただならないというのは、少し突っ込みすぎているかも知れない。ど



## 映画通信

## 「拷問」より

居眠愚太郎



ういう訳か、男の子は右から女の子を攻撃するというが、真偽の程は知らない。  
ドライブインでの食事が長くな

った。  
「今度は少し長いぞ。今のうちにもう一度おしっこしとけよ。我慢しとくと、あわてたって、スラッ

クスのチャックがふるえて、なかなかはずれないぞ」  
「そうね、しとくワ」  
素直にトイレに入っていた。

食後の一服が実にうまい。どれ、そろそろ目的地に向って愛車のブルーバードを走らせるとするか。

題名の通り縛り責め中心のすばらしい映画であった。又縛りや責め場面になると天然色に変わるので肌に食い込む縄目、肌色の変化、汗などが鮮明に写しだされて迫力は満点。

ある屋敷で女忍者が捕われ拷問を受ける。ここでカララーに変化真赤な腰巻一枚のまま逆さ吊りにされ、青竹でビシビシ打たれる本格的な責め、しかし白状しないため両手足を、大の字に大きく開かされたまま竹に縛りつけられ天井から吊り下げられる。

女が豊満な体をしているため肌に食い込む縄は深く肌をくびり苦痛を増している。苦しそうな女の顔、にじみ出る汗、写真では味わえない映画だけの持つ動的緊縛感。

次はキリシタン女を加えた牢内でのリンチ、責めである。キリシタンの嫌いな女囚頭は、キリシタン女を挨拶がわりとして汚れなき尻を板切れで、バシッ

バシッと打たせる。ここでは女囚のうめき声と女が女を責めるといふところが見物である。又女囚頭にさからつたため、顔だけを出したままフトン蒸しにあり、更に壁に逆さに立てかけられている女囚朝迄そのままにされておくと死んでしまうそうである。これを見かねたキリシタン女が、この女囚を助けようとするが、発見され自分も責められてしまう。

キリシタン女は、両手をバンザイの形で腰紐で縛られ、板切れの角で乳房や腋などをゴリゴリとこじる地獄責め。フトン蒸しの女囚は壁から降ろされたものの、両手足の不自由なまま汚れて真黒なゾウキンを顔にのせられ、うんうんうなるが、他の女囚達は知らん顔して寝てしまう。このため、この女囚は翌朝死体となり、女囚頭が殺人の容疑で責められる。

白の囚衣姿で後手に縛られ天井から吊られて下から棒で打たれるが、さすがに女囚頭、白状するど

ころか役人に反抗するので、最後には体を水平に吊られたまま、床へ一気に落され、胸を強く打って気絶してしまう。

キリシタン女は改宗をしないため、遂に処刑されることになる。刑場までは裸馬に後手のまま乗せられてゆく。そこで改宗を再び迫られるが拒絶する。今度は半裸で後手に縛られムシロに寝かされ、目隠しをされる。そこへ二頭の馬から引いてきた縄が、女の左右の足に結ばれる。馬が動き縄がピンと張る度に、それにさからうように女の胸がグッと盛り上がり苦しうに喘ぐ。しかし役人の一声とともに、女は馬に引かれて燃えさかる炎の中に悲鳴とともに消えていった。

今回の映画は、日本拷問刑罰史の続篇であるが、前回のものに比べて責められる人物のほとんどが女であったことが、何よりすばらしく思えた。



## 女性モデルを志願します 小野田順子

初めてお便り差し上げます。私

は或る美容院で見習をしている十

九才の女性です。四国の伊予三島市が国なのですが、両親に早く死に別れ、一番上の兄の家で厄介になつて中学校を卒業しました。兄の家はお百姓なので、長く厄介になつてゐることも出来ず、街の製紙工場の寮に住込みで入つておりましたが、手に職をつけておいた方がよいという友達のおすすめで、今の美容院へ見習でやつてもら

いました。御誌は今年の春より読むようになります。御誌は今年第一に八女性モデル募集の文字が私の目の中へ飛び込んできました。夜、寝床の中で考えただけでも胸がドキドキするよ



## 「女相撲」のことなど

奮斗士好太

九月号読者サロン掲載の大塚、東浦両女力士による取り組みの写真は全く素晴らしい贈り物でした。

ふりそそぐ陽光のもと、両嬢の伸びやかな四肢、そして豊満な女体にキリリと締め込んだマワシのほどの良さ、そのあでやかさ、りりしさは、何とも形容のしがたいものです。

両力士の身のこなしも全く本格的なものと思受けられ、はげしい攻防のうちにも女性特有の柔軟な動作がみごとに生かされていて、これまでの修業のほどがしのばれる。力くらべの荒々しい相撲ならば、それは男の相撲と同じこと女力士はあくまでも、きびしいうちに女性本来の優美さをお忘れにならないように（これは蛇足）なお一層の精進をのぞみます。

掲載された写真だけでは、ちょっとわかりにくいのですが気になる点を一つ。大塚嬢のマワシの結び目が正式の結び方と多少ちがっているように見えます。この点は過月のM氏提供による同氏のマワシ姿背面の写真でもわかりますように、正式な結び目は横から見た

場合には、かなり高くかさばって見えるものです。もっともこれはマワシの生地の厚さや固さなどによって差がありますから、大塚嬢のマワシがそんなに厚くなくやわらかい生地のものであれば何とも云えません。ただマワシの美しさは、その背面の結び目がつくり出す緊張感に俟つところが大きいというのが小生の持論なので一言申し上げたわけです。

ところで先日八女力士の拘引というおもしろい新聞記事（もちろん最近のものではありません）を発見しましたのでお知らせします。これは明治二十年十月十二日付の時事新聞に載ったもので、私の郷土新潟県の話なのです。記事は例によって持ってまわった美文調のもので、わかりやすく現代文に直してお送りします。

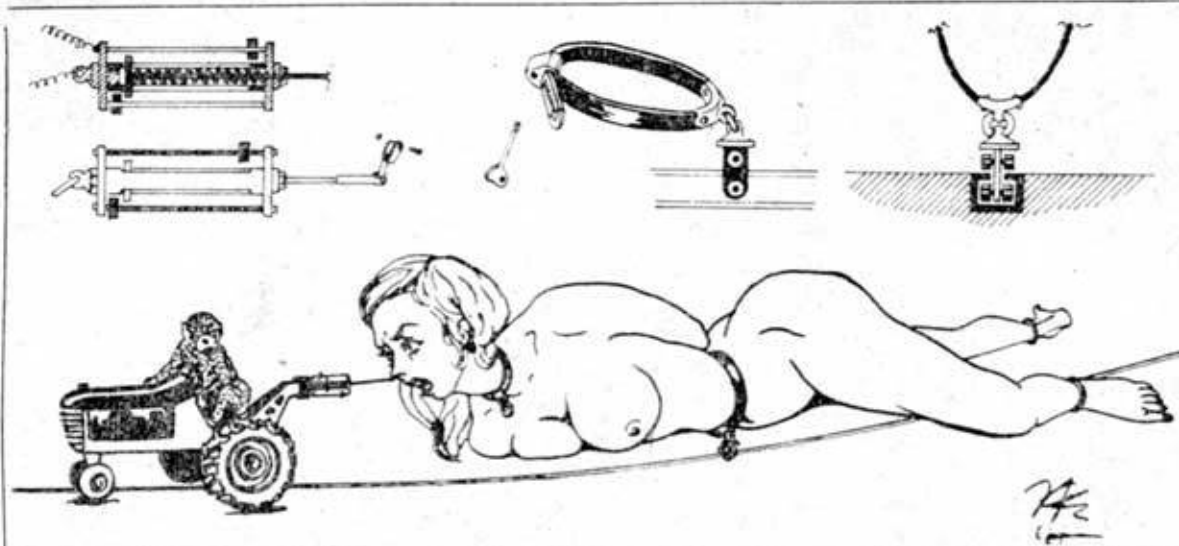
## 八女力士の拘引

数百年来の習慣とはいえ、力士が裸体のまま取り組むのは文明の今日において恥ずべきことがらだと云う人の多いなか、女性の身でありながら恥かし気もなく観衆の前にはばからず、男の力士のよ



私のような者でもモデルになれる  
でしょうか。  
決してお金目あてではありません  
ん。とにかくモデルになってみた

# 新案責具 千葉青鬼



いのです。理由は今申し上げられませんが、もしお会い下さるようでしたら、その時くわしくお話しします。最近の写真三枚同封しておきます。誌上におのせ下さっていただきます。もしモデルに採用できません時は、どなたか同好者の方を紹介いただけませんかでしょうか。決してご迷惑はおかけいたしません。

もし確かな方でしたら、先方の方に私の住所をお知らせ下さい。電話番号も書きそえておきますが、最初はやはりお手紙でお願いしたいと思います。私はまだ御誌を二三冊読んだだけで何も存じませんが理解だけはしているつもりでございます。若い方よりも四十才ぐらいの方のほうがよいと思います。私は三島の工場におった時、一度同性の方から縛られた経験がございます。たった一度だけでしたが、今でもその時のことが忘れられないでいます。

こんな私でもよければ、どうかモデルに採用下さいますよう、心からお願い申し上げます。御入用でしたら誌上の掲載も一向に差し支えございません。どうぞ、よろしくお願い致します。

うに分厚いふんどし一本を緒込み娘髻を結び上げたいでたちで四つに取り組み、豊かな乳房をゆれるにまかせながら、力くらべをするとは全くあきれ果てた話したが、先月中的こと（新潟県）高田に於て、この女相撲を興行した時など珍らしいもの見たさの人情から、せまい小屋がけに押しかけて、力の強弱はあともわしにして、専ら顔や姿の良しあしばかりに氣をとられていた人も少なくなかったという。ところが同月二十八日、この女相撲の一人はる（二十才）という女力士が突然、その筋へ拘引された。

その理由というのは、この女性



夫や子供を捨て江戸長崎を巡る氣取りで前記の興行中だったところを、かねて村松署から高田警察署へ取り押さえ方を照会されていたので、このようなことになったという云々……。

というわけで裸体を恥じた文明開化時代の当時の思想や世相などがうかがわれ、当時の女力士たちが本格的なマワシを身につけた裸相撲だったこともわかります。

△写真は伊万里市の「女相撲」▽



## ふんどし裸女血闘模様へのあこがれ

女 斗 彦

女と女の血みどろな血闘。それもふんどし一つをしめただけという裸体で演ずるそれは、長年の私のおこがれでいるファンタジーであることは、すでに幾度か述べて来たとおりである。十余年前の奇クの黄金時代に、畔亭数久氏の麗筆が毎号巻頭に、或は挿絵を飾っていた頃、氏の作品は責絵、切腹無惨絵と、古今東西に材を求めての豪放な構図、主題で、私の心を捉えた。

京洛生氏の「大奥裸女血闘」がもし、一度び同氏の筆によって絵画化されたならば、きつとすばらしいものとなったであろうと思うと、その出現が少しおそかったことが悔やまれてならない。畔亭氏の作品で、ふんどし姿の女を扱ったのは「切腹幻想」が最初と記憶する。そして「娘相撲」に至って澁瀬とした乙女のふんどし姿は、マニアの喝采を浴びたものであった。小生はこれを元にして好みである日本髪にかえて知人に描いて

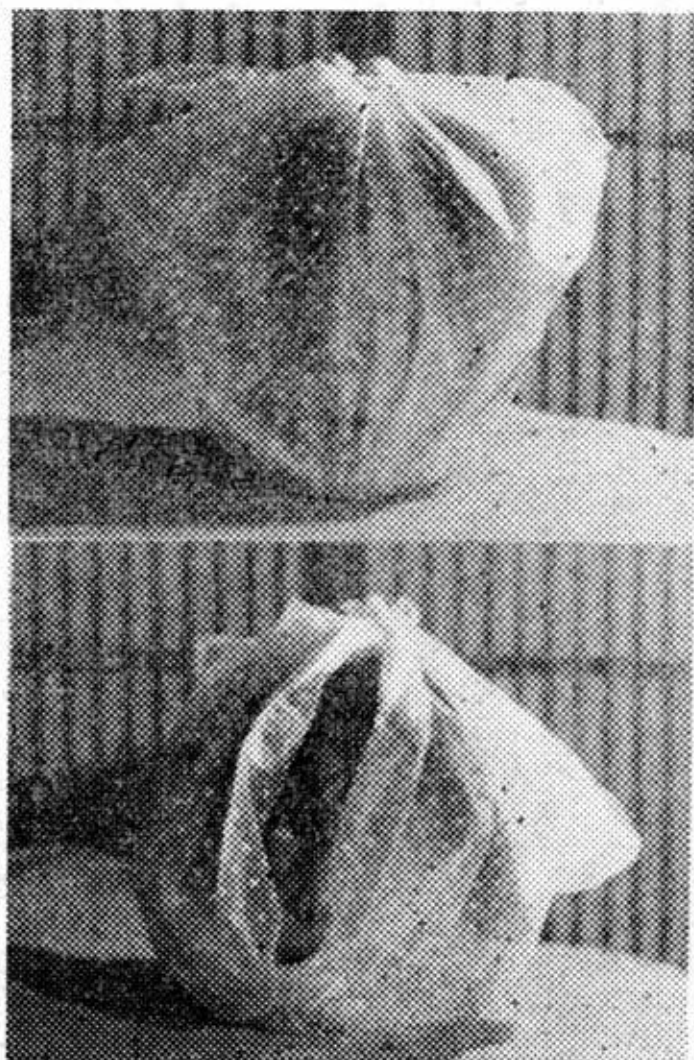
もらって、今も愛玩している。

女の場合「禪」と漢字で書くよりも「ふんどし」と書く方が柔味と親しみを感じさせる。私は乙女の小姓姿、若い女の男装（但し時代物）芸妓の手古舞姿（これを一種の男装）にあこがれを抱いているのであるが、女のふんどし姿、それもつややかに結い上げた日本髪のに至って、倒錯美の極致と感じるのである。

女のふんどし姿の魅力はいろいろあるだろうが、何と云っても、美事なお尻の双丘をわって、きりとしめ上げられた後ろの結び目にあるだろう。ビキニでは何かしまりのない感じがする。女相撲の場合では、この後姿が妖しくうごくのと、豊満な乳房が波打つのに醍醐味を感じさせる。それ程、この後のT字の結び目が、女の裸身をひきしめ、美事なものとなる。血闘図絵となると、斬られ、血しぶきをあげて、生から死への硬直をみせてのけぞる時の斜め後から描

「女の生首」

北 斗 生



いたものにその魅力を感じ、私の血は妖しくうずく。

「大奥裸女血闘」の挿絵の中に、この女の姿が描かれてあったが、単色乍ら今も、この図を愛玩している。裸女血闘図ではこの姿態の女が不可欠のものである。その次に、私のあこがれは、先刻まで、躍動していた美事な裸身で、今日空しく血みどろの死体となって地に横たわっている姿である。平常身だしなみを怠らなかつた美女達も、ふんどし一つというあられもなさを、更に輪をかけた姿で屍と

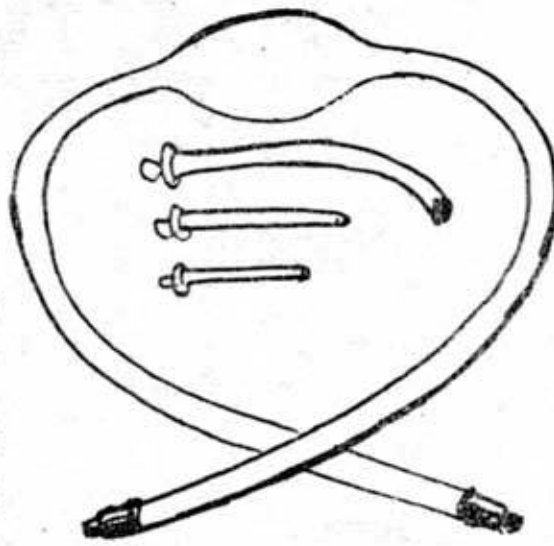
なっている姿である。うつ伏せに後の結び目をみせている屍、或はまだこと切れず、ふんどしが割って入る見事な尻をびくつかせてもだえている状は絵にすることはむつかしいが、想像するだけでも、マニアには楽しいものだ。

豊満な乳房を抉ぐられ、傷口からおびただしい血汐を流して、股をおさまに開いて、ふんどしが僅かに蔽う内股もあらわに大の字なりにこと切れている姿態もよい。私はこのようなふんどし裸女の血闘図に、血腥い妖美を感じて止ま



ない。

又、女が憎悪の余り、討ち取った女の、ふくよかな腹を裂き、はらわたを溢れ出させているところ、首をかき落して、生血を嘔るところ、果てはふんどしもはぎとって急所に凌辱を加えているところな



先日胃ケイレンである大病院に担ぎ込まれました。注射が効いたせいか少しねむくなり目がさめると処置室のベッドに横になっていました。両側をカーテンで仕切られた隣のベッドでは、今誰かが処置を受けているようでした。

「あなたは膀胱が悪いのよ、ですから早く治りたいなら、どうしてもこの検査をしないではいけないのよ。こんなになつたの始めて？」

## 導尿される

### 女高生

#### 或る病院にて

#### 矢部可一

ある。

又、修羅場に漂う若い女の体臭がむんむんとたちこめ、それに血腥さが加った異様な香を想像しても、私の血は燃える。このような分野（ふんどし裸女の血闘）は、奇ク読者の中では極めて少数派と

云えるだろうが、私のあこがれは奇クのみによって満されると信じて、今後このふんどし裸女の血みどろ模様の分野を守ってゆきたいと思う。同好諸兄姉の協力を求めることや切。

ありますから、誰にも見えないのよ。パンツは取った方が良いわ」「出来たかしら、スカートも汚れるといけないから、ずっと上迄あげましょう。腰を浮かしてね」「ビニールはちょっと冷たいけど腰をあげて枕を入れますから。ではお膝を立てて左右に開いてごらんさい。つぼめちゃ駄目よ、楽な気持で、待ってらっしゃい。ちょっと消毒をするわね。ああ動いちゃ駄目、始めちゃっとしみるだけですから、我慢できるわね」「ああ動いちゃ駄目、そうそう、もう痛くないでしょ。あなたは何かもしなくていいの。あら、ずい分出たわね。さあ、もう済んだの。今日はこれでいいから、カードを持って薬局でお薬もらって、あしたいらっしゃい」

聞えてくるのは、看護婦さんの声ばかりでした。私は自分のお腹のことも忘れて胸をときめかして聞いていましたら、今度はこちらへきて「矢部さん、検便なのよ。まだ痛む？」と、入ってきたのは二十才位の美しい看護婦さんでした。隣のカーテンからは、女子高生が出てゆくのが見えました。明日は可哀そうに浣腸されるのでしょうか。病院ですからイルリガールでしょう。その前に直腸診があるだろうか？私の空想は次から次へと湧いて止まるところを知りませんでした。

この病院にいたのは、僅か三日間でしたが、自分の病気がもともと命にかかわるような大したものではなく、痛みがとれてしまうとまああとはケロリンとしていましたので、つとめて、いろんなことを見聞しようと努めました。ほんとうに病院というところは、ゆっくり観察していると、面白いことが多いところでした。



△夫婦SMフォト▽

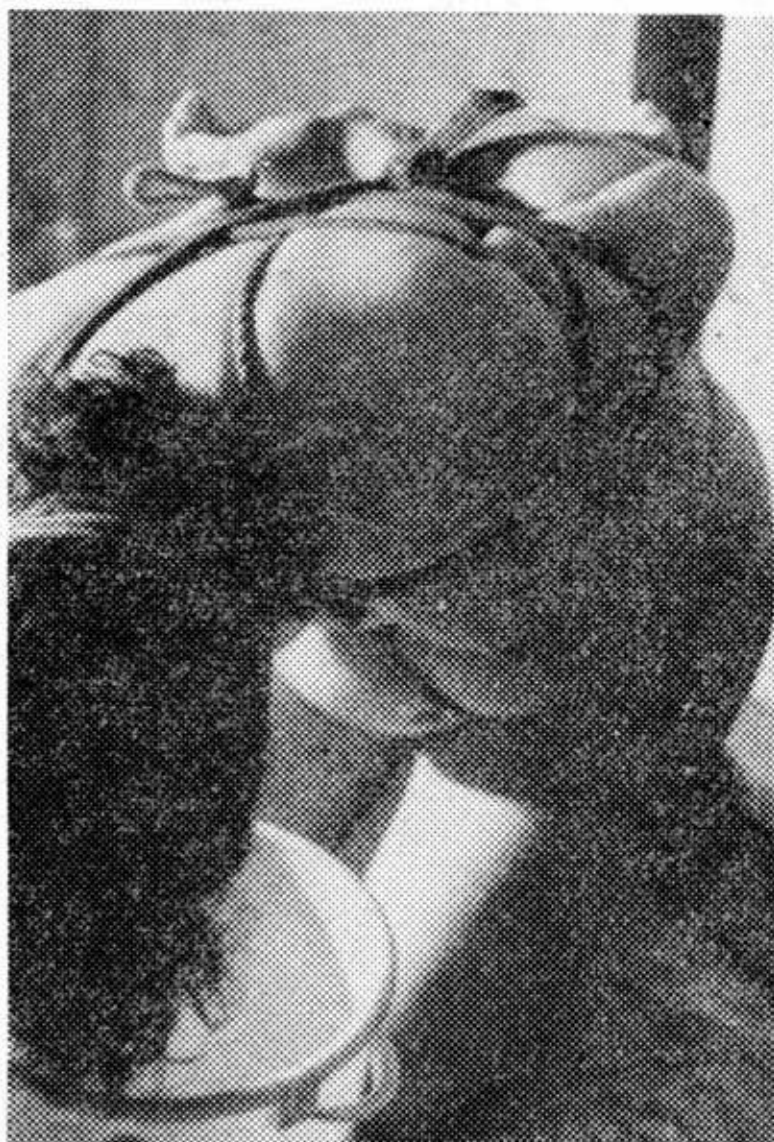
みたこと、

やったこと!!

小竹一浩

七月末の新聞を見てドキリとした。映画案内欄に「奇譚クラブ・骨まで縛れ」と書いてある。どうせまた、と思いつつも、奇譚クラブという活字を見ては出かけざるを得ない。新宿座は金曜の昼間だというのに満員だった。それに、この種の映画館では女性の入場者は皆無に近いのに、その日は数十人の女性を見た。きっと奇クファンにちがいないと想像したが、如何だろう。

「奇譚クラブ、団鬼六作、花と蛇より」という表題に胸をときめかしたが、内容は予想通りで、ストリーも全く安易なものであり、「花と蛇」のムードは、どこにも見出せなかった。わずかに縛られて喘ぐ裸身を花で撫でおろす所と鼻や耳を責めるシーンが、まあまあという所か……。同時上映の、「非公開の激情」のファスト・シ



ーンに、裸に剥かれた女が波打ち際に突き倒され、波にもてあそばされる所があったが、もし彼女が縛られていたら、素晴らしいシーンになっていただろうにナァ……。

その夜、あることを考え、急に試してみたくなった。新宿座の帰り、とある街角で熱帯魚を見た。エヤーポンプの泡が忙しく浮き上ってゆく。

後手高手小手に縛った雪枝をビニールシートの上に転がし無花果浣腸を二本使用する。ポリバケツに排泄し終って、ぐったりと横た

わった雪枝の片足を吊り上げ小型のエヤーポンプを始動させる。細かいビニールホースを通して雪枝の体内に空気が無理矢理に入り込んでゆく。殆ど行わない浣腸責めだし、エヤーポンプの使用も初めてなので、すぐスイッチを切った。

どの位入ったのか見当もつかないが、少し腹部の膨脹が見うけられた。もっとも元来お腹が出ているので、一層大きく見えるのかも知れないが、とに角そんな腹部を覗くようにシャッターを切ってみた。羞恥と股間縛りに排気できず

## 代理部だより

○アルバム「美しき縛しめ」第十集八責められる美女百態▽、略号(美10)は発売以来、文字通り注文殺到で、この調子では(美3)(美6)に引続いて売切れも遠くないと思われます。

○同じく第九集の「革具に拘束される女」略号八美9▽も先月にて完成広告をして以来順調に伸びておりますし、初めてのM版限定版グラビア写真集、Mフォト・オンパレード「女王様に飼育される日々」略号八M特▽も、八月末完成以来、尻上りに注文数が増えてきつつあります。

○限定版グラビア写真集はすべて送料共の値段になっておりますが八M特▽のみは、送料五十円を加算して頂くことになっておりますので御加算願います。第五種便が廃止になりましたから、雑誌以外は全部第一種便(信書扱密封)にてお送りいたします。

○今般、倉庫を整理しましたところ、昭和二十五年頃より現在に至るまでの女体緊縛フォトのネガ未使用分多数が現われました。モデ





身悶えるムードが、少しでも出て  
いるか、どうか……。

ところで芳野眉美氏の「濡れに  
ぞ濡れし」に小生の名前が出ると  
は。(毎号必ず読ませて頂いてい  
ますが、短い会話にそこはかな

## 女のせり市 “朝立ち”

沼田市 郎

「辰、そろそろ出かけよう。陽の  
あるうちに熊谷まで行くぞ。女共  
をひっくくれ」

「へい、かしこまりました」

ここは江戸、中仙道に面した板  
橋の宿。強欲非情をもって鳴る金  
貸金平の住居である。乾分の辰次

は土間の隅の木箱から手錠の束を  
とりだした。土間の荒むしろの上  
には旅仕度をした女が五人、おび  
えたように固まっている。

「さあ、しっかり身仕度しろよ。  
途中、休みは少ないから草履は足  
にしっかりつけろ」

く匂う甘露のような楽しいムード  
には、たまらない魅力を感じてい  
ます。今後とも是非永続させて下  
さい。雪枝と二人で読んだのです  
が、何かくすぐったい思いです。  
とても、おほめ戴く代物ではな

く、お恥しい次第ですが、少しで  
もお気に召したのかと思うと嬉し  
い氣もします。なにせ文才の乏し  
い小生のこと、何かお気づきの点  
がありましたら、今後共よろしく  
御教導のほど、お願いします。

「辰、年増が先だ。太ったアマは  
しんがりにして、早いとこ、ひっ  
くくれ」

「へい、わかってやす。おい、お  
米、早く立つんだ。ぐずぐずして  
ると、痛い目にあわすぞ」

ニヤリと笑った辰は手錠をがち  
やつかせて、お米の前に立った。

五人の女はいずれも金貸金平が借  
金のかたにとった女だ。金平は借  
金の返えせない者からは遠慮なく  
物をとりあげ、品物のない者から  
は、その女房、娘をとりあげる。

そして月に一度、武州熊谷の荒川  
ぶちで開かれる女せり市にかけて  
たたき売るのであった。

お米はしぶしぶ立ちあがって差  
し出す両手に辰が手錠をかける。

ギーギーと音を立てて手錠が両手  
首に喰い込む。「あっ痛いっ」と  
思わず、お米の口から悲鳴が洩れ  
る。辰は調子ずいて、次々と他の  
女にも手錠をかける。

ル別にしても数十名に達するため  
分類に手間どっています。本誌  
モデル嬢総登場のグラビア写真集  
をいざ完成したいと思っています。

○切手代用にて御送金下さるのも  
結構でございますが、切手を紙に  
貼りつけた(一部分でも不可)  
バラバラに切り放したり汚したり  
したものはお断りします。殆どの  
方が切手の一部を紙に貼りつけら  
れますが、これは困ります。必ず  
切り放さずシートのままで封筒に  
入れて、お送り願います。

○代理部分譲品のお申込みの節は  
すべて△略号▽のみお書き願いま  
す。写真の送料は、当方にて一切  
負担いたします。旧号の雑誌の御  
注文には一部に付き送料二十円の  
御加算を願います。在庫の僅少な  
ものがありますから、若し第二希  
望品がございましたら、添記頂け  
れば幸いです。

○本誌三月分以上御予約お申込み  
に限り送料一切当方にて負担させ  
て頂きます。従来の御予約金が十  
月号からの値上げにより生じた過  
不足は、計算書を雑誌に同封いた  
しましたから、それによって御諒  
承願います。継続お申込みの際、  
余剰金を差引き御送金下さい。計  
算書同封頂ければ尚結構です。



## みゆきの妊婦シリーズ

## 「妊娠五カ月」

増田 喜代司

奇クの皆さんお元気ですか——  
早速妻の妊娠したことを御報告  
します。

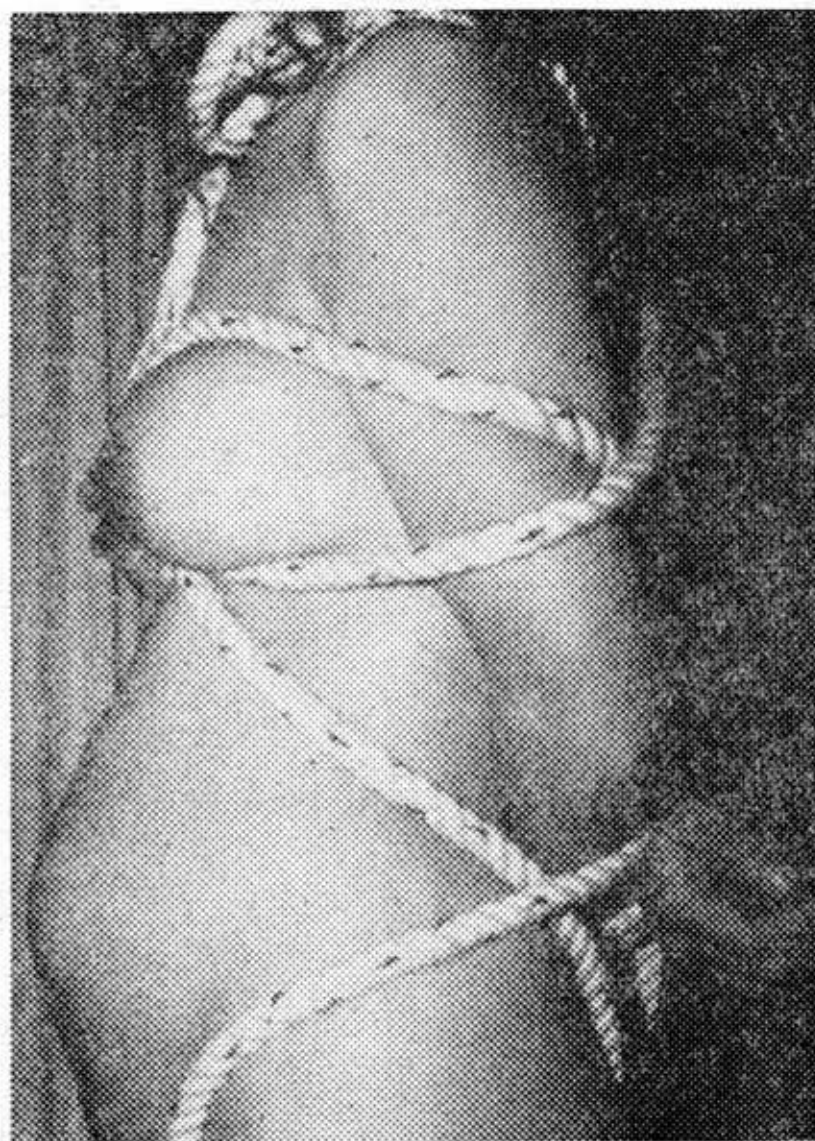
ボク達夫婦は、今年がヒノエウ  
マに当たりますので、協議の上、バ

スコントロールを実施していたの  
ですが、以前からみゆきが早く子  
供が欲しいと言いますので、今年  
の二月末に思い切ってリングを除  
去しました。リングを除去したか  
らといって、そうう  
まく、すぐ宿るもの  
でもありませんが、  
ボクと妻の場合、以  
心伝心と言うのでし  
ょうか、早速うまく  
ゆきました。妻は生  
理が止まったといっ  
ておりましたが、こ  
れは除去したので、  
少し狂ったのだぐら  
いに軽く考えていま  
した処、ホンモノで  
した。それと共に、  
妻の嗜好が急激に変  
り、又夏みかんなど  
欲しがりますので、  
ボクはてつきりそう  
だと知ったわけで  
す。

妊娠三カ月までは  
全然腹部の徴候に変

化はありませんでしたが、六月に  
なると心持ちふくれ始めたように  
見えましたので、みゆきに産婦人  
科に行かせた処、既に四カ月に入  
っていました。余りにも適確すぎ  
て、気持がわるいくらいです。そ  
れと共に、忽ち頭にヒラメいたの  
は、かねての辻村氏の依頼でし  
た。若し妊娠したら、毎月毎月、  
その妊娠の記録を撮ってほしいと  
いうことです。

七月一日、妊娠五カ月を迎えた  
日、ボクはこの約束を果たすため、  
みゆきに頼みました。妻は快くボ  
クのこの申し出をいれてくれまし  
た。ボク達夫婦にとって、最初の  
愛しき子供の誕生を迎えますので  
やはり胎児のことが気掛りになっ  
て、いつものような激しいプレイ  
は避けることにしました。  
夜になって梅雨前線が活発にな  
って、かなり激しい雨になりました。  
た。むしむしする室内に、扇風機  
二台をフルにかけっ放しにして、  
ボクは準備にとりかかりました。  
妻はす早く着ていた服を脱ぎ、す  
べてを脱ぎ捨てて、私の準備を待  
っていました。正直なもので、桃





色だった妻の乳首は乳量が大きく  
なって黒ずんでいます。みゆきの  
おへその下に広幅のビニールテー  
プを二列に貼り、それに一つは記  
録の目的もあって、日時と妊娠月  
をマジックインキで太々と書き込  
みました。妻はくすぐったそうに  
笑っています。

みゆき用の、柔かい太縄で、腹  
部をさけて後手に縛り、乳房を強  
調させました。余った縄は股縛り  
に使いました。既に五カ月ともな  
ると、みゆきのおなかにはぽくぽ  
くと尖ってふくらんでいます。妻は  
「辻村さんが、きっと大喜びしま

すわよ」

と笑って申しました。ボクも辻  
村氏の喜ぶ顔が、ありありと眼に  
見えるようです。

同封のフォト二葉は、その時の  
ものですが、全裸でとりましたの  
で、下半身はトリミングカットで  
す。とり始めるとボクもすっかり  
調子にのり出して、ポーズを様々  
に変えてとりまくりました。それ  
は発表を考えないボク達夫婦のみ  
の貴重な記録のためのものです。  
緊縛は強いものでしたが、無意  
識のうちに腹部への圧迫や、又腹  
縛りは避けていたようです。

「今が一番危ない時期よ。大切な  
赤ちゃんだから無理しないでネ」  
と、妻は協力的ながらも、既に  
母性愛を発露させて、胎内の新ら  
しい魂の存在を心配しました。  
医師の予定日によると、ヒノエ  
ウマは避けられて、来年そうそう  
に誕生するらしいのでホッとして  
いますが、若し月足らずの未熟児  
で生れた場合、ギリギリにヒノエ  
ウマに引掛りますので、出産の  
予定を、医師の予定通りにしない  
と困ってしまいます。

で、これから毎月、月を追って皆  
さんにみゆきの妊娠の過程を発表  
してゆきたいと思っています。  
若いボク等夫婦だけの暮しで、  
子供の誕生に関しては、何一つ分  
らぬ未知数です。どうかよきアド  
バイスをお願いします。  
辻村さんにフォトを送ると、早  
速折返していろいろと親切なアド  
バイスの言葉と、ボク達夫婦の第  
二世に対する喜びをいつて来られ  
ました。あと半年、これからが大  
変だと思っています。

## 「刺青（いれずみ）」の魅力

小 和 谷 勝

九月号の八サロン展望台Vで紹  
介された『刺青ダンサー』は、私  
に劣らぬマニアらしい。

腋の下や内股の竜の刺青もさる  
ことながら、それ以上にパンティ  
の刺青は奇抜で素晴らしい着想であ  
る。勿論、刺青を一種の芸術品と  
して鑑賞される人達にとっては、

この様な刺青は邪道だと云われる  
かもしれないが、それはそれでい  
いと思う。

ともあれ、女性の白い肌に彫ら  
れた刺青の美しさは、最近の刺青  
の女王、山原清子さんのフォトな  
どで紹介されているが、今では伝  
説的になった「羽衣お小夜」（背

中に羽衣、腕に牡丹と唐子と文字  
通り背中いっぱい腕から股まで刺  
青で埋まっていた）も代表的な刺  
青女性であったといえる。

そのお小夜が小説『羽衣の女』

（高木彬光著）の中で恋人に「も  
う一度、わたしだって、前をして  
もいいわ。男みたいに胸わりをし  
て、おなかあたり花でも散らした  
ら……」と語っている。

又、名作『放浪記』（林芙美子  
著）の中にも「腹をぐるりと一巻  
きにして、ヘソのところを朱い舌  
を出した蛇の文身をしていた」淫

売婦が出てくる。

このように一度、刺青の針の味  
を知った者にとっては、刺青は麻  
薬と同じ魔力をもつものらしい。

くだんの八刺青ダンサーVも、  
やがてブラジャーを身に着ける？  
ということだが、おそらく、これ  
だけにはとどまらず、これからも  
彼女は自分の美しい肌を青黒い絵  
模様で飾るかもしれない。

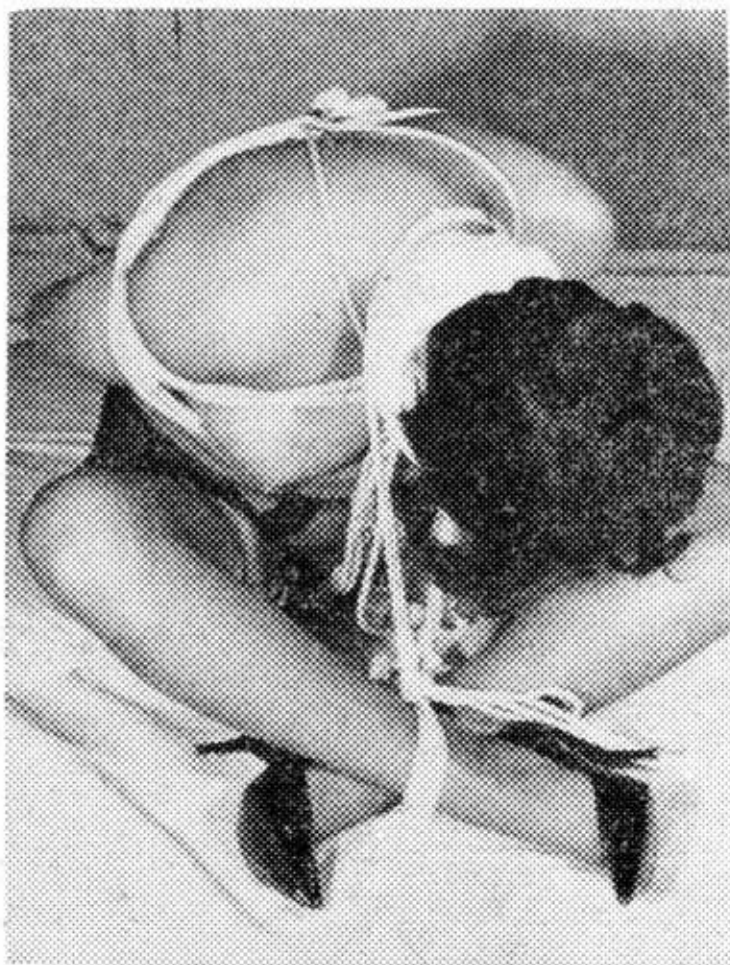
それほどに、刺青はその妖しい  
美しさを知れば知るほど、その魅  
力から脱することの難しい、可愛  
い悪魔である。



## 新妻の海老責めフォト

須磨松男

夫婦SMプレイ通信



編集部のお好意で、早速辻村様に御連絡していただき、懇切なお便り戴きました。予想外にお褒めの言葉をいただき、それに意を強くしまして、送付しましたような、かなり強烈な緊縛を実施して見ました。

妻も積極的な協力はして呉れますが、前にも書きましたように、私は余り苦痛を与える責めは好みませんでしたが、私自身そう申し乍らいつしか緊縛に馴れて、しらずしらず強烈なものになりつつあ

るようです。それというのも、妻自身も私の緊縛に対して、かなり近頃では激しい感応を示すようになったからです。この海老責めもカメラをとるため、かなり長時間に亘りましたが、妻はそれに耐えむしろ緊縛の欲びに浸っているように見受けられました。何分にもカメラ二台で、モノクロとカラーを同時に撮りますので時間がかかります。近く八ミリの現像も研究して見たいと思っ居りますが、成功の暁は、妻の緊縛のあらゆる

ポーズを八ミリに納めて見たい所存です。

私にとっては如何なる場合も、靴は必須条件なのです。婚前、妻を最初に知った時、一番に私の心をとらえたのは妻の脚線の美しさそれに靴を履いたときの足の魅力でした。如何なる場合でも妻を考えるとき、先ず念頭を走るのは、妻の靴を履いた時の姿です。

辻村様も、妻の靴を履いた脚線美と足を褒めて書いてくれましたが、それを認めてもらった嬉しさは、靴フエチのものならでは味わえない欲びでした。

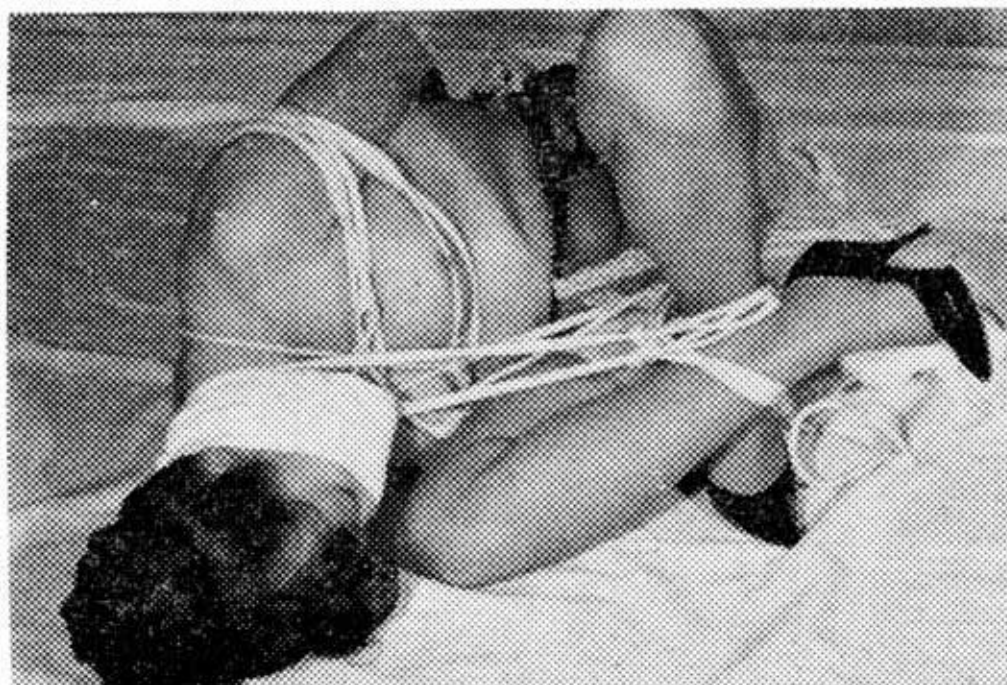
何れ、辻村様のお招きに依じて、近く妻と一緒に自宅を訪問し、私達のようなものでよかったですらカメラ・ハントか対談なども、おこがましくも考えておりますが、これから洋風化された日常生活での、洋装責めの同好の方の出現を大いに期待しております。

私の将来の夢は、欧米ものに見る、洋装風の垢抜けのした、種々の責め

プレイに少しでも近づいたものを撮りたいことです。

妻もそろそろ子供を欲しがっておりますので、子供が出来て体の線が崩れてしまうと、魅力半減します。今の間にドシドシ素晴らしい妻のフォトを撮りまくろうと頑張っ居ります。

拙い作品で皆さまのお目を汚しますが御高評頂ければ幸いです。

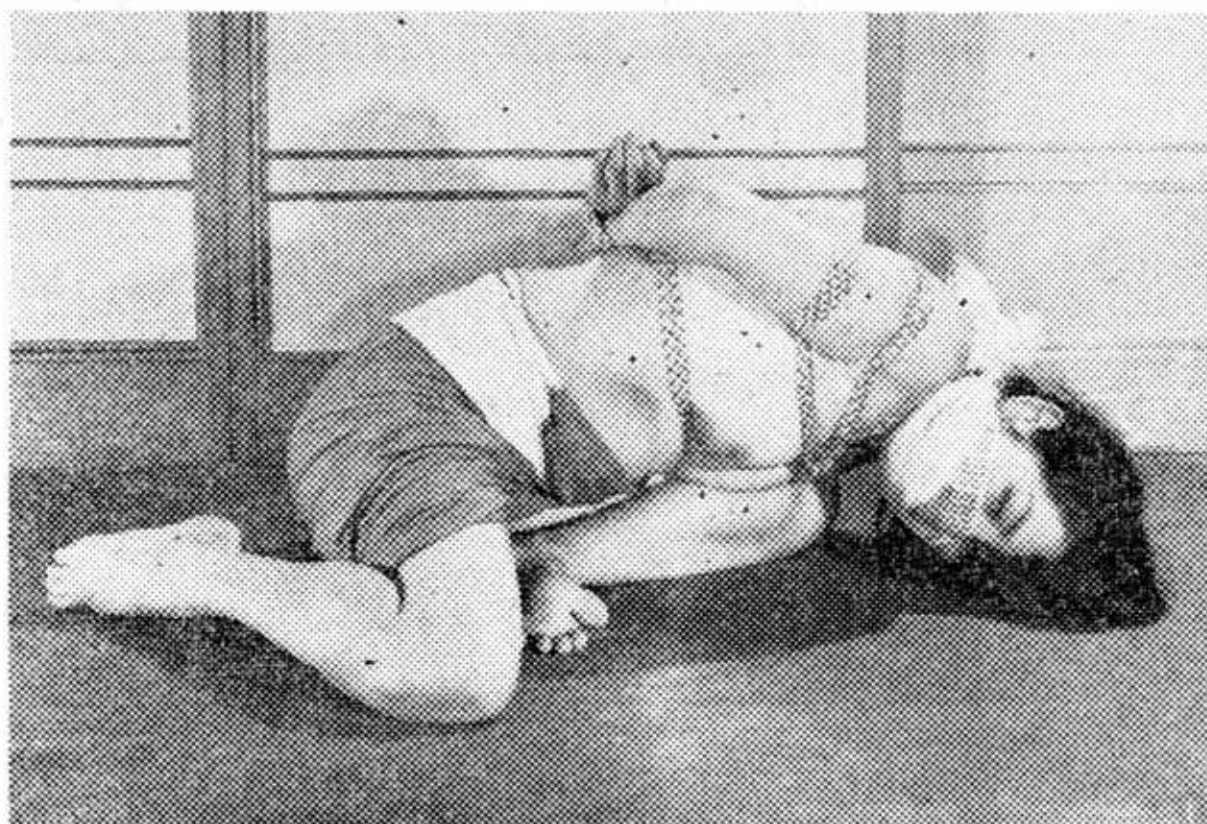




# 奇譚クラブ

昭和41年11月号

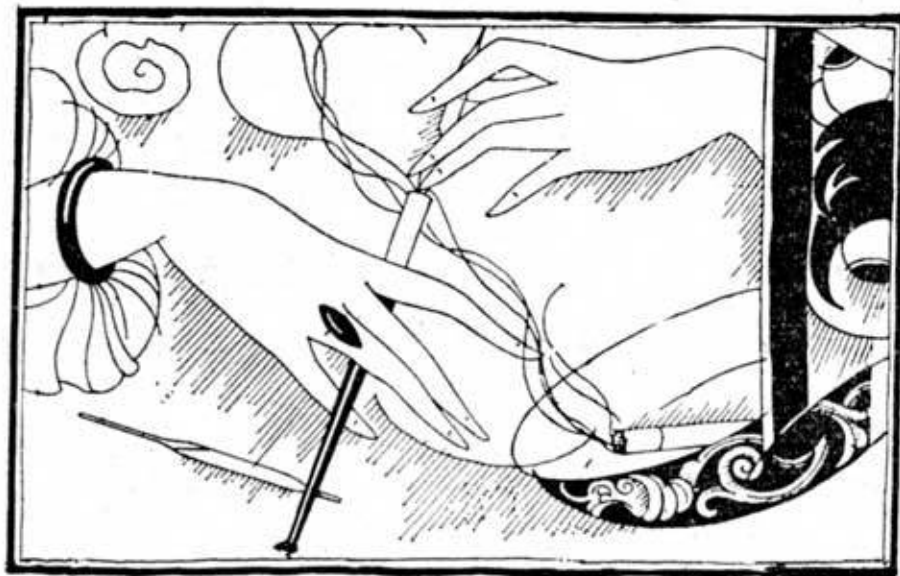
(1966年・11月号<第20巻第11号・通刊第220号>)



## 本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビヤ写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。





## 鬼六談義

### 三文マニヤ文士

#### 団 鬼 六

夏は活動の季節という。

三伏の夏に至るまで万象は全力をあげて活動し、人間生活も、この季節には甚しく積極的、生々澆刺の様相を呈するというが、SMプレイもまた然り、夏の夜の、肌の匂いを感じてのSMプレイは私の好みには一層合うようである。

ところが、今年の夏ばかりは、私にとって

は真に淋しい季節となった。愛人のM子と別れる事になったのである。喧嘩別れではなく、良き結婚の相手が見つかった彼女は、田舎へ引揚げる事になったのだ。女姉妹ばかりで、二女の彼女は、どうしても見合の相手と結婚しなければ、姉の立場が悪くなると複雑な事情を私に告げ、遂に三年間にわたる私との関係に終止符を打つ事になったのである。

もともと私達は、お互の垣を認め、その範囲内で恋心を満たし、いい方はおかしいが、SM関係なるものを続けていたのであるから別れる時が来れば別れるものと、互の心にい間かせてはいたけれど、そういう冷静な態度は、むしろ、炎を一層煽り立てるものである。それに、もうめったに、これだけの好みに合ったM女性を手に入れる事は出来まいと



思うと、彼女と別れると決まった時から、妙に詠嘆的となり、何ものも手につかない。仕事も途中で、おっぼり出し、帰郷を二日後にひかえたM子をひっぱり出して、相模川沿岸の馴染の宿に泊まる。

夕暮迫って、山々の形が墨絵のようにくっきり浮かび上り、対岸の灯りもちろほら美しく、川岸の草花が夜の川風にしどろに揺れるのを彼女と共に眺めながら、過ごし方を語り合い、その夜は川音を聞きつつ、心ゆくまでSMプレイを楽しんだのだが——今、自宅の書斎に肘枕で寝ころぶ私は、風鈴の音を聞きつつ、田舎へ去った彼女の事を、ぼんやりと考えている。

妙に気だるい気分、珍重していた骨董品を失ったような悔恨めいたものが胸にきて、頭は朦朧とするばかりだ。時間は矢鱈に過ぎていくばかりで、予定してあった期日のある仕事は手もつけぬまま次から次と終っていく。

私は、M女性を失ったS男性とは、かくもみじめになるものかと、誇張的に、ああ、つまらねえ、くそ面白くもねえと何度もうたうようにつぶやくのである。静子夫人に逃亡されてしまったなら、川田や田代達も、さぞや口惜しく、こんな思いになるのではないかと

下らない事を考えたりする。

緊縛プレイを悦ぶ人々も、各々、好きなタイプの女性というものがある筈だ。女なら、何でも縛りたがるという初心のうちはいざ知らず、実際にプレイに縛りを加えているマニヤにとつては、自分の好みに合ったM女性を探すという事は、生甲斐である、と極言してもおかしい事ではない。そうしたマニヤの好みが「花と蛇」に登場する五人の美女のどれに当るか、作者としては、そんな事に興味を持っていない。もっと彼女達に、血や肉を、人間臭さ、女の香り等を出せばと思うのだが幾度も断ったように、これは、文芸作品ではない。人間を描くのが目的ではなく、責められる女の描写である。マニヤの作者の狙いはマニヤの読者を空想の世界に酔わせ、しびれさせ……などと、筆はまた、自作の下手な弁明になってしまった。私は、M子と別れたやり切れない気分から、ここ三四日はいささか荒れぎみ、不健康な消費面に耽溺し、今、ようやく二日酔いもおさまりかけ、やっと、わびしい落着きを得て何とはなくに雑文をつづっているのである。

今、いったように、マニヤにとって、好みの女性——大げさないい方をするなれば、マ

ニヤにとつての永遠の女性——それは「花と蛇」に登場する女性群といえようが、しかしこれは、あこがれであり、あくまでもマニヤのS的官能を高ぶらせる空想上の話である。手近かに得られるM女性、つまり、S男に妥協するM女とでもいうか、私好みのものをあげれば、どちらかといえば淋しげな表情を持つ面長の美人で、しかも肉感的、色は白くて

和服が似合い、冷たそうに見えていて実は情が深く、無口で、はっきりしないところがある反面、人に頼まれれば嫌といえない性分、涙もろくて、癪性なくらいにきれい好きで——と、その女としての性格的な属性はいくらでも書けるが、プレイに入っては、羞恥に始まって、羞恥に終り、しかも羞恥にこだわらないという女、いつてしまえば簡単でもあり、また、むつかしくもある。

羞恥責め、などという言葉は、誰がつけたか知らないが、面白い言葉である。たしかに緊縛プレイにおいて、羞恥は女性にとって、絶体不可欠のものなのだ。例外もあるうが、女性の肌に縄をからませようとする男性は、何よりも女性の羞恥をその大脳において、性的魅力と感ずる事を欲しているのだ。裸にされる羞恥、縄をかけられる羞恥、さわられ



る羞恥と、男は、女の本能でもあり、精神的なアクセサリーでもある羞恥の一举一動に好奇の眼を光らせ、モソモソと官能を高ぶらすのである。そうした男の願いを呑みこんで、反射的羞恥や意識的羞恥をたくみに使い分けそれによって、自分も次第に高まっていくというM的女性はなかなか得がたいものなのである。私も、もう十数年、色々と緊縛プレイを重ねてきたが、自分はMであるとはっきりいいきった女でも、M子のように、男の官能をうずかせるポーズを、あれこれ意識的無意識的に折りこんでくれ、はじらいのこもった感嘆とささやきをくりかえした女は見当らなかった。最初は、わざと頑<sup>かたくな</sup>に羞恥にこだわって私を手こずらせ、やがては、拒否に非ざる甘い反抗、そして最後には、緊縛された燃え立つ肌を相手へ押しつけるようにし、もっと大胆なポーズを組ませる事を、はにかみをこめて要求し始める。

いや、もうやめておこう。別れた女のことをあれこれ物語ってのろけるのはみっともない。ただ彼女のような好みに合ったM的女性と、もうぶつかる事もないと思うと、何だか性欲の源を断ち切られた気分、今日は、矢鱈に雑念妄想がわいてきて困る。こんな事な

ら、もっとプレイを楽しんでおくんだと浅ましい事など考えるのだが、人間、ふんざりが大切だ。私は、月一度、悪魔的になった日を選んで「花と蛇」を書き、自分の書いたものにうずきを覚えてM子のもとへ行ったものだが、もうそれが駄目だとなれば、何とも情ない気分、正直「花と蛇」も、もうそろそろ店じまいにかかろうかなどと考えている。

頭の重い時は、KK誌を読むに限ると、私は二日酔いの頭を指でもみつ、押入れからこっそり取り出し、拾い読みしてみる。

八月号、先ず目次を開く。「サジズムとは何か」私はこういう種の論文はつとめて眼にするようにしている。サジスト、マゾヒストなるものを何とか自分なりに適確に納得し、自分の不思議な性情について、しみじみ考えてもみたいのだ。私の如き、マニヤ誌の中にあって、SM的刺戟やくすぐりを楽しむ人目当てに、皮相軽薄なS物語を書いている者ともなれば、このようにまっとうから、Sとは何か、と表題をかかげて論じてくれる作者に大いに敬意を表し、その卓見にふれて大いに感激しようとする欲求は大なるものがある。また、そうしたSとは何か、Mとは何か、といった表題のものが賑々しくKK誌上を飾る

事は賛成であるし、マニヤ誌ならそうなくては嘘だとも思うのであるが、ところが、心の底から、成程とうなるだけのものに最近接した事がない。といっても、自作のものに關したものの以外、ろくに読んではいけないので見逃しているのかも知れないけれど、たとえば八月号の「サジズムとは何か」にしても、悲しくもそれを理解するだけの能力が私にないからなのであるが、気が遠くなるほどむつかしく途中で投げ出してしまった。

作者に失礼だと思って、もう一度ゆっくり読んでみたが、口を真一文字に結んで、妙に力<sup>りき</sup>んで書かれた論文という事はわかるが、内容においては、やっぱり何が何だかさっぱりわけがわからず、私は自分の浅学を大いに恥じたわけであるが、何もショーペンハウエルやパスカルなどが顔を出さずともよさそうなものにと、私は再び痛み出した頭をもみながら口をとがらすのである。ソクラテス、プラトン、釈迦、孔子と哲人聖人をひっぱり出して、わざとむつかしく、ややこしく書く事がKK誌における最近の流行なのであろう。私の如き、レベルのそう高くないものは、うろたえるばかりである。SMに関しては興味は大いであっても、全くのところ、未熟な理



解、浮足立った観念しか持ち合わせていない私のような凡俗にも納得出来るよう、もう少し、気のきいた話し方をしてくれないものかと恨めしく思うのだ。

如何に稚拙極まる文章であっても、わけのわからぬ事をムキになって力説する先生のものよりは私は喜んで読む。読者通信などに書かれていたのだとしい語り口の方が、真に楽しい気分になるのだ。なるほど、こういう世界もあるものか、一つ勉強した、といった気分になるのである。

誰々の文学がどうか、誰々の理論はどうか、と奇妙な文芸評論を誰かが四角ばってやり始めるから、素人作家で構成され出してきたKK誌の悲しさ、猫も杓子も変に胸をはって気取り出し、奇怪な文章が次々と生れる事になったのであろう。鎧や兜で身を固めた武者達の間で、一物をさらけ出して、うろちよろし、羞恥に身悶えし始めているのは「花と蛇」の作者である。といっても、ブツブツ不平を並べようというのではない。時勢に逆らおうなどという気は毛頭ないのである。ただ、神経質に文章がどう、文体がどうかかわれると、時計を机の前におき、M子と逢引の時間を気かけながら、一気に書き飛ばし

てしまう私などは、とても満足頂ける文章の書ける筈はない。文章とか文体とかにはおかまいなしに下駄ばきで上りこんでいけるといふ点にKK誌の気安さがあり、面白さがあると思っていたのだが。どうせ素人作家に門戸を開放したのであるなら、如何に技倆拙劣であっても、読者の腹の立たない程度のものであるなれば、どんどん掲載すべきであらう。幼稚な文章にしたって、結構、楽しいものがある筈だ。

論稿「サジズムとは何か」に失望したとはいえ、それは、私なりの失望であって、つまり、難解すぎて、私の能力では解読出来ないものであって、決して、内容が拙劣であるなどといったのではない。私は、人の作品を批評する事は嫌いである。まして、こういう種のマニヤ雑誌であるだけになおさらの事である。フランスの女囚の話やギリシャの神話など、私は一頁も読んだ事はないが、これも一種のアブの世界、何となく私にもわかるような気がするし、むしろ、こうした真面目な作品はもっと読まれなければいけないような気がする。読者の好評、悪評は、単に嗜好の問題だ。ただし、KK誌読者は、俺の立派な作品を読むべきであって、他の軽薄なエ

ログロは読むべきでない、などという意味のことは作者は口が曲がってもいうべきではないのである。アブの世界は、全く複雑怪奇、不可解なベールに包まれているものだ。自分の浸っているアブの世界以外は偽物であるなどとはよほどの馬鹿でない限りいわないであらう。マニヤの性情というものはなかなか理屈で割り切れるものではなく、知ったかぶりをして暴言を吐くと、好きな女をけなされた男の恨みをかうのにも似て、どえらい目に合わされる事になる。ものいえば唇寒しだ。下手な理屈をこねて袋だたきに合うよりは黙々と執筆されるべきであって、それがどのような分野であるにせよアブの世界であるなれば必ず多数の支持者がある筈である。

私の創作など、こうした真摯な態度で創作されている二つの作品にくらべると、全く、日を同じゅうして語るべき代物ではないのであるが、私の創作態度は、次のような所から発している。

あるピンク映画の配給会社へ、若いテレビの監督が自作のシナリオを持ちこんで、その映画化を相談した。すると社長は、そのシナリオを一読し、顔をしかめて、こういった。「君、こりゃ、たしかに意欲的な作品やと思



うぜ。そやけどな。こんな真面目なもんやったら、客が入れへん。客はやな。ええ気持ちになろうと思うて高い金払いよるねや。客の事もっと考えなあかんよ、君」

私は、KK誌の読者をピンク映画の客と同等とは決まっているのではない。しかし、ピンク映画に今、実に面白いのをやってるぞといえ、飛んで行って見に入る愛すべき愉快な人々だと思っている。KK誌の中に、高尚な論理や芸術的な創作が掲載される事のみを悦ぶ人達ではあるまい。いや、そうだとするなれば、それは良い事か悪い事かは知らないが、恐らく寄稿者仲間同志で何時の間にか作りあげたムードというものだ。寄稿者の一人をつかまえて、誰々論などというものが飛び出すところを見てもわかる。

KK誌は、寄稿家の社交クラブではないと思う。もっと一般読者を大事にすべきだ。

私は、知合いの本屋で、サラリーマン風の男性がKK誌を買う所をつぶさに目撃した事がある。如何にも、青白いインテリといった風の彼は、他の客のいる前では絶体にKK誌に手を出さず、文学書が並べられている棚を見廻っていたが、娯楽雑誌が置かれてある場所から客が引揚げたと見た途端、すぐに進み

寄ってKK誌を手にとり、心の動揺を押し隠すように不景気な口笛の音などさせてめくっていたが、近くにあった月刊雑誌二冊を手にとり、その間へKK誌をはさみこみ、店主に千円札を添えて渡すのである。よほどKK誌を買うのが恥しかったのであろうが、カムフラージュする意味で、他の月刊雑誌二冊を内容も見ずして買うなど、よほど小心な人だ。店主が本を包装する間も、顔をそらせるようにし、釣銭を受取るのももどかしげに、そわそわとして店を出て行くのであった。

こういう読者は、寄稿はおろか、読者通信さえ出した事はないであろう。こうした消極的な愛読者によってKK誌は支えられているかも知れないのである。寄稿家は、そういう事に心すべきではなからうか。などと、あまり私もえらそうな口はきけないが、とにかく私は、ピンク映画の社長の科白の如く、客を大事に扱うという、大げさにいえば信念というもので、いささか過剰すぎる位のサービスをもって、延々と「花と蛇」を語りつづけてきたつもりである。一回一回、出来不出来はあるが、むつかしい理屈は抜きで、何とかマニヤをしびれさせようと努力してきたつもりだ。

それには、まず自分をこの世界にしびれさせねばならず、原稿紙の周辺には、これまで自分が撮ったもの、人の撮ったもの、合わせて数十枚に及ぶ緊縛写真などを散らばしている。その中に浸って私は、鬼源の如き顔つきになり、空想の中では五人の美女を責めさいなむのである。

たしかに、人間冒瀆、淫靡残忍、私も、悪魔的になった日を通り過ぎたあとでは、よくもまあ、こんな無茶なことをと贈呈されたKK誌を手にして周章狼狽、なかなか読み返えず気にはなれない。

最近では、編集者の方でも、いかがわしい箇所は、クロスパズルよろしく、かなり、——線されているが（私の方で——線するのも多くなつた）腹が立つというより、近頃はこっちも弱気になった故か、その労力を深く感謝している。というのは、この「花と蛇」という畸形小説は、部分的にカットしようにも、なかなかカットしにくい厄介な代物なのである。性感度の曲線図のようにじわじわ上昇したり下降したりし、実際どこからカットしていいか、編集子もまごついている筈だ。意地悪ない方をするなれば、それが作者の計算でもある。



当然、カットすべき所がカットされていない、さほど大事でない個所がカットされたりして、編集子の混乱ぶりが私にはよくわかる。それなら作者としても、編集者に対して、その労を少なくすべきであらうけれど、読者と編集者に同時にサービスするという事はむづかしいということよりも、何度もいった事ではあるが、作者の官能が高ぶり出した時に創作するものであり、つまり、変ないい方だが、発情気分を大切にして筆をとるものであるだけに、一つ一つ、細かい事に気をかけていたなれば、筆は全く進まなくなってしまうのである。推敲したり、読み返したりは絶対にしないし、送稿してしまったあとは、一体どんなことを書いたものやら覚えていない事が多い。印刷されて来たものを見て、思いつくわけだが、うまい具合に、本が到着する前後が、月のうちで、私の交尾期になっている時だ。それで、早速、つづきを書くわけだが、最近では、それでは、おそすぎると編集部から苦情がきているので、ラストの一枚だけは、メモでもとっておかねばなるまい。

こういう態度は、不真面目といえは不真面目だが、拙作「花と蛇」がマニヤの好評を得ているのであるなれば、こういう創作態度の

成功なのである。面白い、面白くないは、さておき、たしかに、えげつなさにおいては、自慢にはならないが、これほどのものはまず他誌には見当たらないし、また、今後もある事はあるまいと思う。こういう種の単行本の注文がいくつか来ているのに、なかなか私が書けないのは、つまり、体力の問題でもあるしスパリスパリとカットしていく文章のために編集者がベソをかくだろうと思うからだ。正直、かなりの小遣金になる事だし、と思うのだが、贈呈されたその種の単行本を読んでみて、その痒い所を靴の上からなすっているような感じに、とても私のような発情期ライターは仲間入り出来ぬと思うのである。こういう種の小説を手がける人は、大抵は、要求不満が嵩じて、寝むられぬ夜など、夜具の上には腹這いになりネチネチペンを動かす人だと私は思っていたが、そうではなく、次から次とこうした種の小説を矢つぎ早やに書き、マニヤ誌に発表している半プロ的な人もまた多いようだ。欲情した時にしか書けない私などはこうした人達を実に不思議にも思うし、その体力をうらやましくも思うのだが、まさか、発情しっぱなしで書いているわけでもあるまい。ただ、それが、自分がマニヤであるとい

う事に気を良くして、単に稿科目当てに、取締りや制約と完全妥協し、拙劣極まるS小説を、それも一応の作家気どりで書いているなれば、まことに哀れという外はないが、それをまた、つい好きな道故に、高い金を支払って買い、期待と失望をくりかえしている読者は悲惨という外はない。などという、私は諸先生方の袋だたきにあいそうだが、私もマニヤであり、読者であるという立場で、いわせてもらうなれば、現在の、いわゆるマニヤ向きのS小説なるものすべて空しく、馬鹿馬鹿しく、読めたものではない。Y本作者の低俗な眼で見てもらっては困るといわれるかも知れないが、誰かがいい出した小説や読物の馬鹿げた話ではないけれど、そういう体裁にもなっておらず、しびれるようなSM的ムードもないなれば、こういう代物は一体何と呼ぶのか私は小首をかしげるのである。よくこれで、金が取れるものだとかきれるような陳腐な話を臆面もなく書いている半プロのS作家が多いのであるから、KK誌寄稿者は、文章がどうか何とかと気にかける事はない。大いに楽しいSM話を聞かせてもらいたいものだ。

病気で長く寝こんでいた当時の要求不満と



S小説が枯れかけてきたKK誌に対する不満から「花と蛇」を書くようになって、もうかなりの年月になるが、制約にあまりこだわらず、思いついた事を書きなぐる怠惰な作者のえげつない原稿を、冒険を承知で、大した手も加えずに、掲載するという編集長の度胸におどろかされる時もある。最初は、気まぐれに、ほんの五六回で終ろうとしていたものが延々ここまで至ったというのは、愛読者のおかげでもあるが、もう一つは編集長のくそ度胸の故でもあると思うのだ。一丁、間違えはどえらい事になるぞと発情期が過ぎると、小心翼々となってしまう私であるが、この世情のもと、編集長の胆の太さには、実のところ恐れ入っているのである。描写などについてあまりうるさい事をいわれると、面倒くさからの私は、何時でも筆を折る気でいるから、そういう捨鉢な私の心情を察して、編集長もまた捨鉢になっているのではなからうか。もう少し手加減を加えようと思いつつ、また、愛読者の一人がいうように少しは人倫的道德を守って良心的にと思いつつ、ペンをとるのだが、たとえば、京子と美津子のコンビなどという無茶なことは絶対さけるべきだと思っても、作中の責め手である鬼源や川田や銀子

達が勝手に活躍し始めて、作者の手にはおえなくなってしまうのだ。一時は、読者よりアイデアをつのったりしてみたものの、やはり創作する間は、何かにとりつかれてしまった形で、結局、そういうものは無視したものにあってしまう。原稿紙に向かって、ペンを動かしてみなければ、静子夫人や京子や美津子が、どんな風に責めさいなまれていくものやら、作者の私にさえ予測がつかない場合が多く、何か読者の方で、要望があるなれば、川田や鬼源にいつてみてくれというより手がな

い感がするのである。

さて、筆は、とりとめもなく、女と別れた口惜しさから、心ならずもKK誌批判、自作の弁解へと進んでしまったが、おかげで、二日酔いも大分薄れてきたようだ。「花と蛇」もいいが、閑な一とき、鬼六談義として、気ままに筆を走らせる方が楽しいものである。「続花と蛇」も、そろそろ二十五回、話は、いよいよ佳境に入るといふより、ますますえげつなくなりそうで、実際、私は迷い出している。回を重ねるに従って、責めも極端になるのは仕方がないとしても、静子夫人の妊娠とか、美津子の夫婦プレイの事など考えると平常の私は胸が痛むし、第一、この物語は、

どこまで延々と続くものやら、書き出せば、全くキリがない。私とて、体力の許す限りはペンをとるが、そう長くはつづくまい。休養させて頂く時期も考えている。同時に、新人作者の活躍を大いに期待したい。最近では、KK誌の創作、評論に、かなり筆の立つ人がぼつぼつ登場してきているようだ。閑な一日八月号は、かなりペタンチックな読み方をし冒頭の「サジズムとは何か」には閉口したが「のおと・あと・らんだむ」という論稿には凡俗の私にも楽に読む事が出来た。論稿も、せめて、この程度の肩のこらないものにしてほしい。S小説にしても、つばをよく呑みこんだなかなか達者な作者も出てきたようだ。だが、女を書けねば小説は書けぬという事だし、とくに、これからのS小説は——などといつてはいささかオーバだが——文学的芸術的とまではいかなくとも、マニヤ小説ならマニヤ小説なりに或る程度女性が書けなくてはいけないであろう。美しい容貌、肉体、羞恥に身を揉む描写と共に、苦痛から悦びへ、希望から絶望へ、諦観や達観を織りまぜて、女性の心理描写に今少し力を加え、責める男や責められる女に、今少し人間臭さを——などと自分の書いてるものを棚にあげて、私が生



意気いふのはおかしいが、それだけの筆力が私にないしまた、じっくり腰を落としてもものを書く習慣が最近なくなつた故、大いに新人に期待するのである。探偵小説でも、昔とは違つて、現今はいささか人間を主眼に描き、成功しているではないか。といつても何もむつかしく考えることはない。

S小説、マニヤ小説というものは、どの分野をのぞいてみても、実に荒唐無稽、奇想天外なものである。というより無茶苦茶なものだ。幸か不幸か読む人がマニヤであるから、その珍妙な話をさほど気にしなく読んでくれるし、それをまた作者の方でも心得ているから、臆面もなく、稚拙な話をとくとくとして書いているのである。もう少し意地の悪い言い方をするなれば、この種の半プロの作家を見てわかるように、技倆がないから稚拙な話しか書けないのである。そのくせ、何か意味があるかの如く、マニヤの悦ぶ場面でもない所をくどくどと、もっともらしく、しかも下手くそに設定し出すから、よけいに話がつまらなくなり、と同時に、何かマニヤ小説としては妙に哀れっぽい感じさえし始める。いやこれは、私が、マニヤ小説愛好者としての個人的感想であつて、こうしたいやらしい読

み方は許さるべきでないかも知れないが。これは、私の希望であるが、マニヤ作家は、ペンで書くというより自分の肉体で書いてもらいたいものだ。自分が、こよなくSMムードに酔いしびれ、その気分を読者にわけ与えるという気持になつてほしい。文学とか芸術とかにうるさく拘泥する読者は相手にする必要はないし、人に賞められるような文章を書く

うと氣どる必要もない。作者みずから桃源境に浸り、その甘い氣分を読者に理解願えるようばそぼそ語りかければよいのである。とはいえ、こうした制約下であるから、マニヤ作者がマニヤ読者に対して、そのいいたい事を婉曲と醺化、または抽象的に表現し、迫力を出すべく努力する事は勿論、好ましい事であり、理想ではあるが、これは、本当のマニヤを相手にしては、並大抵の才能では出来ない。というのは、マニヤの読者の欲求は無限大、何時でも作者の努力を上廻っている。つまり、段々とえげつなくなつていかねば承知しないである。これは、私が実験してみてわかつた事でもあるが、例えば、ピンク映画にしても婉曲で醺化したベッドシーン、劇構成も抽象化するという或る若い監督の意見に賛同した或るプロダクションが、スリガラス

の向こうで白い肉体がクラゲみたいにくねくねするという珍妙なものを、意欲的なものと前口上して制作し、配給会社に閉め出しを食つたことがある。曰く、こんなもん、好きな奴には通用せんわ。

こんな話をSMの方へひっぱり出すのは、間違っているけれど、要するに、マニヤ小説を書いてる奴も好きな奴なれば、読む方も好きな奴なのである。自分が助平、いや、色を好むという事にも、色々とむつかしい理屈をつけたがるのは当節の流行なので、私など凡俗は賢明な先生に討論をけしかけられれば、尻に帆からげて逃げ出すより手はないが、私とて当世流に一言、理屈をこねさせて頂くなれば、「花と蛇」を書く手は根本的俗悪趣味に墮しているけれど、書く気持は女の窮極の姿を見つめようというリアリズム精神。いややっぱり、これも屁理屈かも知れぬ。とにかく、私は天邪鬼だから、充実にきたといわれる最近のKK誌の中にあつて、小説とは、かく書くものぞ、という氣取つた創作や、俺は如何に頭がいいか、という胸をはつた論理の中にあつて終始一貫、俺は如何に助平かという事を哀しくもまたいつづけてきている。といった方がよさそうだ。



創作の上で、大家の令夫人や深窓の令嬢を素っ裸にし、生まれがどうだ、育ちがどうだといったって、一皮むきや只の女じゃねえかと、そのとりすました美女の仮面性を引き剥ぐと同時に、私は、心なくも、愛読者を素っ裸にしてしまう楽しみを味わっているのである。何のかんのいったって読者もやっぱり、助平では——いや、ま、その、理屈は色々であらうけれど、作者の私としては、読者がその道を好む人なら実に有難く、都合がいいのである。故に、マニヤ作者たるもの断じて助平でなくてはならぬ。それも、大勢のM女性が作者の身近にあつて、プレイなるものに恵まれ過ぎているのはよくない。適当に要求不満にあつた方が、筆は円滑にすすむようだ。私自身、M女性とのプレイにツキ過ぎていた時は、全然、調子が出ず、というより書く気さえ起らず、恵まれない時の方が、それだけに意気盛んになったものだ。現在のように何ものもなしということになれば、書いてハッスルしても、持って行き場がないので、これも閉口だが。

愛欲描写が実にうまい小説家やベッドシーンの演出をさせたら俄然光彩をはなつ映画監督などが、案に相違して、その実生活では、

全く女にもてない人で、経験も驚く程少ない事を知り私は不思議に思った事があつたが、考えれば、それ故に、女性のその場面を描く事にハッスルするのも知れぬ。女体に対するあこがれ、旺盛な探求心、そして、もてない男の口惜しさなどを含めて、エキサイトするのであらう。故に、マニヤ作家たるもの、適当に欲求不満たるべし。

今、話した映画監督のように、女には、滅多に不自由しないという職業についていながら、不自由のしっぱなしで、それを自分でも不思議に思っておられる人があると思えば、私の友人の一人は、教壇に立って歴史学を、講義する高校教授という職業にもかかわらず女関係が派手で、別にマニヤではないのに、「花と蛇」をこれは高等Y本であるといつて秘かに熱読し、古今東西の重々しい歴史学の本が埋まっている自宅の書齋で、愛人を口説き落とし、最近では、見よう見真似の緊縛写真を撮り出したというのだから、人間とは、なかなか面白いものである。つい、長話になつてしまった。夜も大分更けたようである。

今回の鬼六談義は、予定としては、続花と蛇の映画及び、最近、撮った数本の自作シリオの映画、その間に女優を口説いて、マニ

ヤ向きの映画をロケ中に撮り、スタッフが本職よりもその方を面白がつて、プロジェーサがブツブツいい出した事など話そうかと思つていたのだが、最初から、筆は大きく脱線してしまつた。いずれ機会があれば、またしゃべらせてもらつたしよう。

最後に、もう一言、続花と蛇の映画は、サブタイトル「骨まで縛れ」（この奇妙な題名は会社の社長がつけた）で、もうとくに封切られているから、ごらんになった読者もおられると思うが、前にもいった通り、KK誌連載のものとは何の関係もない。酒場の美人マダム静子を、その酒場の乗っ取りを計るバーテンや女給達が田舎の納屋に監禁し、例によって裸に剥いで縛りあげ、バーテン女給、一致協力して、ネチネチと責めあげるといふ話で、納屋の中の現場監督を引き受けた私はこの静子役が映画に出たのは始めてという素人娘（踊り子）であるだけにかなり手古ずつたし、また責める女達が、スタッフ連がライオンの位置などきめている間に、縛りあげておいた静子役を勝手に面白がつて、鼻責めや耳責めをやり始め、彼女を本当に泣かせてしまひ、大いに私をあわてさせたのだが、そうした失敗談も、後日、話す機会があるだろう。





## 続・跨 がる 女 性

鞍 良 人

### 一、奴隷『随喜』

だいぶ昔のことになってしまいました、

昭和34年の頃、沼正三先生の「新稿・手帖」が連載になっておりました。その四月号には丁度「第三章 愛の馬東西談」があります。

その中で沼先生はローマの詩人マーシャルの風刺詩11巻、104章を引用され「扉の蔭ではフリギヤ奴隷が随喜していた、女主人がヘクトルの馬に乗る度に」と書いて居られます。これは言うまでもなく、トウロイの妃アンドロマキ（原典—uxor）が夫ヘクターに跨がって乗り廻すところを歌った詩です。この詩句で「随喜していた」というところについては、沼先生の言及は特に見られませんが、ラテン原文では *masturbantur*（自らを瀆した）となっております。真つばだかになった大柄の若妻ハイドウ、ハイドウと馬のりする勇ましい恣態におつきの奴隷もすっかり刺戟を受けてしまった様子が察しられるのです。

ヘクターにアンドロマキが騎るたびに  
奴隷はかげでおのれを瀆す。

オヴィッドの「恋愛術」の原文は、持っておりませんし、入手できたとしても読みこなせないでしょうが、たまたま R. Humphries の英訳本を見る機会がありました。そこで、「ヘクターの馬」について詩句を見ますと、  
Little girls do all right if they sit on top,  
riding horseback, ; Hector's Andromache  
knew she could not do this : too tall / とあり、この英文に関する限り（筑摩版）「テ



バイ生まれの妻は、非常に背が高かつたからけっしてヘクトルの上に馬乗りにはならなかった」(樋口氏訳)のように読めないと思います。

この辺のところは、うら若い乙女達に肉慾的快楽の追求の仕方を伝授している箇所で、「諸君が美事な脚をしているのなら、昔アトランタが夫ミラニアンの肩車に乗った様に、脚ごと相手の肩に乗っかかりなさい(更に)諸君が小柄なら(もう一步すすめて)相手の背中に跨がってしまったて、ハイドウハイドウ馬のりをしたらもっと快感が得られますよ」と説いている様な、ニュアンスに読めるのです。ここでアンドロマキが引き合いに出されたのは、普通、馬ごっこで思う存分快感を得られるのは、あくまで「小柄な」女性の場合ですぞということ強調したかったためでしょう。というのは、美事なヴォリュームの体格で知られるアンドロマキの様な大グラマーが馬のりになったのでは、乗り手の足が床に着いてしまう心配は勿論のこと、乗られた馬の方が、第一もたないからではないでしょうか。やっそこさのことで数歩前進しただけで忽ちペシャンコというのではとも思う存分の醍醐味が得られないということでしょう。

つまり Andromache knew she Could not do this (斯くし得ざるを悟れり) というのは、乗る馬も乗る馬も、直ぐに潰れてしまつて、普通のこと(男)では思いきり乗馬気分を味わえないことがわかつた。そこでどうしてもヘクターのような不撓不屈の勇士でなければ間に合わなかつたのである——というような含みに読めるわけです。そうでなければ、愛の馬ごっこのことを特に「ヘクターの馬」と名づけるいわれが納得できかねるのです。

馬ごっこアンドロマキが跨ると

大ていの馬がおしつぶされる

ヘクターが馬をつとむれば大丈夫

アンドロマキも思いきり乗る

## 二、お底々つらいで

「ヘクターの馬」は元々、特定の男女間の私事(乃至は秘事)に属する当事者同士の愉しき営みであつた筈です。例えば映画「氾濫」(35年6月号172頁で触れました)に見られた類です。恵美子というグラマ夫人が真昼間だというのにベビードール型の空色のネグリジェ姿のまま四つ這いの夫坂幹雄氏(これは真田たか子のピアノ教師で、船越英二が演ず

る)にドッカと打ち跨がり、ハイドウ、ハイドウと、部屋中を馬のりして廻つておりました。十一回目を廻り、幹雄も苦しい息の下から「オイ、もう勘弁してくれよ」と哀願しますが、恵美子は、勢よくパカッと拍車をいれながら「アン、ダメ、あと九回廻るのよッ」と許しません(写真としては、「土曜漫画」誌34年7月5日号にあります)。あの恣態に小生はアンドロマキを見るわけです。

「氾濫」で船越英二馬になり

グラマ女優に乗りまわされる

下つて、この愛の遊びが競技化したり、ショー化するに至りました。例えば映画「無頼の谷」(チャカラック)〔34年新年号94頁参照、写真は35年8月号グラビアにあります〕で活きのいいバーのホステス達が、客達を馬にして競馬をするところがありました。あの類です。(ディートリッヒが演ずる)オールタ・キンという女性が、途中の障碍を幾度も越えて、とうとう一着の栄冠に輝きます。あの時、ゴールに着くと同時に馬は乗り潰されてペシャンコになるのですが、乗り手のキーンは、跨がった姿勢のまま悠々馬を敷き続けておりました。

荒らくれた西部男を四つ這わせ



女またがる人間競馬

ゴールインすると同時にバツタリと

力つきてか馬つぶれたり

ゴールにて乗りつぶされた馬の背に

キーン悠々またがったまま

この様に人間馬を散々に乗り廻わし、遂に潰して下敷きにしてしまうというのは、実際にはなかなか見られない場面です。それでもこういう珍らしい場面が最近、テレビのゲームショーで行われたことが報じられております。テレビ番組に「底抜け脱線ゲーム」というのがあって、底抜けチームというのと、脱線チームというのが珍妙な名称のついた随分難かしいゲームをして勝敗を争います。両軍には大たい女性が一人づつ位はまじっております。7月27日のゲームでは「接しボン」、「つりズボン」、「お底々つらいで」等というようなゲームが行われた模様で、ここではこの「お底々つらいで」の紹介記事を新聞の「みもの」欄から引いて見ます。

『男性が馬になり、女性がその上に乗り三つのワクを早くぐり抜けた方が勝つ。ワクの高さが跨がったままではくぐり抜けられない高さ、馬の方はハイつくばるようになくはないけない。60キロは充分に越える巨体の竹

越ひろ子をのせたスマートなジョージ・ルイ

カー、ものの見事におしつぶされて討死に』

(夕刊北国新聞)

小生が九州に在住の頃、「底抜け脱線ゲーム」の番組を数回見たことがあったのですが

途中でその局ではやらなくなり、以来その消息を知らなかったわけでしたが、はからずもこの記事によって、局次第では引き続きやっていることを認識致したわけです。

いずれにしても、目下在住しておりますところ、見えませんから、御らんになれる局の地域にお住いの方から、実際の観戦記をお聞かせ願いたいものであります。当日出場したメンバーは佐山俊二、紀本ヨシオ、海野かつを、新川二部、白浜章、ジョージ・ルイカー、竹越ひろ子らということで、いずれが底抜けチーム乃至は脱線チームかわかりませんし、また、この外、少くとも竹越騎手と対戦した女性騎手がいた筈ですが……。

馬のりになった竹越ひろ子の巨体に押しつぶされて見事に下敷きとなつたジョージ・ルイカーという春川ナミオ氏の絵にでもある様な図を想像するわけです。それと共に、ルイカー馬と対戦した馬は誰で、またそれに打ちまたがっていた女性は誰だったのでしょうか

しらなどと思うわけです。

テレビでも馬のりゲーム見せるらしい

男子が馬で女性が騎手

竹越が馬のりとなりルイカーを

お尻の下に潰してしまふ

### 三、水中ロデオ

二年位前の夏の頃、「底抜け脱線ゲーム」というテレビ番組を見ました折、「水中ロデオ」と言いましたか、何かその様なゲームがありました。プールに浮かぶゴム製か何かの波乗り板風の物にプールサイドから飛び跨がる競技でした。その時も、両チームに女性が一人づついたのでしたが、この競技に限っては、女性が行ったのではあられなく見えはしなからうかという様な配慮によってか、司会アナウンサーは、両女性に休んで男どもがやるのを見物しているよう指示しました。初めは、男どもが代るがわる、うまく行かないながら、試しておるのをおとなしく見守っておりましたが、歯がゆく思ったのでしようか、派手な水着姿の両女性とも自らサイドふちまで進み出て来たのです。我こそは、やらしてくれば成功して見せる、といった様子でした。どうして自分らにはやらせないのだろう



と言いたげな素振りも見えました。司会者は「やってごらんになります?」とうろたえ気味。最初に一方の美女が飛んで見事に成功、水中の馬に悠々跨がりました。片一方の美女もまけじと飛んで、これも見事に成功。「これは女性の方が上手!」と司会者が感激。馬上の二人は得意然と水中に浮んでいました。

水着ごとシブキをあげて飛び降り

からだ自慢の女性タレント

ところで昨年の四月号の「Rogue」というアメリカの雑誌を見ると Bronco on the Briny (野生の海上馬) という遊びが写真入りで紹介されています。同じく「世界のショー」6月特大号という日本の雑誌を見ますと「Rogue」中の、この記事と写真が更に「日本でも流行しそうな水上ブランコ遊び」という題で転載されております。曰く、

『青春の茶目ッ気にあふれたハリウッドの若いタレントたちが新しいお遊びを考えだしました。水上ブランコがそれです。道具はドラム缶に馬のクラをのせ、これを四本のロープで水面から一メートルぐらいの高さに吊り騎手がそれにまたがるわけです。仲間がロープをゆさぶるとブランコは荒馬よろしく猛烈にとびはねます。そこで長く落ちずに馬上

にいられた時間が勝負になるのです。いうなれば「水上ロデオ」のこの遊び女の子の悲鳴をおききになる趣味の方には最適この夏日本でも大流行しそうな気がします』

そして女の子がドラム缶の上の鞍に跨がっている場面が二つ、片足をアブミにかけてドッコイショとまたがりかけている場面が一つそれから海中にモンドリ打って振り落とされている場面が三つ、海から引き上げてもらっている場面が一つ載っております。

海上にロープで吊ったドラム缶

鞍をとりつけ馬の代用

鞍の上水着娘が跨がると

ロープがゆれて馬あばれ出す

同じく「週刊漫画エース」という雑誌のグラビアを見ると、今度は我が国で早速ドラム缶をプールに持ち込んでそれに打ち跨がって遊んでいる娘さんの写真が紹介されております。「アンヨをひらいてソレノドラムカン遊びで go! go! go!」と誌されている頁です。第一景は水中に浮かべたドラム缶から一人の娘が落ちかかっているところを他の娘が水中で支えているようなところ。第二景は、一人の水着娘がちゃんと跨がったところが斜め前の角度から写されております。第三景は一つ

のドラム缶に二人の水着娘が相乗りし、更に娘がもう一人乗ろうとしております。第四景は、第二景の娘の騎馬姿を真正面から写したところ。第五景は、二人乗りの組の一人が水中に投げ出され、残りの一人も正に危いところ。

水上にドラム浮べて馬となし

水着の娘上に跨がる

少しでも馬が回ると一大事

騎り手忽ち落馬しかける

更に「F6セブン」という雑誌の最近号即ち8月13日号及び「週刊実話」8月22日号のグラビア頁を見ると、それぞれ「アッ落っこちる!」「水中ロデオ」というのが載っております。前者に曰く、

『7月23日横浜ドリムランドで、ドラムカン・ロデオが行なわれた。プールの両サイドから2本のロープを張り、その中央部に鞍をつけたドラムカンをおく。そこへちょうど馬にまたがるように人間が乗り、乗った瞬間から両サイドからロープをゆするのだ。少しでも長い間ドラムカンの上の鞍に乗っていたほうが勝ちになる。のまりアメリカの西部で行なわれているロデオを、ドラムカンで楽しもうというゲームである。下はプールの水だけ



ら本物のロデオほど危険はないが、この遊びは現在アメリカなどで大流行している。それはともかくさまざまな乗馬？スタイルを楽しんでください』

四頁にわたって五光景の写真が載っております。そのうち二つが水着女性のもの。第一の騎馬女性は水着のまま腰にピストル吊りの太ヴェルトをしめ、頭にはテングロンハットをかぶった西部劇風のスタイルで右手でピストルを抜きました。勇ましくもあり又、なかなか見事な体格です。模範演技を披露するモデル嬢でしょうか。長い黒髪が両肩の前側にたれています。第二騎馬女性は、縞模様のセパレート水着。右手で鞍の前握りをつかみ、左手を挙げて「ハロー」と大御機嫌。いずれのドラム缶も前面に「SHELL」の貝がらマークが貼りつけてあります。

馬のりの模範演技のカウガール

目にもとまらぬピストルさばき

「週刊実話」の方では、先に述べました、モデル嬢かもしれない第一騎馬女性が大写しになっております。曰く、

『この日30人くらいの若者がカーボーイハットにガンベルトというスタイルでドラムカンに乗ったが次々とふりおとされ、水しぶきを

上げておちるさまはまさに夏のスポーツとして興味満点であった。女性もビキニ姿で登場さっそうと馬ならぬドラムカンを乗りこなしてヤンヤの拍手をあびた。アメリカではマイアミビーチやフロリダの海岸でビキニ姿の女性が登場して乗るスタイルや落ち方のうまさで勝負を決めているという』

折りしも8月3日の「底抜け脱線ゲーム」番組は葉山マリーナからのプール特集ということで、太田博之、仲宗根美樹、叶修二、奥村チヨ、平凡太郎、左とん平などが出演致しました。恐らく、奥村チヨ、仲宗根美樹という歌姫たちが水着スタイルをして水上で勝負を競うわけでしょうが、さてどんな仕合があったのでしょうか？

浮板に腹這う男鞍にして

ビキニの裸女が上に跨がる

水中でレースを競う騎馬娘

ゴール目ざしてせり合い烈し

#### 四、「汎濫」系統

国映・三協プロ「覗かれた個室」（加戸野五郎監督）という映画にショートパンツのトルコ娘が客の花坂伴助（水原真が演ず）を誰も見えない廊下に連れ出します。最初自分

が馬となり、伴助に乗せてあげると言いますが、女に乗っては気の毒だと伴助の方が遠慮して、かえって四つ這いになりました。すかさずグラマーなトルコ娘がその上にガバリと跨がってしまったて、走れよおウマ坂でも山でもズンズン進め」と大声で歌いながら豊かな腰をあふるのです。伴助はお尻をピシピシたたかれ、重みにおし潰されそうになりながら廊下を行きつ戻りつハアハア這いまわらせられます。

客の背にドカと跨がり駆けさせる

トルコ娘のお馬の遊び

跨がったトルコ娘は勇ましく

唱歌うたい馬をはげます

太腿の圧倒的なヴォリュームが

唱歌に和して馬上にはずむ

むき出しのあつき血潮のやわ肌の

娘の腿が馬をさいなむ

乗ったこがなおも続けて責め抜けば

馬の男は力尽きなむ

「女の十戒」という映画の中でも、トルコ娘ではありませんでしたが、この種の室内乗馬が見られた記憶があります。それから「○○のナナ乳房の仁義」というズベ公映画の中にも出ました。昨年の「映画情報」九月号に、



その光景の写真が見られます。

旅館の一室、ビールビンが二本のっているテーブルが中央に置いてあり、中国服をパンティーがのぞく位にまでたくし上げた一人の娘が浴衣姿もしどけない四つ這い旦那の背の上にドッカと打跨がっています。太腿も露わになった女騎手は右手に振り上げたハンガーで盛んに馬をたたきながら、ハイドウハイドウとテーブルのまわりを這わせます。映画では旦那が娘に、馬ごっこをして遊ぼうと提案して四つ這いの姿勢をとります。娘はそれも面白そうねと言いながら、最初試しに跨がりかけて見ますが、裾をたくし上げないとまういと見たのでしよう、一旦退がり、充分にたくし上げました。そして改ためて「さ、乗るわよ」とばかり、後方から馬とび遊びのように勢よく跨がります。それからにテケテケテケターという起床ラッパだか進軍ラッパだかの音頭があわただしいテンポでガンガンはやしたてる中を、馬が狂った様に駆けまわります。騎り手も夢中で鞭をふるっています。

思いきり中国服の裾まくり

旦那の背なに娘とび乗る

進軍のラッパに合わせ鞭ふるう

せわしき乗馬宿の一部屋

「肉体の会話」という久我光監督の映画では清子という娘が、恋人の宮本青年にお酒をおごられ、深酔いして帰って来ます。家に着いてドレスを脱いだなりバツタリと倒れ伏した清子を宮本は何んとかして担ぎ起こそうと努めます。やっと清子の体の下にもぐりこんで一氣に背負い起こそうとするとところまで行ったのですが、宮本も酔っていたせいか四つ這いになったところを、そのまま、上の清子に馬乗りになられてしまいました。ふだんおとなしそうな清子も、その時ばかりは大いにはしやいで下着姿のまま走れ走れお馬ハイドウといいながら宮本を乗り廻します。宮本は重い清子に散々這わされ、もう一步も進めない程へトへトになります。その間何分ぐらいの時間でしょうか。随分長く感ぜられる映写時間でした。馬がヘタバツてしまいましたので騎手も落馬してしまいました。

恋人の上になりたる機に乗じ

酔いどれ娘室内乗馬

## 五、『チャカラック』系統

大映総天然色映画「黒の挑戦者」という中で、人間競馬が見られました。熱海辺の豪華なホテルで行われる秘密パーティー。なぜ秘

密かと言うと後で解ったのですが、麻薬の密売が絡んでいました。場内アナウンスがあつて見物客は二十万円もする馬券を買います。観衆のどよめきの中をいよいよ、第一レース開始です。馬になって走る半裸の男達は、みな麻薬患者で「ヤク」欲しさにその競争に出ました。なんと、そういう男馬に仮面舞踏会風の眼鏡をかけた、色とりどりのビキニ水着の美女が騎乗するわけです。スタートラインに「用意！」の姿勢で四つ這いに並んだ男達の後に緊張した女騎手達が整列しています。「ドン！」の合図と共に、騎手達は一斉に跨がりました。さわがしい音楽と熱狂した喚声の中を、各馬が懸命にひた走ります。馬上の女は、これまた夢中で鞭を入れています。

頑張れ！頑張れ！抜け！！ソレ！遂に先頭に立った組がゴールインしました。決して長くはありませんでしたが実際ささまじい興奮につつまれた貴重な大スペクタクルでした。一着になったのは何番の組でしょう。当った馬券の主は大よろこび。そのような昂奮の渦の中で、再び「第二レース」開始のアナウンスが伝えられました。

はちきれん若き肢体をおどらせて

馬にまたがるビキニの乙女



とりどりの色と模様の水着きた

若き肢体が馬上におどる

裸女乗せてレースを走るショーに出る

馬は葉が欲しきためなり

走れるは葉に飢えた患者なり

麻やく欲しさに馬をつとめる

麻薬などが絡まない、そして純粹に賭博ではない、健全娯楽としての人間競馬が、公然と行われればよいというのが小生の念願でした。34年新年号に載った、人間競馬の中で言及しました運動会種目もその趣旨の競技でした。赤めがねをかけた赤チームの男子の背に白めがねをかけた白チームの女子が跨がり、白チームの男子に赤チームの女子が跨ります。両軍一斉にスタートして、ある一定の時間のうちに白馬がより多くゴールインしたとすれば白の勝ちですので、赤騎手達が懸命に白馬を乗り潰そうと努めています。白騎手達も負けずに赤馬を御していますので、喚声に渦まく運動場の真中は、一見壮大なレスリング大会の様です。健康に日焼けした太腿が露わになった黒ショーツ穿きの女子生徒の股下では、下敷きにされた男の子が泥まみれになります。元氣な女の子は、潰れた馬を起き

させまいとして磐石の重みをかけて力いっばいおさえつけています。

高校の体育祭の出し物で

尻敷き競技に人気集まる

四つ這いで男子が作る馬の背に

女子の生徒が馬乗りとなる

ピストルの合図もろとも一斉に

ゴール目指して飛び出して行く

女生徒は黒いショーツのユニフォーム

腿むき出して馬を蹴たてる

重き騎手途中で馬を乗り潰す

馬はペシャンコ見事下敷き

白き腿太く見事に逞しく

馬のからだを敷きひしいでる

けなげにもやつのことで起き上り

馬は再び進もうとする

そのとたん女性の騎手は容赦なく

はずみをつけて腰を落せり

またしても馬はペシャンコ潰されて

空しくあがく泥にまみれて

「爆発する青春危険な火遊び」及び「日本のウェストサイド十代のしびれ」という、何んだかわけの解らない映画があって、この両映画に同じ騎馬戦の場面が出て来ました。砂浜の海岸で、四つ這いになった若い男達を馬に

して、その上に勇敢な娘達がやはり水着スタイルのまま跨がって騎馬戦をしています。馬上では娘が互に相手を落そうと取っ組み合い烈しく揉み合っています。下の馬は馬で互に頭をつき合わせ押し合っているのですが、遂に一方の馬が重みに耐えかねてお尻の下におしつぶされてしまいます。

海浜で若き男女が入り乱れ

騎馬戦遊びいまやたけなわ

四つ這いの男を馬に勇ましく

水着娘が跨がっている

背の上で闘う騎手の重たさに

くずれおれたり馬となる身は

あえなくも水着の尻にずしりと

馬つぶされて砂にまみれる

実は、この場面が更にもう一つの別の映画（題名失念）にも出て来ました。その時は、曲面レンズか鏡にでも写した様な工夫が凝らされていて、騎り手が見事にワイド化されたり大寫しにされたり旋回したりしてありました。結局同じ場面でも、この最後のものが、何か一番迫力を感じさせた印象でした。

（完）

× × × × × × ×



「痴<sup>ち</sup>人<sup>じん</sup>

の

糧<sup>かて</sup>」||  
刺<sup>いれ</sup>青<sup>ずみ</sup>  
||

## 山 本 一 章

セツコを入れた梱包が届いたのは、もう陽も沈んだ午後七時過ぎだった。運転手が途中道草を食ったのと、外の荷物の配達に時間を費したため、こんな時間になったのだった。

予め電話連絡を受けていた大山は、その遅過ぎた到着にやきもきしていた。もし荷物が間違って配達されたり、遅れて一日も二日もかかったりしたらと思うと落着かない半日だった。だから重い梱包がドッサリと玄関に投げ降ろされるのを見て、言いようもなく嬉しかった。トラックの去って行く音を耳にしながら、大山は縄をナイフで掻き切り、釘づけの蓋をこじ開けた。傍でアケミが息をつめて見つめていた。

「大丈夫かしら？」

「うん」

クッションに埋った頭髮が見えた時、彼はいじらしさで一ぱいになった。一人の人間の果敢なくちっぽけな存在が胸を打ったからだ。この箱の中の彼女に誰も気がつかずに放置されたら、恐らく彼女の二十年の哀楽もこの狭い暗闇の中で、消え去ってしまうであろう。全裸の体をいましめられたまま、一人の女が生命を失いそして腐敗して行く——だがそれは人間の社会にとって猟奇的な事件という以外何の影響をも、もたらすものではないのだ。人類の歴史や文化は永く大きいものかもしれない。しかし平凡な一人の歴史や生

活は、その肉体と運命を共にする貧弱で孤独なものでしかない。

大山は箱の中から、ぐったりしているセツコを引ずり出すと、急いで後手や足首の縄を解いて抱き上げた。その腕には力が入っていた。そして囁くように云った。

「よく帰ってきてくれたな」

アケミはその様子を横で眺めながら、妬くよりも大山という男の純粹さを感じていた。

部屋へ運ばれて畳の上に降ろされても、セツコは力なくその素肌を仰向けに伸ばしたままで、羞恥の行為を示さなかった。精根を使い果した女体だけであった。

「苦しかっただろう？」



「……………」

大山は縄の跡と打撲の跡の刻まれた四肢を撫でてやった。紫色の斑点を作っているその肌は、折檻の激しさを如実に物語っていた。

そしてふと目をやった体の一部にうっすらと血が滲んでいるのを見つけて、大山はそっと紙で拭いてやった。鄭との約束ではあったが現実にはその痕跡を見るのは辛かった。

(可哀想に！)

大山は苛責を感じて、しんみりしていた。

「恨んでいる？」

「……………」

返事はなかったが、セツコの頭がほんの僅かに左右に動いたのを見た大山は、その手を両手で握った。

「許してくれよな」

セツコが嗚咽し、涙が頬を伝ってキラッと輝いた。

「箱詰めってショックだわ。どんな気持ちかしら？」

沈黙を打ち破るようにアケミが言った。

その言葉は、沈んでいた大山にとって救いだった。

「アケミも一度経験してみるか？」

「ウハ！。でも少し興味あるわ。食事やトイ

レさえうまく行くんならね」

大山はアケミなら二、三日位なら大丈夫だろうと思った。そして近い中に実行してやろうと考えていた。

以前とは少し変わった二人の会話の調子を聞きながら、セツコは、二人の間が他人でなくなっていることを更めて感じて悲しかったが反面自分に対する大山の優しい態度も嬉しかった。心細かった箱詰めの日や、屈辱的な鄭の仕打ちも、体が休まるにつれて彼女の心から薄れて行った。

「さあ、アケミ、一緒に風呂に入ってくるんだ。洗ってやれよ。それから食事にしよう」  
この家に再び二人の女と一人の男の平穏な(?)生活が戻ってきたようだった。

○

十一月も末近くなると、さすがに寒さが身に沁むようになった。庭にある枯れかけた楓がそれでも紅葉し、晩秋の気はいを漂わせていた。午後三時、空は薄曇りで寒々とし、中は静まり返っていた。しかし無人ではなかった。大山の書斎に、大山とアケミと、そして中老の男の三人がいるにはいたが、皆黙りこくっているのだった。

アケミは裸身を椅子に縛りつけられて、口

には固く猿轡を咬まされていた。背当てに廻わした後手が縛り合わされ、左右の膝が両肩に触れながら背当てに縄で引きつけられているので、彼女の椅子の上に尻だけを載せて二ツ折れになっていた。腿のつけ根と腹部にも縄がかけられて椅子に固定された。その露骨な女体を前に、中老の男が床に腰を降ろして作業にかかった。先ず剃刀が当てられ、丹念にうぶ毛までも剃り落した。起伏の多いその部分からの完全な除去は容易ではなく、男の額には、うっすらと汗さえ滲んでいた。大山はじっとその剃刀の動きを見つめていた。太腿に圧迫された女の胸がゆっくりと喘いでいた。

「今日中にできますか？」

「うん、二日位欲しいんだけどな。この娘さえ頑張れば、できることはないが。それにここへ彫るのはむずかしいからな」

彫物師は剃り跡をアルコールに浸した綿で消毒しながら答えたが、その目はこれから針を入れる柔肌を注視したままだった。その傍に刺青の下絵が置かれてあったが、縦に並べられた◇印と×印の間に二匹の小さな蠍さそりがそれぞれ上と下を向いている図柄だった。上を向いた一匹は朱色で、下向きのは白色だっ



た。二匹の蠍は図案化された簡単なものではあったが、二本の鋏を拡げ尻尾を振り立てた姿はグロテスクであった。

大山がアケミの肌に刺青を入れようと考えたのは十日程前だった。彼女の白い肌はそのまま残して置きたかったので外から見えない部分を思索し、そこを選んだのであった。友人を通じて頼んだ彫物師は、その場所を聞いて最初は躊躇したが、倍額を支払うということで承知した。当のアケミに打ち開けたのは前日だった。

「凄く痛いんでしょう？」

「小さいのだから、大したことはないさ」

「でも怖いわ」

「厭か？」

「仕方ないわ」

しかし大山は刺青の図柄や彫る個所のことについては説明しなかった。

「わたし、辛抱できるかどうか、わからないから、縛ってね」

彼女は責めの一過程として彫られるのなら辛抱できそうに思えて、小さな声で頼んだのだった。

体を椅子にしっかりと縛りつけ、嚴重な猿轡を咬ましたのは、彼女の希望でもあったのである。

である。

狭い皮膚を押し拡げ、刻むように針が入れられると、縛られた裸身に力が入り、ビリビリと震えた。彫物師の手は非情にも休みなく動き、柔肌を細かく突き続けた。すじ彫りの苦痛は彼女の顔に汗を滲ませ、喉の奥で呻かせた。

大山が彼女の後に廻って、縛られている後手の指を握ってやると、彼女の指も救いを求めるかのように彼の指を握って力を入れた。

「難しい！」

彫物師は一言つぶやくように云いながらも手を休めず、汗にまみれた顔からは打ち込んだ凄まじい気迫が感じられた。彼にとっては一つの芸術品を仕上げるという執念だけが支配しているようだった。

五分、十分。アケミにとっては長い長い時間を感じられた。一個所だけを執拗に突かれていくという感じで、こらえ切れない苦痛だった。涙を流し、頭を振って悶えたが、下半身は固く縛りつけられているため、作業を止めることはできなかった。滲み出る血を布で拭いながら、残酷な彫刻が続けられた。

大山は目まいを感じた。これ以上その作業を見つめていると貧血を起こしそうだった。

指を外すと、彼女の手にはタオルを握らせた。

「気分が悪くなったから失礼しますよ。済んだら声を掛けて下さいな」

「ああ、旦那も気が弱いんですね」

書齋を出た大山は座敷に入って横になってみたが、気持が落ち着かなかった。

「どうかしたんですの？」

セツコが声を掛けた。彼女も今アケミが刺青を彫られているらしいことを知ってはいたが、その痛さや方法についてはよく知らなかった。ので、簡単に考えていた。それだけに蒼い顔をした大山が、座敷で横になっているのが不審に思えたのだった。

「どこか具合が悪いんじゃない？」

「いや、大丈夫」

「アケミさんは、まだ済まないの？」

「ああ、もう少しだろう」

「わたしも、してもらおうかしら？」

「痛いよ」

「でも、アケミさんがしてもらうんなら、わたしも……」

彼女はアケミだけが刺青を入れられるということに、何か取り残されたような感じがしていたのだった。

「ふん、少し高いけど彫ってもらうか。アケ



「ミが済んだら、聞いてみてやろう。辛抱できるかな？」

「そんなに痛いのか？」

「ああ、針で突いて墨を入れるんだからな」

「ふーん、いいわ、辛抱するから」

大山はセツコの気持をいじらしく思った。

手を伸してセツコの手を握ってみると、彼女も握り返してきた。

「好きかい？」

「ええ」

「じゃ、僕がどんなことをしても構わないんだな？ 尤も大抵のことはしたけどね」

「好きだわ」

女の心理は微妙だった。

アケミへの仕事が一段落したところで、大山は彫物師に、もう一人彫って貰えるかどうか尋ねてみた。

「ほーう、矢張り女の子ですか。この頃の若い娘の気持ってわかりませんねえ。いいでしょう。模様はどうしますかね？ 彫る場所は同じとこですか？」

「場所は同じ所でいいだろう。模様は蛇が面白いな」

「色は？」

「やはり朱と白でいいですな。揃いになるか

らね」

セツコの体をアケミと同じような姿勢で椅子へ縛りつけた。彫物師もそれを手伝った。

「二人共、旦那の云うことは、よく聞くんですな。羨しいことですよ。もう少し仰向けにして下さいよ。仕事がいから」

セツコの曲げられた体はアケミより水平にされたので、尻が椅子から少しはみ出した。

「この娘のは白無垢ですな。しかし剃刀は当てないかね。うぶ毛があるもんですから」

猿轡を咬まされたセツコの椅子は、アケミの椅子と背中合せに並べられた。

「僕は席を外すから頼みますよ。綺麗に仕上げてやって下さいな。時々様子を見にきますが、僕は注射でも嫌いでね」

大山は部屋を出ると、彫物師にはわからないように裏口から家を出た。まさかいたずらをするつもりもないだろうと思っただけ、少しの不安はあった。外は少し寒かった。夕暮れ近く、駅前から帰宅を急ぐ人の群れが散っていた。ぶらぶら歩いてはいたが、彼の気持はいらいらしていた。

「大山さん、どこへ行くの？」

後から肩を叩かれて、彼は一瞬脅えたように体を震わした。百合子だった。

「びっくりしたなあ。急に、おどかさんじゃないよ」

「御無沙汰。今から行くところよ。うちの親爺が暫らく居続けたものだから、自由がきかずにいらいらしたわ。アケミちゃんらはどうしてる？」

「まあ、そう急ぐなよ。お茶でも飲むか」

二人は駅前の小さな喫茶店へ入った。そこで大山はアケミらが刺青を彫って貰っていることを話した。

「ほーう、二人共承知したの。大胆だわね。わたしは厭だわ、そんなの。でも、人が彫られているのを見るのは興味があるわ、縛ってあるんでしょう。刺青師一人置いとくと危いわよ」

「大丈夫さ。変った男でね。あんなのを職人氣質って云うんだろうな。彫り出したら鬼のような顔さ」

「あのね、話が変わるけど、うちの親爺、何か感づいているようなの。気をつけないとまずいの。前から浮気したら半殺しにしてやるって云ってるから怖いわ。だから大山さんここへは、そう再々来れないけど堪忍してね。少し経ったら大丈夫だと思っただけ」

喫茶店で二十分余り話した二人は、家へ戻



ることにした。家に帰った大山は書齋へは行かず、座敷で横になった。刺青の様子を見に行った百合子は十分程して戻ってきた。

「二人仲良く並んでいい恰好ね。二人共涙をばろばろこぼしながら、足を払っているなんて傑作だわ。アケミチャンのは、もう完成してたわ。セツチャンのが、もう少し。でも変なところへ刺青したものね。蠍と蛇ってのは大山さんの思いつき？」

「うん。色はどうだい？」

「いいわよ。朱のが鮮かにできてるわ」

「あの男、何か云ってたか？」

「目を血走らせて一生懸命。二人共綺麗な体をしてるって頻りに感心してたわ。それに全身に彫ってみたくなって怖いことも云ってたわ。彼、大分興奮しているようよ。若い女二人を前にしちゃ無理もないわね」

セツコのがもう少しと聞いて、大山も気持ちが落着いた。百合子も少し興奮しているのか横になった大山の傍に坐るといきなり口づけをしてきた。

彫物師が大山を呼んだのは、それから二十分程してからだった。大山と百合子は書齋に入った。アケミとセツコを縛りつけている椅子は同じ方向に並べられていた。

「旦那、よくできたでしょう。こんな細かい細工は初めてで参りましたな。お白粉彫りの方は風呂へ入れるか酒を飲ませたら、はつきりしますから」

長さ二センチばかりの空間に、中央線を少し外れて二匹の蛇が上下を向いて口を開き、中央で尻尾をからませていた。朱の一匹が鮮かでお白粉彫りの方は近くで見ないと分らない位だった。それがセツコのだった。アケミの方のも殆んど同じ位置だったが、朱の片方の缺の先が縁に届き、白の方は左右から肛門を抱くようにしていた。一センチ余りの小さな蠍だったが、精巧な形をしていた。二人共その彫られた部分が少し腫れて浮き上っていた。

「もう解いてあげて下さいな。よく頑張ったな。ここんところは尻や背中と違って痛みが激しいんですよ」

百合子も手伝って二人を椅子から解いた。二人は崩れるように椅子から降りると、床の上に横たわった。二人の汗みずくになった背がキラキラと光った。突然セツコが声を上げて泣いた。すると隣りのアケミまでが、それにつられたように泣き出した。今までの責折檻とは異質の苦痛を、彼女らに与えたようだった。

った。

「二、三日もすれば腫れもひいて痛みもなくなるよ。冷やした方がいいんだけど、あそこではちょっと無理かな」

カカカー——とつまったように笑った彫物師は、大山から残金を受取ると道具類を片づけて帰って行った。

「旦那、あの娘らの背中に彫るつもりはありませんか？惜しいなあ」

最後に彼は大山に云ったが、大山は笑って顔を振るだけだった。

アケミもセツコもズキズキする痛みを呻吟していた。どんなものを彫られたのか知る由もなかったが、兎に角、その痛みの柔らかなを希うだけだった。気をきかせた百合子が、冷蔵庫から氷を持ってきて二人の間に置く二人はその小片を自分で熱を持った個所に当てがった。その恰好が滑稽だったので、もう少しで百合子はふき出しそうになった。

「可哀想にね。痛かったでしょう。でも大山さんのマークをつけて貰ったんだから、彼に捨てられることはなくなったわけね。彼ってそんな男なんだから信用してもいいわ」

アケミもセツコもその百合子の言葉に、何か誇らしげなものすら感じ出していた。氷が



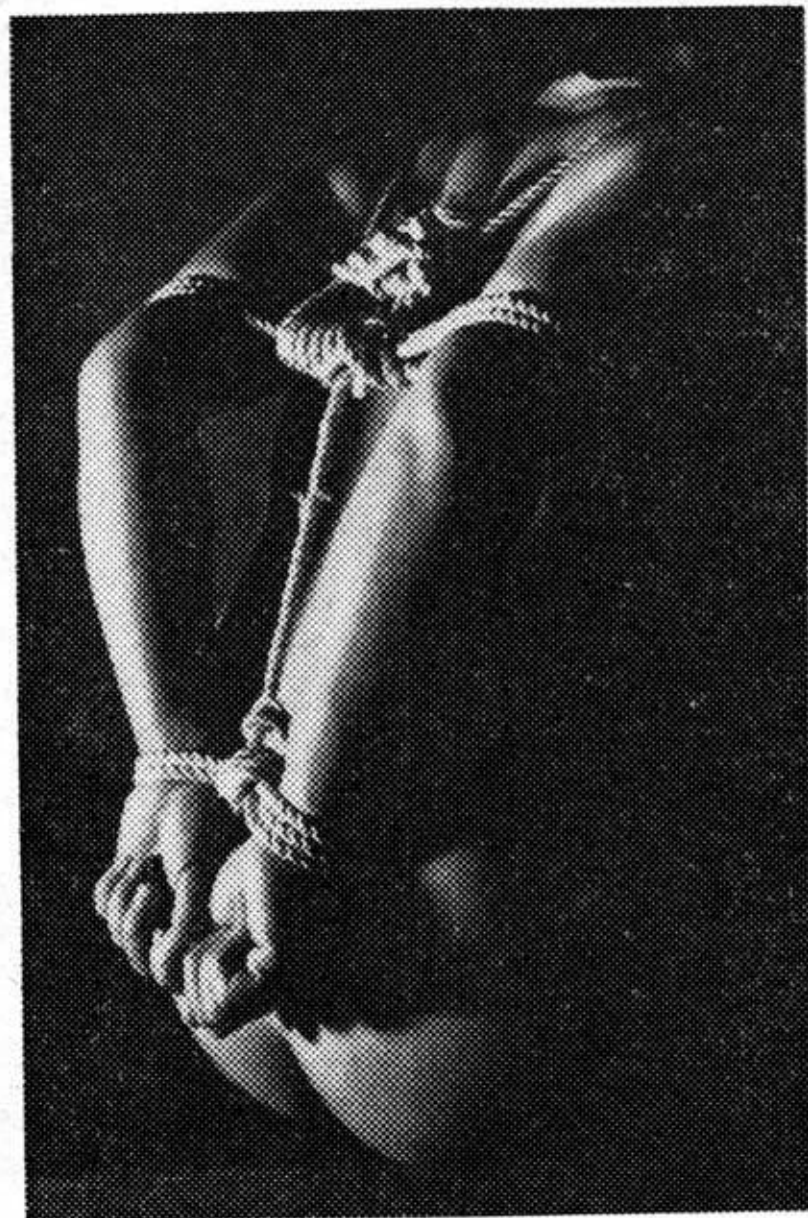
痛みを弛めたせいもあった。

「大山さん、うまく考えたわね。あそこなら誰にも見られることはないものね。それとも刺青を見せる時の羞恥心を計算に入れているのかしら。あられもない恰好になるんだからね」

彫物師を送って戻ってきた大山を見て、百合子が云った。

「ああ、そのどちらも当たっているわね。それにしても余程痛かったらしいな」

床の上に倒れたまま呻吟している二人の裸



身を見降しながら、大山はいとほしくなって二人を力一ぱい抱いてやりたいような気持ちになった。

「百合子、二、三日いいんだらう？」

「さっき云ったでしょう。ちょっと物騒なよ。でも明日の晩まで位なら」

「二人共暫らくは動けそうにないから、回復するまでいて欲しいんだけどなあ。あんまり勿体ぶると……」

「脅迫するの。いやな人。明日の晩までで辛抱なさいよ」

大山はアケミを

百合子がセツコをそれぞれ抱き起して、座敷へ移動した。二人は痛いらしく、ガニ股でヨタヨタと歩いた。「まるでエテ公ね」百合子が声を挙げて笑ったが、当の二人は笑うどころではなく必死になって歩いていたのだった。

寝苦しい一夜を明かした二人は、漸く一人

で歩けるようになった。しかし用を足そうとしてその激痛に飛び上った。排せつという行為が如何に微妙な筋肉や皮膚を使うものかを厭という程身をもって体験しなければならなかったのである。恐る恐る小用だけを足した二人は、括約筋を動かさないように、こわごわ歩くのだった。アケミが尋ねた。

「セツチャン、あんた、どうして刺青を入れてもらったの。最初大山さんは、あなたにはしないって云ってたのよ」

「わたし、お願いしたの。でも、あんなに痛いとは想像もなかったわ」

「馬鹿ねえ。でももう済んだことだから仕方ないわね。どんなのを彫られたのかしら」

「見てあげようか？」

「イヤッ。あんなとこ、人に見せられたもんじゃないわよ」

二人は、お互いに親近感を持ち始めたようだった。犠牲者の共感といったものかもしれない。

百合子と大山が連れ立って外出するのを見送った二人は、再び横になって不足した睡眠をむさぼった。動かなければ、そう痛まなくなったのが幸いだった。腫れは余り引いてい



ないようだった。

その日の昼過ぎから、セツコが高熱を出した。大山が百合子と別れて一人帰ってきたのが午後二時過ぎ、ウンウンうなっているセツコの傍でアケミが氷で頭を冷やしていた。

「大山さん、大へんな熱なの。早くお医者さんを呼んであげて！」

医師の診断ははっきりしなかったが、膀胱炎か尿道に炎症を起しているらしいということだった。刺青には気がつかなかったし、大山等も云わなかった。その熱は翌日まで続いたが、やがて快方に向って行った。

## 私 刑

その頃、百合子の上に異変が起っていた。

二号生活を送っている彼女にとって、最も心配していたこと——大山との関係が発覚し出していたのである。家に帰った彼女をその旦那が迎えた。五十才を少し越したその男の目は怒りを含んでいた。

「どこへ行ってた？」

「買い物よ」

「泊りがけの買物か。何を買った？」

「……………」

「男は誰や？」

「……………」

「みんなわかってるんや。よくも裏切ってくれたな。覚悟はできてるやろな」

「何がわかってるの？ 友達のとこで泊っただけなのよ」

百合子は、彼がどの程度知っているのか探るために答えてみた。

「ふーん、友達か？ 男の友達やろ？」

「いいや、女だわ」

「嘘つけ！ 私立探偵に頼んで調べさしたからわかってるんや。きのう、駅前の喫茶店へ男と入ったやろう？」

百合子はしまったと思った。私立探偵を尾行させたんなら、大山の家もばれてしまったのではないかと氣にかかった。

「じゃ、どこへ泊ったって云うのよ」

彼女は捨て鉢になって反撃してみた。

「それは俺がきいてるんや、男と喫茶店へ入ったことまではわかってるんや」

彼は大山の家のことは知らないらしい——しめたと思った。恐らく私立探偵が何か別のことをしている間に二人が喫茶店を出たらしかった。

「弁解はもう止した方がいいな。それより覚悟するんだな。指をつめて放り出してやろう」

か、それとも、飯場の若い衆に遊んでもらうか？」

土建業を営んでいるその男のことだから、口先だけの脅しでないことが百合子にわかるだけに恐ろしかった。

「指をつめるだけは止して！」

「じゃ男と関係したことを認めるんか？」

「……………」

「命までは取ろうとは云わないから感謝するんだな、どっちにしても俺はもうお前はいらんよ。今まで入れ揚げた金の分だけ償いはして貰うだけや」

「許して！」

「何を許すんや？」

「……………」

「体に云わせてもいいけどな、云わせてみたところで腹が立つだけやから堪忍してやる。さあ丹波行きや」

丹波の山奥に彼の飯場のあることは聞いていた。そこで彼の報復を受けることは、一層彼女に恐怖心を駆り立てた。

「ねえ、許して！ どんなことでもするからわたし、あんた以外の男と寝たことなんかないのよ」

必死の嘆願だったが、顔面を怒りの色で赤



くした男は、軽蔑したように顔をしかめただけだった。百合子は男にしなだれかかって口づけをした。どうにかして気嫌を直させたかったのである。

「裸になれ！」

百合子は、いそいそと服と下着を脱いだ。

女の武器が最後の頼みだった。男はその裸身を抱き寄せた。

終わった時、百合子は勝利を信じていた。

(男なんて、他愛もないものだから) しかし、事態は全く反対だった。

「手を後へ廻わして！」

「何をするの？ 縛るつもり？」

「ああ」

「変態ねえ——」

男は後に廻わした手首を合わせて縄でしっかり縛った。百合子は、それをも男の戯れと思っていたのである。

## ◎本誌増頁に際し◎ 懸賞 原稿募集

### ▽内容△

- 一、特異な風俗文献誌を標榜する本誌の内容にふさわしい作品を期待します。
- 一、S並にMは勿論のこと、フュテッシユ各種、女性切腹、男性切腹、女斗美、女相撲、男女性権美、生首狂崇、妊婦嗜好、変装、見世物奇態珍聞、文献紹介、同性愛、等はじめ、その他特異風俗に関する件全般に亘り、広範囲に大いに新分野の開拓による力作の御寄稿をお待ちしております。
- 一、本誌に従来余り取り上げていない分野のものの特に大歓迎いたします。
- 一、形式は創作、小説などのフィクションも結構です。自らの体験による告白や手記も結構です。更に、論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、最もお得意とするものをお選び下さい。

### ▽規定△

- 一、作品はすべて未発表の自作作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。
- 一、枚数は特別に制限いたしません。一回の掲載量は五十枚前後として下さい。
- 一、締切日は毎月十五日。入選の分は次号誌上に掲載発表いたします。
- 一、入選作品に対しては一篇につき二千元以上十万円迄の賞金を進呈いたします。
- 一、御投稿の原稿に特別の事情なき限り返戻のお求めには応じかねます。
- 一、御送稿は第一種郵便(密封)にてお願い致します。一〇〇瓦まで35円、一五〇瓦まで45円、二〇〇瓦まで55円、二五〇瓦まで65円、三〇〇瓦まで75円です。
- 一、宛先は阿倍野局私書箱第14号天星社。懸賞と第一頁に添記願います。

男は両手首を縛った縄尻を彼女の胸へ回して一巻き二巻き三巻きすると、その端を後手首の結び目に通して、グッと締めあげた。男の態度がゆっくり落着いているので、百合子は何ら抵抗することもなく、彼のなすがままにまかせていた。しかし、後手首を吊り上げるようにして、縄を首に回された時、始めてうううと呻めて身をよじった。

「さあ、行こう」

「どこへ？」

「きまってるやないか、丹波や、俺はこれ位で許さんで」

「……………」

「その首筋を誰に吸うて貰うたんや。キツスマークがちゃんと附いてるやないか。それに、ここのもキツスマークやろ？」

男は彼女の内股を突ついた。

(シマッタ！)

百合子は声を挙げて泣いた。

「カンニンして！ カンニンして！」

しかし、もうどうしようもないことは彼女自身よくわかっていた。

男は電話をして、車を呼んだ。

(つづく)

△挿入写真は筆者の提供によるものです△



漫筆 銭形平次

## 七人の花嫁

牧高志

文庫



筆者はいつも思うのだが、この時代捕物帳ほど、この世の中に楽しいものは無いと。正確にいうと、江戸時代を背景にしたドラマとなるが、ドラマの筋がおかしいの、なんの一手厳しく批判されようとも、第一、こういう風俗はもう現世には絶対に無いのだから、観ていて愉しく、かつ気持ちがしずまるような気がしてならない。中でも野村胡堂原作の銭形平次（池田大助も同様）は事件を解決するに

は、他にもう手段が一つも残されてないというような場合にお得意の女が縛られてくる。八月三日、東京地方のTV番組に組まれてあったフジテレビの午後八時から一時間に亘って放映された御存知銭形平次捕物帖「七人の花嫁」は久し振りに平次の愛妻お静を含めた七人の花嫁が白ずくめの花嫁衣裳を着たまま、全員後手に縛られるというショッキングな場面が映し出された。筋は少々子供っぽく

で見えすいたものであるが、要するに適齡期の娘ばかりを婚礼の輿入れの途中を襲い拐っさらって外国人（いわゆる南蛮人）に売り飛ばすというのであって、これを当時流行した神かくしと称する手を使ってその筋の目を誤魔化そうとするのである。

斯くて話の中心は六人目の娘が拐致されるところから平次の出馬となり、この謎を解くには、どうしても岡っ引直々の女房を提供するほかはあるまいとなつて、平次は女房のお静（八千草薫）に暗に因果を含める。お静も喜んで良人平次に協力を誓った。

ところで話は余談だが、いわば賑やかにヒロインが七人も登場するとなると、願わくばどの花嫁も美女であつて欲しいのが人情。ところが（後編に追書するように）昨今娘役が缺乏し、従つて美女ばかりを集める訳には参らなかったと見えて、人妻役の八千草薫は群を抜いてピカ一の花嫁振りを發揮していた。

さて、いよいよ夕闇迫る頃、お静が大川端を平次とガラッ八に護られてお小夜の身代り輿入れをする途中を、果せるかな、用人棒の浪人一派に斬りこまれ、応戦しているすきに肝心の花嫁お静の姿を見失ってしまう。

ここまで追い詰められると、本誌の読者な



らずとも否やが応でも、この次は一体どうなるンだろう位考え、何はさて置いて好奇心がムラムラと湧いて来る。申し遅れたが、このテレビは東映スタジオで作られ、監督は小野登である。この監督は近衛十四郎の素浪人月影兵庫の時もそうだったが、時と場合によって脚本以上に容赦なく女を縛りあげることでは有名?と見た。現に印象的だったのは道中旅の娘を捉らえて監禁し柱に縛ったまでは当り前だが、それから先きが可哀いそうである。すねた浪人崩れの男が竹の先で坐った娘の膝頭を、つまり道中着の着物を左右に刎ねて、赤い長襦袢を大っぴらに出させる、あとは湯文字一枚だけだ。というような演出を試みた御仁でもある。

ところで、映画でも芝居でもそうだが、これから先は一寸やそつとでは、なかなかめざす本陣を拜ませて呉れないのがすべての演出の常法と見えて今回の七人の花嫁もそのまま暫らく棚上げにされ、いらさらせる方法を採っている。すなわち、婚礼参列の羽織ハカマ姿の平次とガラッ八がまんまとお静を奪われたあと、大川端の岸に打寄せる多分お静が棄てたであろうところの目印の浮游物に商売柄一応気がひかれるが、いたずらに考え込む

ばかりで、挙句の果てはまるで夢遊病者のように岸边をウロウロと歩き廻るところで時とフィルムを稼いでいる。失礼ながらこんな場面は、よしんばそこにどんなギャグがあろうとも少くとも男性たる者はスクリーンを観ていないものである。

だから、しびれを切らして煙草でも吹かししばらく待っていると、やつのことに出て来た、来ました。宵の暗らさにほんやり見えるが(こんなのは早く判っ切りさせないと困りますよ)大川(今の隅田川)を小舟に乘せられ船頭一、見張り一に監視され、無残にも細引で後手に縛られた白い花嫁姿のお静が舟の真ん中に坐らされたまま漕がれて行く。やがて小舟は何んとも判らぬ屋敷の前と思われる岸に接岸すると、女をせき立て、もがく裾曳き長着の花嫁を舟から岡へ曳き上げる。そして小門から本屋敷?へと連行していくのである。このあたりの情景は曾って本誌に筆者が紹介した東映作品「花まつり男道中」に哀れな娘役を演った長谷川裕見子とよく似ており誠に好演であったと思う。実は筆者は責めそのものよりも、こうした移動場面に時代劇現代劇を問わず好感を持っている一人では非自前のシネを撮って置きたいと思っている。

もう一つ、ここで筆者好みからいえば、折角の美女八千草薫扮する花嫁を後手に縛ったのだから、のっぺら棒と型通りにひっぱって行くのは如何にも芸が無さ過ぎる。縄尻を持ったまま後ろからこずくのは結構だが、謎の屋敷ならそれらしく、秘密の段階を昇ったり降りたり、ひんやりする蜘蛛の巣だらけの地下牢の廊下を花嫁衣裳がひっかかりひっかかりして歩かせた挙句に問題の奥御殿?に後手の手首を判っきりと見せてどんと突き放す位なところが是非あって欲しい。

本TVではその点誠におとなしく、奥座敷に坐ったまま戦<sup>お</sup>のいている六人の花嫁の中へお静の花嫁が放り込まれるが、その時お静は既に後手が解かれてあった。ところがこのあとがさっぱり、しまらない。つまり熱がなくて駄目なのである。六人の花嫁を目の前にして、私が岡っ引平次の女房であります云いかせて一同を一応安心させるのはよいとして、それを運悪く誘拐団の一味に見破られた以上、ただでは済まなくなる芝居を補足的にも是非加えて欲しいと思う。

江戸時代とは云え泣く子も黙る名にしおう婦女誘拐団の連中が、あの手この手と考えた責めの大道具小道具は何処かに冷然と作られ



てあった筈である。それを念の為紹介して置こうじゃないか……となって暫らくは売り飛ばされる直前の陰惨な責め場へカメラをパンして映し出される。

「おとなしく云うことを聴かぬとそら、あの通りだ」と柱の向うに梁から花嫁衣裳をまとった一人の娘が帯を垂らしたまま逆さ吊りに吊るされている。奥州安達原に一段と華やかさを加えた風景である。「また、逃亡しようなんて了簡りようけんを起すとこんな具合だ」見ると赤い湯文字一枚にむかれた娘が髪をふり乱して石抱き責めに逢っている。

「どうだ、怖そろしいか、心の底から怖わいであろう。だから痛い目を見ない前にこちらの云う通り素直に了庵先生（彼等のおかかえ医で勿論もぐり）の手で身体検査を受けて、伝馬船に乗るんだ、沖には大きな南蛮船が待ってるぞ、いいな、それから念の為云って置くが、お前達の身柄を先さまに渡すまでは一切この縄は解かねえ、判ったな？ 小用から身の廻りの物一切は、ここに居る男衆がやって呉れる。さアあと半刻ときの辛抱で楽にさせてやるからな」

斯うは云うものの、岡ッ引の女房がいる以上油断は禁物だ、こう云う場合はどうしたら

よいか？ 娘達を早目に伝馬船に乗せて了えば事は済むがまだ陽は高い、人目もある。

それには何んと言っても平次の女房をこの場で凌辱し、手なずかせて置くのが便法というものだろう。と云う訳で子分の一人が矢庭にお静に挑み、帯を解いて仰向けに倒そうとする。どっこい、あたしゃ岡ッ引の女房だよそれっぽちの安智恵で妥協して堪るものかねえ、縛られたって、手込めするならして御覽のど笛に喰いついて殺ろしてやるッとはかり一世一代の痰呵を切り凄味をきかせたが、相手は地獄の一丁目で門番をしていたと云う向う見ずのならず者ばかりだから、始末に終えずもう絶対絶命だ。

「おッ皆んな、岡ッ引の女房はな、いつでもこの衣裳の下に朱房をかくして居るっていうじゃないか。どうだ、一つ拝ませて貰おうじゃねえか」

「ウむ、そいつ面白いや、へえ、あの朱房がねえ、この股の間に？ 大かた子袋のある代りに十手の入る袋でも、お持ちなんでしょう。ヘッヘッヘッ」

現代の青年が日頃見慣れた彼女の洋装が和服に替った瞬間、誰しも和服特有の魅力に取りつかれると云う。洋装の無かった江戸時代

の若者達はまさかそれ程でもないにせよ、白装束の花嫁衣裳に緋色の長襦袢、赤の下着はやっぱり情慾をそそるものがあると見えて、お静を押し倒した瞬間、乱れた裾からばたばた醜る緋の長襦袢はどう見ても目の毒だ。

何するんだい、お前達は。と叫んでも、口を塞さがれていては百年目、お静の力の限界が来て正に屈伏されようとした時、青天の霹靂とばかり周囲を圧する岡ッ引銭形平次の名調子が響き渡ったのである。

「おッ、どういつもこいつも神妙にお縄を頂戴しろ。何もかもみんなバレちまつてるんだ」

おまけのセリフがついて、これがTV放送筆者の改訂版なのである。因みに本放送の時は「役人に押込まれねえうちに早く娘ッ子を舟に乗せちまえ」で監禁部屋から再び七人の花嫁を後手に縛りあげて庭伝いに出るところに正面から平次が現われる（それも思いかけず突如なのである）ところが映写された。しかも乱闘が始まると肝心の花嫁達は撮影関係者から邪魔になるとばかり追っばらわれてあとは無粋なチャンバラとは如何にも情けない（と思いませんか？）。

しかもこの場合、またガラッ八が余徳とばかり（解くところは見せないが）七人の花嫁



のところへ飛び込んで恐らく目にも止まらぬ猛スピードで後手の縄を解いたと見えて、今はすっかり解放された花嫁連中がチラッと映り、この場のしめくりは砂利のスクリーンをはさんで右から平次、左から裾を乱し緋の下着を蹴ちらしながら八千草薫のお静が走り寄って感激の抱擁を行うところで一先ず大団円となったのであるが、ここまでくるまでに筆者は随分と手前勝手な悪口を云ったのは要は、映倫があるような無いようなTV放送が深夜ならいざ知らず、夕方のゴールデンアワー八時とあっては茶の間はまだ都合なことが多い頃であろうから、これ位が精一杯のところだと云われれば、それまでである。

「お婆ちゃん、どうして、花嫁さん、縛られるの？」なんて訊かれたら百年の恋も興覚めである。そこで一つ提案がある。それは株式会社天皇社が総天然色8ミリ映画時代物捕物帳を自ら製作し読者に販売することである。そこには奇巧好みのシーンがふんだんに盛りれて居り、邪魔も入らず心から満喫？ 出来る私版的捕物奇譚篇なのである。夢を抱くのが幸福なら、こんな幸福？なエゴイズムにも酔ってみたいものである。

以上、こんな漫筆を綴っていたら、偶然に

も日刊スポーツ八月四日号、に耳よりな記事が載っていたので追書として是非添えて置きたい。

「深刻な時代劇の『娘役』不足と題して、NHKの『大岡政談』とフジ『銭形平次』はテレビ界でも数少ない時代劇。いずれも20パーセント以上の視聴率をかせいで、『二大捕物帳』といわれているのだが、人気上々に喜んでいい筈の担当者、実はその舞台裏で娘役探しに四苦八苦。女優さんの中には捕物帳につきものの縛られ役、殺され役を敬遠するムキもあって『娘役ヤーイ』とタレント不足をかこっている。云々。

つまり始めのうちは美人タイプ娘役が割合多く集ったが昨今は美人も数少なくなっている、おまけに和服のこなし方、時代劇の所作事は全く零、歩き方さえなっていない、それに第一背が高くなったのがカツラを冠った男優よりも高いという、そこへもって来て『悪役ならイヤよ』と題して次のような甚だもったいないことを仰言るようになった。

すなわち、おもしろいのは出演交渉を始めると「縛られますか？」とまず聞く人が多い

(NHKの話) ことだ。両者番組(銭形と池田)とも捕物の推理や面白ろさが人気の一つ

の支えとなっている以上、女優さんが縛られたり、殺されたりは当り前。にも拘らず二枚目女優といわれる人達は素直にこんな要請に乗って来ない傾向が強くなった。だから原作で縛られたり殺されたりするところを、わざわざ書き直して一応ご機嫌を取り出演して貰うこともしばしばです。とはプロデューサーの話とある。

要するにテレビ界はタレント不足に悩んでおり、分けても時代劇のコマ不足はかなり深刻。とは私達も認識不足でした。それにしても永久にいつでも何処でも縛られる訳でもないのに「縛られ役は嫌やだわ」などと放言する女性は、それこそ株式会社天皇社教養指導部あたりでみっちりシゴク必要がどうもありそうである。

なお、筆の余勢を駆って筆者が一言つけ加えて置きたいことは二大捕物帳のうち「池田大助」のレギュラーお美濃事克本幸子(22才)は天性の美顔におどけまなこを輝かやせて筆者が数えただけでも四、五回縛られている。或る意味でファンの多いことであろう。このスナップはいずれまた。

(完)



S M カメラ・ハント

……△飯塚千鶴子の巻▽……

## 「妖精のたわむれ」

辻 村 隆

東京のS氏が来阪されて電話が掛ってきた時、生憎私は所用で留守にしていた。夕方帰って来た私に、家内はS氏の伝言を伝えてくれた。

「Sさんから御電話がありましたネ。五時にミナミの喫茶マリモで待っているからって。もし五時以降なら、六時まで法善寺のいつもの寿司屋にいるから、是非出てきて欲しいって……。余りおそくならないで帰って来て下さいネ」

妻は稍々不安と危惧をこめていった。S氏が来阪すると、いつも遅くなり勝ちで、時には泊ることすらあるからだ。

S氏は、山原清子の第二回の座談会の席上で、ゆくりなくも知り合った仲だった。S傾向の彼は、私と非常に意気投合し、社用で来阪すると、必らずといってよいほど、私を呼出して派手に奢ってくれた。

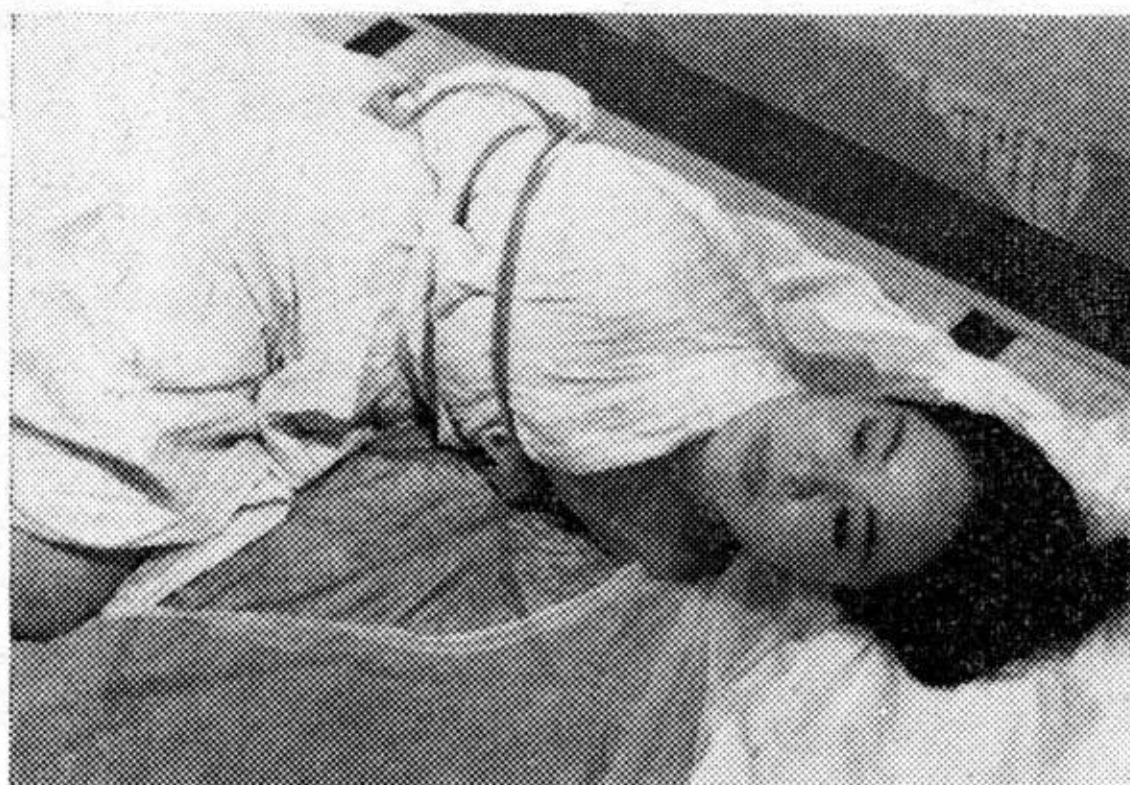
糖尿の発病以来、余り呑めなくなった私にとって、S氏のこの豪遊には、時としては、サービス過剰を感じて、持て余すこともあるが、彼は心底から愉しげに一夜を語り明して痛飲し、美女にたわむれ、偽悪をふりかざして、日頃社長の職責柄抑圧されている、鬱積したSの感情を、大阪の地に吐露して行くように思われた。あっさり辞退すればよさそう

なものの、根が左ききの私のことである。それに、日頃は仕事に追い廻されている毎日であれば、偶にはミナミの歓楽街で、若い美女を侍らして、SMについて論じ、飽気にとられている美女共に、SMの毒気を振りまくのも、亦私としても愉しからず哉のひとときでもあった。

暑さ続きのこのところ、とも角も、さっと一風呂汗を流して、時計を見ると午後四時少し過ぎ、急いで行けば五時の約束のマリモで出会えるかも知れない。

「体によくないから、余りのまないで下さいよ」





という妻の言葉にフンフンとうなずき、私は夕食ぬきで家を飛出すと、タクシーを拾った。S氏と会う場合、私は絶対自分の車を使わないことにしている。帰宅に自信がもてないからだった。

七月終りの土曜日——この処、十数日カン

カン照りの暑い日和続きで、日が落ちても、昼間の炎暑の名残りが、ムーツと巷に充満していた。

マリモの暗い二階に上ると、匂いのいり混った冷気が汗ばんだ体をなでる。

奥まったボックスからS氏が手を振っている。

「やあ、会えてよかったですよ。ダメかと思っていたのですが」

「一寸出ていましてネ。家内から聞いて大急ぎで駆けつけました」

「いつもいつも御無理許りいっちゃって……」

辻村さんの御高説をきかないと、関西へ出張してきた甲斐がないというものです」

「いや、とんでもない。いつもつまらない話許りで。Sさん、せんだって京都へ出て来られた時、お立寄りになるかと思っていたのに御連絡もなかったですネ」

「ええ、あの時は女房のサービスでしてネ。

祇園祭を見たいっていうものだから……。女房のお供じゃ、全然面白いハナシ出来っこないでしょう。だから今夜は日を改めたつもりなんです。こんな場所じゃ仕方ないでしょ。

すぐどっかへ出掛けようじゃありませんか」いそいそと伝票を掴むと、S氏はもう立上

っていた。一見せっかちに見えるS氏の、このテキパキした動作が私は好きである。マリモの階段を下り乍ら、S氏は振り返る。

「明日東京で会う人があるので、今夜の新幹線で大阪を発ちます。二時間ばかりしかないので、せかして御免なさい」

× × ×

宗右エ門町のマンモス・キャバレーF。

大阪ミナミの歓楽街の代表のような、このキャバレーのボックスで、私達二人は四人の美女群に取り囲まれている。時間が早いので客は未だ少ない。

飛び込みのイチゲンの客だから、指名はない。本番二人の外、体の空いている朋輩の女が坐る。坐ってしばらくすると又立上る。入れ替りに誰か他の女が坐っている。何ともめまぐるしい。私は正直いって、こうした落付きのない雰囲気余り好まない。

アクセントの違いで、私とS氏が標準語で談合していても、彼が関東の人間である事はすぐ、女達に分るらしい。関東の語尾ははね上り、関西の語尾は下り気味である。

この様な場所で酔うまでのものは愚の骨頂である。ビール一本が一打に匹敵する価格にハネ上り、まるで金をのんでいる様なもので

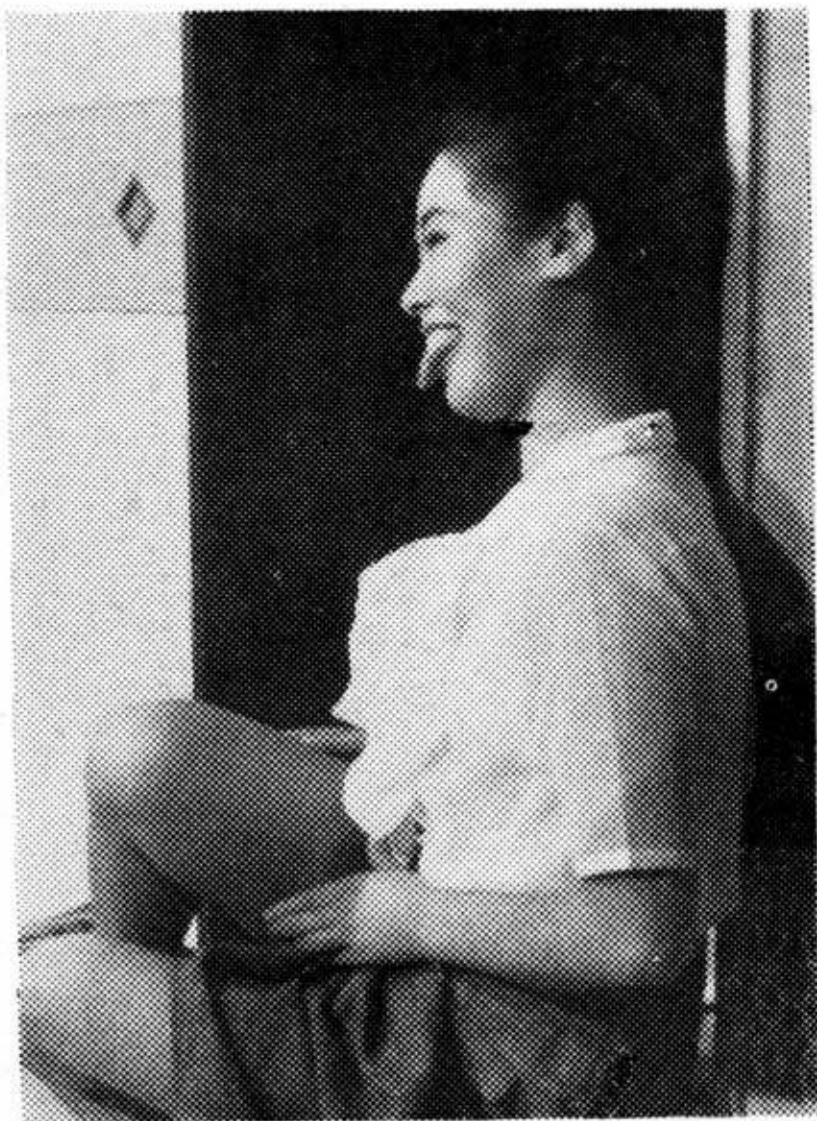


あることは、遊び上手のS氏もとくに承知であったが、今夜は時間もないので、ジャンジャンもって来させた。いつもなら、どこかで下地に一杯のんで、いい加減のところでお繰り込むのであるが、時間がないから、その下地もない。ホステス達にとっては、よき鴨ござんなれと許り、甘いものに群がるアリの如く集まってくる。

S氏のききたいのは、カメラ・ハントの女性達のこと。手頃なプレイの出来る女性はいないかってなこと。夫婦プレイにオブザバ―として同行出来ないか等々。

最初はひそひそ声の彼も、いつしかビールの酔いも次第に手伝って声高になり出す。私は場所柄ハラハラし乍らも、いつしかそのペ―スに捲きこまれて、己れ自身も声高に応答している自分をそこに見出す。

今夜のS氏は、小原真澄に関して、かなり執拗に喰い下ってくる。ハナシは、私かマスキの誕生日の一日、志摩方面へ一泊ドライブしたことに付いて、根掘り、葉掘りきき出そうとしていた。私がマスキとの一泊旅行のカメラ・ハントを脱稿したのが、締切間際の五日前だから、彼は勿論、私のカメラ・ハントを読んでいないわけである。



前月号の『岩壁の裸女』が、公開誌掲載の立前上、比較的、編集長の神経に触らぬよう安全且つ穏健に書いているが、その事実譚ともいうべき、ありの儘の事実は、やはり公開を憚られる個所が随所に点在している。

彼にとっては「そこがききたい」と思うのは、SM同好者として、無理もない心情であったに違いなかった。奇くでは月刊誌の都合上、カメラ・ハントの間隔は一カ月ずつ区切られるが、マスキと行ったのが七月十五日、そしてS氏と逢っている今夜が七月三十日で

に緊張していた。

「辻村さんの話しぶりでは、志摩で一泊した夜、マスキ君と何もなかったと御仰有いますがネ。本当に何もなかったの？　これぐらいでおとなしく納まる雰囲気じゃないと思いませんか。本当の本当はどうなの？」

これぐらいでと、S氏はしきりにビール瓶を握ってゼスチュアたっぷりである。

「そこは適当に想像して下さいよ」

私は当り障りなく体を交そうとする。

「逃げちゃいかんよ逃げちゃ。ずるいよ、そ

ある。とすれば、その間半カ月の経過のみで事実、マスキとのハント紀行の憶い出は、私にとっても、まだ生々しかった。

私は包み隠さず、殆んど在りの儘をS氏に話した。体を乗り出し時々ゴクリと唾をのみ込み、しきりに会話を打つ彼の顔は、同好者のみがしる真剣な様相



こんなことを判っきりし給えよ、君——」

いつしか社長口調になって、S氏は飽く迄喰い下ってくる。

「読む人の、マスマミに対するイメージを壊したくないのでネ。判っきりというのは酷<sup>こく</sup>と思いますがネ」

「じゃあ、SEXはあったと考えていいわけですね」

仕方なく私はうなずく。折角前月号では、奇麗ごと<sup>きれいごと</sup>に終らせたのに、遂々白状せざるを得ない羽目に陥ってしまった。

「そうでしょう。それが当然ですよ。その方がずっと自然ですよ。辻村隆ともあろうお方が、あの素晴らしいマスマミ君と、一夜を共にして、何もなかったというのがおかしいよ。畜生ノうらやましいね」

S氏はやけにビールをガブガブとのみ乾した。だから云わないこっちゃない。辻村隆、ペンでは、おとなしくオネンネさせておいたのに——。彼はしきりに赤裸々な告白を聞き出そうとする。その執拗さに負けて、真実あの夜、マスマミを強烈に緊縛して、私は遂に自制心をなくして、彼女と一線を越えた仲になった事を告白せざるを得なくなったが、こんなことなら、あっさり、あの時書いておけば

よかったと、今更乍ら、心にもないペンの綾が悔まれた。夜中、ビールの多量の液体が、膀胱を圧迫したのかマスマミは尿意を訴えた。不自由な縛られた尽の姿で私の胸の中に抱かれていたマスマミが、仄かなビールの香のただよった吐息を私の耳許にふきかけて、小さく囁やいた。縄尻をとった尽は裸のマスマミを浴場に連行した。深夜、私は何の気兼ねもなく一緒に入り、立ちはまだかつて、激しく沛然と降り下る、マスマミの爽やかな驟雨を、腹這い乍ら夢中で受けていたのである。芳野眉美になりたいと思っていた最初のチャンスをもぎむぎ逃した私は、全身にくだけちる飛沫の中に、芳野眉美の喜悦をさもありませんと始めて会得した観念でうけとめていたのであった。

S氏に喋べるこの件りは、私も流石に声を憚<sup>はげ</sup>かった。ネクタールなる隠語はこんな際便利であった。奇クならではの特殊用語も、時によつては都合よかった。声もなくS氏はうなずいていたが、感嘆に似た溜息をつくとき、「Sである貴方が、そうしたM的感覚になるのですかねえ。しかし、その場合、私だつて或いはそうしたかも知れませんか」

と、S氏は感興極まれりという面持で、きらきらと眼を輝やかせて、さもありませんと、

話の合間合間に大きくうなずいていた。私より三才下の彼は、私の語る、その真実の一つ一つが、激情をそそる以外の何ものでもなかったに違いなかった。

興深げに、私達の話にききいる女。呆れ顔の女。興なげにかけもちでソワソワしている女。そんなホステス達に囲繞されて、私はいつしか、彼女達には無意識にきかせる口調になつて喋べっていた。

S氏の質問は露骨である。私は隠さず応答するが、そのやりとりは、やはりここへは書けない。セックスを加味したプレイが随所に顔を出しているからだ。

私は空になったコップを、私の傍らに侍る女性に何気なく差し出していた。そのホステスは何か考え込んでいたのか、突嗟には瓶をとり上げず、ハッと気付いたようにあわててビールを手にして、急いで並々といでくれた。話のきれ目を待っていたかのように、私の耳許にソツと唇をよせ、小さく囁やきかけてきた。

「辻村さんでしょう。お願いですから、私を辻村さんの指名に変えて下さらない。でないと、最後までお相手できないかも知れませんわ。私、話しがあるの、先生に——」





「えッ！」

私は改めて、その女性をマジマジと見直した。彼女はやや羞らい気味に睨を伏せて、テーブルの下で、そっと私の右手のひらに指を重ねた。誰かに似ている——。突然には思いつけなかったが、彼女が、歌手の二宮ゆき子そっくりの顔立ちである事に私は気付いた。歌手の二宮より少し年令は上らしいが、落付いた深味と、人生の年輪を重ねた、女らしい味わいが、黒いドレスを纏ったその肌から、じーんと感じとられた。

人はいないか——」

S氏は大きく手を振って、女達を振り返った。私に指名を望んだ女を除いた三人の女性が、一斉に、わたしよ、わたし、わたしにと口々に叫んだ。

「君の友達いるの、この中に？」

私は傍らの彼女に訊ねる。

「ええ、あの方の左側のカットの人。よく気が合う妹分なんですわ。出来れば指名していただければ嬉しいけど」

「分ったよ、そうしよう」

「辻村さん怪しいぞ、どうしたんだい」

S氏が酔った勢いではやし立てる。

「ウン、彼女、指名にしてくれていうんだが、構わないかしら」

「ああ、いいですよ、

いいですとも。外ならぬ辻村氏の頼みだ。ゼッタイいけないとは申しませんよ。ああボクは淋しいネ。誰かボクの指名になってくれる

私はS氏に囁やく。ふんふんうなずいていた彼は、矢庭にカットの可愛いトランジスタグラマーといった、廿才前後の彼女の背に手を回して、ぐいと引寄せ、

「よっしゃ、この子にきめた。あんじょうたのんまっせ」

奇妙なアクセントの大阪弁で笑った。

「嬉しいわ、ウチ」

その子はS氏にチュッと形ばかりのキッスをして見せて、立上った。指名に振替える手配であるらしい。

「おいおい待ってくれ——おトイレよ私」

よろよろと立上り、ふざけて、その子の肩に腕を巻き、S氏はしばし消えた。汐どきと見てか、取巻きの他の女も次々と立上った。

ゆくりなくも、広いボックスに、私と彼女の二人だけがポツリと取り残された恰好で坐っていた。

「スゴく奇遇のような感じですね。私、辻村隆って人、まさか本当にいるとは思いませんでした。しかも私の目の前にこうして並んで坐っているなんて、まるで夢みたいですよ」

「何故知っているの？」

「そのわけ知りたい？」

「知りたいね」



「辻村さんの書いておられる雑誌を、無理矢理読まされたから」

「奇クを？」

「ええ、或る男に——」

「あんたの旦那？ それとも恋人に？」

「旦那や、恋人ってなものじゃないわ。判つきり分り易くいえば、私の稼ぎを次々と絞り上げた男。世間でいうヒモに……」

「ヒモがいるの？ こわいねえ」

「ヒモは唯今留置中、起訴間違いなしだから当分帰ってこないわ。暴力団員でしたの」

「何かやったんだネ」

「あの男の入っている組は、大阪でも悪名高い〇〇組なの。最近元締の神戸の方から検挙の火の手が挙って、あの男も、恐喝と、売春容疑で引張られたの。私も今こそこうした一流キャバレーのホステスしているけど、それはそれは非道い眼にあったわ。口では言えないような。それを聞いて欲しかったの。今はゼツタイ、ヒモはいないんです。私とさき程の子と二人で、萩の茶屋でアパート借りてるんです。辻村さんさえ構わなかったら、お勤めが終ったあと、少しでいいから逢って下さらない。何か過去の出来事を、すっかり洗いざらい喋ってしまいたいです。ねえお

願い」

その時、ゆらゆらと揺れてS氏が通路を、相手の女性と絡み合い乍ら戻ってくるのが見えた。彼女はさっと小さい職業用名刺を胸許からとり出すと、胸に挟んでいたちっぽけな赤いボールペンで、裏に何か書き込んだ。素早く私に手渡す。暗いボックスのスタンドに名刺を近よせて見ると、店の源氏名が、  
「勝浦」と刷られてあって、裏返すとかなり手馴れた女文字で三行

(汚されていじめられた過去は過去

しみじみいじめられてみたい女心

バカな女ね私って……飯塚千鶴子)

× × ×

抱きかかえられるようにして私達はキャバレーFを出る。千鶴子の指が、強く私の指に絡まって離れない。別れ際に囁やく言葉。

「この横手の従業員の出入口で十一時迄、きつとネ、欺さないで——」

私は無言でうなずき返す。

ベルトコンベアにのったように、タクシーが止まっては流れ、又止って一台、一台とFの前を走り去ってゆく。

その一台に私とS氏は身を委ねて、新大阪駅へ向っている。彼はかなり酔いが廻ってい

る様子であった。

「辻村さん、くどいようですけどネ、例の小原マスマ、どうにかならないですか……」

「どうにかっていうと？」

「出来れば東京へ連れて行って、ボクの秘書にしたい。何も仕事をしない秘書、ペットにして、いつもボクの身近においておきたい。彼女に対する責任はすべてボクが持つ。と、こんなこと考えちゃったんだけど……」

「Sさんらしい、お金のある人の考えそんなことですネ。マミスがきいたら、一も二もなく行きたがるでしょう。しかし言うておきますけど、さして教養はありませんよ。可愛いことは凄く可愛いけど。それに私以前にも交渉のあった、いわば過去に少しズベ公めいたところのある娘ですよ。それでもいいんですネ」

「面白いじゃないですか。そんな娘を飼育してみたくなるのがボクの悪趣味かも知れないな。辻村さん、是非お願いしますよ」

強引にS氏に喰い下られると、私も断わり切れない。いつしか承諾した格好になってしまった。

「兎も角、一両日中にマスマに、その事を話して見ましょう」



「有難う。一日千秋の思いで彼女の  
上京を愉しみにしています。帰って  
二、三日したら電話しますから」

私はうなずく。マスキのことだ、  
この条件を話したら、恐らく快諾し  
て、気もそぞろに飛んでゆくことだ  
ろう。とかく大東京に憧れる女心で  
ある。S氏がしっかりした会社の社  
長だけに、滅多なこともあるまい。  
いつか近い将来、マスキと出会った  
時、そこに、すっかりMに変貌し、  
飼育され、成熟し洗練された女の姿  
を見出すに違いない。

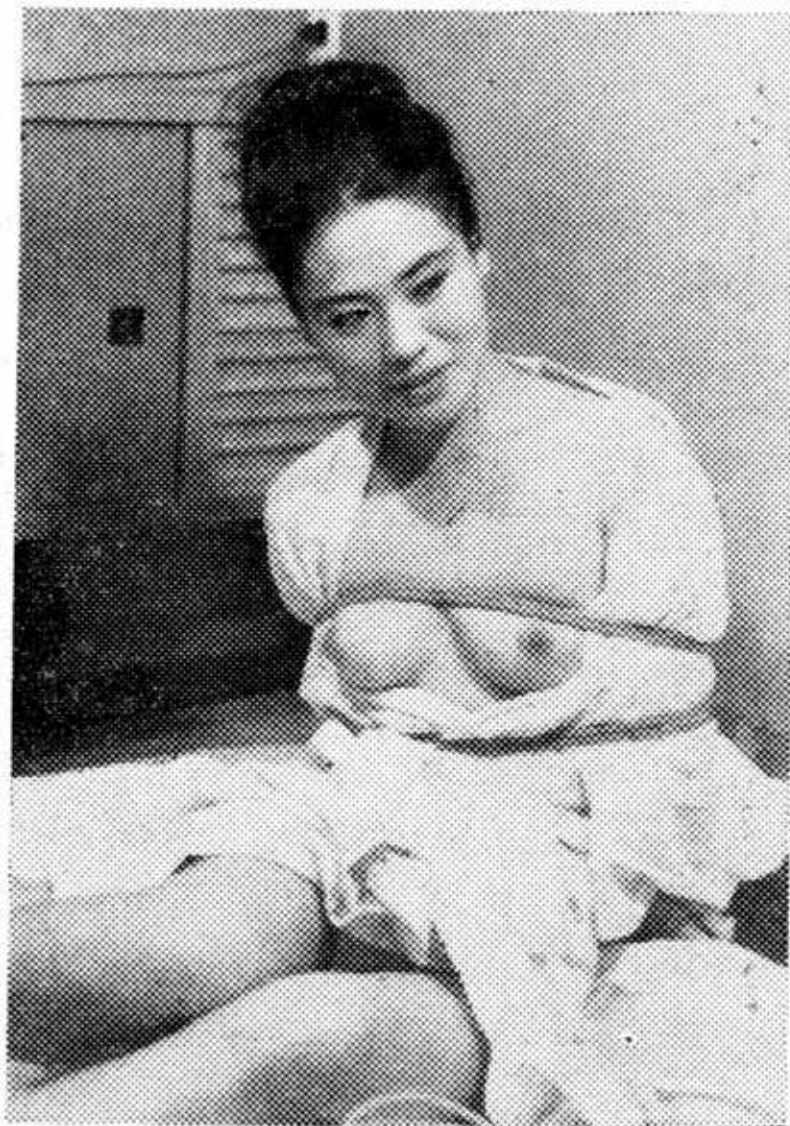
私はフト話題をかえた。

「今夜の私のホステスで、指名して欲しいと  
いった女があるでしょう。どうもハント出来  
そうなんです」

「ホウ、それはそれは……。流石に辻村さん  
は眼が早い。いや手が早いのかな」

私は先刻貰った「勝浦」の小さい名刺を黙  
って裏返して彼に手渡した。カールームは暗  
い。S氏はパチリとライターを点じると、そ  
れを読んだ。

「成程ねえ、いつの間に——」  
素早いことやったんだろうというように、



ウームと唸って、暫し感嘆した挙句、私の肩  
を叩いた。

「こりゃ、いよいよマスキを紹介する義務が  
ありますよ」

と、よくよくマスキにこだわっている。

私はざっと飯塚千鶴子の素姓を説明した。

「ヒモはないと思いますが、どうもこれが目  
的じゃないですかネ」

S氏は人さし指と親指を丸めて見せた。そ  
れは私にも危惧を感じている。相手をSMマ  
ニヤと素早くにらんで、金にしようとする、

近頃の不景気な折柄の、ホステスの  
体当りのテクニックでもあろうか。

でないとし話が無すぎる気もす  
る。私のカメラ・ハントの過去の経  
験から推しても、ホステス等のいわ  
ばくろうとタイプの女性はいない。

「だまされた気で、一応当って見よ  
うと思うのですが」

「それもいいでしょう。虎穴にい  
らば虎児を得ずって諺もあります  
からネ。やって御覧なさい。マスキ  
との交換条件という意味じゃ決して  
ありませんが、私がスポンサーにな  
りますよ。かなり要るようでしたら  
仰有って下さい。いつでも喜んでハントの  
資金は提供しますよ」

「どうもどうも。その節はよろしく頼みまし  
よう。しかし、今夜はまあ当って砕けてみる  
ことにします」

「ところで今夜早速やるの？」

S氏は眼前で人さし指を二、三度動かして  
カメラをうつす動作をした。

「又、目を改めるとなると、気の変るときも  
ありますからね。出来ればそうしたいが、何  
も準備して来なかったんですよ」



「私のでよかったら使いませんか。十枚ばかり、新製品（彼の会社の本来の目的である。貿易用機械部品）をうつして来ましたが、二十五、六枚は残っているはずですよ。ストロボはないが、フラッシュガンなら二箱許りありますよ」

「ええ、有難う。いい調子ですネ。カメラは何ですか？」

「アサヒペンタの一眼レフです。うつしそこないは少ない」

「でもカメラ、要るでしょう？」

「カメラは五台許りあります。私の撮った商品の写真は、出来たらすぐ送って下されば結構です。ああそれから、うまくいったら、その彼女のフォトも是非ネ」

「話がうまくゆかず、撮れなかった時困りますネ」

「構いませんよ。その時はフィルムをその俣抜いて現像だけでもらって、ネガを送って下さればいいですよ。カメラは次回に来た時にでも返してもらいますよ」

それで私の腹はきまった。

新大阪駅にて、新幹線東京行午後八時発ギリギリに間に合って、ホームで慌ただしい別れのあと、私は紙バッグに入った、カメラと

フラッシュを横わきに抱えて、地下鉄の乗り場へ足を向けた。飯塚千鶴子と会う午後十一時迄には、かなりの時間の間隙がある。

新大阪駅から地下鉄でナンバーへ——。ゆきつけの喫茶へ漫然と入る。海のものとも山のものとも分らぬ、未知の、ホンの数時間前始めて知り合ったばかりの女と出会って、果してうまくゆくものかどうか——。私自身その気紛れさに、いささか自己嫌悪すら感じつつあった。仄暗い喫茶の、ルームの片隅で、酔いのさめつつある脳裡で冷静に考えて見ると、それは余りにも私だけのひとりよがりであったかも知れない。馴染客をつくらうとして迎合する女の、手練手管の様に、急激に思え出した。

私はテーブルの下に棚においたカメラが、いっそう重荷に感じて来た。そのくせ、数度腕時計を眺め、時の経つのをまっているもう一人の私が、今宵の猟奇を求めて、しきりにあがいていたのである。

一人ぼっちでのむコーヒの何と味けないことよ。その味けなさを紛らわすべく、私は勢いよく伝票を掴んで立上ると、酔いのさめかけた肉体に、更にアルコールを入れて、酒の勢いをかって、初期の目的に邁進すべく、

ネオンの巷にぶらりと出て、立呑み屋の屋台を求めて首をつっこむ気で、にじむ暑さの、夜のミナミをさすらい出した。

× × ×

マンモスキャバレーFの裏口から、ドクドクと吐き出されてくる、けたたましい女族の群れ——。その周辺のおちこちにたむろする男の影が、女にヒタとよりそい、アベックを形成して、東に西に消えてゆく。

私のまなこは、飯塚千鶴子を求めて、必死に出入口をにらんでいる。薄暗いボックスの片隅で見た二宮ゆき子によく似た女。しかし数時間のうちに、彼女の面影はいつしか怪しくなっていた。見落すまいとして、にらむ様にその一点を凝視する彼方に、私の記憶に誤りがなければ、確かに飯塚千鶴子とおぼしき女性が立現われた。彼女はスタスタと出入口を数歩離れ、それから辺りを見廻した。それは或る種の期待をこめた姿勢であった。

私は建物の暗い影から急ぎ足に出て、彼女の眼前にて立ち止る。

勝浦さんとも、飯塚さんとも、千鶴子さんとも呼び様のない、困惑した気持で「待っていたよ」

とひとこと声をかけた。見も知らぬ他人同



志が、ボックスでの一時間半の間に、手を握り、肩を抱き合ったからとて、一旦去って再び相見えるとなると、こうでも声をかけるより外に言いようがなかった。

「あらッ、やはり待っていて下さったのネ。嬉しいわ」

飯塚千鶴子は、パッと眼を輝やかせて、媚めかしい唇をやや歪めて艶然と笑った。

「何処へ行きましょう？」

「何処でもいいよ。君の知っている処があったら……」

「深夜営業の、落ちついた店がありますわ。

軽いものでもたべ乍ら、お話ししましょうか」

私はうなずいて、すべてを彼女に任せて並んで歩く。極く自然に彼女の腕が、私の腕に組むようにまとわりついた。

御堂筋を横断して、黒々と聳える歌舞伎座横の道を右に折れる。この一帯はナンバ新地といわれるところだ。食堂を標榜し乍らも、中に入ると小料理屋めいた内構えのその店を勝手知ったる如く、調理場横の細い通路をぬけて奥へドンドン歩いてゆく。突き当りの右手が扉になっていて、開けると、ベニヤ仕切りのたたみ二帖ぐらいの居間が数室ある。履物をぬいで、その一つに上り込むと、チャブ

台を挟んで、彼女は膝をくずして横坐りになる。むっちりした腿に、エンジのセミタイトスカートが窮屈そうにピッタリと肌にくい込んでいる。胸許を大きなリボンに結んだ白のブラウスに細い金のネックレス、職業用の化粧を落した、やや色あせた顔に、夜の勤めの疲れがにじみ出ていたが、素顔の綺麗な、肌のきめやかな色白の肉感的なタイプの女であった。まじかく見ると、二十三、四才ぐらいの爛熟した女の匂いを、全身から生々しく発散させていた。夜毎の接客のなりわいが、いっしょに彼女の体にしみついていたらであるうか。

「やはり本当に来て下さったのネ」

彼女はしみじみした声で呟やくようにいった。別れ際、ああは言ったものの、ホステスの悲しさ、私の顔を見るまでは一抹の危惧を抱いていたらしい。

「名刺の裏の、殺し文句につられたよ。私の気持をぐっと惹きつけたからね。にくいね」  
ビールと軽い一品料理を注文し、運び去ってしまおうと、彼女は鮮やかな、馴れた手付で私にビールをつぎ、自分のコップにもなみなみとついで、そっとコップを寄せ合うようにすると、一気にのみほしていた。

「私、辻村さんのものを、三十九夜物語当時から読んでいました。最近三カ月許り読んでいないけど、あのカメラ・ハント読んで、なんて虫のいいこと許り書いているんだらうと相当反澁を感じていたのですよ」

「それはそれは……」

「まさか、辻村さん御本人にお目にかかれるなんて、夢にも思わなかったんですもの」

「至って平凡極まる男にガッカリってとこかね」

「平凡なのでよかったわ。キザな文士タイプを想像していたの。その平凡さに、どの女の人も反って安心して、フラフラッと喋べってしまう、辻村さんのテクニクに乗せられてしまふのネ」

「テクニクなんて何もないよ。買い被りだよ。でもまさか、あなたが奇クを読んでいたとは意外だったよ。世間は案外狭いものなんだネ」

「無理矢理に読めって、読まされたの。SMっていうのかな、そんな世界のあることを、あの男から仕込まれたのよ。私の転落の詩集聞いてくれる？ 石川達三の小説の題名じゃないけど……」

私は無言でうなずき、カニサラダをボソボ



ソつまんで口に運んでいた。

「私、九州の田川郡糸田町って炭鉱の多い町の生れよ。不況のあほりで、父の仕事がいけなくなつて、高校は三年になる春の中退。先輩のお友達を頼って大阪へ出てきたの。色の黒いおカップの純情な娘だったわ。大阪駅でポン引の若い男に、うまくひっかけられたのが私の運のつき――。」

辻村さん、こんな話おきまり過ぎてチットモ面白くないわネ。ジメジメした話よすわ」

彼女は口をつぐんだ。確かに彼女自身いう様に、定石通りの転落の花びらの物語。エロダクションのストーリーの発端でもある。彼女の言葉にウソはないにして、転落の娘達の動機は、東京も大阪も



皆似たりよつたりである。田舎からのポツと出娘を引っ掛けるのに、駅前の狼野郎達は、さして苦勞もしなかったに違いない。

「まあいいさ、それで？」

私は先をうながす。

「大学生の服をきていたけど、裸になると、

右腕に『男一匹』って下手な刺青をしていたわ。堂山町の安宿の二階で、一週間許り、縛られ通しのカンキン状態が続いたの。私があばれたし、隙があれば逃げ出そうとしたためでしたけど。その男は（俺は女を縛り上げて虐めるのが生甲斐だ。おとなしくしてないで、もっと暴れる。暴れれば暴れるだけ、俺は尚更たのしいんだ）なんていって、十数本の縄を準備して考えられる限りの縛り方を私の体に試したようよ。

夜も昼もない、暇さえあれば、私をまるでオモチャのように扱かって、私の体のあらゆる隅々まで、しゃぶりつくし、しりつくしていったの。何も知らない純情な私を、台風一過のように激しい勢いで女にしてしまった。しかし男はいつしか私を愛し始めていた事に、私自身身体から気付くようになったの。

（お前のような可愛い女を売り飛ばしたくない。一緒に暮そう）

といい出したの。男の仲間が時々入って来て、縛られている私を、物欲しげにジロジロ見つめ、中にはいやらしい素振りをしかけたり、聞くにたえない露骨なことを口にして、私に近づいたりする者はあっても、男は頑として指一本私に触れさせなかったの。ヤバいから早くパイせえと、仲間がいうのを振り切って、男は組長のところへ、自分の女にしたいからって頼みこんだらしいのよ。それで私に稼がせた金を組に何万か入れることでハナシがつき、私と男との同棲生活が始まったってわけです」

飯塚千鶴子は淡々と他人事のような口ぶりで話していたが、話をきいてビールを独りでついて呑みほした。

私も黙って専ら聞き役に廻っている。ここ



で変な半畳を入れると、女は貝殻のように堅く口を閉ざしてしまいうだろう。彼女は語りついで。

「組の世話で、男は小さいバーのバーテンにはいり、私はその店で客の相手をするようになりまして。僅かの間に真黒だった顔も、すっかり白くなり、大柄だったので、未成年として怪しまれることもなく、比較的順調な毎日が続いて、だんだんにこの道に馴染んでいったのです。疲れた体を引曳るようにしてアパートに二人で帰りつくと、縛ったり虐めたりするのが好きな彼も、流石にぐったりして、プレイしない夜の方が多く、偶に想い出したように私を縛っても、あの最初のときのような激しい情熱は感じませんでした。二度妊娠して二度とも彼のいいつけで始末してしまいました。

彼は奇クの月極め購読者で、本が送ってくると、自分の好きなものだけ一夜のうちに読み終って、私にも読む事を強要しました。S Mのものの許りです。

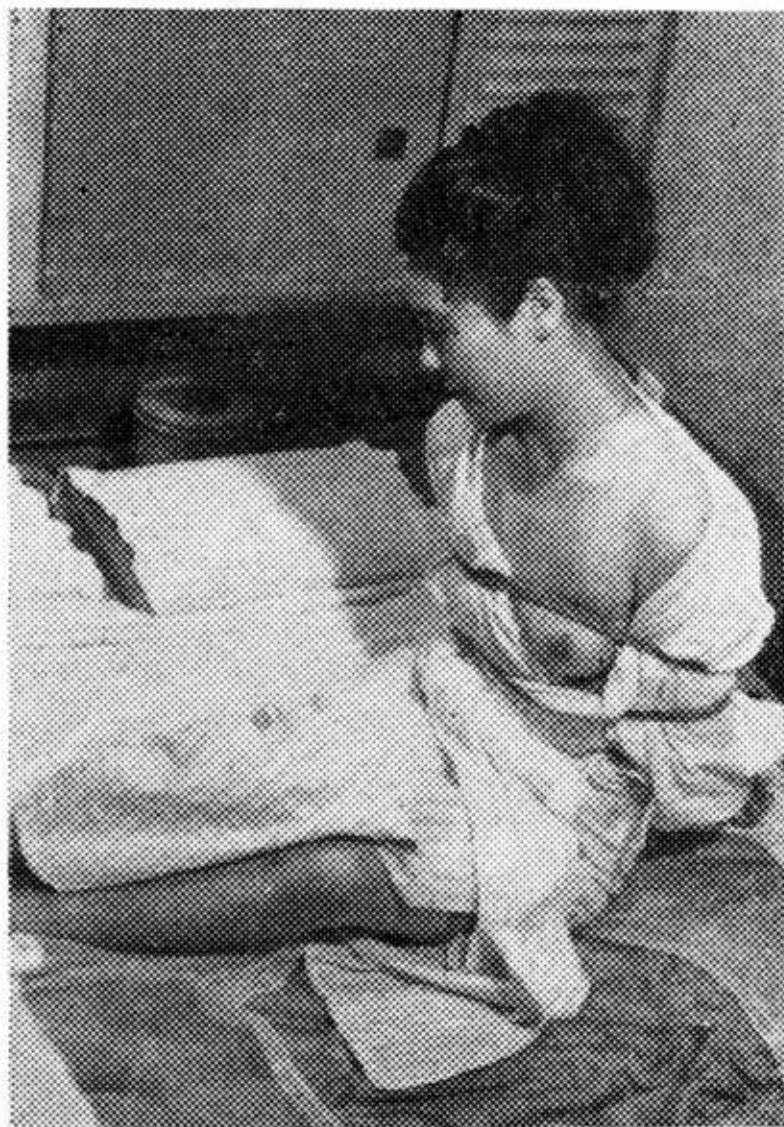
彼も高校中退で、父親のいない家庭で育って、悪い仲間に誘われて、ぐれ出して組に入ったそうです。

二年半彼と同棲するうち、いつしか私の肉

体はMになるひとききを歓ぶ体に変貌しておりました。身内の疼くような、切ない生理前後、私はむしろ彼に緊縛を要求したりする事すらありました。同棲中勤めのバーが三度許りかわり、一時、彼と別々のバーで働らく時期があった時、私は彼に内緒で、三度許り浮気をしましたが、単なる身体の交歓は、私の

被虐を求めて餓えた心をみたしてはくれませんでした。一度など、相手の男自体がMになるうとして、色々と私に求め腹立たしくなつて、四ツ這いになった中年男の頭を蹴飛ばして帰ったこともあります。

夜の不自然な爛れな生活を続けるうち、彼は胸をわずらって、入院しなければならなくなりまして。入院費はドッサリとかかり、私の稼ぎはきびしくなりました。私も悪い女だっただけですが、彼が入院して十カ月も経った頃、その頃浮気した男の強烈なSに惹か



され、遂々手に手をとって大阪をドロンしました。相手の男は小学校の教師でしたが、そのため職をやめ、名古屋へ逃げて、中京の祇園街で私は相変らず夜の勤めに出て、男は塾の講師や、筆耕をしておりました。この男は一種の責め具マニアでした。暇さえあればコツコツとひとり、いろいろの責め具をつくるのが唯一のたのしみでした。黒い革帯や、パンチ、鳩目、尾錠など、まるでカバンの修理屋が開業出来るくらい揃えて、私のウエストやヒップの寸法をはかっては、私の身にピ



ッタリと箆った責め具をつくりました。猿轡に使う箆口具も十何種類か作り、貞操帯めいたデルタバンドにファースナーをつけたものや、黒革のブラジャーの真中に穴をあけて乳首のみ突出するものなど、押入れを開くと、これらの責め具で、ムーツと革の匂いが鼻をつくぐらいでした。彼は殆んどロープを使わず、彼に云わせると、縄は最も原始的な緊縛用具に過ぎないというのです。そして私の体を責めるのに専らバイブレーターを使用したのです。

私はのたうち、悦楽の叫喚に汗を流し、悶絶するまで、彼はその手を休めず、私の心身をトコトンまで責めぬくのです。しかし不思議に私の体に傷はつかず、いよいよ脂がのって、我乍らあきれる程、豊かに成育してゆきました。

耽溺の生活はつづき、夜もすがらSMのプレイが絶間なく、私はひる過ぎまでねてしまいます。夕方風呂へ行って、化粧して店へ出て十一時半にアパートに帰り、待ち兼ねた彼の新作を身に纏い、そして溺れてゆくという日々の連続でした。彼は眼に見えてやつれてゆきました。私の収入で充分二人はやって行けましたが、案外律義な彼は、遊ぶのをい

さぎよしとせず、何とか仕事をつづけていたため、過労と睡眠不足と荒淫がたたっていたようです。この尽でゆくと、第二のこの男も或いは病気になっていたかも知れません。

一年以上名古屋での生活が過ぎた秋の夜の一日、私達二人に破滅の日が訪れました。最初の男の、組での仲間が、偶然に私の勤めているバーに入ってきて来て、私を認めたのです。

男達は三人連れで、そのうちの一人が彼の舍弟だったのです。逃げるいとまもなく、私は外で待ち受けていた男達にとり囲まれ、その尽車にのせられて、出来上った許りの名神高速道路を一路とばして、大阪に連れ戻されたのです。最初の彼は電話してあったのか、連れ込まれた旅館の一室で、怒気に燃える形相で、膝頭においたこぶしを震わせて待ち兼ねておりました。愛憎が彼の体内で激しくぶつかり合っていたのでしょう。私は殺されるかも知れないと思いました。

三人の男の前で、彼は荒々しく私の服を引きちぎり、下着もちぎりとって、ブラジャーとパンティ一枚の私を、太い縄で、無茶苦茶に縛り上げました。その縛り方は最早、SMのプレイのルールを度外視した、荷物にも等しい扱い方で、海老責めにして、背に足をお

いて、力をこめギューギューと力任せにしめ上げたのです。彼はズボンをぬいで、革バンドを引抜くと、それこそところ嫌わず、力の限りなぐりつけました。絶叫する私の口にプーンとむれた匂いのする、薄汚れた靴下を二つ押し込み、その上から、私の頬がヒン曲るほど強く縄でしめつけました。

最も苦しい海老責めの、それもプレイを度外視した強烈な縛り方の上、ところきらわず打たれて、私は息もたえだえに、もうこのまま死ぬのではないかと思いました。

三人の仲間の一人が、見兼ねて（もうそのくらいで許してやれ）と止めに入らなかったら、本当に死んでいたかも知れません。

大きく息を弾ませ、彼はやっと打つ手を止め、死んだようにぐったりとなっている私の顔を荒々しくぐいと持上げ、少し心配になったのか、海老責めの縄だけはといてくれましたが胸の縄、足の縄はその儘です。

夜更け、組の仲間の一人が運転する車で、私は縛られた上に、じかに合おうバーを引っ掛けて、皆に囲まれて旅館を出ました。そして古巣の私達二人で暮っていた元のアパートへと連れ戻されたのです。

第二の彼の云う、最も原始的な縄の洗礼が



四日三晩ぶっ続けに続きました。私の全身は縄目の跡で隙間もなく埋まり、革バンドの激しい打撲の痕が全身を蔽いました。廊下にあるトイレへも行かせてもらえず、私が訴えると、彼は大きい空缶をもって来てそれに用を足させ、夜更けてそっと捨てに行きました。（殺してやる、殺してやる）と、彼は絶えず口走り乍ら、真赤に血走った眼で、私を責める手段は常軌を逸しておりました。

太いローソクを、何十本となく買込んで来て、全身にそれを立て、少しでも身動きすると、熱いローソクがタラタラと肌に流れ落ちました。彼が何か用事をする時は、私は首に犬の首輪をはめられ、太い鎖で柱につながれていました。食事も彼の残りものを、縛られた俣なので両手を使えず、喘ぎ乍ら這いなめずり廻して口に入れました。豊満だった私の体も、日毎毎の責め苦に流石にやつれが目立ち始め、それと共に、彼も眼を奥へ凹ませてどす黒い隈が眼のふちを蔽い、折々、疲れ果てた様に少しの間でも、ウツラウツラと、体をだらしなく左右に振って舟をこいでいたのです。

狂痴の果ての恐ろしいカタストロフが、もうほんの先までやって来ているように思われ

ました。プレイというには、余りにもかけ離れた、悦楽も歓喜もない、唯あるのは、愛情のしがらみと化した責めといたふりと一方的な凌辱だけでした。

私にも充分悪いところがあっただけに、私はこの責苦を忍従し、じっとこらえて、彼のなすが俣になっており、ひとときも早く、彼の怒りのとけるのを祈りたい気持でした。

四日目に仲間が訪れてきて、幽鬼そっくりの彼の姿、凌辱と責苦にさいなまれて生傷だらけのやつれ果てた私の姿に、大いに驚いた様子でした。彼の組長に当る男が改めてかけつけて来て、この忍従の激しい責苦にピリオドが打たれました。組の監視の下に、数日後ようやく元気を取り戻した私は、男達につれられて、暴力バーのホステスとして勤めることになりました。このバーは彼等の資金源のひとつでもあるので、絶えず組員の誰かの眼が光っていました。

数カ月経った頃、私は彼以外の三人の組員達の共通の女になっていました。いや、無理矢理ならされた恰好でした。

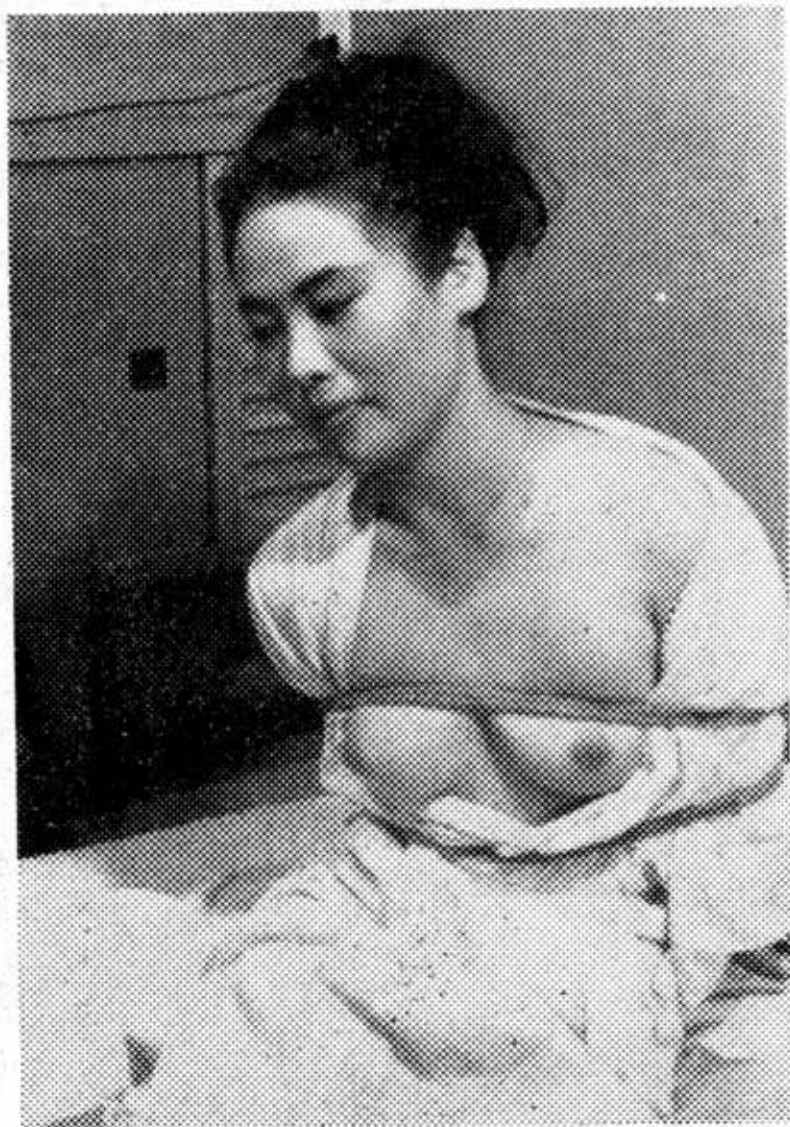
働らいても働らいても、稼ぎまくっても、すべて組員達に吸いとられ、反対に借金はいくらも式にふくれ上って、最早どうにも抜き

さしならぬ、雁字搦目の情ない毎日を押つけられ、希望も愉しみも、夢もない、蒼ざめて這いずり廻る、地獄の如き日々がつづいたのです。最初の彼は、仲間三人の共通の女になった私の事を知っていましたが、彼等には恩義もあり、何も責め立てませんでした。しかし夜は狂おしい程に私を求め、縄を握る手は妖しく震えていました。以前よりヤクをうっている事を私は薄々感じていました。すっかり恢復しきらぬ病氣とヤクに、彼の肉体が急速に荒廃してゆくのを私は彼の体からじかに感じとっていました。

働らけど働らけど無に等しい生活が半年もつづいた頃、組自体が大揺れに揺れ始めていたのです。神戸の××組から火の手が上り、その傘下にある彼等の組も安穩では済みませんでした。慌ただしい動きが私にも分りました。春の大手入れの際、売春容疑と恐喝で彼も例の仲間で一斉にごっそりと検挙されたのです。足許に火がついては、最早私達稼がされている女の監視どころじゃありません。むしろその容疑を恐れて、勝手にどこへでも行けといった風なのです。

この機会に便乗して、私は友達三人と一緒に逃げるようにして、この暴力バーを去りま





した。といって、今更堅気の仕事も手につかず、友達の一人の世話で、キャバレーFに入ったのです。ここも稼ぎと文句の多いところですが、兎も角もヒモは切れて、今の私は自由なんです。恋愛も自由なんです。例えば辻村さんと一夜の恋愛をしたとしても……」

長い凄惨なハナシを終って、千鶴子は妖しく笑った。

我に返って時計を見ると、既に午前二時。チャブ台の上のビール三本は、とっくの昔に空になっていた。

少し酔いの回ったトロンとした眼で、千鶴子はチャブ台を押し付け、私の膝に倒れこんで来て、じっと私を見上げた。

私の首にじんわりと腕を巻くと、スツとビールの匂いを漂よわせた唇をよせてきて、囁きかけて来た。妖精に変化して……。

「ねえ、思い切り虐めて……。私をいい気持ちにさせてえ——」

× × ×  
カメラ・ハントの前置きが大変長くなった——乞御諒恕。

蛇の道はヘビというがこの深更にもかかわらず飯塚千鶴子はチャンとホテルを見つけ、プレイの場を探してくれた。叩き起された女中が、ねむい眼をこすり乍ら、うるさげにポットとちっぽけな茶菓子を置いて引下ると、間髪を入れず、彼女は立上って入口の扉のノブを回して施錠した。

「カメラ・ハントなさるの？」

「出来れば、そうしたいネ」

彼女は黙って立上ると、バスの湯栓をひねって戻って来た。

「お風呂に入りたいわ」

「いいさ、どうぞどうぞ。ぬいでゆくところを先ずとらしてもらうかな」

「いやネ、そんなフォト、別段どうってこともないでしょう」

「いや、君が余り美しいからさ」

「辻村さん独特のお世辞ね。カメラ・ハントによく出てくる台詞よ」

いい乍らも、いやな気配もなく彼女の眼は笑っていた。私の準備は至って簡単。紙のバッグから、S氏のカメラ、アサヒペンタックスをとり出し、フラッシュを装填すると、フアインダーを覗いて見た。

「とるよ？」

「いやーん——」

飯塚千鶴子はペロリと舌を出した。そこを一枚——。スカートをぬぐ又一枚。ブラウスをぬいでシュミーズ姿をとろうとしたら照れて胸を抱えた。そこを一枚——。緊縛でないフォトは、これくらいにしておこう。

「辻村さん、いやーね。こんな何でもないフォト撮ってどうなさるの。ちっとも面白くない」



「いじゃありませんの」

「又逢う日に、記念に、あんたに進呈する分だよ」

「そんなの貰ったって、誰にも見せられやしないわ」

千鶴子はふとのぞかせたあどけない笑いを浮べて、又舌を出した。

私は狐につままれた調子で、コトがトントン拍子にここまで運んで、ハタと困った。

緊縛するに必要な一条の縄も持参してないのである。

「困ったネ。折角プレイフォートを撮る段になって、私はこんな事になるとは知らなかったから一本も縄をもって来なかったんだよ」

「カメラは準備したんでしょ」

「いいや、これはあの友達の借りものさ」

「とんだカメラ・ハントね。辻村氏準備が悪いぞ——。仕方ないわ、黙っていようと思っただけ……。これ使ってよ」

思いがけなくも、飯塚千鶴子は、かなり大きめのハンドバッグを開くと、底の方から平たく折りたたんだ細目の縄を一条とり出したのであった。

「びっくりしたなあ、もう——。よく持っていたネ」

事実、私は彼女がしなやかに柔かく使い馴れた縄をとり出したのに一驚した。

彼女は心持ち睨を伏せ、呟やくようにいった。

「でもネ。もし好きな人に出逢ってプレイしなくなった時、なければ困るでしょう。だから私、もしやの僥倖をたのんでもち歩いてるんだけど、随分長い間、使うことがなかったわ。一本の縄でもないよりましでしょう。それより一緒に入りませんか？」

妖精は艶然たる媚笑を浮べて、私の手をとると力をこめて握った。私はうなずく。

「ぬがしてあげますわ。さあ……」

馴れた手付で、しゃがむとバンドを外し、ファースナーを引き裂き、香港シャツのボタンを外してゆく。

「先に入っててネ。すぐ行きますわ」

或いはその間に、私の財布はぬきとられ、カメラ諸共に、彼女の姿は消えるのではないかと、そんな危惧すらチラリかすめる程、彼女のサービスはよかった。それともよくある手でいざという時、とんでもない奴が現れる美人局（つつもたせ）ではないかと、ジャアジャアと湯舟に湯をみたし乍ら、悪い予感許りが当る。余りにもサービス過剰になると、

反って気色わるい。しかしその不安は数分後に霧散した。豊かなボリウムのある女体を堂々とさらして、千鶴子は浴場の扉を開いて私の眼前に姿を現したからである。

「どっちの？」

漫才師の口調を真似て、どうしたと訊ねる彼女に、私もやり返す。

「君の体、いいじゃない？」

眼鏡を外しているので、尚更マジマジと見つめるのだろう。その視線をまともに受けてさっと、かかり湯を浴びると、私の傍らに足をつっ込んで来て、豊かな女体をざーッと沈めた。小さい湯舟の湯は忽ちに溢れて、洗い場が洪水になるくらいにどりこしてしまふ。

湯舟で向い合った私達は、どちらからともなく体を寄せ合って、唇を求めている。

過去のモデルにはない、甘い果実のうれた味の、ぬめりとした舌が、私の口腔をたくみにかき乱して舌と舌がもつれ合った。

私の機能が激しく躍動する。それを抑えるかのように、彼女の甘い声が耳許で

「これからプレイ始めるのでしょ。あわてないで……辻村さんらしくもない」

さっと体をかわして、しぶきをあげて彼女は躍り出ると、濡れた軀をぬぐいもせず、さ



っさと浴場を出ていった。

正にお面一本とられた形である。

私が出てくると、既に彼女は備えつけの浴衣を身に纏って、旨そうにしなやかな手付で煙草をふかしていた。何もかもが一步先んじられ、徹頭徹尾、彼女に振り廻されている恰好である。

「ハイ、縛って頂戴。きつてもいいわ。一本きりで物足りないけど……。その代り、うんと虐めてネ」

堂々と憶する色もなく、彼女は愛用らしき縄を私の目の前に差し出した。こう正面きって押しつけてこられると、反って私は萎縮してしまふ。主客転倒した恰好で、兎も角もいわれた通り縄をとり、後に回って両手を背後に組み合して、縄をかけ、胸に二巻きするともうおしまいになった。細いので縄を半分に曲げて使ったので、幾許の長さもない。

まるで初歩的なポーズだが、ないより遙かにマシである。胸を強く乳房の上下でしめたので、胸許をこじあげると、形のよい崩れていない双つの丘が大きく突出している。前後左右から、彼女の肢態をカメラに納め終り、このシンプルな縛りをとく。フラッシュガンがあと三個しか残っていないのに、私は愕然

とした。いつものストロボのしかもハーフ判の使いなれた私は、つい同様のポーズを数多くとり過ぎるキラいがあるが、そのいつものくせが出て、貴重なフィルムを、よく似たポーズ許りとして、うかうかと無駄に費消してしまったことに気付いた。気付いた時はおそい。カメラの捲上の指数は二十九を指している。あと七、八枚はとれるが、フラッシュが三個ではどうにもならない。カメラ半ばでどうやらフォトに見きりをつけて、プレイのみに専念することになりそうな気配である。

縄をといて、浴衣を剥ぎとると、ハッと彼女は胸を抱えたが、下には何一つ身につけていなかった。私の追う手を逃れて、鬼ごっこを愉しむ子供のように、ふんわりと柔かく弾力性のある、ダブルの寝具の上を転々した。

その彼女の挙動からは、先刻きいた陰惨な暗い過去は微塵も感じられない。プレイの行為自体を心から愉しもうとする、燃えさかる女体のみが、ありありと私の網膜を強烈に刺激した。

やっと捉えた体を抱きすくめ、後手に挟み上げた左右の手を一本の縄の端で結び、背でぐいと引き絞って吊り上げ、首に回して、直線に股にかけて、元の両手に縄の端をつない

だ。短かい縄を最大限に活用したのである。両手を下げようとすると股の縄が喰い込む。身をくねらし、よじらせて、彼女は少しでもラクな姿勢をとろうと努力していた。

のけぞり、海老の様にはね上り、脚をばたつかせてねじそるその女体を、カメラはまたたく間に、フラッシュの閃光と共に撮り終っていた。残ったフィルムは、いかにASA-100のフィルムでも、部屋の暗い蛍光灯だけでは、例えレンズを全開にしても露出不足で恐らく無駄であるに違いなかった。

私はカメラを投げ捨てて、俄破と千鶴子の白い豊かな肌に爪を立てていった。

抱きすくめられ、軽く汗をかいだ彼女は、甘い息を弾ませて、喘ぐ。溜息にも似た微かな囁やきが私の耳朶を打った。

「ぶって……早くぶってえ。思いきり、ああ私——」

頭がジーンと重く、眼が気だるい。夢魔からさめて、裸の私は眼を開いた。手を伸ばすと、傍らは空しく空白になっていた。

嵐のようなひとときのあと、女の要請で、手足を縛った俤、私は彼女を抱きしめて、いっしかトロトロとまどろんだ筈なのに——。



縄もろとも、飯塚千鶴子は忽然と消えていた。あわてて枕元の時計を見ると午前七時だった。暑い太陽が、コンクリートの高い壁に押しへしやがれ乍らも、微かに朝の光を窓に送りこんでいていた。部屋の空気はネットリと澱んで、微かな女体の匂いの名残りが、そこはかとなく私の鼻をついた。鼻先の女の枕

から、それは発散しているのかも知れなかった。のろのろと身を起すと、私はハッとして、やおらずボンのポケットを探って見た。私の記憶どうりの紙幣が、減りもせずその俵にあった。眼を転ずると投げ出した俵のカメラがその位置にチャンと転がっていた。

## △華々しき女体緊縛の組写真集▽

限定版写真集  
グラビア印刷

### 美しき縛しめ 第四集

一〇〇〇円(送共)  
略号 △美4▽

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

一般書店売りは一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。

### ◎縛られた美女ばかりのフオート八十態の内容◎

刺青女体の逆エビ責め (山原清子)  
鉄扉に緊縛晒し責め (玉田美佐子)  
ブロック石抱き責め (木村洋子)  
箆子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)  
両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)  
古墳後手吊り組写真 (木村洋子)  
両手吊りに悶える組写真 (山原清子)  
逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)  
猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)

革拘束具による組写真 (大塚啓子)  
柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)  
セーラ服緊縛組写真 (大塚啓子)  
野外に於ける晒し責め (玉田・木村)  
刺青女体の柱縛り責め (山原清子)  
捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)  
入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)  
両足吊りの表と裏 (山原清子)  
△以上緊縛写真 八十葉▽

私はコツコツと頭を叩いて見た。判っきり記憶がよみがえり、始めて私は、彼女が純粹のプレイヤーであった事に思い至った。枕元のスタンドの下に、一枚のメモが見えるように挟んであった。とり上げて開く。(愉しかったの一言に尽きる一夜でした。私のSMの遍歴はみんなウソです。私のMの創作です。気の弱い善良な夫はテーブルで入院中です。急に夫の顔が見たくなりました。夫の大好きな奇クの新刊号を買っていつてやりま

す。  
私の一夜の気紛れを、お許し下さい。

親愛なる辻村様もとへ 千鶴子)

ポカンとして私は天井を振り仰いでいた。ニフは妖しい蜜をまきちらせて、夜明けに消えていったのだ。昨夜来のすべてが嘘の様に思える。

そして、飯塚千鶴子の強烈なイメージのフオートだけが、夢でもなく、歴々とカメラの中に納まっていた。

何処まで嘘で、何処まで真実なのか？

思考力をなくして、私はいつまでも、いつまでも紫煙のみを天井に向かってふかし続けた。

(おわり)





# 切腹研究夜話

中 康 弘 通

近ごろになってはじめて、お手紙を下さる読者の方々、それは大むね小著「切腹―悲愴美の世界」（久保書店刊―売切）の「あとがき」で、筆者の住所をご存知になってのことであるが、そういう方々からお受けする共通のご質問の一つに筆者が今まで発表した拙文の、掲載誌紙名を知りたい、というのが少くない。

思えば終戦より二十年余、無能無才、無学無識の、この道ただ一とすじと、わが邦武士道の支柱であった「切腹」の歴史や文芸について、史資料をあつめ、拙文を綴った来し方

を顧りみて、この辺で著述目録を編んでみるのも、まるまるの無駄でもあるまいと思うので、貴重な紙面を塞ぐことにした。なお小解を付しておけばご検索頂くのに一層便利と思われるので、ついでに簡記しておく。また本誌名は「奇ク」と略記させて頂く。

著作  
番号 題 名 誌名及び月号

（二十七年）

1 藻屑物語鑑賞 人間探究 8月

寛永年間、美童伊丹右京の衆道による刃傷賜死に際し、念者の舟川采女も来り会

（二十八年）

3 切腹史談（上下） 奇ク3月―4月

切腹の起原、歴史、語彙などについて概説するもの

4 少年及女性の切腹 奇ク 5月

少年および婦女の切腹を史実から探り、

して、共に切腹し果てる説話を、古文獻「藻屑物語」により解説したもの

2 女ハラキリ 人間探究 11月

女腹切の史実を述べ、軽演劇での女腹切の悲愴美を説くもの



更に輕演劇における女腹切の扱い方にも触れるもの

5 文芸における切腹描写 奇ク 6月

主に近代以降の文芸作品に現われる切腹のモチーフ効果を、著作権法に許された範囲で、引用文とその解説により、説述したもの

6 切腹問答 奇ク 6月

「奇譚クラブ愛読生」なる読者の方の御質問に応じ、切腹の意義および作法について、先に発表した「切腹史談」を補足説明するもの

7 大東塾と神風連 奇ク 9月

神道思想と切腹の精神との触発した実例として、二つの国粹的団体行動と、その壮烈な切腹の様相を説くもの

8 切腹願望と女性心理 奇ク 9月

信太蓉子さんらが奇譚クラブに寄せられた告白文から演繹して、切腹の擬態に魅かれる女性の、複雑な心理機構を説明しようとする試論

(二十九年)

9 切腹研究夜話(一)(二)(以下「夜話」と略称)

女腹切雑話 奇ク 2—3月

女性の切腹願望と、女性の切腹事件などを中心に説述、女性の自刃を扱う文芸作品にも触れるもの

10 夜話(三) 男の切腹願望 奇ク 4月

男の切腹願望を告白文から分析し、そういう男性の好むと思われる文芸作品を紹介、他に昭和二十八年末ごろの実例や映画をも引用している

11 夜話(四) 切腹の文献 奇ク 5月

昭和初期以降に発表された切腹の文献について、書目を編み、その内で筆者の目に触れたものを解説する。

序でに、読者の方(島根のA氏、福岡のH氏、香川の岐溪秀峰氏)からお知らせ頂いた、女腹切の実話を紹介する

12 夜話(五) 奇ク 8月

切腹を扱う新聞記事(主として随想)や浪曲等を主体に、切腹についての随想を展開するもの

13 夜話(六) 明治の小説 奇ク 9月

明治の文芸作品から例を挙げて、文芸作品に於ける切腹の描写につき、紹介とモチーフの効果の検討を試みるもの。5を補足する

(三十一年)

14 切腹の作法 民主公論3—4月

切腹の作法について、古来の諸文献から引例し、総合して解説するもの

15 殉死考 新勢力8—10月

殉死、殊に追腹、先腹の史実と、乃木將軍の殉死、またその文芸界への影響について論考するもの

16 少女の切腹 救国運動12月15日

原爆下の広島で家族を失った十九才の少女が、被災者を収容する似の島へ向う船中、身だしなみの日本剃刀で悲壮な十文字腹を掻切った実話

(三十二年)

17 切腹通信 奇ク 6—8月

切腹についての奇ク記事への感想など編集部あて記したもの

(三十三年)

18 おんな切腹史 特集人物往来 1月

女腹切の史実を解説するもの

19 切腹通信 奇ク 1月—7月

17と同様の書信

20 切腹した基地の女 救国運動8月15日



うら若い基地の女が、前途をはかなみ、  
秋の山に入って立腹を切った実話

(三十四年)

21 昭和の女白虎隊 奇ク 2月

終戦前後に割腹して果てた大和撫子の、  
清く美しい最期の姿を、田谷敬生氏の論  
考その他よりまとめたもの

22 新春雑感 奇ク 5月

切腹のポーズある白虎隊の剣舞を、新東  
宝の女優さんたちが演じた映画「爆笑王  
座征服」の解説するもの

23 切腹の作法覚え書 特集人物往来5月

切腹の作法を古来の文献や実例により解  
説するもの

24 散華白虎隊 裏窓 6月

白虎隊の結成から、飯盛山における割腹  
までを、史実に則して説述するもの

25 女腹切りの史実と小説 裏窓 7月

女腹切を扱う文芸作品について、史実と  
虚構並びに、モチーフ効果を検討するも  
の

26 美童切腹史 裏窓 8月

史実により美少年の切腹を解説するもの  
続女腹切の史実と小説 裏窓 9月

25の続編に当るもの、主として仮構の作  
品を解説する

28 愁恨 奇ク 9月

夜話の一つとして、切腹に関する思い出  
を随想風に書いたもの

29 少年切腹史 裏窓 10月

史実より少年の切腹を解説するもの

30 会津娘子軍 裏窓 11月

切腹と直接は関係が薄い、散華白虎隊  
の姉妹編として描く、会津の婦女子自刃  
の様相を解説するもの

31 女人悲傷譜 裏窓 12月

「女腹切の史実と小説」の続編で、切腹  
ではないが、悲愴な自刃を計るヒロイン  
を描く文芸作品を説述するもの

32 切腹通信 奇ク 12月

17と同様の書信

(三十五年)

33 鬼哭妙国寺 裏窓 2月

堺事件について、十二烈士の切腹の様相  
を中心に説述するもの

34 維新神戸事件 裏窓 4月

付外人の「腹切」観  
滝善三郎の切腹を中心に神戸事件を解説

し、更に外人の見た「ハラキリ」の叙述  
を引用解説するもの

35 女人悲傷譜 裏窓 5月

「女腹切の史実と小説」に引き続き、女  
腹切の史実や文芸を説述するもの

36 切腹願望について 裏窓 6月8月

かつて一再ならず説いた切腹願望の心理  
について解説するもの

(単行本) 「切腹—悲愴美の世界」

(内容) 久保書店刊 6月

37 切腹の沿革

3の改稿

38 切腹の作法

14 23を総合解説したもの

39 少年切腹史

29と同じ

40 美童切腹史

26と同じ

41 寛永美少年録

1の改稿

42 殉死考

15の改稿

43 殉教切腹史

7の改稿に「死のう団」の殉教記録を挿  
入解説するもの

- 44 散華白虎隊  
24と同じ
- 45 会津娘子軍  
30と同じ
- 46 女人悲傷譜(一)  
25と同じ
- 47 女人悲傷譜(二)  
27の改稿
- 48 女人悲傷譜(三)  
9 16 20の改稿と、戦後の女性切腹例および映画演劇での女腹切について説述するもの
- 49 文芸切腹史  
文芸作品における切腹についての概論と5 13の内から村上浪六、直木三十五両氏の作品について解説するもの  
あとがき
- 50 小著著述の動機、経緯等を説明する  
(本書初版は売切れの模様です)
- 51 切腹通信  
32に続くもの。従って17 19 32に続くことになる。  
奇ク 7月
- 52 女人悲傷譜  
35に続くもの、従って46 47 48 31 35に続くことになる。  
裏窓 8月
- 53 身辺雑感  
切腹研究についての随想  
奇ク 2月
- 54 思い出すことども  
28年4月号の本誌に登場した信太蓉子さんについて、考察するもの  
奇ク 4月
- 55 三村氏興亡史  
中国地方の名門三村氏が、戦国の嵐に吹かれ、一門の城主たちが次々と切腹して果てて行く経緯を説述するもの  
祖代 6 7 10月
- 56 文芸切腹史  
文芸作品における切腹のモチーフ効果を引用文と要約文により説述するもの  
裏窓 9月
- 57 回顧十五年  
終戦時を回想し、拙ない研究につながる志を述べたもの  
新勢力
- 58 文芸切腹史  
56に続くもの  
祖代 12月
- 59 思い出すことども(二)  
故郷建静子夫人の純烈と、その最期について諸説を総合解説したもの  
奇ク 12月
- 60 文芸切腹史(二)  
58に続くもの  
祖代 新春号
- 61 合戦記に現われた切腹の種々相  
ぐんしよ 2号
- 62 法谷四郎論  
奇ク 29年8月号に切腹曼陀羅図絵を発表した法谷四郎氏の作品について、論考を試みたもの  
奇ク 7月
- 63 HARAKIRI DESIRE  
SEXOLOGY  
切腹願望についての小論文(英文書きおろし)  
1月
- 64 むすめ切腹史  
明治以降、妙齡の処女が切腹した事例と世相から見たその原因の考察  
奇ク 4月
- 65 HARAKIRI  
63の西文版  
JUN 6月
- 66 映画「切腹」の周辺  
松竹映画「切腹」について、新聞に見えた前記や映画評、ストーリー等を集録、構成した文章  
祖代 6月
- 67 処国処女譜  
構成した文章  
奇ク 7月

(三十七年)

(三十八年)



終戦当時悲壮な割腹を遂げた三人の処女の最期を、実話に基づきセミドキュメンタリーに説述したもの

(三十九年)

68 山田久仁子さんに 奇ク 1月

女性の切腹実験グループを主宰するとい  
う、山田久仁子さんに借問した文章

69 忍者、TV、切腹 奇ク 6月

TV映画の傾向と、そこに見える切腹の  
種々相を説くもの

70 創作「殉国」の周辺 奇ク 10月

裏窓37年12月号に掲載した創作「殉国」  
について、その制作「基礎、意図と世評  
などを集録したもの

71 戦国切腹史 読切文庫 12月

戦国時代の凄烈な切腹の史実を挿話風に  
集録したもの

(四十年)

72 清水正二郎氏の作品における 奇ク 1月

切腹のモチーフの効果

清水正二郎氏の作品から切腹のモチーフ  
効果を論ずるもの

73 江戸時代の切腹 読切文庫 2月

江戸時代の切腹の様相について、戦国時  
代のそれと比較しつつ検討するもの

74 戦国の切腹 奇ク 4月

ある作家の方のご質問に応じ、戦国の切  
腹の特色を説くもの

75 今昔断想 奇ク 7月

切腹研究の手法や資料探究についての随  
想

76 切腹の研究 奇ク 8月

3切腹史談と時をほぼ同じうして執筆さ  
れ、永く筐底に秘められていたもの、角  
度を変えて見た切腹史概論

77 烈女切腹史 劇豪列伝集 8月

臨時増刊

戦国、江戸時代の女腹切りの実録

78 女の腹切り 人物往来 12月

明治百年を回顧して、女性切腹例を世相  
史として捉えた小論

(四十一年)

78 「ある女の自殺」評 サスペンス 6月

マガジン

鳴海大介氏「ある女の自殺」(サスペン  
スマガジン四月号)について、小感を述  
べたもの

80 切腹願望 ゆまにて 6月

男女を問わず切腹に異様な魅力を感じる  
人人がある。その心理を告白や手記によ  
り分析し解明しようとする試論

足かけ十五年、長短併せて八十編、こうし  
て目録にまとめてみると、つくづく、拙文を  
綴り続けて来たものと思う。しかし、なお未  
見の資料、未整理の資料、更には終戦前後の  
殉国者のように、探るに由ない例しも少なく  
い。是も世の定めであろうか。

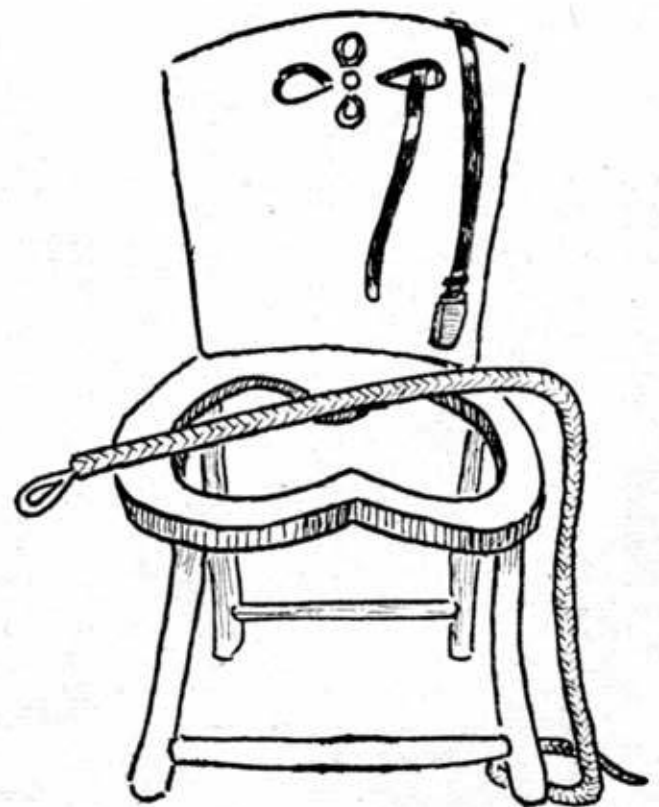
ここ二、三年前までは、ずいぶん史資料あ  
つめに焦ったものであった。誰よりも先に手  
に入りたい、というような気持はなかった。  
ただ、失われ埋もれて行くものを惜しむ心  
であった。けれども、すべては時の流れかも  
知れない。手に入っても整理に追いつかない  
ときもある。もはや焦る心はない。

ひたすらに、後に続く者あり、百年の知己  
あらんことを信じて、筆者は書き続けて行く  
のみである。わが生涯の夢、定本「切腹」の  
刊行と、あらゆる芸能を網羅した切腹のショ  
ウを海外にまで進出せしめること(歌舞伎、  
映画、剣舞、女剣劇、軽演芸を含む) 是らは  
永久に夢に終るとしても、である。

# 心傷たむ遍歴こころ い へん れき

第二十三章 女囚ミシユリーヌ（三）

## 西条 操



ミシユリーヌとミルドレーヌは股手錠のま  
ま追い立てられた。睡眠不足と空腹、痛めつ  
けられた心身の疲労、そして初めての股手錠  
にされた二人は、よるめいては膝をつき、縦  
ベルトの切なさに腰をよじり、その度に髪を  
引張りあげられてドヤしつけられた。

二人は喫茶室あたりの窓下に並び立たされ  
た。あと二、三日で十二月の戸外は、ときに  
は薄陽が射すとはいえ、吹き抜ける風は冷た  
い。それに、二人は「ベルト」だけの姿だ。  
裸か身二つは忽ち縮みあがり、全身の肌が  
そそけ立ち、唇が紫色になった。

「寒いわ。もう、凍えそう——」

ミルドレーヌが泣き出し、齒をガチガチ鳴  
らせる。ミシユリーヌもガタガタ震えつつ、  
すばめるにはすべもない両膝で足踏みした。  
足の裏に砂利が音を立て、一きわ冷たい風が  
股下を吹き抜ける。

「——なかへ入れて欲しい。せめて——」

ミルドレーヌは股下で手錠を鳴らし、少し  
離れた陽溜まりを見やった。立たされている  
場所は日陰で、風を遮ぎってくれるものな  
い意地悪さ加減だ。

「——ほんとね。でも、ここで立ってろって

命令されたのよ」

「死んだ方がましだわ、ミシユリーヌ」

二人は泣きながら震えわななき、そして、  
眼前の窓を盗み見た。上目使いに恨めしく覗  
く窓の内部は喫茶室だ。暖かそうな室内——  
制服やドレスがテーブルに憩い、窓ガラス越  
しに笑い声が洩れる。

耐えかねたか、ミルドレーヌが低く呻き、  
激しく身悶えて地団駄踏んだ。窓が半ば開い  
て、ドレスの二、三人が顔を並べた。

「こら、じっと立ってるのよ。保安課のひと  
にいいつけるわよッ」



「でも、ちょっと可哀想みたい。風邪ひきやしないかしら？」

「風邪や肺炎なんか、すぐ癒っちゃうわよ。」

思い知らせてやるのが第一よ」

「ねえ、この二人、三監だったわね？」

「そう。女看守は一人減っちゃうし、三監は当分大変ね。遠慮しちゃって、ここにも誰一人姿見せないじゃない？」

「ブリネル看守の補充は当分しないそうよ」

ミシュリーヌは眸をあげて、顔見知りを、ことにイヴェットとマジョーリを室内に求めた。そして、空しく再び地に落ちる。

「ね、ね。私たちも女看守になって見ようかしら。お給料いいし、ああして縛り上げちゃうの面白いじゃない？」

「お勝手に。私はイヤよ。見物するのはいいけど、自分がやるのは嫌だわ」

「あんたたち、寒いじゃないの」

と、窓辺に寄って来たのはイザベル婦人看守だ。

「いい加減にお閉めよ。あら、お前は——」

イザベルはミシュリーヌを認め、微かに眉をひそめた。この四五三号を取扱ったのは短かい間だったが、健気にいじらしい女囚だった——。ミシュリーヌもイザベルを認め、涙

を浮べて眸で縫りつく。きつい婦人看守ではあったが、ミシュリーヌは可愛がってもらったものだ。

しかし、窓はピシャリと閉じられた。保安課に身柄を握られている女囚に対しては、他の課から指一本さすことも難かしいのだ。

昼食どきとなり、頭上の食堂からも物音が聞えて来た。横手の出入口がときどき開いて個室女囚が出入りする。そのたびに料理の匂いが流れ漂い、裸身股手錠の二人は頬を濡らした。

袖に番号を縫いつけた若い女が出て来て、二人の前に皿をおき、エプロンを払った。

「大変だねえ。でも、頑張るのよ。あら、まだ飲んじゃ駄目。ここは刑務所よ。新米なのね、あんたちは」

皿にはスूपらしいものが半分ほど——それを眼下に見下ろして、二人は鼻を吸った。

遠からずここを出して貰える女囚仲間、番号付きながらもちゃんと着せて貰っている個室女囚を盗み見ると、我が姿と刑期が胸に沁みて悲しい。

喫茶室の窓がガラリと開き、エプロン女囚は飛び上った。

「油売ってると承知しないよ」

マーゴットに叱りつけられたエプロンは縮みあがり、両手合わせて頭を下げ、飛んで行った。

「涼しいだろうねえ」

マーゴットは、窓枠に肘をついて眺める。

「かんにんして下さいまし——」

「フフフ。かんにんしてやれるかどうかは、取調べの結果によるねえ。まだ取調べは終わらないの」

二つの裸か身が全身で泣いた。

「スूप、飲みたいかい？ え？」

「はい」

室内の人々が窓に寄り、男の眼も混じる。

「ふん。ならね、一昨日のことをそこでハッキリ云って見な。男と二人きりになった所からでいいよ」

ミシュリーヌとミルドレーヌは齒がみし、腿に挟んだ両こぶしが期せずして握り締められた。

「イヤならいいんだよ。取調べが長くなるだけさ。仕方話するにゃ、うってつけの恰好させてあるんだけどねえ。どうせやるなら早くしないと、折角のスूपが冷めちゃうよ」

一昨日の夕方から痛め続けられて、二人の事故女囚の心理は常態を逸してもいた。スー

プも欲しいが『取調べ』はなお恐ろしい。

二人はこもこも喚き初めた。

「一緒にしゃべっちゃ分りゃしない。三八五号の方から初めな。一区切りごとに代わることにしよう」

ミシュリーヌの方はまだしもだが、ミルドレーヌの方は深刻だ。

「こんなの、本なら発禁ものね」

「きわどいと思ったら。でも、難かしい言葉でうまく逃げるわねえ」

「これ、元女医なの。こら、ラテン語なんか使うんじゃないよッ。翻訳して云いな」

さすがに二、三人がその場を去り、ミルドレーヌは涙声を張りあげるのだった。

「ちょっとひどいわね、いくらなんでも」

と、若い娘が頬を染め、ドレスの胸を押える。そうだと——。いくら顔に泥を塗られたとは云え、保安課のやり方は行き過ぎだ。

「そ、それでおしまいですッ。こ、こんなこととして、あんたたち、さぞ面白いでしょうねッ——ああ——」

ついに、ミルドレーヌが叫んで髪をふり立てた。

「なんだって!! 文句あるかい? 不服ならちゃんと筋道立てて訴え出るんだね。こら、

そっちのチビはどうなの? 口紅しゃぶってないで云いな」

「……………」ミシュリーヌも唇噛んで黙る。

「そうかい。じゃ、こっちもそのつもりでいるからねッ」

「ね、二人とも謝まった方がいいわ」

と、娘が声をかけた。エプロン女囚が出て来てオロオロし、スープ皿を両手に泣き顔を覗き込んだ。

「ね、ご気嫌を損じちゃ大変よ。あたしも保安課の鬼婆アたちには泣かされたわ。でも、仕方ないじゃないの。ここは——」

「なにグズグズしてんだい? さっさと持って行きな。要らないんださだからねッ」

「は、はい。ただいま——。ね、ともかく、お詫び申し上げて、あたしたち囚人なのよ。訴えるところはないの。分ってるでしょ」

そうなのだ。ミルドレーヌがガクリと首を垂れ、ミシュリーヌもコクリとした。

二人は口々に赦しを乞い、全身で屈伏を示した。マーゴットは満足げだ。

「ドヤしつけないと分らないんだね。新兵と同じなのね。規則とか秩序とかいうものが全然分っちゃいないんだもの。いいかい? 森の木が落ちるのも、冬になれば寒いのも

みんなお前たち自身が悪いのさ。分った?」

嘗てマーゴットに訓練された婦人部隊の新

兵たちは、さぞかし辛い思いをさせられたことだろう。

「すごいファッショなのね、このひと」

窓辺の娘たちが囁やき合う。

「あのね、元陸軍々曹なの。アルジェリア戦線のことしゃべらせたらご気嫌よ」

二人の裸か身は、もう一度、大声で赦しを乞うた。

「よし。スープ皿を元へ」

エプロン女囚がホッとして皿を地におく。「よかった。飲まず食わずで此の寒む空にそうさせられてたら、いったいどうすんの? 一口でも食べときゃ、ずい分とちがうもんだわ。さ、早くお願いして——」

二人は、さらにスープのお恵みを哀願し、こみあげるみじめさに哭くのだった。

股手錠のまま地面にへたり込み、泣きながらスープを啜り舐め、その薄さと、我が身の浅間しさに涙するひまもあらばこそ、忽ち

マーゴットの号令が飛ぶ。

「立てッ。そのままで反省ッ」

二人の背や腰や腿は、朝からのきびしい股手錠に硬張って、喰い込む縦ベルトの鋼鉄環



が一しお痛かった。それに、冷え切った体の生理的要求も激しい。

しかし、窓は無情にも閉じられて、二人はそのまま背を丸めて立たされた。なにしろ、いまは昼食後の休憩時間なのだ。

「つらいわ。どんなことをしてでも、監獄にだけは——入るもんじゃないわね」

ミルドレーヌは、地面を見詰めたまま、唇ふるわせて呟いた。

スーツを着込んだ娘が二、三人出て来た。

「助けて下さいまし。おねがい」

ミシュリーヌは、意地も誇りもふり捨てて哀訴した。

「おねがい。恩に着ますから——。も、もう——凍えてしまいそう」

と、ミルドレーヌも足摺りして声を絞る。

「憫れみを求めて泣いてるわよ。可哀想みたい。でも、仕方ないわよねえ」

「そうよ。私たち、刑務所の職員だもの。世間じゃどんな風に云ってるか知らないけど、刑罰ってものは甘ぢょういもんじゃなくなつてよ——。とってもきびしいの」

娘たちは見物して嘲笑う。

「哀れッばい声出したって駄目。他人の苦しみはいくらでも我慢することにしてんのよ。」

でなきゃ、こんなところに勤まらないもん」

「耐え忍ぶほかないわね、薄情なようだけどね。あら、風邪くらい、いくらでも引くがいのよ。病監で楽できていいじゃないの」

「ね、こんなの見ると、悪いことは出来ないと思わない？」

「ホントね。いい見せしめだわ。大体、世間のひとはおセンチ過ぎるのよ。ホラ、こないだの少年刑務所の集団脱走だってねえ」

「そうよ。世間じゃ、あのチンピラ女どもに同情的なんだもん、ホントに腹が立つわ」

「ところで、さっきの続きよ。クリスマスに彼を招ぶの？ それとも拗ねて見せる？」

昼の休みも一時間過ぎて、二人は再び地下室へ追い込まれた。

こんどは「ベルト」の後ろ腰を天井から吊り下げられ、踵が床にすれすれにされて責められた。マーゴットは相変らず顔を見せているが、そのほかのメンバーは新手のババアどもだ。

「また、またですよ!! 何度同じことを」

ミルドレーヌが股手錠を鳴らせた。

「あら。私たちは、まだ聞かせ貰ってないのよ。詳しく聞かせて頂戴な」

ビンタが鳴り、革ロープが降り、そして、

腋の下や脇腹を執拗に擦ぐられる。

二人は脂汗を流し、全身こわばらせて絶叫した。ミルドレーヌは三回の愛撫を交わしたことにされた。そしてミシュリーヌも拷苦のままに、とうとう、キスだけではなかったことにされてしまった。

「ふむ。一緒にバスへ入ったって？ 貧乏刑事のくせに、よっぽどデカイ浴槽を持ってたんだねえ」

「お前のいうこと理屈に合わないよ。いったい、いつ着物を脱いだのさ？」

「ボケナス女医のいうことは正確だけど小むずかしいし、モチ肌女の話は情が移るものの無茶苦茶だね。こら、じゃあ男の体が左側へ引越したのはいつだえ？」

「こいつら、尻軽女の割に、御本を読んでないんだよねえ。まるで、こっちがお話をこさえてやってるようなもんじゃない？」

意地悪ババアどもは、きわどいことを口走らせて眸を輝やかせはするが、そんな二人の「自供」なんかを信じているわけでもない。「ところで、お前たちは、男を何人知ってんの？ ありていにヌカセ、こら」

「なに？ たった一人だって？ 嘘つけ」

ミルドレーヌが擦ぐられて苦悶した。

「ほ、ほんとでございますッ——ひィ」

「ふん。お前はッ？」

「は、はい。三人——です——」

ミシュリーヌは正直に白状し、ミルドレーヌに恥かしく思った。

「ま、何人でもいいさ。二匹とも、初めてのときのことを詳しく云いなッ」

さすがに二人は胸を詰まらせ、革ロープが背に鳴り、吊り鎖が滑車のあたりで軋んだ。

「それは本件に関係ないじゃないの」

と、マーゴットが云う。軍人あがりだけあって、ときにはケジメのついたこともいう。

ババアどもも飽きて堪能したか、二人は漸く吊り鎖から解かれた。

「立ちな。とつと入るのよッ」

鉄格子扉が荒々しく閉じられ、女囚二人は泣き出した。股手錠を解いて貰えないのだ。

「こ、このままで？ お、お慈悲ですから、ここから——せめて、ここから解いて」

ミシュリーヌは、白い両腿もだえて金髪をふり乱した。喰い込む手錠に両手首は痛みつけられ、すりむけた皮膚にヒリヒリ泌みる。

さっき、後ろ腰を吊られる前に、額すりつけて足させて貰ったのだったが、股手錠姿のままで跨がらせられたのだ。

「お取調べ、いつになったら終わりますの？」

と、ミルドレーヌが低くハッキリと問う。

「ふん。お前の指図は受けないよッ。いいかい？ ぶち込まれて半年やそらの女囚に泥を顔へ塗られたんだからね。ここは刑務所。

いろいろと、新米にゃ分らないシキタリがあるのさ。なによ、臭い飯喰い初めて間もないくせして——」

ババアどもはそう云ってシタリ顔だが、古顔の女囚に対しては、何年臭い飯を喰ってるのさ、とキメつけることだろう。

電灯が消され、膝を落とした二人は背を深々と倒し、闇の中で嗚咽するのだった。

——それより少し前、つまり、ミシュリーヌたち二人が喫茶室の窓外に追い出された頃、パリ法院の地下通路を、おひるには何を喰べようかと思案しながら、婦人看守エメリーヌが歩いていた。彼女が握る革ロープの先に、小粋なスーツの大柄グラマーが、腰バンド手錠姿でハイヒールを鳴らせている。この女はギャングの情婦で、男を逃がせてやろうと楯になって警官隊に又物三昧、犯人隠匿と公務執行妨害と傷害の罪に問われ、今日が公判の女囚だ。午後にも引き続いて審理が行なわれるときには、法院地下の仮監房に被告人を入

れて休憩させる。

「ねえ、看守さんてば。バンドゆるめてよ」

大柄グラマーが腰をもだえた。

「きついわア。こんなゴツイの締められちゃうと痛いよ。寒くなると腰骨が疼いて。だってさ、まだ癒ってないのに退院させてブチ込むんだもの。ひどいわ、ほんとに——」

女囚は、挫いた腰骨の痛みを訴える。せめて、この冬だけは警察病院で過ごしたかったことだろう。

「すぐ解いてあげるわ。さっと行くのッ」

エメリーヌはきめつけてやり、婦人房区画へ追い立てた。

狭い独房へ突き入れて鉄格子扉を閉じ、黒パンと水を与えてやる。

「あんた、おひるには何を食べるつもり？」

拘留には場馴れしているグラマーは、未決の身を楯にエメリーヌの制服姿を「あんた」呼ばわりする。いずれその中には、ちょっと痛い目にも逢わせてやることになるだろう。

「そうね。殻付きの生まがきにレモンをタラタラ、それに、あっさりと鴨のシェリー酒蒸し、シャンペンは夜に取っというてねえ、おひるは辛口の赤ブドウ酒と行くわ。私、ブドウ酒はボルドーよりブルゴーニュの方が口に合



うのよ。ホホホ。お水、お代りしたら？」

女囚の人柄如何によつては、エメリーヌもそのつもりであらう。グラマーは狭いベンチに豊かな腰を載せ、口惜しげに鉄格子の外を睨んだ。

「おや、パンを食べないの？ 八十号」

「そのうちに気が向いたらかじるわよ。そんなにせつたなくてもいいだろう？ それにさア、こうして娑婆のドレス着てるときぐらいは名を呼んでよ。マリアってね。マダム・マリアよ。ああ、うちのひとに逢いたい。もう赤縞落ちしたかしら？ ねえ、教えてよ、あのひと何年喰らい込んだの？」

「知らないわねえ」

「ちきしょう。せめて、証人に呼んでくれたらいいのにさ。血も涙もありゃしない」

「ホホホ、だからね、余計な武勇伝なんかやらさないで、おとなしく縛に就きゃよかったのよ。そうしてりゃ、一つ手錠に繋いであげたかも知れなくてよ」

「ほ、ほんとかい？ ああ、一ぺんでいいからそうしとくれよ。ね、靴でも舐めるわよ」

グラマーは哀れにも真に受けて切ながり、エメリーヌは冗談が過ぎたと後悔した。

「あたしの方が早く出ることだろうけどさ、

あたしや操を立てるよ。立てるとも——」

「結構ね。愛は鉄格子を越えて、だわ」

「いまましいこというねえ。あんた、亭主持ちかい？ あーあ、女盛りを——。でも、あのひとは絶対にほかの女を抱けないんだ。それだけは安心だわ。ね、いじらしいだろう？ ところで、紙をおくれよ」

グラマーは隅の便器を蹴った。

「駄目。出るときにあげます」

「切ないねえ。我慢できないんだってば」

「嘘つきなさいッ。規則です」

「きびしいのねえ、軍律は。じゃ、煙草吸わせてよ。それも駄目？ なら、さっさとランチを食べに行ったらどう？ 職員食堂のランチは一フランでお釣りが来るだろう」

「撲って欲しいの？」

エメリーヌがグラマーの相手をしていたのも、食事仲間のアネットを待っていたからだ。グラマーは肩をすくめてソッポ向き、仲良しのアネット婦人看守がやっと現われ、

ベル婦人看守と二人がかりで金髪を引き立てて来た。その様子を眺めてエメリーヌは眉を寄せた。金髪女囚は例のアニエス・ノエルで、ツーロン婦人刑務所に服役中の身を、偽証罪で起訴され、今日が公判だ。腰バンド手

錠の両腕を両側から扼され、口惜しげに鼻を鳴らしている。口のまわりをピッタリと、嵌口テープで封じられているのだ。予審廷でもそうだったが、今日の公判廷においても、おとなしくはしていなかったらしい。

「また手古摺らせたのね？ アネット」

「そうなのよ。ムシウ・ジュールダンが傍聴席の一番前なんか坐ってるもんだから」

「ジュールダン氏って？ あ、そうか。この被告の偽証の被害者ね」

「そう。巖窟王の現代版のひと。満面笑みを湛えて凱歌を奏してるもんだから、この女ったら半狂乱になっちゃまって。ベルと一緒にだったから助かったわ」

ベル婦人看守はイキがいいから、そういう場合には役に立ったことだろう。

グラマー女囚から二つ隔てた鉄格子の前で金髪は肩を突き回され、ふてくされてよろけたハイヒールの先をベルに踏みつけられ、唸って立ち止まった。

「ここで休憩するのよ。もう喚かない？」

金髪はアネットにうなずいて見せた。嵌口テープがはぎ取られ、ベルが背中を突き飛ばす。一米半をよるめいた金髪は奥の壁に肩を打ちつけ、鉄格子の閉じる音に、ふり返って

噢いた。

「くそっ。被告人にそんな乱暴していいのかい？ 弁護士にいつけてやるわ」

「どうぞ。弁護士さんもね、お前にはホトホト手を焼いてるわ。それにねえ、お前は服役囚なのよ。いわば二重に鎖つけられてんの」

「ちきしょう。これ、このままなの？」

「アニュエスは、手錠を腰バンド鉄環にガチガチこすった。」

「そうよ。暴れた罰。もちろん、それだけじゃ済まないことだろうけど——」

「ふん。あたしはね、ツーロンの飯を四年喰って来てんのよ。大抵のお仕置になんか驚くもんか。鞭でも窄衣でも持って来やがれ」

金髪はアネットに毒ずき、ベルがコップを持って来た。そして、いきなり女囚の素足にぶちまける。アニュエスのハイヒールがしとどに濡れ、地団駄踏んだ女囚は鉄格子に体当たりして口惜しがった。

「まあ!! なんてことを——」

「あら、この女が自分でコップひっくり返したのよ。アネット。ホホホ」

と、ベルは澄ましたものだ。

「ね、ちょっときつ過ぎやしないこと?」

「うとするもんだから——」

アネットは鍵を取り出し、女囚に頸をしゃくった。

「手を出して。ゆるめたげるから——」

「ふん。ぶちのめしておいてチョッピリ撫でるのね。あんたたちの常套手段。心にもない憐れみなんかたたくさんだわ。はずしてくれないなら結構よ、このままで。何さ、ワッパくらい。憐れみと同情とは全然別のものよ。分ってんの? あんたたち——」

アニュエスの語尾が微かに震え、アネットが鉄格子越しにあやす。

「強情張ってないで。さ——。痛いでしょ」

女囚はアネットとエメリーヌを上目使いで見やり、まつげを伏せて鉄格子に寄った。手錠がゆるめられ、ゆるめ過ぎて少し縮められ、アニュエスは眼を指先へと屈んだ。しかし、指先は鼻のあたりでもがき、鋼鉄が軋む。アネットは震える肩を押した。

「後ろ向いて——」

鎖の窮屈な手錠をきつく嵌めた上に、腰の革ベルトも思い切り締めつけてあったのだ。

黒革が分厚く鳴って弛み、女囚の指は漸く眼に届いた。

「あたしの気持、あんたたちになんか分って

ないだろうねえ——」と涙声で吸り云う。

「そんなに拗ねないで。少しは分ってるつもりよ。さ、ちゃんと立ってなさい」

「分ってなんかいるもんか——」

女囚は足摺りして身もだえ、しゃがみ込んだエメリーヌは鉄格子越しに、濡れた素足を拭いてやるのだった。

「あたし、戦争で身寄りを全部失くしたの。ナチスの軍隊のおモチャにされて娘時代を過ごしたのよ——」

女囚はやさしくされて嗚咽し、エメリーヌとアネットは繰り言を聴いてやる。

「みんなの防波堤になってあげたのよ。分ってくれるわね? いま、娑婆で仕合わせに暮らしてる女たちの、その幸福を守ってやったのよ。どんなに、その仕合わせの仲間に入れて欲しかったことか——」

アニュエスは腰掛板に崩折れて嗚咽した。心やさしき二人の婦人看守は、黙って深々と見やる。戦争で孤独になったのは、その二人とて同様だ。ただ、正しく生きようと努力した点でアニュエスと異なるのだ。

「やっこの思いで、これと思う男を捉まえたのよ。あたしは日陰女でよかったの。ひとりの男を待って暮らすだけで、もう、とっても



嬉しかったわ。でも、あのひとが、女房さえ居なければって嘆くもんだから——」

「ね、もう過ぎたことじゃない？ 償ないを終えて、また出直しなさいな。さ、ここへ来て。顔を拭いてあげるから」

「あら、出直させていうの？ 鉄格子からおっぱり出される頃には、年がいくつになつてと思う？ 空々しいこといわないで!!」

「ね、アニエス」

エメリーヌは、番号でなしに名を呼んだ。

「まじめにしてれば仮釈放して頂けるのよ。知ってるでしょ？ ふてくされるのは愚よ」

「ふん。あたしは賢い女じゃないの。ほっと

いてよッ。あたしに仮釈放なんて、誰が心配してくれるもんか。鎖に繋いどきや安心だつて考えてるのよ、みんな。くそッ——」

「どうして、そんなにひがむのかしら？ ね

ええ、アニエス」

「あら、あんたも名を呼んでくれるのね、アニエスさま。腕をねじたり、猫撫で声出した、ずい分とお忙しいこと」

「さっきのはお仕事。ね、おとなしくしないと駄目よ。ハッキリ云えば、損よ。早い話が今の裁判だって、ずい分と心証を害してるわ

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演

Mフアン待望の超傑作集

Mフオト  
最新作

M場面決定版

大手札印画紙焼付三〇〇〇円  
各組 十二枚一組

山原、大塚の二嬢によって展開される稀有の迫力あるMフオト。△まふ▽は分譲中止。各組十二枚一組三〇〇〇円に値上げ。事情に依り近く分譲中止の予定です。こんな真に迫ったMフオトは二度とできません。今の中にどうぞお早くお求め下さい。

二女の戯むれと男

略号  
(まも)

美女から縛られる

略号  
(まね)

男馬を乗り潰す女

略号  
(まめ)

痛烈ムチのご馳走

略号  
(まれ)

首絞めで刺す止どめ

略号  
(まむ)

汚臭と足舐の強制

略号  
(まり)

二女の臀臭に泣く

略号  
(まみ)

よ。きっと後悔してよ。あのとときにおとなしくしてりゃ、もっと早く出して貰えたのにつて。どうして、他人のことを、そんなにそねんだり恨んだりするの？」

「だから分ってくれちゃいないって云うのよお!! いいこと？ あのひとは他人じゃなくってよ。あたしの愛しい男。その男を娑婆に残して二十年も放つとけつていうの？ ほかの女に渡したくなかっただけなのよ——」

女囚は身を揉み、制服の二人は首を振る。

「どうせ、あんたたちみたいな冷血人種には分りっこないさ、あたしの心根はね。いいのよ、もう。いいから行って頂戴」

「そう。ま、よく考えることね。さ、これを食べるのよ。コップ、気をつけて——」

「ふん。自分が手錠かけといて、いい気なもんだこと。ああ、あのひと、いま何を食べてるかしら。女と差向いじゃなからうねえ。いや、きっと女がベタついてるに決まってるわ。ちきしょう——」

アニエスは黒パンとコップを手錠の両手に持ち、妄想に駆られて無念の形相も凄まじく、壁に金髪を打ち当てて歯がみした。

「あたしのお陰で太っちゃ女房が居なくなつてくれたというのに——。有難がるどころか

逆恨みしゃがって。早く出してくれる所か、もっと鉄格子の中に入ってるとうんだわ。ね、聞いてよ。待ってるから一日も早く出ておいでって云ってくれて当り前、それをサ、一日でも長くしてやろうというのよ。あたしだけをブチ込んでいて、自分は誰かと結婚する気よ。ああ、たまらない。神さまなんて居るもんか。おぼえてるがいいわ、呪い殺してやるから——」

エメリーヌとアネットは顔を見合わせ、救い難いわ、と嘆息するのだった。

「あら、もう行くの？」

「だって、行けて云ったじゃないの。淋しいのね」

「馬鹿にしないで。暗房に出入りしてるあたしだよ。ね、これ、はずしてよ」

アニュエスは手錠をガチャガチャ引張って見せ、少し哀れっぽい風情を示した。

「駄目ッ」と、二人は立ち去る。

きめつけられて、女囚は鼻を寄せた。拒絶されて元々だ。

仕切り壁の向うは男囚用の仮監だが、男性看守の声がそこで唸鳴りつけた。

「この野郎ッ。なにしてるんだ？ 貴様ア」  
聞いて、アネットが肩をすくめた。

「なんだとオ？ 誤魔化そうたって駄目だ。サポーターを、がっちりとかけるぞ」

「男って、いやらしいのねえ」

「なにしたらいいのかしら？」

「ま、エメリーヌだったら——。年はいくつなの？ カマトトもいいとこねえ。ホホホ」

「ね、お二人さま、男だけじゃないわよ。女だってやらかすわ。だから「ベルト」ってものがあるのよねえ」

と、グラマーが鉄格子の中から声かけた。

「お黙り。お前は腰が痛くて、それどころじゃない筈ね」

マリアは鉄格子にしがみついて見送り、二人は、仕切り壁のはずれにあるデスクにシヨルダーバッグをおいた。

「お願いするわ」

「ちょっと待ってくださいよ」

と、デスクの男がパイプを口から離す。

「野郎二人だけじゃ、御婦人客の責任は持てないぜ」

「ダラシないのね。あら、ベルは？」

「とうに消えたわ。このオバさん、どうしたの？ 怠慢じゃないの」

「託児所の小母ちゃんたら、御飯が長いのねえ。歯がガタガタなんだから無理も……」

「オバさんとは何さ。え？ 聞えたよ」  
中年の婦人看守が悠揚迫らざる貫録で現われ、エメリーヌたちは首をすくめた。

「歯はどうだか知らないけど、耳は確かなんだからね。へん、これでもねええ、向う側を歩けば殿御の声が絶え間なしさ」

と、男性仮監の方に眼をつぶって笑った。  
「お見それいたしましたわ。とってもスバラしい御血色——ほったなんかバラみたい」

「なあに、葡萄酒のせいさ、アネット」

「あんたは黙っといで。えーと、二人かい？ 今日」

こんな質問は話が逆だ。

「ええ。そうだと思いますけど。でも、二人とも、ちょっと難物ですわ」

「ああ、あのあばずれもだったね。で、どういうことになりそう？」

「さあねえ、じゃ——」

「ああ、ゆっくりしといで。どんな魔女だって二人くらいならね。さきおとといはキヨロキヨロしちゃったけどさ」

金曜日には、悪質エロ・ヌードの踊り子たちと万引団の女たちの公判がカチ合って、十個の婦人独房では足らなくなり、男の方へも二人ぶち込む有様だったのだ。



陽が射して来たようなので、エメリーヌとアネットは建物の外へ出て、食堂へ急いだ。

「まだ十二時になってないわ。一時半に戻ればいいのよ。こんなときぐらい、ゆっくりしましようよ。お互いに律気な女ねえ。マジメ過ぎて悲しくなっちゃう」

「そういうこと。ねええ、あのアニエスって女の気持、なんとなく分って来たわ。結局男のせいなのよね」

「ま、なんて安易な思想!! とはいうもののねええ、そんなにまで思い詰めさせてくれる男が欲しくない? エメリーヌ」

「スゴイ危険思想。でも本音よね。このバツジより警官のバツジの方が、世間の男には魅力があるらしいわ。ホントに残念——」

「そんな淫ら話はよしましょう。お仕事離れたら、もっと高尚なこと話さなきゃね」

「ハイ、ハイ。じゃ、あれ、まだ使ってるらしいわね。ホラ、男のサポーター。あなた、見たことある?」

「私だって見てないけど、話は聞いて知ってるわ。モチ、使ってる——という話ね。女囚の「ベルト」とおなじよ。革でこさえてあって、ただ、鍵がかかるだけのこと。内側にはフェルトやフランネルが重ねてあって、スゴ

く優雅でねえ、穿き心地よさそうよ」

「やっぱり見たことあるのね、ホホホ」

「バレたか。あなただって見たけりゃ、いつだって見せてくれるわ。でも、穿かせて締めあげるとこ見なきゃねええ」

「辞め際に見ようっと。ね、ね。でもさ、ベルトとちがって革でピッタリじゃ、ホラ、日に何度かは脱がせてやらなきゃ——でしょ」

「利発なのねえ、エメリーヌは。逞ましい想像力ね。そうよ。女囚みたいに締めつけ、というわけには行かないの。不便ね、男は」

「ねねッ。さらに追究すると——よ。つまりさ、ホラ、ね、その——つまり、締めつけ難くなっちゃうことが往々にし——」

「具体的にハッキリ云いなさいな、ホホホ」  
「ここは公共の場所よ。はっきり云ったら、あなたに逮捕されちゃう」

「ワナにはかからないわねえ。あのね、男ってホントに仕様がなのよ。往々にして、どころか、そんなのはしょつ中だって。仰角かけたまま締め込んだんじゃ駄目なんで——これはまあ、なんとなく分っちゃうわねえ」

「ンまあ、巧妙な表現だこと。で、どうするのよ? そんなときは——」

「あなた、勤めて何年になるの? つぶさに

御存知の上で、私にしゃべらせてるんじゃない? こんな聖なる話は、しゃべるより聴く方が面白いもの」

「ホント知らないのよ。私、あなたみたいに敏捷じゃないものね」

「おだててる。あのね、私だって、そんなとこを見物しに行ったんじゃないよ。偶然だったの、ほんとだってば。でなきゃ、誘ってるわよ。信じてったら——」

「いいから、いいから——」

「ちえっ。あのねえ、つまりさ、その、簡単なことだわ。つまり、例えば股の内側あたりをシバきあげてやるの。それだけの話。一発でヒーツと泣いて、イチコロで正常位に戻っちゃう。そこをすかさず……」

「ギューッと締めあげるのね」

「あらま。エメリーヌったら、頬っぺたなんか押えちまって——。感激したのね」

「バカ。規則の残酷さを嘆じたの。血気な若者なんか、一週間で泡吹くそうじゃない?」

「あら。やっぱりトボけてたのね。よく知ってること。それも想像力のなせるわざ?」

緊張から解放された気易さに、二人は笑いさざめいて、陽溜まりを選んで歩いた。

法院の裏が拘置所の獄庭に接するあたり、

その石炭置場で赤縞男囚たちが労役していた。二人宛が腰連縛されて十組ばかりを、たった一人の制服が監視する。

「ムシユウ、だんひる」さん。そろそろおひるよ。いい加減にしてやったらどうお？」

男の制服はアネットにあだ名で呼ばれて、自慢のパイプを口から離した。

「ああ、俺だってそうしたいんだが、一区切りつくまではそうも行かないんだ。明日、石炭がタンマリコと入って来るんだってよ」

労役は、残り少なな石炭の整理と、置場の清掃やらペンキ塗りだ。

「あら!! ここに一組いるわ。そこから見えるの?」

アネットが声をあげた。置場の横手をのろのろと塗っている二名を見つけたのだ。

「ああ、知ってるわさ。タルんでやがったらシゴいてやってくれ」

「あんな所から呑気なこと云ってるわねえ」

二人の赤縞服はエメリーヌたちを盗み見て肩をすくめた。二人の男囚はいずれも三十前後、若い方は弱気げな男だが、年かさは苦味走って精悍な面構えで、油の売り方も要領がいい。

「お叱りをこうむるんじゃないんですかい」

「そうね。でも、やめとくわ。お前たちは担当外なもの」

「それに、いま私たちは御休憩のお時間よ」  
そう軽口を叩きながらエメリーヌも立ち止まって、腰に手を当てた。

「そうですかい。じゃ……」

年かさの三九〇号はペン缶をおおびらに置いて、こっちを向いて伸びをやらかす。

「おい、フェラール——じゃねえ、三六六号さんヨ。てめえも一息入れな。あーあ、腹が減ったなア。コキ使いやがって」

しかし、三六六号は刷毛を握ったまま背を向け、塗っている恰好だけは続けた。

「怠けちゃ駄目じゃないの。明日、石炭が入るのよ。乾かないわ」

「ヘッ。スチーム用の石炭なんぞ、こちとらにや関係ねえんでさ。なア、相棒」

「撲って欲しいの? このバッジと制服が怖くないのかしら?」

「へへへ。スチュワードスの姐御株みたいでさア。撲ってもれえてえくらいで」

婦人看守は二人は肩をすくめた。

「ところがねえ。近頃の乗客には物騒なのがちょいちょい居るので、スチュワードスもこんな物を持ってるのよ」

と、アネットがポケットから手錠を取り出し、カチャつかせて示した。

日和りは暖かで二人ともコートなしのくらいだし、男は坊主頭で無恰好な赤縞囚衣姿ながらも、女にとっては何となく魅力を感じさせる。そうでなきゃ、構ってやれるものか。

「そんな無粋なものを振り回さないで下せえよ。折角の女っぷりが台なしだ」

アネットはクローム鍍金をスカートの横腰に持ったまま、脚を踏み替えて片眼をつぶった。釣られて、エメリーヌもポーズを取る。

「いいアンヨだなあ、お二人とも……」

男の眸が、手入れのキチンと行き届いた二人の制服の上を撫で回わし、ギラギラ光って腰のあたりに吸い着いた。

「おっと、寄って来ちゃ駄目」

アネットが明るくからかう。たとえ囚人といえ、若く精悍な男性にこんな眸で眺められるのは、女として悪い気持はしない。

「エへへ。心配御無用ですぜ。サポーター穿いてますんで。錠前つきのピッターした奴をね、ホラ」

赤縞のズボンは、ズボンというよりも股引で、胫の半分が出ている無細工さ加減だ。その股引の前側、そこらあたりを男は軽く打っ



て見せる。張り切った革の音がした。

「なんなら、股引脱いでお眼にかけますぜ」

「いいったら。分ったわ」

「道理で、さっきから腰をモゾモゾさせてたのね。折角の男前だけど、そんなんじゃ男性としましては大減点。残念なこと。デート申し込もうと思ってたのに……」

「トホホ。切ないことおっしゃる。でも、こいつア残酷ですぜ。血気盛の男を捉まえて。」

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

ちょっと気散じをってわけで、段取りにか

ただだけでよォ、目くじら立ててビンタ喰わすわ、縦横にギュッと締めつけるわ、おまけに錠前つきと来やがるんだから、まったくひでえや」

「男の世界の規則よ。仕方ないじゃないの」

「規則だか掟だか知らねえが、血も涙もねえたアこのことですぜ。誰に迷惑かけるわけじやなし。なあおい、相棒、そうだろ？」

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

「あらまあ。そっちのもかけられてるんじゃないかって？ その腰つきじゃ……」

「おッ、さすがはお見通しだ。お目が高い。なにイ？ エヘヘ、あんまりそばへ寄らねえでくれってヌカしてますぜ。お体の匂いでサポーターが破けそうだって云ってますさ」

「あら、そうお。臍たけた美人はハタ迷惑ねえ。化粧も香水もなしでこれだもの」

「ごもっともで。だけど、この野郎はゲームセットしてからバレたんですさ。それに引きかえてこちとらは段取り最中にアゲられちゃって——娑婆にいたるときゃあ、長丁場の修行ばかりしてたもんなあ。そうそう早芸に切りかえられるもんじゃねえやな」

「なにブツブツ云ってんの？ サポーターの三週間や五週間がなによ。暖かくていいじゃないの」

「トホホ、ホ。御婦人がたにや到底分らねえこつてさ。ああ、折れそうだ。苦しい……」

「オーバーなこと。なら、労役に精出すの。いったい、何日目？」

「も、もう四日目ですぜ。こいつを締められ

たときだけは女の体が羨ましくって——」

「男って悩み多き性なのね。たった四日でこわれちゃうの？」

「四日と云や、かれこれ百時間ですぜ。それに、俺はその前からのが……ああ」

「自家発電未遂の件は聞いたわ。さぞ心残りなことねえ。ま、煩惱を去って修行しなさいよ。サポーター明けの悦楽日を睨に描きながらね、ホホホ」

「あら、悦楽日ってなアに？ アネット」

「一週間に一回——だったわねね？」

「へえ——」男は鼻をこすり、腰をよじる。

「——つまり、そういうことを黙認してやる日があるのよ。知らなかったって？ 信じられないわ」

「まあ!! そうか。一斉射撃とか云うのはそのことなのね。見たことある？ アネット」

「云っていいことと悪いことがあるのよ。第一、それは女人禁制。残念でした」

「も、もう——よして下せえよ、スカートの旦那がた。切ない思いを掻き立てるのは」

「そうお。じゃ、キリキリ働くことね。労役で精根すり減らすのが一番じゃない？」

「味気ねえことをポンポンおっしゃるなあ。

ま、いまどきなら、泣きながらでも辛抱できねえでもねえが、ポカポカとして来る春先に締め込まれて見なせえ、まったく死ぬ思いですぜ。一週間で鼻血が出て、のた打ち回って

十日目ともなりや、泡吹いて気が狂いそうになりますぜ。鞭の一ダースの方がよっぽどマシでさア。三日に一ぺん、手めえのものやらサポーターやらを、張番されて掃除させられるんですぜ。そんなときやもう……」

「もう絶対に悪いことはするまいと思う？」

「まったくの話、そう思いますぜ。あ、また硬張って来やがった。旦那がたのお声を聞いてると、どういふもんだか……」

「とか何とか云ってて、結構楽しそうね。私たち威厳がないのよね」

「そう。もったときびしさを湛えて凜としなくちゃ。ところで、お前、なにやったの？」

「へえ。よくぞお訊ね下すった。タタキで十六年なんで。この若い身空で十何年間、娑婆とお別れですぜ。男盛りを女に指一本触れねえで——。泣けて来ますぜ。なんとか云ってやって下せえよ」

「そうね。折角、人間に生まれて来て、そこまで育ったのにねえ。し残したことも沢山あるだろうよ」

「トホホ。なんてえ云われ方だ。情けねえ」  
「泣くのはおよし。みっともないわ。何よ、男一匹、十五年や二十年の辛抱が出来ない？ 潔よく支払いを済ませることね」

「女っ気なしに十五年暮せば、立派な聖者さまになれるじゃないの？ 淨らかねえ」

犯した罪も罪だし、相手になっている中には人柄も分る。アネットもエメリーヌも、日頃に似合わず言葉でいたぶるのだった。それに、こんな男が女性を転落させるのだ。

「敵わねえ。ところでスカートの旦那がた。

朝のうち、向うの方で洗い物を干してた女たちが多勢見えてましたっけが、取り入れに来るのは同じ赤縞女たちですかい？ それとも別の女囚……」

「さあねえ。そんなこと、何故訊くの？」

「その——つまり、可愛い女を探してるんださ。ねえ、お綺麗でおやさしい旦那がた。教えてやって下せえよ、おねげえだ。マリアっていうんですよ。何年喰らいましたっけ？ まさか執行猶予なんてことには……」

アネットとエメリーヌは顔行合わせた。つい今しがたまで世話してやっていたグラマー女囚——あのマリアが恋い焦がれていた男がこの赤縞なのか。

「病院からここへ移されたってこたア聞きましたんで。ね、教えて下せえ。俺のために大怪我までしてくれた女でさ」  
「教えてやったらどうするつもり？ 心配し



なくても、ほかの男とイチャついてないわ。それだけは教えたげる。そのほかは駄目」

男は大袈裟に身を揉んだ。

「一目だけ逢いてえ。なんとかして下せえ。一つ屋根の下で暮してるといふのに。おい、相棒。おめえもおねげえ申しあげな。薄情女の首に縄つけて、ショビいて来てもらったらどうだ？」

気弱そうな鎖仲間は悲しげに、ペン刷毛持つ手で眼をこすった。

「この野郎も女に泣かされてるんで、へえ。隣に住んでいる婦警があんまり別嬪だもんでアナポリスタア知らずに盗品を見せびらかせやがったトンマ野郎でさ。そりゃまあいいけど、その女デカに許婚者の眼の前でパくられちまって——。だのに、その純情娘の奴、手紙一本寄越さねえ。可哀想にこの野郎、気が狂いそうなアンバイですぜ。ペアトリーヌとかいう薄情女によお、きつく云って聞かせて下せえよ。なあおい、フェラール」

陽が翳り、二人の婦人看守は、お互いに促がし合った。お腹も減ったし、食堂も少しは空いて来ただろう。

「さ、労役を続けて。感心な相棒さんが困ってるじゃない？」

「あ、もうお行きになるんで——」

男は、張った腰鎖の先で身もだえる。

「いけない？ なんなら一緒に来る？」

「切ないことを云うもんだ。ねえ、おねげえしたことは駄目ですか？ せめて、マリアが今どうしてるぐらいのこたア教えてくれたってバチは当りますめえ。きっと、この俺に逢いたがってるにちげえねえ」

「思い切りの悪い悪党さんだこと。ま、気長に辛抱してなさいよ。その中に逢えるかも知れないわ。でも、云っとくけど、どっちが懲罰中でも駄目になるのよ。夫婦そろって鉄格子暮らしのときの心得ごと」

「ね、旦那がた。マリアに俺のことを伝えてやって下せえよ。このとおり、おねげえだ」

男は足摺りして両手を合わせた。

「私たち忘れっぽいよ。これッ、甘ったれてないで、ペンキ塗りしなさいッ」

ムッシュウ「だんひる」がぶらぶらとやって来て、三九〇号は恨めしげに壁に向いた。

「とんだ暇つぶし」

「でも、男にペコペコされるのって、いい気持ねえ。煙草、喰いつきそうな眼で見詰めたじゃない？」

「あら、吸殻、そこらへ捨てたんじゃなくっ

て？ アネット」

アネットはポケットから吸殻を摘み出して見せた。

「けど、涙こぼれるメロドラマね。哀れな男が仲をせかれて、両方で同じことを云ってるわ。あら、おひる時間だというのに、チンピラたちの御入来よ。鑑別所から逆送ね」

一目でハイティーンと分かる娘が四人、手錠の両手を前に突き出して虚勢を張り、ロープで芋蔓に繋がれて、二人の婦人教官に追われて行く。

「ね、リリアンヌ、どうやら仮釈らしいわ」

「そういう話ね。金持はいいわね。不公平だわ。マドレーヌなんか、あんなに神妙にしても駄目なのに」

「マイヨール氏、凄い奔走ぶり。弁護士っていい儲けよね。私、一ぺんだけ、雪の降る日に溝掃除させてやりたいのよ、リリアンヌのマダムにさ。世の中はお金だけじゃないってことを骨身に叩き込んでやらなくちゃ」

「いつからコミンテルンに入党したの？ アネット。あ、マイヨール氏で思い出したけどねえ、ヴィヴィアンヌのこと知らない？ 黙って姿消したんですって。先週の話よ」

「知らないわ。強情張って前科者なんかと結

婚するからよ。苦勞するわよ、可哀想に」

二人は溜息を吐いた。マイヨール弁護士の助手だったヴィヴィアンヌは、家族と夫との間に挟まって悩み抜き、ついに、夫フィリップと相携えて出奔してしまっただ。ヴィヴィアンヌの行手にも、黒い深淵が口を開いて待ち構えていることだろう。

エメリーヌとアネットは食事を終えて引き返した。法院の廊下で、予審廷へ曳かれる女囚とすれちがった。小柄な女囚の髪には白いものが混じり、深々とうなだれて手錠を恥じる風情だ。革ロープを握る制服はうら若い娘で、伸びやかに發育した体を真直ぐに立ててきびしい。先輩の二人に、制服娘がカチッと敬礼した。

「可哀想ね。痛々しくって胸が迫るわ」  
「規則とはいえねえ。でも、あの子、なかなか感心だわ、若いのに似合わず態度厳正」

見送って二人は軽く嘆じた。規則というものは、末端へ行くほど拘子定規にきびしくなるものだ。ことに、その女囚は殺人容疑の被告人、正業を嫌って箸にも棒にもかからぬ息子を思い余っての末とはいえ、人間一人を殺した女なのだから、はた目にはいくらむごく見えようとも致し方がない。

「私、明日のことを考えると気が滅入るわ」

階段を降りながらエメリーヌが呟いた。彼女が明日、夫殺しの人妻を実地検証に連れ出す予定だ。

「そうね、エメリーヌ。嫌な仕事を押しつけられたわね。なんでも、残された子供たちが居るそうじゃなくって？」

「そうなのよ」エメリーヌは嘆息した。

その女囚が連れて行かれる先は自分の家なのだ。そして、その家には、両親を一挙に失なった子供たちが十六を頭に三人、淋しく残されているのだ。痛ましい愁嘆場が演じられることだろう。物見高い近所の人々なら気も楽だが、いまでも母を慕う子供たちをも追い払わねばならないのだ。そして、おそらくは泣いて否認する女囚を引き立てて、またも鉄格子の中へ連れ戻さねばならない。エメリーヌが心重いの無理はなかった。

消毒剤が匂って陰気に薄寒い地下仮監区画では、ベルが珍らしく先に来て待っていた。

「たったの一枚かい？ やっぱし。ドレス着たときくらいにはケチケチしないですよ」

マリアがエメリーヌに口をとがらせ、睨み据えられて紙をひったくり、忌々しげに裾をからげた。エメリーヌ婦人看守は鉄格子の外

から監視し、マリアはしゃがんだまま顔をしかめる。

「しっかり見張ってよ。ほんとにもうー。おや、もうそんなもの持ってるのね。ちくし。う。そんなにひとを縛りたいのかい？ カチャつかせないですよ。出るものが途中でひっかかっちゃうじゃないか」

マリアは毒ずきながら身繕ろいし、鉄格子を出て顔をこすった。

「手を洗わないの？」

「いいわよ。そんなマナーは早く忘れなきゃね。さ——」

マリアは背を向けて両腕をあげた。

「きつくしないでよ。あーあ、うっとうしいねえ」と、向き直り、おとなしく両手をそろえる。観念してはいるものの、不服がましい態度だ。まだ未決囚だから、とエメリーヌは大目に見てやっているが、血の気の多い制服ならばピンタが飛ぶところだ。

「あと二、三時間で言い渡しね。検事の奴、六年だなんて云いやがったけど、請求書どおりになったりしたら化けて出てやるから」

「お黙リッ。おとなしくお裁きを受けるのよッ。お前、面影胸に抱く男に逢いたいだろ」  
「痛い」と突くわねえ。拘束衣も窄衣も恐ろ





女相撲物語

カッ卜・海野美津男提供

# 花の女斗美たち

(9)

奮斗士好太

あくる日の日曜日は、申し分のない好天気でした。

頭のどこかで、もう起きなくちゃ……などと  
思いながら、ウツラウツラしている耳に「ザ  
アザア」というひどい雨降りのような音が聞  
えます。ハッとして目を開けますと、もう朝  
の日光が明るく射しこみ、窓のガラス越しに  
青空がのぞかれます。寝すごさないようにと  
ワザとカーテンを引かないでおいたのです。

まだハッキリしない頭に、競技会―応援―  
集合時間―そして笠原さんはじめ皆の顔がク  
ルクルと回転し出して、その像がだんだんピ  
ントの合ったものになると共に、私の意識も  
それにつれて次第にハッキリしてきました。

枕もとの目覚しを手を伸ばして取り上げま  
す。七時半をちょっとばかりまわったあたり  
を指していて、スイッチを入れておいた七時  
四十五分までには少々ゆとりがあります。

「ヤレヤレ、どうやら目覚ましのお世話にな  
らなくてもよかったわ」

床の中で思い切り背伸びをしますと、溜っ  
ていた血液が、一ぺんに活動を開始して、ま  
るで音を立てるくらい勢いで体のすみずみ  
にまで流れ込んで行くのでした。

「こんなよいお天気なのに……さっきの音は何  
だったのだろう？」

と、考えましたが、それは直ぐに解決しま  
した。母が洗濯機を動かしている音なのでし

た。ガアガアという、あのうるさい響きが、  
雨の降る音のように聞えたのは、きっと心の  
中のどこかで雨降りを心配していたせいなの  
かも知れません。

おふとんをたたんで、軽く体操。

だれも見えていないのをいいことに、マワシ  
こそ締めませんが、パンティだけになって伸  
脚や屈身運動。すっかり太くなった腕や、た  
くましくなった太モモ―それは私がひとりで  
そう思っているだけかも知れませんが―この  
朝の起きがけの体操は、学校の練習場の四股  
ふみとはまた別の楽しみで、私のひそやかな  
自信をはぐくんでくれるのです。

「だんだん肉づきが良くなるのがわかるわ」



腕を振り、足を屈伸させ、そしてボディを柔かく動かしながら私はごきげんなのです。ケタタましい目覚ましの響きにこの幻想はたちまちやぶれてあわててベルを止めます。

お台所へ行きますと

「オヤ、もう起きたのかい」

とふり返りもせずに母が声をかけました。

「もうでもないわ。直き八時よ」

「おやさうかい。目覚ましが鳴らなかったようだから」

「わたしが止めたのよ」

「おまえでも目覚しがいらないことがあるのね」

母はそういつて笑いました

「ごはんはできてるからね。汽車の時間は何時だったの？」

「九時よ。十分前までに駅へ集合するの。ヒロちゃんがむかえにくることになってるの」  
しかし、そのヒロちゃんは、なかなか現われないのでした。

ラジオから流れる名曲のしらべにもさっぱり耳に入らずに、イライラソワソワして立ったり坐ったり、玄関のあたりへ行ってみたりとうとう八時半をまわる頃には待ちきれなくて靴をつっかけて表へ出てしまいました。

ちょうどヒロちゃんがやってくるのに出合いました。

「おそいわよッ！ おくれちゃうじゃないの」と、さっそく文句をつけましたが、ヒロちゃんは悠々としています。

「そんなにあわてなくても大丈夫よ。ちゃんと時間はかって出てきたんだから」

「だって、もう八時半すぎよ」

「だいじょうぶだってば。十五分あれば駅までゆっくり行けるんでしょ」

「バスが直ぐ来ればの話よ。なかなか来なかったらどうするの？」

私にいわれてヒロちゃんは、ハッとしたようでした。そして急にあわて出すと

「そうだわ。あたし、うっかりしてた」

「何が？」

「待つ時間のことよ。あたし、乗ってからの時間しか考えてなかったわ」

顔色を変えたヒロちゃんは、

「大いそぎ、大いそぎ、たいへんだわア」

と、いきなり走り出しました。

「勝手ネ」

私も、いつものことながらあきれて、それからあわててヒロちゃんの後を追いました。

ポテッとした感じのヒロちゃんは、それで

もなかなか足が早いのでした。

「ユッサユッサ」と肩をゆすりながら走るヒロちゃんのうしろを、口をとがらせながら追いかけて行きますと、大通りへ出る角を曲がろうとしたところで、ふたりの目の前をバスが一台スーッと通り過ぎました。

「アラ……」

落胆の声をあげましたが、幸いにこのバスは行き先のちがうバスでした。

バスストップは、この角を曲がって大通りへ出たところから五十メートルくらい行ったあたりにあるのです。

私たちが大通りへ出て、その方を見ますと待っている人たちの姿が三四人と、そのずつと向ころからやってくるバスが一台目に入りました。

「ヤレヤレ、どうやら間に合いそうだわ」

と私は思い、ヒロちゃんはひと安心といった顔になって走るスピードをゆるめました。

その時でした。

「モシモシ……」

私たちを呼び止める声にヒョイと振りむきますと、大きなフロシキ包みを背負ったおばあさんです。

曲がりかけた腰に杖をつき、もう一方の手

も荷物を下げています。

こんな急いでる時に困るなァと思い、立ち止まってしまったのを後悔しましたが、仕方なしにお相手をします。

「ハイ、何でしょうか？」

「あ、う、チョットおかしいんですが」

こちらの急いでるのも知らず、おばあさんはモグモグと、はっきり聞きとれないようなしゃべり方で尋ねます。

「大学病院まで行きたいのですが、孫が入院しますもんで……。ここでバスを降りれていられましたんですが、どう行ったら」

「それなら……」

とヒロちゃんはイライラした調子で指さしをしながら説明します。

「あすこに大きい建物が見えるでしょ。あすこの角を左に曲がると正面に見えるのが病院ですから、すぐわかりますわ」

「ハイハイ、あの大きな建物が病院ですか」  
少し耳の遠いらしいおばあさんは、説明しあげたことの半分くらいしかわからないらしいのでした。

一つ先の停留所へ止まったバスは、もうそこを出てこっちの停留所へ向かっています。  
「そうじゃなくて、あの建物の角を左へ曲が

るんです」

「アア、左がわに入り口があるので……」

「あの建物じゃないんです。ここからはかげになって見えないんです」

「アア、そうですか。そうしますとまだ大分遠いので……」

いなかから出て来たらしいおばあさんですが、それにしても、なんてのみこみの悪い人なんでしょと足ぶみしたいほどのもどかしさです。

ようやくのことで、このおばあさんから解放された時には、バスはもう停留所に着いていて、そこに待っていた人たちも乗り終ろうとしています。

「どうもどうも、ありがとうございましたのう」

というおばあさんの声を背中に聞いて

「待ってェ」

「乗りまあす」

と歩いてる人たちがびっくりするほどのなかまわず、まるで短距離選手のように突進しましたが、半分くらいを走ったところで無情なバスは発車してしまいました。

「乗せてくださァい」

追いつがって声をかけるふたりに、車掌さ

んは冷然と首を振り、そしてバスはそのまま排気ガスのうす黒い煙を残して遠ざかって行きました。

「なんてニクらしい車掌さんなんでしょ」

「運転手さんだって、わたしたちの走って行くのを見てるはずなのよ。わかっていて発車するなんて……」

くやしがつても、あとのまつりです。

「アアあ、今日はツイてないらしいわよ」

「あのおばあさんさえないなかったら」

と、ヒロちゃんは、まだそのことを怒っています。

「日曜日になんか病院へ行ってどうするのかしら」

「いいじゃないの。それより何とか早くバスが来てくれないかしら」

不安がいっぱいになった胸をおさえながらバスの来る方を眺めるその傍を反対方向へ行くバスがスピードをあげて過ぎて行きます。

「遅刻したら厳罰だって笠原さんがいったけど……厳罰って何をさせられるのかしら」

そんなことを考えると汗がにじむほど心配になるのです。

「練習場の掃除番か、この前の時みたいにマワシの虫干し係りくらいですんでくれればい



いんだけど……」

次のバスがやって来たのは、それから五分ばかり過ぎた頃でした。

待ちどおしいだけに、その三倍も待ったかと思うほどでしたが案外早かったのです。

しかし、もうその時はすでに八時四十五分に針が進もうとしています。

もうバスが途中止まらないで走ったとしても、九時十分前という集合時間までには、ゼツタイ間に合いません。

残された最後の希望は、せめて汽車の出る九時までになんとか間に合ってくれば良いということだけでした。

バスはだいぶ空いていました。

私とヒロちゃんはドアのすぐわきへ並んで腰をかけました。駅へ着いたら真先に飛び出せるようにという、「ケナゲ」な気持ちからなのです。

「集合時間までには間に合わなくても、発車には何とか間に合うんじゃないの？」

ヒロちゃんが独り言のように話しかけました。しかし、それもいつものヒロちゃんのように自信ありげないかたではなくて、そうであってくれば良いという、ヒロちゃんの希望を話してするように聞こえるのでした。

私も同じ気持ちなのですけれど、このコースのバスのことは、ヒロちゃんよりよく知っているだけに、その希望も実現の可能性は、ほんのわずかしかなことがよくわかるのです。

ヒロちゃんの話しかけるのにうなずいてはみるものの、私の方は何か奇蹟でも起こって汽車の出るのがおくれなものかしらなどを考えてみたりするのでした。

十時三十分。

わたしたちふたりは、ようやく汽車に乗っていました。

ヒロちゃんの希望も、私の希望も、とうとう実現しなくて、私たち二人はどうとう置いて行かれてしまったのでした。

私たちが駅へ着いたのは九時五分過ぎ。そしてバスから飛び降りた二人が、息を切らして駅へ駆け込んだ時には、もうホームはガランとして、私たちが乗って行くはずだった汽車は影も形もありませんでした。

「また失敗しちゃった」

取りのこされたくやしさと、罰を受けなくちゃならないことへの不安がいっしょになつて、胸の中がひっかきまわされたようになり汗がドッとふき出してきて、額からダラダラ

と流れ落ちるのでした。

バスはどうかしらと思って、その方へも行ってみましたが、それさえも出たばかり、次の発車までは汽車の方より短かいのでしたがそのかわり途中が長くかかるので、結局汽車で行った方がかえって早く着くのでした。

そこでふたりは、次の汽車を待つことにして一時間近くの間固い待合室のベンチにボンヤリと腰をかけていたのでした。

それでも、時々はこちらかが話しかけて見るのでしたが、相手の方がまともに聞いていないので話が続かないのです。

「お待たせいたしました。只今から……」

というアナウンスに、まるで一年間も待ち続けていたような気持ちから解放されて、ようやく腰を上げるまで、私たちはお互いの顔も見なかったようだったのです。

「ネエ、笠原さん怒ってるかしら？」

汽車が動き出しますと、やっと元氣をとり戻したらしく、ヒロちゃんがいいました。

「あたりまえじゃないの。あんなに注意されたのに遅刻しちゃったんだから」

「そうだね。……でも何かうまいいいわけはないかしら？ 急用ができたとか……」

「ダメよ。そんなこといってごまかそうとし



たって」

「そうネエ。あたしもあんたも、あんまりウソの上手な方じゃないからネエ」

ヒロちゃんがマジメな顔でそんなことをつぶやくので、私は思わず笑いかけて、やっとこらえました。

「ネエ、厳罰って、どんなことさせられるかしら?」

今度はちょっと不安そうにいます。

「さアて?」

私が首をかしげますとヒロちゃんは

「お説教だけですむってことはないわネ。せめて、この前みたいナマワシの虫干し係りくらいなら良いんだけど」

と、私の考えていたことと同じようなことをいいます。

「あんた高いところはにが手なんでしょ」

私がいいますと

「ほんとスゴクコワイのよ。屋根へ上がらないですむ方法ってないかしらね。物干場みたいなものを作って、そこへ掛けておくようにすれば良いのに…」

「でも一本や二本ならいいけど、みんなのを干すんだからたいへんよ。長さだってかなりだし…」

「そうね。マワシって、伸ばしてぜんぶ広げてみるとスゴク大きいもんネ。こんな大きいのをよくからだに巻いてるもんだと思うわ」

「重いしネ」

「そう…。ほんとにあんなに長く重いものを締めるなんてごろうさまだと思うけど、締めてしまうと、ホンのチョッピリしかからだに着けてないように見えるんだからふしぎみたいなものよネ。うまくできてるわ」

「いったい、誰がマワシなんか考えたのかしら?」

「そうねエ…。誰かが考えたってより、だんだん変ってきて、今のようになったのよ。でも、マワシ・スタイルって素敵じゃない、あんなむづかしい締め方をするのに締めおわってしまつと、スゴクスッキリするんだから…世界一のユニホームだと思うわ」

マワシ干しの話から、だんだん脱線して、罰のことなんか、どこかへ行ってしまうそうでしたが、

「でもネエ」

と、ヒロちゃんは

「マワシ干しならありがたいけど、わたしたちの失敗ってこれで二度目でしょ。だからこんどはマワシ干しなんかではすまないわ、キツト…」

心配そうなヒロちゃんに、私もまた胸の中がすっかりふさがってしまいました。



「どんな罰になるのかしら?」

私の不安そうな問いに、ヒロちゃんは

「四股ふみ二百回なんてどこかしら?」

と、首をちぢめました。

私もその言葉にヒヤッしました。

たしかに、マワシの虫干し係りなんかより何十倍もこたえます。

みんなといっしょに踏む時は、それでも少しくらいサボれますけれど、監視つきでやらせられるとしたら、とてもいいかげんなふみ方は許されませんから、いつもの何倍も苦しいでしょう。

「二十回か三十回でもヘタバリそうだったのに…。二百回なんてさせられるかしら」

私がいいますと、ヒロちゃんは

「わからないわよ。それとも、ウサギ飛びかな」と、まるで自分が罰をきめるみたいにいいます。

「四股もツライけど、ウサギ跳びもイヤだわね。あれをさせられると立ち上がれなくなっちゃうわ」

「そうね。心臓がノドから飛び出しそうになるし…。マワシは喰い込んでくるし…。」

「どっちにしても罰なんだから、楽なことなんかないわ。ああ、どうしたらいいかしら」

私たちがそんなことを話していると、通路をへだててむかい側の席に腰をかけていた女子高校生がヒョッと顔を上げてこちらを見つめました。

私たちと同じ年令ぐらいの同じ市内のF高校の制服を着ています。

それまで本を読んでいたのが、私たちのマワシだとか四股だという声が聞こえたらしくキラッと目を光らせて顔を上げたのです。

浅黒い健康そうな肌で、ガッチリした体格をしています。

「あの子も応援に行くのかしら?」

ヒロちゃんがソッとささやきました。

F校は女子相撲部を早くからとり入れた学校で、それだけに毎年優勝候補の一つにあげられている名門なのでした。

「そうかも知れないわね」

私が答えますと

「なかなか強そうじゃない?。一番申し込もうかしら」

ヒロちゃんはたちまち、それまでの心配ごとを忘れて、そんなことをいい出します。

しかし、あとになってこの人とこともあるうに私が取り組むようになるうとは、全く夢にも思わなかったのです。

ヒロちゃんのおしゃべりが、ようやく一段落しかけた頃、汽車はやっと目的地の駅にすべり込みました。

私たちが改札を出ますと、松田さんが駆け寄ってきました。

「どうしたの?」

とがめる声に、私とヒロちゃんは思わず舌を出して

「時間をまちがえちゃったのよ。つまり…駅までどのくらいかかるかを計算ちがいしちゃったの」

ヒロちゃんは、さすがに面目なさそうでした。

「笠原さん怒ってる?」

私が尋ねますと、松田さんはあきれた様に「あたりまえでしょ。汽車に乗るギリギリまで駅の前で待ってたのよ」

「ゲンバツだわネ、わたしたち…」

ヒロちゃんも、すっかりしょげています。

「団体戦はどうだったの?」

もう一つの気かがりだったことを聞きました。だが、この方もダメでした。

「負けちゃったわ」

松田さんはポツンといました。どうやらきげんの悪いのは、このためでもあったよう

でした。

松田さんが説明してくれたところによりまずと、準決勝の結果は1-4という、きのうの成績からは意外なくらいの勝負だったのです。

トップの野川さんから、金子さん、池田さん、そしてホープの小林さんまでが、立て続けに敗けて、最後の今井さんがようやく一勝をあげただけという惨敗ぶりだったというのでした。

「それじゃますます絶望だわ。二百回じゃすまないかも知れない」

と、ヒロちゃんは泣き声です。

「二百回？」

松田さんが聞きとがめたので、私が説明しますと、

「そうだわね、さっきの笠原さんの様子じゃそんなもんじゃないわ。きっと五百回くらいよ」

松田さんまでが、ニコリともしないでおどかします。

「おどかさないですよ。今どこにいるの？」

「今は休憩時間よ。午後から個人戦だから。」

控え室でおひる食べてるわ」

松田さんは、そういうと、私とヒロちゃん

をうながして、会場の方へ向いました。

会場になっていいる学校へ入りますと、マワシ姿の選手たちが、ウォーミングアップの四股ふみや鉄砲をしたりしているのが見られました。またその傍でおしゃべりをしている選手たちもいました。

私たちの控え室——といっても教室を利用したのでしたが——は入り口の直ぐわき、広いグラウンドの見えるところにありました。

さすがに顔を上げられなくて、松田さんのあとから、おそろおそろ入ります。

かくごをしていた笠原さんのお叱かりは簡単でしたが、それだけにあとがコワイ感じでした。

「オソイワよッ」

津野さんが大きな声で、そのかわりを勤めてくれました。

やっと顔を上げて見ますと、選手の人は今井さんと池田さん、それに補欠の中川さんだけで野川さんや金子さん、小林さんの姿は見えませんが、マワシ姿になっているのは今井さんだけでした。

「ほかの人は、どうしたの？」

ソツと津野さんに尋ねますと

「小林さんと金子さんは練習に行ったわ。野

川さんたちは、どこかしら？」

そういつてるところへ小林さんと金子さんが戻ってきました。

ふたりとも汗ビッシヨリです。

「いいかげんに休みなさいよ」

笠原さんが小林さんに声をかけました。

「彼女スゴク張り切ってるの、さっき敗けたのがヨッポド頭へ来たのよ」

津野さんが、そっと耳うちしました。

「立ち上がったトタンに横へとばれて彼女何もできなかったのよ。見事な出し投げだったわ。まるでぶつかりげいの時みたい一回転しちゃったんだから……」

あの自信やの小林さんが、そんな敗けかたをしたのではよほどのショックだったのでしょう。でも、そんな敗け方をしたあとで、少しの休憩時間にも猛練習するのはえらいなあと思いました。

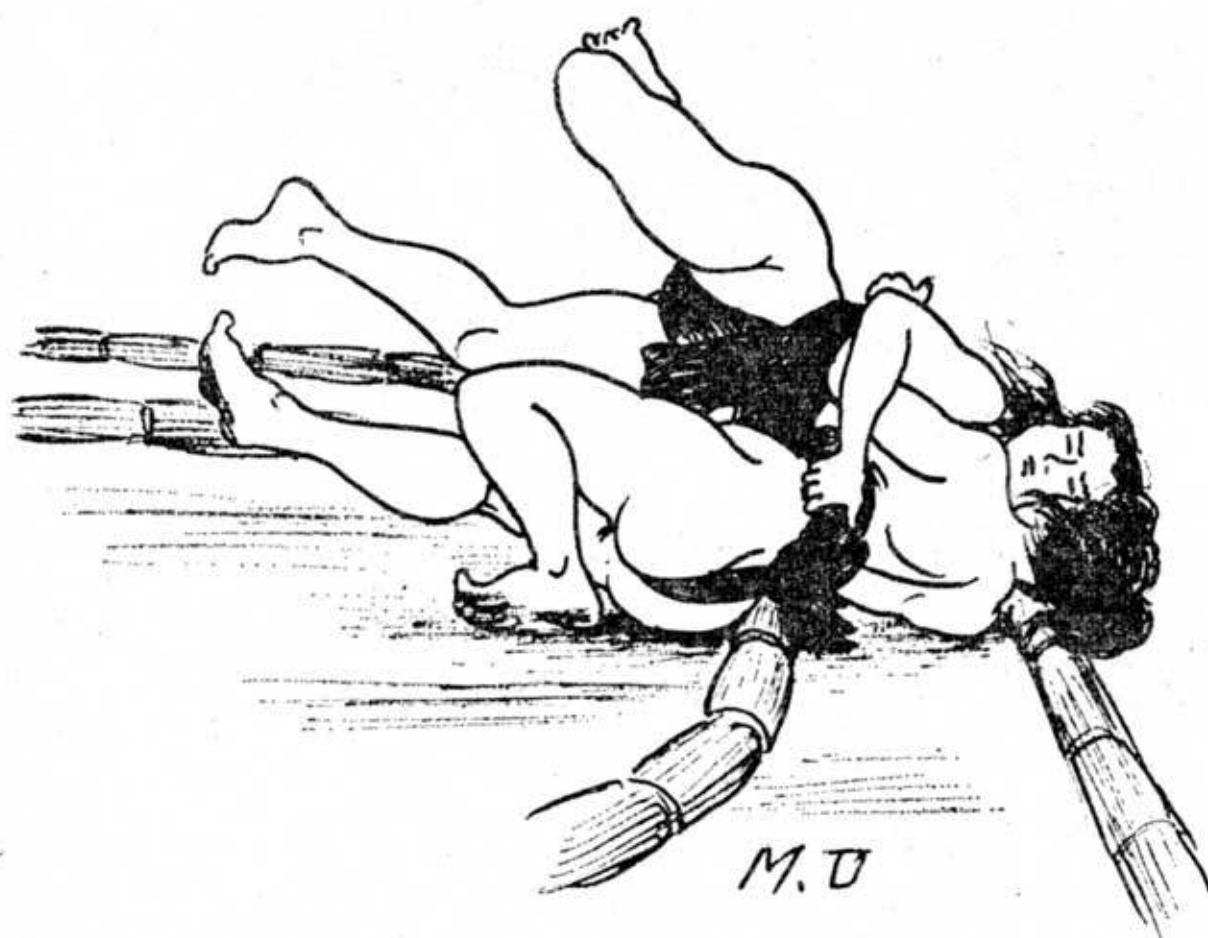
笠原さんに声をかけられて小林さんは、汗をぬぐいながら、

「大丈夫、このくらい練習しないと調子が出ないわ。さっきはウォーミングアップが足りなかったから……」

「でも、もういくらも時間ないでしょ」

「ええ、もう止めます」





小林さんは腰を下ろしました。  
大きなポテポテした白いお尻が椅子からこぼれ落ちそうになっています。

金子さんがそのうしろに立って、自分の汗

をぬぐおうともせず、マワシの乱れたのもそのままだに、小林さんの髪をていねいに揃えてあげていました。

今井さんがふと時計を眺め、そして、笠原さんに何かいいました。

すると笠原さんも、小林さんに何か声をかけ、そして私たちの方を向いて

「ヒロちゃんとテルちゃん、ちょっと」

と呼びました。

何でしょうと、少しドキンとしましたが、

「ハイ」

と立ち上がって、その方へ行きますと、

「あんたたち、今井さんと小林さんの、マワシ締め直すのを手伝ってあげて」

何か叱られるかと思っていましたので、そんなことだったのかとホッとしていますと

「ア、テルちゃん、わたしの手伝って」

と小林さんが私に声をかけまし

た。

「こないだ、あんたに締めてもらったら、とっても気分が良かったから、またたのむわ」

みんなの前でそういわれて、私はちょっとテレくさくなって顔が赤らみましたが、小林さんが案外本気らしいのに助けられ、そのうしろへまわると、一巻きごとに

「どうか勝ちますように」

と祈りながら、小林さんのたくましい腰に青いマワシをギッチリと締めこんでいくのでした。

張り切ったふたつの半球が、さっきの練習でホンノリとピンク色に染まり、そのまんなかを割って、キッチリと締め上げたタテミツの青い色がほんとに美しく、そしてりりしく見えるのでした。

おわりに結び目をキュッと引き上げ、そしてその上をポンとひとつたたきます。

これは私のオマジナイです。

「ありがと。イイ感じ」

小林さんは私をふりかえってニッコリ笑いました。

先に締め終っていた今井さんも、その声にチラリと目を流しました。そしてオヘソのあたりの前褌を両手で軽くたたいています。

何だかタヌキの腹つぶみみたいですが、これもおマジナイなのかもしれません。

やがてベルが鳴りました。

いよいよ個人戦の集合時間です。

「タイヘン、タイヘン。こんなにしちゃいけないワ」

と、まだマワシ姿のままだった金子さんがあわてて、そのマワシを解き出しました。

ベルを聞きつけて、榎本さんや、中川さんも戻ってきました。

「サア、行きましょう」

笠原さんが声をかけます。

マワシ姿の今井さんと小林さんを先頭にしておいて、そのあとから私たち応援が続きます。

会場の中庭へ入りますと、個人戦に出場する「女力士」たちが続々と集ってきました。

色の白い人、黒い人、肥った人、スラリとした人とさまざまですが、皆、肌が張り切っ

てそばへ寄っただけでもはねとばされそうに見えます。目がキラキラと鋭く光っているの

で女性同志ですのに何だか別世界の人たちみたいない感じがするのです。

「黒くってなかなかイカスじゃない？」

ヒロちゃんにいわれて、その方を見ますとスラリとした長身にマッ黒いマワシをキリリ

と締め込んだ選手が通り過ぎました。黒い髪浅くろい引き締まった肌に黒のマワシがともよくマッチしてハツとする程魅力的です。

そのうしろから来た人は、若々しい緑のマワシです。

「ああ、F高校って緑のマワシなのね」

ヒロちゃんにいわれて気がつきましたが、その緑のマワシの選手のと後に続いてくる人は、さっきの汽車の中で見かけた人でした。

やがて東西に分れて整列。これから始まるのは二回戦からですので選手は、東西八人ずつです。

「シッカリ！」

「ガンバッテ！」

早くもここから声援がとびました。

私たちの代表今井さんは三番目、そしてホープ小林さんは五番目です。

「ワァッ」

とあがる歓声のうちに、勝った選手は顔を輝かせ、敗けた人はくちびるを噛んで土俵を下ります。

そして、今井さんの登場です。

相手の人は、何とさっき私とヒロちゃんが見とれた黒のマワシをつけた長身の選手でした。立ち上がると、今井さんはうまく飛びこ

んで頭をつけ、とくいの体勢でくいい下りました。しかし相手も長身だけに、今井さんを抱えるようにして、見るからに弾力の強そうな両足をふんばって今井さんの寄り身をこらえています。

ジリッと今井さんが下から相手のからだをコネ上げるようにしながら寄り進みました。

ちよっとからだの起きかけた相手は、顔を真赤にしてこらえ、押し返そうとしました。

そのとたん、今井さんは、それを計算に入っていたように、右足を大きく引きながら、強烈な下手ひねり。これが今井さんのとくいの

中のとくいで

「ガクッ」

と膝が折りそうになった相手は、辛うじて膝のつくのだけはこらえましたが、大きく泳ぐところを、今井さんはすかさず一気に寄り立てました。

「アッ」という間に土俵ぎわへ詰まった相手は、苦しまぎれに右手で今井さんの首を巻き

うっちゃりに最後ののぞみをかけました。

しかし、もう棒立ちで、やっと爪先だけで立っている体勢からではもちろんうっちゃり

など利くはずはなく、そのままドッと寄り倒されて、浅黒い二人の体が重なり合って、黒



い相手のマワシと、青い今井さんのマワシとがもつれながら、土俵の下までころげ落ちて行きました。

「ワァ、ヤッタァ！」

中川さんが元気のいい声で真先に歓声をあげ、私たちは一せいに手をたたきました。

「うまいわねェ」

松田さんが興奮した真赤な顔になって喜んでいました。

もちろん、松田さんだけではなく、津野さんも、ヒロちゃんも、そして私たち全部がおどろ躍るように喜びあったのですが：審判の手は、どうしたことが敗けたはずの相手方を指しているではありませんか。

土俵下から立ち上がった今井さんはサッと表情を変え、あべこべに相手の選手の人ばかりくくりしたような、ケゲンそうな顔をしました。

場内もちょっとどよめきましたが、審判は土俵下の審判席へ一言二言説明しただけ。審判員の人たちからも抗議が出ないのです。

「おかしいわねェ」

私たちが首をひねっているところへ、今井さんがもどってきました。

さすがに口惜しそうで、下唇をかんでいま

す。額にかかった髪も、そのまま直そうとせず私たちの質問にもしばらく答えてくれませんでした。が、ようやく氣をとり戻したのか

「敗けは敗けよ」

と口を開きました。

「あの下手ひねりがあんまりうまく効いたのでつい調子に乗りすぎたのよ。もうちょっと腰を下げていればあんなことなかったのに」

問題は土俵ぎわで相手が苦しまぎれに見せたうっちゃりなものでした。

体勢の崩れたところを一気に寄せられたのですから、うっちゃりの構えをとれるゆとりなどあるはずはなく、もちろん利くわけもないのですが、今井さんの寄るスピードがあまり早すぎたために、自分で足を出してしまったような形で今井さんが左足のつま先をふみ切ってしまったのでした。

「残念だワァ」

「取り直してわけにいかないかしら」

今井さんがあきらめたのに反比例して、応援の私たちがぐやしがりました。

「仕方ないわ。ホラこんどはコバちゃんよ」

今井さんに逆になぐさめられて、また土俵へ目を向けますと、ちょうど小林さんの巨体がユラリと立ち上がるところでした。

小林さんの相手は、W女子高のキャプテン三年生の岩下科子さんです。

個人戦優勝候補のトップで、一七〇センチ六四キロという、バランスのとれたすばらしい体格です。団体戦を無敗で勝ちぬいてきた岩下さんは、まるでピカピカと光るような肌の艶にエビ茶のマワシをキリリと締め、土俵上の態度も堂々としたものでした。

しかし小林さんも、氣おくれすることなく激しいファイトを燃やしているということがそのうしろ姿からもよくわかるのでした。

「コバちゃんスゴイファイトじゃないの」

「何かやりそうだわね」

いつ来たのか野川さんの声もしました。

「まあ相手は優勝候補だから、敗けてもともとだわ。そう思ってるから返って気が楽なんじゃないかしら？」

「ひとのことだと思って」

「でも彼女こんな張り切ってるなんてタノモシイじゃない」

私たちの期待は、ムダではなかったのです。小林さんの出足は、スバラしいものでした。

姿勢を低く構え、両腕をピツタリとワキへつけて体当たりに出たため、さすがの岩下さ

んの突張りも不発。小林さんはすぐ右手で前  
 揮を握り、左手で岩下さんの右手をたぐるよ  
 うに引っぱりこみました。

突張りを封じられた岩下さんは、誘われた  
 ように右を差して右四ツ。

この突張りはずして何とか四ツになると  
 いう小林さんの作戦はみごとに成功して、一  
 方的な勝負になるだろうという予想は全くく  
 つがえされ、にわかに声援が盛り上がりまし  
 た。

あのマジメな今井さんや笠原さんまでが、  
 顔を真赤にして口々に何か叫んでいます。

岩下さんが左手を伸ばして上手をさぐりま  
 した。

指がちよっとかかりかけましたが、小林さ  
 んはうまく腰を引いてそれを外しました。

「かんとんとられてたまるもんですか」

私が心をこめて、いっしょうけんめいに締  
 めてあげたマワシです。

私は思わず叫んでしまいました。

どこかで笑い声がしたようでしたが気にも  
 なりません。

しかし、小林さんは第一段の作戦に成功し  
 て組むことはできたのでしたが、自分も左上  
 手がマワシにかからず、右の前揮も作戦を変

えた岩下さんの強い押っつけで自由にならず  
 苦しそうで、そのため攻撃に出られません。

さすがに優勝候補のトップだけに岩下さん  
 は、あまり得手とはいえない右四ツガップリ  
 になっても十分な強さを発揮するのです。

「ガンバッテ！」

「もう一息ヨッ！」

私たちの声援もますます力が入ります。

しかし、岩下さんは、右の下手を十分に引  
 き、そして左の押っつけをますます強く利か  
 せながらジリジリと攻勢をとります。

岩下さんの強い引きつけにあって、小林さ  
 んのタテミツがおシりに深く埋もれて、まる  
 でヒモのように細くなっています。

さっき締め直すときに手伝ってあげただけ  
 に、私は、それが自分のマワシが肌に喰いこ  
 んでくるみたいに感じられて、何だかおシリ  
 のあたりが痛くなってくるのです。

しかし、小林さんは、大きな体でこの岩下  
 さんの強力な寄り身をこらえ、左手を小手に  
 巻きながらがんばっています。

体がかわって、小林さんが向う側にまわり  
 ました。

岩下さんの肩の上にのぞいている小林さん  
 の顔がほんとに苦しそうで、汗がにじむのか

時々目をパチパチさせています。

この予想外の小林のがんばりに、岩下さん  
 の攻撃もちょっと止まり、そして観衆の声援  
 もやや静まりかけます。

しかし、次の瞬間岩下さんは、強い押っつ  
 けで小林さんの右の下手を切ることに成功す  
 ると同時に、猛然と攻撃を再開しました。

「ワァッ！」

と場内の歓声が盛り返します。

両マワシを切られた小林さんが、タジタジ  
 と後退しました。

この時には岩下さんは、おそらく勝ち名り  
 を受ける自分の姿を考えたかもしれません。  
 今井さんたちの顔もゆがみ、私たちも

「アア、もうダメだわ」

と、あきらめかけた時でした。

下がりがけた小林さんは、岩下さんの右の  
 差し手を両腕でかかえ、その寄ってくるタイ  
 ミングをうまくとらえると思いついて振りま  
 わしたのです。

十分の体勢になったところに、岩下さんの  
 ゆだんがあったのかも知れません。けれども  
 例え岩下さんに気持のゆるみがあったにしろ  
 小林さんの気力はすばらしいものでした。

アッという間に岩下さんの体が浮いて軽々



と一回転、たちまち形勢は逆転して土俵にしまった岩下さんを、こんどは小林さんが猛烈に寄り立てます。

何とか、かかえられた右手をふりほどいて体勢を立て直そうとする岩下さん。

そうはさせまいと齒を喰いしばって必死に寄り立てる小林さん。

思いがけないこの光景に、場内は大きなざわざわになりました。

岩下さんへの声援と小林さんへの応援がもう全くごちゃごちゃになって湧き立っています。

お互いに自分が何を叫んでいるのかわからないのですが、とにかく何か叫んでいるいではいけないのです。

土俵ぎわへ追いつめられた岩下さんは、なおもけんめいにまわり込んで残そうとしましたが、もうすでに腰が浮き上がっていて最後の努力も及ばず、大きな体をうまく生かした小林さんの止めの寄りにとうとう力尽きて土俵を割りました。

「キャーッ！」

と、ヒロちゃんが思い切り声を張り上げて、そして飛び上がって手をたたきました。

ヒロちゃんだけではなく、松田さんも、津

野さんも抱き合ってピョンピョン跳んでいます。

勝ち名を受け、土俵を降りてきた小林さんに今井さんと笠原さんが駆け寄って、まるでコズキまわすようにして喜んでいきます。

小林さんの体は濡れるくらいに汗でぬれ、激しい息づかいに、大きなおなかも波打っていました。

笑おうとしても笑顔にならず何かいおうとしても息が切れて言葉にならないようです。「えらいえらい。スバラしかったぞ」

役員席の方から部長先生も、とんできました。小林さんは、その方へペコリと頭を下げましたが急にポロポロと涙をこぼしました。

「何だ、泣くヤツがあるか、君はこの大会のヒーローになったんだぞ」

部長先生はそういって、わざと乱ぼうに小林さんの汗にぬれた肩をポンとたたくのです。

私も何だか胸がジーンとしてきて涙が出そうになり、あわてて隣にいた松田さんの背中にとびついてふざけました。

準々決勝の小林さんは、しかしあっけない負け方でした。

岩下さんとの一戦に力を使い果たしたので

しょう。

相手の投げを一度は残しましたが、続けての攻撃に崩れるような倒れ方で膝をついてしまったのでした。

でも、それで十分なのでした。

誰も優勝を期待していませんでしたし、小林さんにはまだ来年があります。

そして何よりも優勝候補を堂々と敗ったという自信が貴重なのでした。

そしてこの小林さんの自信は、同時に私たち全員の自信でもあるのでした。

毎日いっしょに練習している人が優勝候補に勝ったということは、私たち全員をどれだけ力づけたかわかりません。

部長先生が小林さんを「君はヒーローだ」とおっしゃったのも、この意味なのです。

汗のビッシヨリとにじんだ小林さんのマワシを解いてあげながら、このマワシににじんでいるのは汗ではなくて貴い伝統として私たちに受けつがれて行くものなのだと、しみじみ感ずるのでした。

(未完)

× × ×

# のおと・あと・らんだむ (八)

千 草 忠 夫



## 十六、コレクター事件

奇クを耽読したり、こんな「のおと」などを書くのに血道を上げていたりするとロクなことではない。

まず日常生活がバカバカしくなってくる。ついで現実感覚が次第にモーローとなつて来て、やがてカスミを食って生きているような気持ちになつてくる。そして最後にやってくるのは平衡感覚の完全な喪失である。裏返し

世界が唯一無二の住むべき世界となり、この世は仮の世となつてしまふ。その世界に住む住人の特徴は倫理感よりも欲望の追求を上位に置くことで、これが最もおそろしい。

私が「コレクター事件」と仮に呼んだ事件は、この五月に新聞をにぎわした女子高校生誘拐事件のことである。東京の某女子高校の三年生が、窃盗常習犯角園九十九という中年男に誘拐され、約六カ月にわたつて同棲を強いられた、あの事件のことを、本誌の読者ならきつとまだ御記憶のことと思う。丁度、映画「コレクター」が評判をとつた直後のことであり、犯人が「コレクター」にヒントを得て犯行に及んだと供述した所から、「コレクター」が再びムシ返され、私の読んでいる地方紙では、「コレクター」未見の読者のために、簡単なストーリーの紹介まで記事に入れてあった。

「へえ、小説に出てくるようなことを実際にやる男もいるんだな」と、私は大した興味も起きないままに読み過した。「大して珍らしいことでもないじゃないか」と、そのときたしかに考えていたに違いない。そのまま事件のことは忘れてしまった。

最近の週刊紙は人が忘れた頃に事件をムシ



返しては、好奇心をそそろうとする傾向があるけれど、「コレクター」事件を偶然私に思いつかせたのは週刊誌だった。なぜ偶然かという、店頭に並んでいた「週刊現代」七月七日号の白表紙に「大脳生理学が実証した家庭の秀才教育」と印刷されているのが眼についたからである。

「ウチの娘も小学校だし、ひとつこころ回りでシゴク必要があるとカネガネ思っていた所へ、これは何たる福音！」

「家庭の秀才教育」という文句が気に入って五十円を投ずる気になった。ここまでは、まことに日本の標準的な良きパパで、コレクター事件のコの字も頭になかった。

ところがである。いざ家に帰って秀才教育の秘伝の伝授にあずかろうとページをパラパラとめくった時、何たる運命のいたずらか、「女学生誘拐魔の異常な秘密日記」という大見出しが、眼に飛び込んで来た。「愛欲と妄想がうごめく変質者の美文ノート」という副題を読んだ頃には、完全に秀才教育のことは忘れてしまっていた。

新聞の報道では、たしか、角園が行きずりの少女に声をかけたところ、黙ってついて来て、それ以後も別に檻禁したわけではなく、逃

げようと思えば、いつでも逃げられる状態におかれていた。ということになっていったようである。これについて、「不可解な思春期の少女の心理」とか何とか言うような心理学者かなにかの談話がついていたと記憶する。

その記事を読んだとき、「そんなことがあるものか。裏になにかやっているとにきまっているさ」と、下司の勘ぐりでそう思い、心理学者のそのわけ知り顔な説明にかすかな反撥をおぼえたものだ。ところが、週刊誌の記事を見ると、この勘ぐりが、そっくりそのまま事実だったではないか！

「やっぱり……」

私は深い考えもなく、予測的中したことをひそかに誇った。

「何かやっている」と、考えた時のその「何か」というのは、中年男が少女を誘拐した場合、当然生ずると思われる状況のことであり、私の場合は「花と蛇」の愛読者として、更に異常なことまで想像していた。それがそっくりそのまま実行されていたということは私自身の心の裏をのぞきこまれるようでありまかり間違えば自分が犯人になっていたかも知れぬ。という妙な興奮さえ感じた。

ということは、この事件に対して私自身が

倫理的な怒りを全然感じていなかったということである。それだけならセンセーショナルなマスコミの記事にならされた大衆の「またか」式の反応として、さして異常ともいえないかもしれない。ところが、記事の文章を読んでゆくにつれて、犯人に同情し、この記事を書いた記者に対して次第に反感めいたものさえ感じはじめたのである。

「醜い獣欲」「恐るべき淫獣」

「四十男の不潔な情欲日記」「黒い欲望」

「希代の変質者」

「性に執着しつつ、せまいアパートの一室に閉じこもっている四十男の不潔な妄想がひしひしと迫ってきて、どうにもやり切れませんでした」（角園の美文日記を訳した捜査課某氏の談）

「頭の禿げ上がった四十すぎの男が、妄想に苦しめられているサマは、哀れとも滑稽ともいえない……」

こんな文句の数々を読んでくるに従って、なんだか私自身が公衆の前で非難されているような羞恥と屈辱を感じはじめ、それに対する反撥が、犯人への同情と記者へのうらみに変ったものと考えられる。

私はそのことに気づいて、しばし呆然とな

った。

ああ、何と恐ろしい事であるか。十年後には犠牲者の少女と同じ年になる娘（あの少女よりはきつと美人になるだろうし、前に述べた通り教育に深い関心を持っている私という父親を持っているのだから、きっと才女になるに違いない）を持ちながら、その少女に一片の同情も寄せないのみか、社会の木鐸をもって任じている人の公憤に満ちた記事に反感をおぼえるとは！

私は間違っている墮落の極に達している。新聞記事を眼にした瞬間から眉をひそめ、心を曇らし、公憤を投書らんにたたきつけるべきであったのだ。十年後に愛娘が成人した時の事をおもえばかって、「秀才教育」にうつつを抜かす前に、週刊誌の記事を熟読し、憤りを新たにしつつ、かかる変質者の手口をしさに吟味し、もって十年後の危機にそなえるべきであったのだ。これこそ、世に標準とされる父親の務めであったのだ。

このような倫理に対する無感覚を私に植えるに到った責任の大半は、この奇クという雑誌にある。だから、私はこの「のおと」の第一回に奇クを「悪書」とであると規定して大いにその非をならしておいた筈なのだが、

頭の禿げ上った四十男の妄想に駆りたてられるままに、今日までこの絆を断ち切ることができなかった。ああ、なんという優柔不断ぶりであったことだろう。

よし、今ただちに奇クとの縁を断乎断ち切ろう。「四十男の不潔な情欲日記」をつけることも止めよう。いつ魔がさしてフラフラッと高校生に手を出すようなことがないとも限らないからだ。週刊誌を読んでから、その危険をヒシヒシと感ずる。もしそんな事になって逮捕されでもしたら、後生大事にしまつて来た奇クや日記が証拠物件として押収され、「彼は長い間、獣のような欲望を育て、それをいつかかならず実行しようと、ひそかにチャンスねらっていたのである」と書きたてられる可能性が多分にあるからだ。

前者の轍をふまないようにと、私は最後にもう一度週刊誌の記事を通読した。こうして一新した気分で読み直してみると、たしかに獣と呼ばれても仕方ないほど非人道的な行為である。「コレクター」に刺戟された、とあるが、「コレクター」を見ようが見まいが、この男ならいつかはやったに違いないという気がする。とすると、十年以上も前から「コレクター」にまさる内容をもった雑誌を愛読

して来ているが、いまだに実行しない自分などは、永久に実行しないかもしれない、という気になりだした。それとも奇クの刺戟がそれ程稀薄なのか？

ところで、「コレクター」のストーリー紹介の後の方で、妙な一句に出会った。

「ストーリーだけ紹介すると、何とも救いのない映画のようだが、むろんワイラーのねらいは、誰もが心の底に抱えている欲望をかしやくなくえぐり出すところにあった」

おかしいぞ、と私はしばし戸惑った。たしかにおかしい——おれは結論を早まったのかな？

誰もが心に抱えている欲望なら、私だって抱えている筈だし、そういう御当人も抱えている筈だ（だからこういう同情ある考え方をするのだろう）。犯人の角園も勿論抱えているに違いない。とすると、それまでの記事とのつながりは——

わかった、欲望を抱いても実行に移さえない。なければならない、ということなんだ！ なんだ、そうだったのか。角園は悪人じゃなくて、ただ機会の犠牲者に過ぎなかったのだ。私にしても、愛する奇クと涙をのんで別れなくてもいいんだ。ただ、実行しようという



気さえ起きなければ——十数年も奇クに親しんで、いまだその気を起した事は絶無だから実行の可能性は零に等しいだろう。安心していい。

やはり社会の木鐸をもって任じていられる人の記事だけあって、人情の機微は十分にのみこんでおられる。あのような記事の書き方をしたのも、世の愚か者が誤解するのを防ぐ方便のためであつたのであろう。私のような正直者には、とてもつとまる仕事ではない。こうして私は安心して一方では奇クを耽読しながら、一方では娘の家庭教育にいそしむ事ができるようになった次第である。

## 十七、「おじさん嬉しい？」

### その他

どうも小悪魔マスミに引っかきまわされた感じである。福田氏の「サジズムとは何か」にまでマスミの文句が登場するに及んで、それを持ち出した張本人であるらしい私としてどうしてもこの言葉に結着をつけねばならないような気がしてきた。

「おじさん嬉しい？」ときかれたのは私ではなく辻村氏である。その辻村氏が一言も発言

されないのにハタから寄ってたかつて（という程でもないが）あれこれあげつらうのも、考えて見れば妙な話だが、私が辻村氏の立場に立ったつもりで、今一度考えて見たい。というのは、あの辻村氏の文を読んでいた時、私は完全に辻村氏になりきっており、マスミがあんな文句を吐いた時、たしかにギョッとなったからである。その衝撃の強さが、その言葉の含む重要性和、あるいは感ちがいされた面があるかも知れない。いや、考えれば考えるほど、こちらの考え過ぎといった気になってくる。

「ナニ、たかが小娘が自分のはずかしさをまぎらわすために、照れくささをかくすためになんの気なしに言ったことさ。気にするのがどうかしている——」

そう、たしかにそれが実態だろう。

しかし、無意識の言葉の中に意外な真実が含まれている場合もありうる。ことに、それについて常に考えている人にとっては、思わぬヒントとなったり、今の場合のような衝撃を与えたりする事もありうるのである。ここに言葉の持つ不思議さがある。主体的にとらえられた言葉の持つ力がある。

私はあの頃「のおと・あと・らんだむ」を

書くために、SMのことばかり考えていた。しかしそれはあくまでも主観としてのSでありMであつたので、客観されたSがどのような映ずるかということにまで考えが及んでいなかった。それでマスミのあの言葉が、Sを客観する者からの言葉として、ショックだったのだと思う。「なぜ女をさいなむことが楽しいのか？」この問いに対する返答は、福田氏も申されるとおり、おそらく永久に為しえないものと、私も思う。九月号の「プレイと何か？」で一応私なりの考えを述べては見たが、おそらく解答には程遠いだろう。しかし、SMを愛好する者は、この求めて得られない解答を常に求めて苦悶しなければならぬのだ。俗世間というものの眼がある限り、異端者はその眼をはね返して自己の立場を確固としたものとする為に、常に戦闘的に自己の立場を肯定する為の理論を展開せねばならない宿命におかれていたからだ。

こんな理由で、私はマスミの言葉にあるいは真剣に取り過ぎたのかもしれない。真剣に取りすぎた事自体を私は間違つたことだとは考えないが、その時受けたショックの性質について、その後次第に考えが変って来た。

あの時はSに対する挑戦状とまで考えて、

挑戦状を突き返すまでは「のおと」を進めるときおいたったものだったが、今はそれ程にまで考えていない。なる程、あの言葉に挑戦状としての性格は多分にあるが、私の受けたショックの性格は、挑戦状を突きつけられたこと以外にも原因があることが次第にわかって来たのである。このことは「プレイとは何か?」を書いているうちに、次第に私の中にハッキリした形を取りはじめ、今では、ショックの大部分が、これによるのではないかと思うようになっていく。以下、それについてのべるが、これは先号に書いた「プレイとは何か?」の補足になるかもしれない。

読者は、オランダの史家ヨハン・ホイジンガの「ホモ・ルーデンス」という著作をお読みになったことがおありだろうか? でなければ、その著作の題となっている「ホモ・ルーデンス」という言葉を、どこかで聞きになったことがおありだろうか? ホモ・サピエンス、ホモ・フアーベルなら、知っているが、ホモ・ルーデンスなど聞いたこともない。とお答えになる方が多いのではないかと思う。御承知の通り、ホモ・サピエンスとは「英知人」即ち知性とくに理性を人間の本质と見る立場による人間概念であり、ホモ・フアー

ベルとは「工作人」即ち人間と他の動物との区別は人間が物を作ること、とくに物を作る道具を作ることにあるとする立場で、人間の知性も工作と結びつけて理解しようとする人間観である。

これらに対して、ホイジンガの提唱するホモ・ルーデンスとは「遊戯人」即ち、人間の作りあげた文化の本质は遊戯にあり、とする立場である。宗教も文学も戦争でさえも、人間の遊戯本能とでもいうべきものによって成り立った、とホイジンガは説く。今その全貌を解説している余裕はないが、その中で、遊戯とは何かという定義の部分だけを抜き出してみよう。

「遊戯とはあるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行われる自発的な行為、もしくは活動である。それは自発的に受け入れた規則に従っている。その規則は一旦受け入れられた以上は絶対的拘束力を持っている。遊戯の目的は行為そのものの中にある。それは、緊張と歓びの感情を伴い、またこれは日常生活とは別のものだ」という意識に裏づけられている」(中央公論社版五十八ページ)

これだけではよく判らない点もあると思うので少し補足すると、「自発的な行為」とい

うのは他から強制されない、みずからの楽しみのためにやる行為という意味であり、自発的に遊戯の要求する時間空間の中に身を置きその中で要求される規則に無条件に服従するのが遊戯の本質的な性格となる。

さて、SMプレイも「遊戯」である以上はこの定義に従わなくてはならない。いやこの定義からはみ出さないからこそ「プレイ」と名づけられるのであろう。そう思っただけで定義を読んでいただければ、いちいち首肯されるところがあろう。

ところでマスを縛った辻村氏の場合だが氏はプレイの何たるかを骨のズイまで心得ておられたが、ズブの素人のマスミはそのことについては全然知らなかった。即ちプレイの性質をなす規則を知らなかった。従ってその規則の持つ絶対的拘束力などはマスミには絶対的とは見えなかったのである。ではSプレイにおける規則とは何なのか? Sプレイの場合には簡単である。遊戯の要求する時間空間の中に没入するということ、即ちイリュージョンの中にみずからをひたす。ということに外ならない。

「おじさん楽しい?」という問いは日常生活の側からの問いである。遊戯の場という日常



性から隔絶した所では不必要、いや不謹慎な問いである。これは重大な規則破りの行為である。遊戯の世界においては、規則が犯されるや否や、その世界はたちまち崩壊し去り、

## 挿絵画家を募る

○本誌発表の作品にふさわしい幻想的で優雅な異色画を求めます。

○用紙は必ず白い画用紙に墨汁又は黒インクにてお書き下さい。鉛筆や青インクはお避け下さい。大きさは御自由ですがなるべく二倍乃至三倍位が適当です。

○優秀作品は本誌の最近号に発表の上、読者の反響の如何によっては、本誌専属挿絵画家として毎月執筆願います。

○従来、S画（主として女体緊縛）或はM画、女体切腹などについて多くの方々から御応募頂きましたが、残念ながら特に傑出した作品には接しませんでした。どうか奮て力作をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御送稿は第一種便にてお願いします。

○尚、アイデアとしては、中々秀逸なものが各傾向のマニアの方々から寄せられておりますが、いずれ専属画家の手にてイラスト化したいと思っておりますから今後とも御希望のものを寄せ下さい。

△奇々編集部▽

日常世界が、さむざむとした布をひろげて覆いかぶさってくるのだ。

マスミは意識せずに（というのはプレイを熟知していなかったから）この規則破りを行った。子供たちの遊びにおいて規則破りがどのような罰を加えられるかを読者はよく御存知だろう。辻村氏のイリュージョンはズタタに引き裂かれ、一瞬の怒りが氏の指先をふるわせたに違いない。そしてこの小娘の不謹慎な一言に平手打ちでむくいられたのは氏の良識の勝利といえるだろう。それとも、こざかしい小娘などすぐに自分のイリュージョンの中に引きずり込んでしまえる。という自信のためであつたらうか？

氏の文を読みながら氏と同化していた私はこの規則破りの行為にショックを受けたのだ。氏をとうして描いていたイリュージョンを、あの一言によって破壊されたせいだった。

だが、マスミのような極端な場合はともかく、プレイをする者は常に規則破りにおびえていなくてはならない宿命にあるようだ。なぜなら、Sプレイの規則というものは、一般の遊戯のそれほど明確に確定したものでなく常にプレイの相手の想像力のみを当てにしな

くてはならないからである。そして更に不幸なことに、長い訓練の結果相手の想像力さえ自由に支配できるようになった時が、その女を相手にしてのプレイに情熱を失なう時になってしまう。若し新しい相手を求めにくい場合には、プレイが更に深まってゆく。そしてこの「深まり」は往々にして遊戯の域を越える場合の多い危険地帯なのである。それだけでなく、プレイヤーは常にプレイの規則の壁にブチ当たり、それをのり越えたい誘惑にかられがちである。万一その誘惑に負けたならば、プレイの世界は崩壊し去るばかりではなく、悪い場合には自分の日常生活さえ破壊してしまう、という醒めた意識がプレイヤーになかったら、それはおそろしく危険な遊戯なのだ。しかも、プレイヤーのイリュージョンは往々にして、この意識を彼方におしやろうとする。このおそろしい綱渡りのスリルが、あるいは、プレイヤーの楽しみなのであるか？ あたかも夫ある妻との情事が、プレイボーイにとって無上の快楽であるのと同じように――

私が今もっとも知りたいのは、プレイヤーのそこら辺りの心境である。

（この項終り）

# モッキンバード 三原 寛



## ヒモと手下

船橋駅西口のガード下には一杯飲み屋の屋台店が軒を並べて、レース帰りの客で賑わって居た。

吉川博と中尾昇司の二人は、その屋台の赤い提灯をいまいまし気に横眼で睨みながら舌

打ちしていた。

「だから兄貴よお、第九レースで五―三をおさえておけばよお、五の頭はかたいつて判つてんによお、兄貴がどうしても二―三だなんて穴に大きく張り過ぎるからだよお」

「黙ってるノ、済んだ事をばやいてもしょうがねえ。五―三で二四八〇円もつくのが判つて

りゃあ、俺だってかたく張ったさ。今日はついてねえんだ」

「だって、兄貴みてえによお、金づるがついてりゃあ、またってこともあるけどよお」

「俺の自由になる金づるなら苦労しねえ。組合の掛金が三日も溜ってるんだ。今日中に何とかしなきゃあ、俺も、おめえも、とんでもねえ事になるぜ」

頬に一筋、切り込まれた傷痕のある吉川は眉根を寄せて肩をすぼめた。

吉川はモヘヤ地の派手なサイド・ベントの背広を着込んで居た。指には真鍮の大きな指環が鈍く光って居る。

中尾は短く刈り込んだ頭、太い首、プロ・レスラーのようにがっしりした体格に黄色いアロハシャツをひっかけていた。

二人は、船橋駅前に大成不動産の看板をかけたビルを根城に、この界限をとりしきる大津組のチンピラだった。

二人に与えられた仕事は、レース場内に軒を並べている屋台店から毎日、ショバ代を徴集して歩く事だった。こうして集金した金は一銭も自分のポケットに入れる事は許されず全額組合に納めねばならなかった。

吉川自身の収入源としては組合から女を一



人当てがわれていた。スケコマシ専門の組員が拾って来て仕込んだ家出娘である。

吉川に当てがわれたのは照子という白豚のように肥え太った女だった。はれぼったい低い鼻、厚い唇、メロンのように大きな乳房色の白いのだけが取り柄の女だった。彼女のトルコ風呂での稼ぎが吉川の生活費だった。ただし、吉川に輩下としてつけられた中尾の面倒は吉川がみてやらねばならなかった。

汚いアパートの六畳一室に吉川は照子と同居し、部屋の一隅をカーテン代りの毛布で仕切って中尾が寝泊りしていた。

照子は早番の時は午後過ぎから、遅番の時は夕方から勤めに出て深夜帰って来た。

最初のうちは吉川達も夜の営みは遠慮していたし、朝になると中尾が気をきかして出て行ったので、その時間を利用していたのだがそのうち、中尾を気にするのが面倒臭くなった吉川は、中尾の存在に構わず深夜帰宅した照子に挑むようになったし、照子は照子で、毛布のカーテンの向うで悩まされる中尾の気配がなければ刺戟されなくなっていた。

こうした関係が続けた当然の成行として、中尾には照子の存在が女神の地位に迄昇化され、照子の下着類の洗濯から食事の準備、果

ては靴磨き迄中尾の仕事になったし、照子も平気で中尾に足の爪切をさせる程になった。

吉川には内緒だったが、中尾は、吉川から与えられる小遣錢の大半を照子に注ぎ込んでいた。中尾の心底を見抜き、すっかり見縊った照子は中尾に対する値段をどんどん吊り上げたので今では普通の料金の何倍も払わねば照子に相手にして貰えなくなっていたが、中尾にとって照子以外のトルコ嬢を相手にする事は考えられなくなっていた。今では、一日分の小遣いでは足らず、何日も節約して、月に二、三度漸く貢ぐだけの金を溜めて照子の許に通うのだったが、中尾をすっかりばかにしきった照子は、浴室のタイルの床に額をすりつけて哀願する中尾に、お情けで足の裏を舐めさせるのが精々で、あとは、床に這いつくばって、自らの手で狂ったように自らを穢している中尾の醜態をベッドに腰を下した照子が冷笑しながら見物するのだった。偶々気が向いた時だけ、照子はベッドに仰向きになり、その白い豊満な二本の太腿の間に顔を埋めた中尾の舌を利用した。

吉川は、照子に対する中尾の気持を薄々気付かぬでもなかったが、目に角を立てる程のことでもなかったし、寧ろ、こうした関係が続

いている限り、この血の廻りは悪いが、プロレスラーのように頑丈な中尾を隷属させて置く事が出来るのだ。吉川は早く大津組の幹部になりたかった。金色のバッヂを光らせて、外国製の洋服を着て車を乗り廻すのだ。キャバレーを委せられパチンコ屋からのあがりのごっそりポケットに入ってくるのだ。それに女だ。こんな白豚みたいな女は中尾に呉れてやって、ばんとした本当の女を情婦にするのだ。

ボスの情婦こそ本当のばんとした女だ。

近くで拝んだ事は一度しかない。いつもは時々、愛用の黒塗りのメルセデス・ベンツ・二三〇・Sの後部座席にサングラスをかけておさまって、通り過ぎて行く姿を遠くから眺めるだけだ。近くで拝んだのはヤキ入れの時だった。

組員の一人が集金を誤魔化したのだ、ヤキ入れの時は、みせしめの為に、同じ様な役をやらされているチンピラ組員達全部が組合事務所の地下室に集められる。

彼女、江川貴美子は、青白い顔に、細長く切れ上った<sup>まなぢり</sup>眦、眸は黒い冷たい炎がめらめらと燃えているようで白眼の部分は青味がかった凄絶な妖しさが、彼女にみつめられた者の

魂を凍るような魅力で締め上げた。頬のほくろが色気を漂わせるが、薄い唇が顔全体の雰囲気を残忍な印象とした。その彼女はコンクリの床の上に、仰向けに大の字に手足を押えつけられた男の下腹部に尖ったハイヒールの片足をかけて、一同を見廻して云った。

「お前達虫けらでも、痛めつけかた次第ではひいひい音を上げて若しむのだ。掟を破った者がどんな目に遭わねばならないか、よく見ておくがいい」

彼女が踏みつけた足に力を加えてゆく度に男は身をよじり苦悶の呻きを洩らした。

引起された男は、今度は素裸に剥がれて木製の台の上に仰向きに手足を全員で固定された。釘抜きを手にした男達が、台に固定された男の手足の爪を一本一本引き抜き、その度に男は魂切るような絶叫の悲鳴を上げた。頑丈な男だったが、余りの激痛に全身油汗にまみれ、喉も裂けるような悲鳴が続いたあと、耐え難い苦痛に悶絶せんばかりになると、それ迄、唇に冷笑を浮べて見守っていた江川貴美子は、カチリとライターを鳴らして煙草に火をつけ近寄って来て、男の腹部にじいと、その火を押しつけるのだ。そして、片手を伸ばして、男の髪の毛を鷲掴みにしてぐいと引

き起し、ぎゃあっと悲鳴をあげて苦しみ悶える男の顔を冷い炎がめらめらと燃えているような眸でじいっとのぞき込むのだった。男は貴美子に料理される為に、<sup>まないた</sup>組に乗せられた恰好で、仰向けの全身を散々に責め苛まれ、何度か悶絶しては水を浴びせられた。

仰向けで思うさま料理された男は今度は台の上で裏返しにさせられ、背中を貴美子の振り下す革鞭で皮膚が裂けて血みどろになる迄打ちのめされた。

「もうよかろう。それ以上、痛めつけて、くたばっちゃったら厄介なことになる」

それ迄黙って眺めていたボスが貴美子を止め、血だらけのぼろ屑のようになった男がぐったりと床の上に崩折れた。

吉川と中尾は余りの残忍な拷問に、何度か自分自身失神しそうになりながら、真青になってこのお仕置をみていたのだった。

絶対固いレースがあるという情報を中尾が仕入れて来たのがはじまりだった。集金を組合の事務所に納めに行って、翌日の第七レースが大津組によって仕組まれたレースであるのを幹部達の話から盗み聞いたのだ。

持ち金をすっかり注ぎ込んでそのレースを買った吉川と中尾はレースが終った時三倍に

増えた現金でポケットをふくらましていた。それで止めて置けば良かったのだ。だが、中尾は照子に貢ぐ金をもっと欲しかったし、吉川は幹部になる夢が捨てられなかった。幹部になるには自由になる子分の数を増やさねばならないし、子分を養う為には金が必要だった。

欲につられた二人は共謀して、集金した組合の金に手をつけた。取ったり取られたりしているうちに、少し宛穴のあいた損害を取り戻す為に賭け金は次第に大きくなり、気がついた時は、一日の集金を全部使い果していたのだ。

翌日は必死だった。集金は毎日納めなければならぬのだが、金額さえ揃えてゆけば、一日位何とか言い訳がつくだろうと思った。大穴を狙わなくとも、手固いレースで倍につけば取り返せるのだ。こうして、翌日の集金も消えてしまった。そして、三日目の今日焦った二人が必死になればなる程、張った目は逆目逆目と出て、とうとう三日分の集金をすってんでんにすってしまったのである。

組の掟を思うと身の毛のよだつ程の恐怖に捉われた。何とかしなければ、と焦る。もう一日逃げて明日こそ何とか、取り返して、そ



して組合にはうまく誤魔化して、金さえ耳を揃えて持って行けば、うるさい事もいわないのではないか。しかし、三日も組合に顔を出さないと、集金を持ち逃げしたと考えて、二人を探そうとするのではないか。そうすると明日はレース場で集金する事も出来ないかも知れない。

頭の方は少し愚鈍な中尾は表面落着いた素振りの吉川の態度から、それ程切羽詰った自分達の立場を認識してないようだったが、それでも、リンチの恐怖は震え上る程見せつけられているのだ。やけ酒を<sup>あお</sup>呷る金もなくなつた二人はガード下の暗がり立っていた。

### ネギを背負つたカモ

不図、吉川が中尾の袖を引き、あごをしゃくった。サラリーマン風の男が一人、ガード下の暗がり立小便をしていた。中尾がうなずいた。二人は男を左右からはさむようにして近付いて行った。

「勝手に犬みてえな真似しやがって、黙って通れると思うなよ！」

中尾が凄んだ声を出した。

男が向き直った。逆光線で表情はしかと判らない。

身体つきは意外に大きく、プロレスラーのような体格。中尾にひけをとらない程だったが、「どうすればいいんでしょうか」と、おとなしい声を出した。頬の傷痕に凄味をきかして、吉川がにやりと笑った。

「罰金を戴こうじゃねえか」

「嫌だといったら」

同じ場所に突っ立ったまま、男の口調が変った。

「嫌とは言わねえさ。俺達は大津組の若いもんだ。痛い目に遭う前に出すものを出した方が身の為だろうさ」

吉川が嘲笑し、中尾が一步近づいた。

「待って呉れ、<sup>ただ</sup>無料で鶏の喧嘩みてえな茶番をやらかす暇はない。俺は金になることしかやらぬ主義だ。お前さん等を痛めつけられにくくなるんだ？ 俺はこれだけある。お前さん等が勝てばこれはお前さん等のものだ」

吉川と中尾は目を見張った。男がポケットからとり出して振って見せたのは部厚い一万円札の束である。五十万はあるだろう。

吉川と中尾は血走った眼を見合せた。こうなったら、殺してでも欲しい金である。吉川の手にはパチンと音がしてスピンドル・ナイフが光った。

中尾はビール壺を拾い上げて底を電柱に叩きつけた。慣れた手つきで、壺の底が鋭角に削げ落ちた。

「尻の穴の詰ったスカンクみてえにうろたえるのはみっともないぜ。こんな所で派手に喧嘩<sup>ろ</sup>って、見せ物になる気でもあるまい。ついて来いよ」

男は後を向いて歩き出した。

ガードをくぐり抜けて、連込み宿の並んだ線路沿いの舗装されていない道路を人影のない薄暗い路地に折れ込んで男は向き直った。

「さあ、始めるとするか」

中尾がビール壺を手にして男の正面から迫り、スピンドルを右手に光らせた吉川が後に廻った。

勝負は呆気なくついた。ショバ慣れした二人だったが、男のアタックは、それ以上に適確だった。

吉川は股間を押えてうずくまり、中尾はひざで突き上げられた顔を血みどろにして地面に這っていた。二人とも、すっかり戦意を喪失していた。

「俺の勝ちだな。どうせお前さん等には、金もないだろうが、大津組といったな？ 金の代りに、条件を聞いて貰うぜ」

吉川と中尾の二人は、まだ札束を手にしたままにいる男を呆然と見上げた。

## シゴキの女王

大津組三代目の跡目を継いだボス、横井大造は、腕一本で叩き上げた男で、度胸の良さを買われて、先代の情婦の一人娘貴美子の婿となったが、気っぶの良さと向う意気の強さだけで、経営の能力はまるきり無く、船橋の一隅で細々と縄張りを守っていた大津組を、一代のうちに一挙に関東一円の大ボスにのし上げたのは江川貴美子の手腕だった。

強者を利用するだけ利用して骨の髄までしやぶり尽し、弱者は徹底的に踏み躪り、踏み潰してゆく貴美子。非情なやり方に、最初、大造は反対していたが、今では、組の経営はすっかり貴美子に一任してしまい、自分は、今では盆栽と将棋盤相手の隠居生活をしている。駅前的大成不動産のビルの三階が大津組の総本拠である。社長室の深々とした皮張りの肘掛椅子に坐って、江川貴美子は傲然と、前に立っている男を見据えた。

男は譲である。顔を腫らした吉川と中尾がおどおどと後に控えている。

「それで？」と貴美子は顎をしゃくった。

「それで、この二人に代って、此奴等のスツちまった金をお払いしようという訳ですよ」

「うちの身内のももの始末は身内でつけるから、余計なおせっかいは不要だわ。それに、この船橋で、大津組のものに手を出したら、どういふことになるか、知っておいて貰った方が良さそうだわね」

貴美子が机の上のボタンを押すと後のドアから二人の屈強な男が、驚く程の速さでとび込んで来て、譲におどりかかり、譲の両腕を後に捻じ上げた。「それでは、ちょっと、シゴいてみようかね。お前がどんな音を上げるか楽しみだわね」

江上貴美子は、腕まくりをしながら立ち上った。

「そうされてみたいんだが、仕事が先でね」譲は言い乍ら後から彼をおさえつけている二人の男の足を靴の踵で思い切り踏みつけ、思わずゆるめられた両腕を曲げたままありったけの力で後に叩きつけると肘が二人の男の鳩尾にめり込んで、まるで無言劇の振付けのように、二人全く同じ恰好をして、胸を押えて前に崩折れた。

「どうやら、貴女はサディスティンらしい」譲はシャッポを脱ぎ捨てた。譲のたくまし

い上半身は一面に鞭のみみずばれの痕が走っていた。

「俺はマゾヒストなんでね、貴女とは仲良くやってゆけそうなんだが、貴女のおつき合いをしている暇のないのが残念ですよ」

「ふん、今に思い知らせてやるわ、だけど、今日の所は、お前の話というのを聞いて上げてもいいわね」

「実はこの二人のちんぴらを譲り受けたんですよ。貴女の事務所にお願ひに来ようと思っていたら、向うからとびこんで来たってな訳で。理由は聞かないで欲しい。その方がお互いの為らしい。一人頭五十万、二人で百万で如何でしょう」

「ふん、車一台買えない金額で、大の男二人を買いたいというのは虫のいい話だけど、まあ、こんな虫けら、代りはいくらでも見付かるわ。お前もかけ引きのきく相手ではなさそうだし、それで手を打つわ。集金を持ち逃げしたらしいというので、たっぷり鵜殺しに責め苛んでやろうと楽しみにしてたんだけど運のいい奴等だわ。何に使う気か知らないけど、百万払ったら、煮ようと焼こうと御自由にしているいわ」

譲はポケットから百万円の札束をとり出し



て机の上に積み上げ、それから、部屋の隅で、  
どうなる事かと成行を見守っていた吉川と中  
尾に顎をしゃくった。

## 襲 撃

杉並区の北沢町は閑静な住宅街である。交  
番は同町の四日市街道沿いにあった。深夜、  
吉川と中尾は物陰から、交番の様子をうかが  
った。若い巡査が一人、机に向って、何か書  
き物をしている。今一人の巡査と交代したば  
かりだ。深夜の勤務は二時間交代である。交  
番の裏側に続いた部屋が休憩室になっていた  
が、交番と休憩室は壁で仕切られていて直接  
ゆききする事は出来ず、一旦外にでてぐるり  
と建物を廻ってゆかねばならなかった。今一  
人の巡査は休憩室のベッドで横になり、まど  
ろみはじめた頃である。

吉川は物陰から出て、静まりかえった通り  
を酔っぱらった足どりで靴音を乱れさせ乍ら  
交番の前迄よろめき進み、それから、又、中  
尾の隠れている物陰の辺りまで戻って来て、  
急に虚空を掴んでぱたりと地面に倒れた。

様子を見ていた巡査が交番からとび出して来  
て、吉川の上にかがみ込んだ。物陰から、ナ  
タを手にした中尾がとび出して、巡査の後頭

部を一撃した。巡査は物も言わずにその場に  
昏倒した。即死である。目撃者はなかった。

吉川と中尾は大きく溜め息をついた。殺人  
を犯したのである。しかも、巡査殺し。逮捕  
されれば死刑以外の判決は考えられない。

だが、譲の命令に従う以外なかったのだ。

江川貴美子のリンチよりは、死刑の方がま  
だましだった。吉川と中尾の目の前で貴美子  
の凄絶な拷問に遭ったあの男は、今は半身不  
随の生ける屍しかばねのようになって駅前のパチン  
コ店に払い下げられている。廃人である。男  
性の機能は貴美子に煙草の火を押しつけられ  
て焼き爛れさせられていた。パチンコ店の二  
階に寝泊りする女達の奴隷として追い使われ  
る身だった。女共の食べ残した魚の骨や野菜  
の渣を土間の隅で犬のようにがつついて  
その男をみて胸が悪くなったものだ。こんな  
目に遭う位なら、あっさり、絞首刑になった  
方が余程いい。

それに、捕まるとは限らぬのである。捕ま  
るところか、後は譲が逃がしてくれて、しか  
も、一人十万円宛貰えるのである。

## 三 次 防

商工省の航空機工業審議会の村山会長は、

最近執拗に持ち込まれる業者からの育成金融  
資問題で頭を悩ませて居た。

現在、日本で国産されている主な航空機は  
N航空機のYS-14、M重工業のMU-3B  
C、I航空整備のN-65N、F重工業のFA-  
400、新・M工業のPX-X等であるが、  
これ等業界が血眼になっているのは、四十二  
—四十六年度に見込まれた第三次防衛力整備  
計画—三次防である。防衛庁の要求する主要  
装備費七千億円のうち航空機関係分は四千  
五百億円を占める。この膨大な需要に対して  
YS-14を擁して三次防をめぐる受注戦に独  
走態勢に入ろうとするM重工業に対して、K  
航空機、F重工業とN飛行機が、技術開発、  
受注、生産について、業務提携に入ろうとす  
る気運が高まっていたが、ただ一つのウィー  
クポイントであるN飛行機への助成策強化つ  
まりN飛行機の経営基盤強化の為の金融的措  
置に対する航空機工業審議会の承認が得られ  
ない事であった。村山会長にはM重工業から  
既に数万円のリベートが届けられていた。こ  
こで、三社の業務提携を阻止する事によって、  
四千五百億円に上る発注額の殆んどを独占出  
来るのである。M重工業は村山会長を捉えて  
離さなかった。このままでは三次防の膨大な

予算額に対して、三社業務提携はお流れになり、各社乱立の入札競争となつてM重工業の蹂躪にまかせることになかなかねなかつた。そして、一番痛手を蒙むるのは金融基盤の弱いN飛行機であつた。

富村梨枝子は、ここに眼を着けた。

富村梨枝子は、三社に対して、談合機関による斡旋を申出た。予想通り、彼女の提案は一笑に付されて蹴られた。そんな機関によつて談合が成立する位なら、自分達の手で実行している。富村梨枝子は三社の中で、弱味のあるN飛行機を口説いた。

問題は村山会長である。談合さえ成立すれば、M重工業に対抗するのは容易であつたし話合いによる受注を三社で配分してもその利益は十分過ぎた。ただ、N飛行機の金融基盤が強化されぬ限り、残りの二社でM重工業に太刀打ちしても勝ち目はなかつた。

富村梨枝子は、N飛行機の重役と密談し問題解決を約束した。

## 濡れ衣

今日も深夜迄の会議が続いた。ハンドルを持つ村山会長の手は重かつた。村山会長は、運転手を使わなかつた。運転には昔から自信

があつたし、自分の行先を一々運転手に知られることを好まなかつた。

四日市街道をいつもの様に交番の角で曲つて入り込んだ所が自宅である。

交番の所で巡査が懐中電灯を振つて停止の合図をしている。急停車した村山会長に巡査はいきなり拳銃をつきつけて下車を命じた。警官の服装をした譲である。吉川と中尾が、巡査の頭をナタで叩き割つてから一分も経てない。車から下り立った村山会長を譲はいきなりつきとばした。不意をつかれた村山会長は足許の死体につまづいて血糊の中にうつ伏せになり、顔から胸が返り血を浴びて真赤になつた。懐中電灯をつきつけられていたのが目が眩んだのである。つんのめり乍ら、手に触れたナタの柄を思わず掴んだ。

その時、譲の拳銃が轟然火を吐き、村山会長は背中を射抜かれてそのまま地面に崩れ込んだ。死んだ巡査の拳銃である。譲はその拳銃を持主の手に返して姿を消した。

休憩室の巡査が寝呆け眼でとび出して来た時、手に拳銃を握つた相棒の巡査が後頭部を割られて血の海の中にうつ伏し、数米離れた所に背中を射抜かれた村山会長が死んで居て血に塗れた村山会長の指紋のついたナタが投

げ出されていた。傍にはエンジンのかかつたままの村山会長の車が駐められていた。

## 後 始 末

船橋駅西口のガードをくぐり抜けて、連込み宿の並んだ線路沿いの舗装されていない道路を人影のない薄暗い路地に折れ込んだ所、つまり、吉川と中尾が初めて譲に出遭つた夜、散々な目に遭わされた場所で、同じ三人が向き合っていた。

「金はやらないとは言つてない。しかし、条件がある。先ず、これを飲んで貰おう」

譲は後手に提げていた一升瓶を示した。

「焼酎が入っている。ここにグラスが二つある。飲み競べをして勝つた方に二十万円出すことにする。負けた方は悪いが消えて貰う」

いつの間にか譲の手に拳銃が握られていた。焼酎を五合宛、息もつかず飲まされた二人は今度は二人で勝負をして勝つた方に金を払う。負けた方は射殺するとおどかされて必死の取っ組み合いを始めるのだった。

翌朝、連れ込み宿の女中が二人の死体を発見して所轄署に届出た。

吉川は頭を石で叩き割られ、中尾は心臓麻痺で絶命していた。胃には大量のアルコール



が検出され、泥酔の上、二人が仲間喧嘩して中尾が吉川を殴り殺し、同時に中尾も、泥酔した上で暴れた為、心臓に響いたものと考えられた。警察では喧嘩の原因を三角関係のもつれとみた。聞き込みによって、吉川と照子の関係が明らかになり、同じ部屋に中尾も同居していたこと、中尾はトルコ風呂の照子を度々指名していたこと等から、当然の仲間割れと考えられた。

## 勝利

村山会長が何故そのような事をしたのか、理由は依然として明らかにされなかったが、兎に角、村山会長の精神状態が突然に錯乱して自宅附近の交番の警官の後頭部にナタの一撃を加え、重傷にひるまず警官は逃げようとする村山会長の後を追って拳銃で射殺した後絶命したことは明らかだった。

村山家の女中が、兇行に使用されたナタが村山家のもので、当日の朝からいつもの置場所である物置から紛失していたことを証言した。又、村山会長が、仕事のこと、この所ひどいノイローゼ気味であったことが多くの人により証言された。

航空機工業審議会は、N飛行機に対する融

資案を可決した。

一方、頼みの綱であった村山会長の変事で動揺しているM重工業に対しても、富村梨枝子の手がのびて行った。

今や、富村梨枝子は、片手にはN飛行機をはじめ、F重工業の三社連合と、今一方の手にはM重工業を手玉にして、自由に操れる立場に立ったのである。

三社連合とM重工業との間にも談合の話合が進められ、各社の利害の均衡点をおさえている富村梨枝子に対しては受注額の一パーセントが手数料として支払われる事になった。

談合が成立している限り、各社とも、過当競争の心配もなく、高利率の受注が保証される訳であったが、富村梨枝子の思惑次第ではこの談合は一瞬にして崩れるのである。一パーセントの手数料は安いものであった。

だが、総発注額四千五百億円の一パーセント、四十五億円が富村梨枝子の手に転がり込むのである。

ユニヴァーサル・フッド（ジャパン）カンパニーの経営権を握り、ドリーム・ベッドを膝下に屈せしめ、そして、今や、日本の航空機業界が富村梨枝子の顔色をうかがわざるを得なくなったのである。

## 肥料

富村梨枝子と江川貴美子がカクテル・グラスを合せた。大津組の社長室である。

富村梨枝子の巨大な企業連合と江川貴美子の強力な組織が手を握ったのである。

二人は次の攻略目標であるNビール征服の細かい打合せを終った所である。日本のビール界は、Nビール、Kビール・Sビールの三社によって独占されているといってよかった。「うふふ、今に日本全土を征服してやるわ。日本中の虫けらどもを、あたし達の肥料にしてやるんだわ」

富村梨枝子と江川貴美子は再びグラスを合せた。

「それはそうと、この男にちっとばかり貸しがあるんだわ。返えさせて戴くわね」

貴美子は、社長室の隅に土下坐して控えている譲を顎でしゃくった。

「いいわ。譲、裸におなり！」

梨枝子が命令した。

貴美子は腕をまくり、切れ上ったまなじり皆に冷たい炎の燃える眸で、薄い残忍な唇に舌なめずりしながら、ハイヒールを鳴らして譲の方に近付いて行った。



## 幼時よりの遍路

中 島 久 夫

考えて見れば何とも奇妙な男である。父母も、幼い頃の私の奇行はいざしらず、現在の私がこのようなアブノーマルな世界に浸っているとは知るよしもなからう。精神医学的というと、私のような変態者になるのには先天的要素よりも後天的要素の方が大きな比重を占めるそうであるが、私の場合はこれを否定している。即ち私は先天的な変態なのであるらしいのだ。私の記憶は六才の頃まで遡れるのである。私はここで長い間、私の胸に秘めてきた、あやしくもまたなつかしい想い出をお話ししようと思う。

確かに年齢の移り変りにつれて、やった事興味を覚えた事には、かなりの変化が見られ

る。しかし、その中で一貫している事、それは最終的には自縛に行きつくということである。その時、自分が可憐な（美しくなくともよい）少女を縛っている場面を想像して、興奮している。と、同時に自分の身体に喰い込んでくる縄や、その他の小道具の物理的な痛みにも酔っているのである。

私は幼時、ズボンの中に手をつこんでは母にとがめられたことがある。そこら辺りから記憶に残っている。

入学前の遊び友達に淑子ちゃんという女の子がいた。この子が私の最初の相手であった。二人はよくお医者さんごっこをやった。お医者さんごっこというのは互いに裸となって各

々の違いを検分するのである。今から思うと、背筋が寒くなる思いであるが二人はそのお医者さんごっこをお茶の木の中でやったものである。都会の方は判らないかもしれないが、田園のある郊外へ行くと今でも畑の回りにお茶の木が植えてある。防風林である。その木はお茶を取るのを全目的として存在するのではないから、その中の枝に乗って遥っても怒られないのである。それが度重なって、幼い二人が中に腰かけても大丈夫な中空に近いお茶の木ができる。それが二人の診察室であったのだ。それが何回位行なわれたであろうか。かなりの回数になるだろう。しかも幸いにも親に見つからずに過ぎたのである。二人のこ



の愉しみは淑子ちゃんが東京へ行ったことで終幕となった。でも楽しい日々であった。

淑子ちゃんが去り、小学校へ入った私はまもなく奇妙な遊びを考案した。細ひもでふんどしをするのである。これが現在まで続く不変の物となったことは前記の通りである。縛り方は中学以後に比べると段違いである。ただ、腹部を縛ってくびらせ、それに他のひもを通してそれをタテにとうして、中間の突起を押しつぶすようにするだけであった。ただこれだけでも、これをするのが私の最高の愉しみとなった。

この頃、便所でふんどしをして、意気揚々と自室へ戻る所を父母に呼びとめられた。パンツを脱げというのである。私は、口実を設けて雨の中に出て、例のお茶の木の中でふんどしとなっている細ひもとをとり、それから家に戻った。その後で父母には、パンツを脱ぐように言われたが、すでに父母の懸念したような物は取りのぞかれた後であった。その後両親の信頼が増したように思われる。

小学校中学年の頃覚えた事に、肛門愛好がある。愛好と言っても私のは今の知識で言えば浣腸である。ここで落としてはならない事は、私はその頃浣腸されたという事である。

といっても奇クの方々のように楽しみにしたのではなく、強制的にさせられたのである。

原因は木の実の食い過ぎによる便秘である。木の実といっても、サクランボなんて上品な物でなく、野性の草木の実である。二回浣腸をやられたのであるが、二度とも排便するのをこらえるなんて事はやらなかった。でも、それから後、肛門に何かをさし込むと言った事に異常な関心を持った。浣腸用の道具なんてないから、そこら辺の木の小枝を適当に折ってさし込むのである。しかも、その上、そのまま散歩に出るのである。こんな事をすれば自然直腸内から出血してくる。それがひどくなりそうになると、中止するのである。これは、家ばかりでなく、近かった小学校の便所でやったものである。その後これは、痔の恐ろしさを知ってから止めてしまった。しかしその名残りは後に中学生時代になってから表われてくるのである。

この頃の冬、よくやったのには、ペン軸責めがある。ここら辺からハッキリと自分を痛みつけるということがでてくる。無論自縛は続いていた。

このペン軸責めというのは、フトンの中で下半身裸かになり、そこへ先のふんどしをし

めて、おおむけに寝る。その上からかけぶとんを掛けるのである。その時、木製の細いペン軸をヘソを中心に腹部に立てて、それに掛けぶとんの全重量をのせるのである。冬の事でありふとんは重い。体と腰と腹部で固定されたようになる。この状態で千を数えるのである。二百も数えたとペン軸が肌に喰いこんできて、軽く息を吸って腹を動かしてもひどく痛む。それを最後はほとんど息を殺して千を数えるのである。三カ所もそれをやると腹が何となく重たくなってくるのである。それは一冬続けた。毎晩夜になると、その事を考えていた。

やはりこの頃であるが、女の子に生まれればよかったなあという気持が強く、前述の模倣浣腸や、ペン責めをしながら、絶えず私の頭の中に女の子に突然変化した自分を想像していた。こうした想像があったからこそ、かなりの痛みを平気で（という程でもないが）耐えられたのである。しかもこの事は次のノイローゼ期を通過した後の私の行動に深い影響を与えているのである。

五年生の七月、私は精通を見た。男として役に立つ能力を有したのである。この頃、私は鎖に凝っていた。いつも短い鎖を持ち歩い

ていたし、特に肌に巻きつけるのが大好きであつた。あの冷やかな感触、何とも言い表わせないものである。その晩も私は鎖を例の所に巻いて、イタズラしているうちに何かおかしな気分になつて来たのである。ともかく、この初めての体験は私にとって大きなショックであつた。自分の体が特別な物に思えてきて、幼時よりの奇行にその因を押しつけてしまった。だから、それから半年間、私の最も学業に励んだ頃である。と同時にこの半年、私は不眠ノイローゼとなつたのである。

このノイローゼ期も少年期の活発さによつてふきとばされてしまつて、また元の自分に戻つた。まだ何となく恐怖の念は残つていたが、奇行も再開された。一度壁をのりこえれば、後はもう以前以上の流れとなつてしまつた。何しろそれは一日の愉しみの最後に置くという、現在のパターンがほぼできあがりつつあつたし、この頃には、その後、私を引き付けたものは奇クをのぞいては全部そろつてきていた。

六年生頃からは、細ひものふんどしから、レッキとした自縛へと移行していた。この頃より私は小荷物荷作り用の麻ひもを愛用している。あれは細くて強いので、肌への喰い込

みがするどくて、最高である。ではこちら辺で、当時のプレイの最高潮である、六年生の学芸会の日記より書き写そう。

十月×日(日) 小雨

父と母は船田さんの家へ行く。どうしても欠かせない義理があるそうだ。姉、兄共にピクニックへ。雨が降つても小降りなら強行と打ち合せがあつたらしい。下の兄は少々渋りながら出て行く。この家に僕一人。何となく心が躍る。今日の劇を誰にも見てもらえなくて残念なんて気はない。はやくいつもの事をやりたいだけ。僕の出番は最後から三番目、二時集合だ。それなら、あと四時間はある。いつも狭い自分の部屋のフトンの中で物音をたてないようにやるのに、今日は思いきりやるうと思う。やりたい事がたくさんあつて困る。まず、梅酒を飲む。コップに一杯。何となく体が浮いたみたい。兄の部屋へ行ってカーテンを閉めて、裸になる。

まず麻ひもで腰骨の上のやわらかい所をぐりりと二重に巻いて、おもいきり締める。腹の血管の脈が判る。ここでコブを作つてゆるまないようにする。まだ先のひもの余りがたくさんある。それでまず前から後へ、股間縛り、それを後で胴ひもに通して、折りかえし

て、前に持つてくる。そこでぎゅっと引張ると胴ひもが下に引き下げられる。そこで先のコブにとめる。いつもより強くしまつて気持がよい。これから別のひもで太ももを縛る。縛つて置いてから、その間を割つてしめ上げる。続いて足首を同様に縛る。その足首のひもを太もものひもに結ぶ。これでまず下半身の拘束終り。この後、胸の所にひもをまわしてそれを固定して、首に回す。その胸ひもと胴ひもを結ぶ。その胸ひもから小さな輪を作つて、その一端を足に結ぶ。輪は背に二つある。二の腕を体の前に交叉し、そこで結び、二本にふりわけて胴ひもに結ぶ。そこに三角形ができ上がる。そこで手首を先の輪の中に入れる。そして頭を先の三角形の中につつまむと足と胸ひもとの距離がのびて手首がしまる。これで全身、何本かのひもでしめつけられて、動きを封じられた。しかし、その体でイスから、机にはい上ろうとして三度とも落っこちた。

それから風呂場までころがってゆき、風呂桶の中に入った。中には昨日の湯が冷えて残っている。その中に入つてみたら口が水面より上へでない。あわてた。このまま死ぬのではないかとさえ思った。そうこうするうちに



湯を腹一杯のみこみ、しかもまだひもがはずれない。横隔膜がケイレンを起こす。もがくうちに、やっと首が三角から抜けた。ほっと一息ついた。手首から先がしびれている。やっこの思いで風呂桶からあがって、しばらくひもとらずに休む。体が冷えてきたので、自分の部屋にころがって戻る。そこで手首をはずして次の準備をする。

洋服かけに、へこ帯をかけ、その下にイスを持ってくる。へこ帯を手首の入っている輪につなぐ。輪の部分が切れないように補強する。手首をさしこんでイスをける。宙に浮いた。手首が痛む。机の前の鏡に自分の姿が映る。三分もすると疲れてきた。降りようと思ったがイスを強くけりすぎた。手首から血がにじんでいるようだ。手の甲は紫色になっているのが鏡でよく判る。と、その時、足首と太ももをつないでいたひもが切れた。結ぶ時に弱そうに思ったが、水にぬれて、寿命が早まったようだ。お陰で足がついて助かった。今日のは散々だった。でも、とても楽しかった。そのままの姿でラストコースへ。今まで恐しかったのに、今日は何故か落ちついてやれた。

(注・原文はもっと省略してありますが

判りやすいように、書き改めました。  
が、内容は同じです)

こうして楽しい一日を過ごしたのである。この後、一人で留守番をよく引き受けた。何故だなんて野暮な質問しないでくださいよ。判り切っているじゃありませんか。

その後、私立中学(近在の名門校)を美事に落ちて、公立中学校へ。友達もできず、悶々としているうちに私のプレイは大いに発達した。この頃は私の精神の発達期であった。

先に、私には女性になりたいという願望のある事を書いたが、それにフェティシズムがからまって、女装をするようになったのである。奇クを読んでいるとパンティに言いしれぬ魅力を感じている方は多いようであるが、私のブラジャーへのあこがれであった。体格は中の部に属す私(一六九センチ、五十六キロ)は女性用の物を着用すると締め上げられたようで、身が引き締り、縛ったのと同じ効果があらわれる。

この女性へのあこがれが、女性化粧品へのあこがれともなった。特に乳液とヘヤートニック系の物が好きであった。

それに加うるに、以前の模擬浣腸が変形してでて来たのも、この頃。全く、考える事が

楽しい時代でした。では以上の三点をつかった部分をまた日記から引用しよう。

七月十六日 快晴

楽しい夏休みまであと四日。こう暑くちゃやり切れない。夏休みは七月二十一日からなんて野暮な規則を作ったのは、いったいどのどいつだろう。

父は会社、母は池袋の叔父の家へ。兄はアルバイト。姉は友達と映画。僕は午前中授業だからお昼頃家へ。もうこうなりや、やることは決まっている。昼飯をかつこむとすぐ家中の戸をしめる。それから裸になる。こうしていつものようにやろうと思ったが止めた。すぐ戸を開けはなした。無論その前にズボンとシャツは着ている。パンツははかない。姉の部屋に行って口紅とオーデコロンとヘアートニック、それに父のポマード少々。これらを愛用のノリのカンに入れる。それから姉のパンティ、ブラジャー、スリッパ、ブラウススカート、ナイロンストッキング。僕の部屋からセメダインを持って物置へ行く。意外と涼しい所なのである。内からつかえ棒をして、これで準備OK。物置の電球をひねる。中がボーッと明るくなる。

再び裸になる。天井のはりにぶら下がる。

古ぼけた鏡台にぼんやりと映る僕の姿が印象的であった。飛び下りると、まずパンティをはく。次いでブラジャーをつける。乳房の入るカップの中には、ゴムボールを入れる。タダでさえ息苦しいのに、ゴムボールがひしゃげている。胴を麻ひもで締め上げる。胴回りが普段の半位になったみたいだ。太ももを縛って割箸を入れて締める。手をただでさえ苦しい胴まわりのひもの中に入れる。上着のポケットに、手をつっこんだみたいになかった。自由なのは足首だけ。不自由な手でパンティをももの所までずり下げる。

この格好で屋根裏への階段をかけのぼる。次いでかけおきる。これを十回程するうちに息が切れて、めまいを感じる。自転車のペダルの下に寝ころんで、体で自転車のスタンドをはずす。自転車が体の上にのり上がり、足の方へ倒れる。ペダルが下腹部に当って頭につき上げるような痛みが走る。懸命になって自転車の下からはい出した。手はずして、今度は足首も縛り、手をもとのように拘束して、また階段をのぼりおきる。のぼる時は跳ねなくてはならないので、すぐ息がはずむ。下りは半分は落っこちると、いった方が正確だ。三度も往復すると立っていられなくなる。

ももと足首のひもをはずして、スリッパを着けた時、ガーターを忘れていたのを思い出す。やむなく、スリッパを脱ぎ、パンティ、ブラジャーの上からズボンとシャツを着る。そっと物置を抜け出して、姉のガーターを、パンティの中にしまふ。ここが一番安全なんだ。物置に戻ろうとした時、玄関に人声がした。どうしよう。あの洋服、元に戻せない。でも今頃戻る人はいないはず。このまま行っちゃおうか。泥棒だったらどうしよう。色んな考えが浮んでは消えた。

意を決して玄関へ。何んて事はない物売りだ。本日留守なりということで、お引き取り願った。まったく驚かせやがる。

小走りに物置に戻ると、すぐシャツとズボンを脱ぎ、ガーターをした。それからスリッパを。本当の使い方なんて知らないから、我流でやった。それからブラウスを着、ストッキング、スカートの順。ひどく暑苦しい。スカートがタイトだから体にへばりつく感じ。その格好で鏡の前へ。何とも珍妙である。ともかく大満足である。それから口紅を塗り、オーデコロンをつける。さてその格好でまた階段でのトレーニング。次いで二つの箱を隔

てて置いて、それを飛ばないでまたぐ。タイトスカートが気になってうまくできない。とどいたと思ったら後へ尻もちをついた。下の小石が当たって思わずのけぞった。

そこで、腰は例の麻ひものふんどしを締めそれを起点にして体を前かがみして、頭と足を結ぶ。海老責めである。まだ手は自由だ。手さぐりでセメダインを探りあてて、ふたをとる。ヘアートニックのは瞬間的であるが、これはじわじわとくる。腰を動かせば新しい部分がセメダインにあたってしみる。しかしそのままの格好で階段の下まで転がっていつて戻った。もう体中が焼けるようで、背中には汗が泥をへばりつけさせていた。

すべてが終ってからセメダインをはぐ。これがすごくヒリヒリする。

身仕度を整えて外へ出ると、涼風が吹いてくる。スカートとブラウスはタンズへ。下着は、洗濯籠へ。どうせ洗濯機へはうりこんで済ますのだから、判りやしない。今夜はぐっすりと眠れそうだ。

私の愉しみは、このようなものである。

中学三年生の頃はドアの鍵穴から、姉の着換えをのぞくのが趣味となった。でもどうしてもパンティを取り変えるのを見る事ができ



なかった。風呂場をのぞこうかと思ったが、実行しないで今に至っている。このチラリズム（のぞき見主義）は三カ月位であきた。やはり普通のヌードはつまらない。

高校に入学してからは、父の週刊誌をあさった。親類に行っても、変な本ばかりを読んでいた。思い出に残っている記事としては、

1、宙吊りにして、復讐するシーンのある小説。

2、アフリカの植民地で、一年に一日だけ黒人の天下となる日がある。その日一組の老夫婦と令嬢とが捕えられ、いじめられて最後にカヌーに乗せられて、海に捨てられるという話。（三人は生きたまま

海に捨てられたのである）

3、可憐な女の子がいじめられたり、縛られたり、ときには浣腸されたりする場面の出てくる小説。

4、犯罪実話などで強盗が美しい母娘だけの家へ侵入して乱暴をはたらくシーンを描いた物語。

等である。

こんな事から空想する事が多くなり、現在では時間的制約から、プレイするより空想を愉しんでおります。奇クを読んだのが、去年の暮、これ以後空想の愉しみが増し、空想が小説のストーリーとなって、かたまって来つつあります。今一編、短編のつもりで書いたのが、あら書きだけで三十枚位になりそう、このままあら筋から、肉をつけて小説に仕立てようか、短くカットしようかと迷っております。いずれ発表する予定です。

こんなおかしい過去を持つ男、私は二十才の浪人です。大学は文科を狙うつもりで、ゆくゆくは、人間の本质を性倒錯で描いて、文学者になりたいと考えております。

拙文を長々と失礼致しました。何かまだ、たくさん書くことが残っているような気がしますが、ひとまず筆を置きましょう。

## 四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

### 女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビア印刷写真集

### 豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

本誌のグラビア口絵は諸種の制約のために残念ながら思いきった編集が出来ず、折角撮影した華麗なる緊縛フォトが徒らに葬り去られて、マニアの皆さまの目に触れないという実情であります。嘗て「美しき縛しめ」のアルバムとして限定版写真集刊行の輝やかしい歴史を持つ本誌が、ここにフアンの方々の要望と御期待にこたえて、力作フォトを集成して、グラビア印刷によるアルバムを作成いたしました。

この「緊縛女体アルバム」は、若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさ最高度に發揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずか

ずを、画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。特に写真に迫力を増すためとグラビア印刷の効果をフルに運用するためにも写真面を一きわ大きくしました。

前記二嬢の豊満美と対照的に、更に清楚にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

この一冊にて四人の美女の裸身のすみずみまでが、八縛りというアクションによって、フアンの皆様方の目の前に極めて鮮明な印刷によって展開されています。どうか一冊を机上にお飾り下さい。

## 妖奇譚小説

## 燕巢秘譚

河津安春

「燕巢是南方支那之一大珍味也」

藩 秀 蓮

## 一、

交易船『香琴号』が澳門マカオの港を出帆したのは、西曆一六三九年十一月、明朝末期の崇禎十二年、莊烈帝の御代であった。

白み初めた東の空は、既に曉き近きを告げていたが、港を埋める帆船ジャンクの群れは、未だ濃い朝霞もやの中に眠り、時に高い幼児の泣き声が舷側を打つ単調な浪の音の中に聞えてくるのみであった。港を取り囲む白亜の商館街は、薄明の中に固く窓を閉ざし、人影も無いバナンの並木は、夜来の露を含んで、重々しげにその枝を垂れていた。海も陸も清涼の氣に包まれていたが、見上ぐる空には、早くも重

畳と堆積する入道雲が、真昼の酷暑を約束するかの如く、昇り来る朝日を反映して、その峯々を赤く染めていた。

澳門が葡萄牙領となつて既に百年に近く、其の間、遠く西夷の国よりはるばる旅して来る夥しい船舶の群れは、古来進取の氣象に富むと称せられる広東商人達の血を、いかに沸き立たせた事であろう。然も尚、彼等華商をして、傍若無人な葡萄牙船の活動を、只拱手して傍觀せしめたものは、是れら洋夷の船の装備する火器の、恐るべき威力以外の何物でも無かつた。名は交易船と称していても、一朝、洋上に好餌を発見せんか、立ち所に豹変

して海賊となるを常としていたからである。

だが見渡す限りの港内には、且つて数十隻の船団を以て、港を睥睨へいげいしていた彼等の姿は無く、僅かに数隻が霞の中に青い影を見せているに過ぎなかつた。ここ数年、葡萄牙船の澳門への入港は、次第に減少し始め、今は彼等との交易にのみ依存している澳門の業界を深刻な不況の中に追い込みつつあった。

風聞する所に依れば、馬來亞半島の馬六甲マラッカに、第二の交易拠点を設けんとした葡萄牙の企図は、由緒ある馬六甲王朝のサルタン、モームドの烈しい抵抗に逢い、血を血で洗う凄愴な戦いが、実に七十有余年の永きに互つ



て続けられて来たと言う。優秀な火器と、昔ながらの弓矢との戦いである。サルタン、モームドは不遇の中に世を去ったが、其の子アラウディン・シャー、ケダ洲のサルタン、パティス・カーディール、ヒンズーの勇将、ラクサマナ・ハン・ナディム、更には瓜哇のジャバラ女王等々、何時果てるとも知らぬ入り乱れての馬六甲攻防戦は、アラウディン・シャーが新興の和蘭と提携するに及んで、漸く勝敗の帰趨は明らかになりつつあった。

地球を半周して送られてくる葡萄牙本国よりの増強にも限度があったのである。永い戦いに疲れ果てた馬六甲の葡萄牙政府は、命運既に旦夕に迫っていた。然かも馬六甲を捨てて、檳城に退かんとした彼等は、檳城丘の頂上に高々と翻っているユニオンジャックの旗を発見しなければならなかった。後門の狼、英吉利は着々とその地歩を固めつつあったのである。

ポルトガル 葡萄牙の勢威遂に地に落つ、今こそ千載の好機致ると立ち上ったのは、澳門の若い実業家、廖湯武であった。若しこのまま、荏苒として日を過ぎさんか、馬六甲が和蘭、英吉利その何れの手へ帰そうとも、我等華商の進出は再び望み得ずと彼は判断した。無謀なりと

諫める、友人知己の忠告を振り切って、葡萄牙船を手に入れた彼は、これを中国風に改装し、愛妻の名をそのままに『香琴号』と名付けたのである。

今、巨大な朱泥の鳳凰を以て飾られた『香琴号』の船首に立って眉清目秀の青年船長、廖湯武は満足気に頬を撫して微笑んだ。三年前に父を亡い、二十五才で家業を継いだ彼は昨年、恋妻を得て、今や青雲の氣に燃えていた。前途に予想せられる幾多の困難と冒険に彼は敢然として己れの運命を堵ける覚悟であった。尤もこれは決して暴虎馮河の勇では無かった。困難を押して葡萄牙船を購入したのも、これより浪荒き南支那海を渡り、馬來亞半島を迂回して檳城に赴き、積載した綿布、絹織物を売り捌くと共に、帰途、馬六甲で胡椒、青唐辛子を買付けんとする長途の航海の、安全を期する為である。況してや、南支那海には菲律賓の獐猛なる海賊達の跳梁、頻りなりとも伝えられている。だが漕手二十名を一組とする『香琴号』の船脚は、恐らく海賊共の小舟を寄せつけないであろう。

湯武は傍らの遠眼鏡を採ると埠頭の方に向けた。澳門でも艷女の聞え高い香琴夫人は、折りから差し昇る朝日の中に、婢女達の捧げ

る白絹の日傘の蔭から、長袖を風に靡びかせながら、薄紅色の手帕をヒラヒラと打ち振っていた。強烈な南国の太陽を、蛇蠍のように忌み嫌う香琴夫人の肌は、白磁の如く白と滑らかであった。その華奢な手足は、湯武の掌の中に包みこまれる程に小さく、力を籠むれば、傷つけるかと憚られる程に柔らかであった。

湯武はこの夫人を熱愛して居た。伉儷の契りを結んで、未だ二年に満たず、若し此の度の航海に何等かの心残りが有りとなれば、夫人との永い別離以外に無かったであろう。

前夜も湯武は密かに香琴夫人の浴室に忍んで戯れた。

温泉水滑洗凝脂

香琴嬌慵地浴畢

湯武の声に驚いた香琴夫人は、曖乎と叫ぶと豊かな肢体を素早く浴中に沈め、纖手に水をはねて、良人を浴室から追い出した。

甘い追憶から覚めた若い船長は、胸を張ると高らかに出帆の命を下した。だが彼は、積荷の蔭から、喰い入るように香琴夫人を見結めている今一人の男が居る事には全く気付かなかった。

馬友仁は積荷の蔭から立ち上ると、ホッと深い溜め息をついた。

馬は三才の時、湯武の父、広世に買われて廖家の人となった。買われた子供は終世、その身を粉にして働き、養育の恩に酬ゆるのが当時の慣わしである。だが心優しい広世は、三つ年長の我が子湯武と共に、分け隔てなく育て上げた。一人息子の湯武に、終世変らぬ協力者を与える積りであったのだろう。馬は今でも、湯武を大哥と呼んでいる。

その大恩受けた主人、大哥の令夫人に想いを寄せるなどは以ての外、許されぬ大罪である。その事は重々承知しながらも、湧き上がる思慕の念は、追え共去らぬ煩惱となって馬を苦しめていた。然し馬の心に巢喰う香琴夫人の姿は、良人湯武の見るような優艶な女人では無かった。天女の如き面ざしではあるが、その性は冷酷にして残忍、奸智に長けた恐ろしい女人である。

二年前の或る朝、馬は廖家の後門に倒れている若い女を見つけた。色白く、肌こまやかに、小さく媚やかな手足は、この地方の生れで無い事を示していた。馬は女を傭人の部屋に運び、手厚く介抱をしてやった。漸く生氣を取り戻した女は、河北の生れで、名は茫香

琴、親兄弟に死に別れ、今は天涯孤独の身の上である事、風の便りに一人の叔父が、澳門に住むと聞いて、百里の途を遙る遙る尋ねて来たが、頼りの叔父は行方知れず、途方に暮れていた所と、涙ながらの物語りである。

すっかり同情した馬は、主人湯武に口添えして、女を廖家の婢女の一人とした。

「馬大哥は妾の命の恩人。御恩は死んでも忘れません」

優しい笑顔を見せて感謝する香琴に、馬は心の躍るような喜びを覚えるのだった。だが其れも半年余り。彼女の色香に迷った湯武が夫人にすると約して以来、彼女の態度は急激に冷めたく成って行った。馬はもう彼女の笑顔を見る事は無くなった。馬に用を命ずる時以外、彼女と言葉を交す事も無くなった。今は高嶺の花となった彼女を、馬は少しも恨まなかった。もとより妻を娶れる身分でない馬にとって、仮令、短い間にもせよ、優しい言葉を掛けてくれた香琴の姿は、彼の心の奥深く、忘れ得ぬ女人として大切に抱き続けられていたのである。

其の頃、朝の早い馬は、未明の中に床を離れて庭園を掃除する習わしであったが、ある時、白い人影がずっと後門から消えるのを見

た。不審に思って密かに後を追った彼は、そこに香琴が一人の男と親しげに話を交しているのを見た。男は三十才余り、骨格拔群、鬼髭長き偉大夫である。香琴の手渡す銀三枚を懷中にとすると、男は白い歯を見せて笑いがら立ち去った。馬は素知らぬ風を装っていたが、其の後、幾度香琴が、男に銀を手渡すのを見たであろうか。五度六度、度び重なるにつれ、香琴は露骨に不機嫌な顔を見せるようになった。時には、地上に銀を投げ棄て、走り帰る事すらあった。

ある朝、いつものように香琴が後門から消えるのを見ながら、馬は雨上りの雑草取りに余念が無かった。その馬の目の前に、いつ戻って来たのか香琴が、珍らしく立ち止まった。小さな白い鞋が、馬の目に滲みるようであった。

「馬。雨上りの道で、御覧。足がこんなに泥んこになって仕舞ったわ」

驚いて振り仰ぐ馬を見下して、香琴は悪戯っぽく微笑んだ。嬉しさに真っ赤になった馬は、いそいそと盥に水を汲んで来た。幹太い桃樹に寄りかかりながら、香琴は足許に跪く馬を見下した。彼女の秘密を知っているらしい此の男を、どうすれば宜いだろうか。香琴



は馬の様子をじっと窺った。そんな事とは知らぬ馬は、震える手に彼女の可愛い足を取ると、きっちり喰いこんだ小さな鞋を、宝物のように丁寧に脱がせた。薄く脂の浮いた白い足、振り返った細い足指には、貝殻を並べたような艶やかな爪、馬の呼吸は荒くなり、水を注ぐのも打ち忘れ、頬ずりせんばかりの様子であった。香琴は誇らかに笑った。

「馬。どうしたの？洗ってくれないの？」

馬は慌てて、冷い水を注ぐと、そっと洗い始めた。

「あっ！血が……」

裙子の裾に赤黒い血痕を見つけた馬は、思わず声を立てた。だが香琴は驚かなかった。

彼女の腹は決まっていた。

「フフフ、馬、お前はいつも妾の後をつけ廻していたから、今更隠して見ても、仕方が無いわね。お前も見ただろう、あの髭男を。それは、彼奴の血なんだよ。お前も知っているように、余りしつこく銀を強請りに来るので、たった今、引導を渡してやった所さ。なあに、自業自得、当然の報いと言うもの、お前は知るまいが、彼奴は陝西省で、数々の悪事を働いて来た大盗の首領、九節鞭の紅臉虎と綽名された高大虫と言う悪党さ。驚いたろ

う。もう一つ驚かせる事があるわ。その悪党高大虫は、実を言えば妾の良人。フフフ。ここまで言えば、お前にも、判るだろう。范香琴なんて真つ赤な偽り。まことの名は葉青娥、又の名は、大嫂虎三娘と呼ばれる大姐御さ。こうして何もかも打ち明けるのは、馬、お前は妾が好きで堪らない、首つ丈、惚れこんでいるのを知ってるからだよ。そうだろう馬？だから、此の事は誰にも言わずに、黙っているのだよ」

香琴は濡れた足を馬の頸にかけると、ぐっと仰向かせた。馬はまるで女郎蜘蛛の巣にかかった蛾のように、ワナワナと身を震わせていた。

「いいね、判ったね。もしお前が、一言でも喋べると……」

香琴の細く、よく撓う足指が、キリキリと馬の咽喉首に喰い込んだ。呼吸も出来ぬ苦しさに、虫のよう呻いた馬の身体を、電光のようには戦慄が貫いて、その目は五彩の虹を見、その魂は天外に飛び去った。

香琴が廖夫人と成って後、馬は夫人を見る事、益々稀れとなったが、桃樹の下で味った甘い戦慄の記憶は、彼の脳裡から消える事は無かったのである。

### 三、

農曆正月に一句を余す頃『香琴号』は無事に檳城に入港した。古い取引先、南祐公司の錢総理は、旧友の息子を喜んで迎えた。正月を間近かに控えた時期柄も幸いして、積荷の売り捌きは順調に終った。幸い先き良しと湯武は有頂天だったが、馬六甲での買付計画については錢老人は不安気に白い眉を顰めた。

「さて、馬六甲での商売はどうであろう。

葡萄牙政府は今、退却の準備で、大童わと言う事だから、まともな商売は難しいのでは無いか」

不安に駆られた湯武は、船旅の疲れも未だ癒えぬ水夫達を急に立て、急拠、檳城を後にした。

馬六甲の風雲は予想以上に急であった。二十余隻の葡萄牙戦艦が、蟻の這いでる隙きもない、嚴重な防備を固めていた。巨大な城壁は、度び重なる戦斗に所々崩れ落ち、丘の上に立つ壮麗な聖ザビエルの教会堂も、無残な傷痕を残しているのが見られた。『香琴号』は積荷も無く、澳門に籍を有する事で、漸く入港を許されたが、買付商品には税三割を課すと、掛役人より申し渡されて、湯武達は仰天した。三分乃至五分が通例である。檳城の

英吉利軍も五分の税を課したのみであった。

とにも角にも上陸した湯武と馬は、古い取引先を馳せ廻ったが、何所でも失望と落胆を重ねるのみであった。銭老人の喧きは杞憂では無かったのだ。

「随分、戦争が続きましたからねえ。集荷の仲買人は不安を感じて、仕事をしないのですよ。稀れには栽培者達が小舟に胡椒を積んで持ちこむ事もありますが、陸揚げする前に、葡萄牙商人が買い占めてしまいます。是れ迄胡椒と言え、欧羅巴でも王侯貴族だけが賞味する、高貴な調味料だったのですがねえ。どんどん船で運ぶものだから、今じゃ庶民の食膳にも無くてはならない物になってしまいました。ですから需要は増える一方で、婆羅瓜哇の全生産を持って行っても、未だ足りない位でしょう」

どこへ行っても答えは一つであった。

終日、一角牛の索く興車に揺られて、すっかり意気銷沈した湯武と馬は、海辺の酒亭『三楽』で、不味い酒を口にしていた。馬六甲海峡を彩る美しい落日も、彼等の憂鬱を救う事は出来なかった。どうしても、この尽では帰れない。金銭の損失よりも、言葉を尽くして諫めてくれた友人達に、どうして顔が合わ

されよう。

意を決したように馬が口を切った。

「大哥、婆羅へ行こうか。こうなつては、生産地へ直接買い付けに行くより仕方が無い。サンダカン迄、たかだか三日の船旅だ。葡萄牙も和蘭も、婆羅には未だ手を着けていないようだし……」

馬の言う通り、どこの国も未だ手を着けていない事は確かであった。密林に覆われた湿潤な大気、充滿する恐ろしい悪疫、海のダイヤクと呼ばれる精悍な原住民の海賊達、さては密林に潜む首狩賊、悪条件が揃って居た。否、むしろ瘴癘の僻地として、白人達も近附かなかったのだ。

流石の湯武も首を傾しげた。

「大哥、思い切つて行つて見よう。水夫達には私がよく言つて聞かせます。是が非でも胡椒を手に入れなければ澳門に帰つても、物笑いになる」

湯武も思ひは同じである。他に名案も無い事だし、賛成せざるを得なかった。

「好了、行つて見よう」

翌日の朝まだき『香琴号』は馬六甲を船出した。船首を更に南に向けて、灼熱の太陽が君臨する密林の島、悪疫と暗黒に包まれた未

知の国、婆羅へ旅立った。船首の鳳凰の鮮やかな朱泥も、永い船路に色褪せて、船内には憂愁の気が満ちていた。

#### 四、

それから三日目の夕刻『香琴号』はサンダカンの沖合いに差し掛つていた。亭々と聳ゆる椰子の大樹林の彼方へ、今、没し去らんとする太陽は、眼に信じられぬ程赤く、巨大であった。海沿いに立ち並ぶ大家屋の群は、北部婆羅第一と言われるダイヤク部落である。夕餉の支度に忙しいか、所々に白い煙の立ち昇っているのが見えた。四辺は静寂の氣に満ちて、耳を澄ませば、微かな人声が聞こえて来るようであった。

湯武と馬は黙然として甲板に立っていた。夜を控えての上陸は、危険この上も無い事は勿論である。更に今宵は、彼等の襲撃に備えて、夜を徹しての警戒が必要であらう。二人共、今宵の無事と、明日の取引の成功を、神仏にも祈りたい気持ちであった。

落陽は既に密林に沈み、真紅に染まる夕空を反映して海面は一瞬、血の如く色付いた。その時、突如として騒然たる物音が空の一角より近付くと共に、茜色の空は忽ち暗雲に覆われた。驚愕して見上げる空に、彼等は世に



も凄まじい燕の大群を見た。何千羽、否々、何十方羽居るのであるうか。残照の空一面を覆い尽くし、啼々と声高く叫び交しながら、疾風の如く飛翻している。生暖かい羽風が汗ばんだ二人の顔を烈しく打ち、海面はさながら沛然たる驟雨に逢えるかの如く、音立て、無数の波紋を描いた。通り魔の如く密林の中に姿を消して行く燕群を、二人は茫然として見送った。

「馬！」

ヒンズーの神々。左端、上より二番目がカリ女神。



「大哥！」

夢から醒めたように顔を見合せた主従は、莞爾として固く手を握り合った。口に出さずとも、彼等の気持ちは完全に通じて居た。

「燕の在る所、必ず燕巢有り」

胡椒の買付よりも、燕巢の採集の方が遙かに有利なる事は言を俟たない。何事ならんと飛び出して来た水夫達も、一様に歓声を挙げた。その夜の『香琴号』は明るい笑いに溢れたが、樞城を出帆して以来、始めて見る彼等の笑顔だった。

翌朝、数々の土産物を用意した彼等は上陸してダイヤクの長を訪れた。胡椒の集散地であるサンダカンの首長は、交易の業にも慣れて温厚であった。湯武達はここで耳寄りの情報を得て

勇氣更に百倍する思いであった。即ち、ここより南方十里の地点に、パタンガンと呼ぶ大河があり、その上流約六里を遡ればゴマントンと称する大丘陵地帯がある。全丘陵は石灰岩より成り、大小無数の洞穴が自然に穿たれていて燕群の良き棲家となつて居ると言う。

(註)ゴマントン丘陵に在る何百と数えられる大洞穴群は、その内部の複雑にして多岐なる事、さながら迷路の如くであつて、現在に於いても、その調査の完了したるものは、全体の僅か三〇%にも満たずと言う。

(K、G・トレゴニング著「ノース・ボルネオ」一九六〇年版)

だが湯武達が道案内の同行を依頼すると、彼等は身震いをして拒絶した。洞穴には恐ろしい悪鬼が棲んでいると言うのである。一笑に附した湯武は過分の謝礼を与えて、漸く一人の青年を承諾せしめる事に成功したのであった。

かくして勇み立った『香琴号』の、燕巢の宝庫を求めるパタンガン河の遡行が開始されたが、この航行は実に困難を極めた。

干潮時には水深が浅く、為に船の運航は不可能であつた。更には生い茂るマングローブの木々は、岸辺から河の中央部に迄及んでい

た。水夫達は、干潮時に鰐の攻撃と戦いながら木々を除去し、満潮を待って船を進めるといふ繁雑な作業を、辛抱強く繰り返さなければならなかった。如何にこの廻行が困難であったかは、六里の河を廻るに、実に十日余を要した事からも推察されよう。

それだけに、直射する赤道直下の太陽に、目も眩ゆく映えるゴマントン大丘陵を始めて発見した時の、彼等の喜びは例えようも無かった。壮大なこの丘陵は一里以上も連なっているであろうか。その岸壁に穿たれた無数の洞穴から、雲の如く多数の燕の群れが、忙がしく飛び来り、又飛び去り、矢の如く飛翻するその影を、白い丘陵に写す有様は、此の世のものとも思えなかった。水夫達が疲れも忘れて、手を取り合い、踊り狂ったのも無理は無かった。

湯武の命で祝杯をあげんとした時、道案内のダイヤク青年の姿が見えない事に彼等は気付いた。恐らく洞穴に棲むという悪鬼を怖れて逃げ去ったのであろう。だが、まこと悪鬼が棲んでいるのであろうか。馬は喜び騒ぐ水夫達を眺めながら、ふと不吉な予感が胸を過ぎるのを感じた。

## 五、

久方振りに老酒の栓を開いて、水夫達は上機嫌であった。だが、燕巢の大宝庫を遂に発見した廖湯武の心は、喜びに躍り、只眼前に眺めているだけでは、どうしても我慢が出来なかった。

「馬。一寸上陸して、そのあたりを見て来るよ。あなに、心配は要らない。直ぐに戻って来るから」

驚いた馬は、もう日暮れにも間も無い事ではあるし、今宵は船内でゆっくりと疲れを休め、明朝早々に全員手分けをして調査を始めると、言葉を尽して引き止めたが、血気に逸る湯武は聞かなかった。止むを得ず小舟を下ろし、屈強な水夫三名が同行する事となったが、彼等の姿がマングローブの繁みに消え去るのを、馬は不安気に見送った。

一刻、二刻、夕闇は次第に濃くなって来たが、どうした事か、湯武達を乗せた小舟は中々帰って来なかった。安否を気遣って船首に立ち尽して居た馬は、ふと丘陵の大洞穴の一つに、微かな灯りが瞬くのを見た。何者かが居る。洞穴には何者かが棲んでいる。ダイヤク人は悪鬼と呼んだが、仮令、悪鬼に非らずとしても、悪鬼に等しい兇悪な何者かが棲んでいるのだ。馬の不安は極限に達した。もう

捨てて置く事は出来ない。残されたもう一つの小舟を下ろすと、馬は只一人の水夫を連れて乗り込んだ。水夫達には、いつ何時なり共出帆出来るよう準備を命じると、薄闇の中を小舟は静かに進んで行った。

岸近く迄来た時、馬は多勢の人声が近附いて来るのを耳にした。急いで小舟を茂みに隠すと、馬は瞳を凝らして窺った。これは一体何者であろう。手に手に松明を揚げた三十人余りの群れである。しかも其の先頭に立っているのは、白衣を纏った年若い美女である。見上げるばかり丈け高く見えたのは、六尺有余もありそうな巨漢の肩に跨って居るのであった。巨漢は牛の角の冠を着け、美女は片手にその角を持ち、片手には一条の綱を索いていた。その綱に縛られ、索かれて行くのは、『香琴号』から姿を消した、あのダイヤク青年ではないか。

思わず驚愕の声をあげる水夫を、馬は慌て押し止めた。青年の全身は血潮に塗れ、足許も覚つかなく、幾度か倒れんとするを、美女は邪険に綱を引いて歩ませて行く。附き随う男達は、何れも腰部を白い小布片で覆い、手に斧の如き武器を持ち、口々に声高く何事かを誦しながら歩んで行く。彼等の表情は、一



様に、憑かれた者のような狂気と興奮を示していた。

馬は呆然として、奇怪な一団が吊梯子を登り洞穴内に消えるのを見送った。湯武達が彼等の手中に落ちたのであろう事は、今は疑うべくも無かった。只、異様なこの一団が何者にもあれ、人間であって、悪鬼では無い事が馬を勇気づけた。

小舟に水夫を残すと、彼は密かに、その後を追った。一步一步、足を踏みしめながら吊梯子を登り、洞口に立った馬は、眼鼻にしみこむ強烈な龍腦の香りに、息を止めて顔を反に向けた。この香りは、印度人が好んで身体に塗る聖油である事を、馬は思い出した。そうだ、彼等は印度人だ。馬は、そっと足を踏み入れた。人の気配は感じられないが、洞穴の壁に反響して、時に高く、時に低く流れてくる人声は、相当、多人数が集まっているようであった。右に曲り、左に折れ、漸く明るい灯りの見える通路に達した馬は、そっと顔を覗かせた。

そこは天然の広間になっていた。洞穴内とは信じられぬ大広間である。百人を越すであろう半裸の印度人の群れが集まっている。獣脂の燃える臭いと龍腦の香りが、彼等の体臭

と入り混って、むっとするような空気が充満していた。

正面の岸壁には巨大な像が彫刻されていたが、何と言う奇怪な姿であらう。

無気味な髑髏の首飾りをつけ、右手には笏を持ち、左手には血潮の滴る生首を引っ下げて、白牛の背に座している青面の女神像である。半ば開かれた口から長く舌を垂れ、口辺からも血潮が流れている。

その女神像の前には、先刻見た、白衣の女が、女神と同じように白牛の背に腰を下していたが、よく見れば其れは白牛では無く、跼った人間の背の上であった。

「カリの女神だ。カリ教徒だ！」

恐怖の余り、馬はその場に立ち竦んだ。

## 六、

カリ教徒の残虐さについては、馬は曾つて印度人水夫から聞かされた事がある。月に一度、満月の夜、教徒達は、女祭司の指揮の下に、女神に捧げる犧いけにえを求めて近郊の村落を襲う。血潮を流すは、カリ女神の最も喜び給う所と信ずる彼等は、家畜たると人たるを問わず、目に見ゆる者は殺し、手に触るる者は斬り、狂気の如く荒れ狂うと言う。ダイヤク族が悪鬼と呼んだのも無理では無かった。

その時、人牛の背に座す白衣の女が、笏を挙げて叫ぶと、半裸の印度人達は一斉に跪いた。さき程、女を肩車に乗せていた巨漢が、大斧を手にして現われ、女の前に恭々しく膝をついてその命を待つようである。女が再び笏を挙げて叫ぶと、縛りあげられた一人の男が引き出されて来た。恐怖の為、魂は天外に飛んだのであろう、声も立てず、よろよろとその場に引き据えられた。馬の口が大きく開いた。何彬だ。湯武と一緒に上陸した何彬では無いか。

白衣の女の声に続き、教徒達は祈りの言葉を誦し始めた。その声は次第に熱を帯びて、狂気に誘われるかの如く高まって行った。

白衣の女が一声高く叫び、笏を挙げた。

一礼して立ち上った巨漢の大斧が一閃するや、何彬の首はあつと言う間もなく床に転がり、血潮を高く噴き上げた。熱狂した教徒達は、両手を頭上高く合掌して、歓喜の声をはり上げた。

(註) 印度のヒンズー教は、何百と数えられる奇怪な神々で有名だが、中でもカリ女神は其の性残忍にして、血を何よりも好む破壊の神、或いは犯罪者の守護神として、今に至る迄庶民の間に尊崇される一方、舞踊の神とし

て芸術家達の信仰をも集めている特異な神である。

元来シバの神の妻であるが、或る時、血に酔い痴れた女神は、喜悦の余り踊り始めた。為に大地は揺らぎ、山々は火を噴き上げ、海水は津浪と成って陸地を襲い、この世は滅亡するかと思われた。驚いた良人シバ神は、女神の足許に身を投げ出して大地を守った。

女神は酔いの醒め果てる迄、良人の背の上で踊り狂ったと伝えられている。

儀えの儀式については、教書「カラトリア・マストラ」に次の如く述べられている。

一匹の獣を殺して、その血と肉を捧ぐればカリ女神は一年の間、それを嘉し給う。

一人の人間を殺して、その血と肉を捧ぐれば、カリ女神は十年の間、それを嘉し給う。

三人の人間を殺して、その血と肉を捧ぐれば、カリ女神は百年の間、それを嘉し給う。

カリ女神に儀えを捧ぐる時は、女神を讃えて、次の如く祈るべし。

デビ ラジエスワリ

カリ カリ ラワ ダンダヤイ ナマ

ラング リング カリ カリ

ビンド ビンド カリ カリ

スフエング スフエング カリ カリ

カリ カリ ラワ ダンダヤイ ナマ

(大意、カリ女神よ、恐ろしき雷ちの女神よ。この斧をもて、儀えを打ち殺し給え。その血を啜り、その肉を喰らい給え。カリ女神は讃うべき哉)

儀えの儀式の執行者は、ラング・リング・カリ・カリと唱え終えたる時、その斧を打ち下すべし。

続いて仲間の呉、趙が索き出され、血潮が更に床を染めるのを、馬は為す術も無く見詰めていた。教徒達の興奮は今や絶頂に達し、狂気の如く打ち振る合掌の手に、獣脂の灯火はユラユラと揺れ、祭壇のカリ女神の像は、揺れ動く灯影に、さながら笑みを含むかの如くであった。

大哥はどうしたのであるかと、思わず首を差し延べた馬の顔に、女祭司の視線がハタと止められたかと思うと、笏を向けて彼女は大声に叫んだ。血走った顔を振り向けた教徒達は、ワツとばかりに立ち上った。

其の後は馬はもう夢中であつた。滑り落ちるように吊梯子を下り、必死に走って小舟に飛び移り『香琴号』の舷側に手が掛かるや否や、馬は出帆の命を下した。

かくして、失意の『香琴号』は婆羅を離れ

た。無残にも若い船長と三人の仲間を、密林の奥深きゴマントン丘陵の洞穴に残して。

## 七、

馬と四十四人の水夫達が語る悲報を聞いて香琴夫人は、床に身を投じて慟哭した。緑なす黒髪を離れた金釵が、リリと涼やかな音を響かせるのを、馬は身を切られる思いで聞いた。敬愛する大哥を、不甲斐なくもカリ教徒の手に渡して救いもやらず、今又、天女の如く崇拜する香琴夫人の、身も世もあらぬ嘆きを見て、馬は只々、冷い床に額を打ち続けて詫びるのみであつた。

数日後、馬と水夫達は、再び夫人の前に呼ばれた。昼も夜も恐らく涙の中に過したであろう香琴夫人の眉は、濃い憂愁の影に打ち曇っていたが、丹花の唇は、何事か深い決意を示すかの如く、固く一文字に結ばれていた。

香琴夫人の意外な決意を聞いて、馬も水夫達も仰天した。良人湯武の安否を確かめる為船の修復の成り次第、夫人自ら『香琴号』に乗り組んで婆羅に赴きたいと言うのである。

水夫達は口を揃えて、婆羅は僻遠の蛮地であつて、嫺々たる夫人のよく行く所に非ずと必死に止めたが、遂に夫人は聞かなかった。

其の日から、香琴夫人は綾羅も金釵も投げ



棄てた。船の修復の成る迄の六カ月を、航海の術を学び、水夫達と共に働く覚悟である。粗末な衫袍を、袖裾短かに着けた夫人の姿は紅顔の美少年を思わせる妖しい魅力を発散するようであった。強い太陽の日射しは、忽ちの中に白磁の肌を、小麦色に染め、澳門一の艷女と謳われた面影は、見る由も無くなつて行つた。

だが夫人を見守る水夫達の目から、危惧と不安の思いは去らないようであった。其れも無理からぬ事であつた。残忍なカリ教徒を相手とするには、香琴夫人は余りにも優艶であり、平然と犧えの首を刎ねる女祭司を相手とするには、余りにも弱々しかった。

水夫達の氣遣いは、香琴夫人にもよく判つて居た。然し、彼等を引きつれて、はるばる婆羅に旅し、危険なカリ教徒と交渉する為には、何うしても、水夫達の信頼を得、彼等を中心せしめなければならぬ。廖家の人と成つてより、悪夢の如き過去は一切忘れ去る積りでいた香琴夫人ではあるが、此の度の航海の為には、再び大嫂虎三娘の昔に還る事も、又止むを得ないのではないか。夫人はとつおいつ考えるのであつた。

遂に意を決した夫人は、水夫達を呼び集め

た。

「お前達が今度の航海の事で、妾の身を案じてくれるのは、本当に嬉しく思っています。でも妾は、良人の生死を確かめる為には、妾の命を捨てても悔いは無いと、覚悟を決めました。どんな困難があろう共、妾は婆羅へ行き、カリの女祭司と話し合う決心です。だからお前達にも頼みたいの。これから先き、妾の身を氣遣うのは止めておくれ。そして、この危険な航海には、良人の身代りとして、妾の命令に絶対に服従して欲しいの。妾を女だと思わず、湯武だと思って欲しいの。只、口で言うよりも、妾は、ここで妾が男である事をお前達に見て貰う積りです。お前達の中で一番よく劔を使うのは誰なの？」

水夫達に押されて水夫頭の頼思儀が前に進み出た。三十半ばの筋骨逞しい壮漢である。

「馬。竹杖を二本持ってきて来ておくれ」

何事か始まるかと、怪訝そうに見ている水夫達の前に、香琴夫人と頼は竹杖を持って相対した。

「頼、遠慮は要らないよ。妾を香琴だと思わずに、カリ教徒の一人と思って、本気で戦うのだよ。若し妾が負けたら、お前達の言う通りに、今度の航海は思い止まるよ」

きっと竹杖を構えた夫人の姿には、一步の隙きも無く、百人の手下を雌伏せしめは往年の虎三娘の、烈しい氣迫がこもって居た。始めは迷惑氣に竹杖を取った頼であつたが、其の眼に驚きの色が浮かんた。並み並みの構えでは無い事を知つたのだ。頼の全身にも斗志が漲つて来るのが判つた。一合、二合、夫人の動きは胡蝶のように軽ろやかで、太刀捌きは電光のように鋭かつた。

「嗖」

紅唇から裂帛の氣合いが洩れるや、見よ、頼の竹杖は跳ね飛んだ。

「好！好！」

水夫達はどよめいた。腕自慢の大男、頼が艶治な香琴夫人に、子供でも扱うように打ち負けたのだ。

「次に拳法をよくするのは？」

夫人の声は静かで、いささかの呼吸の乱れも無かつた。水夫達の目は馬友仁に向けられた。

「おや、そうなの。じゃお出で、馬」

馬は立ち上つたものの、当惑したように動かなかつた。

「馬、どうしたの？早く守らないと、妾の方から攻めて行くよ」

水夫達は馬に声援を送り始めた。止む無く身構えたが、夫人の切れ長な目で睨み据えられると、もう其れ文で馬は身体中が萎えてゆくようだった。

「馬！馬！どうした？頑張れ」

水夫達の声援は高くなって行く。臆ろげながら夫人の意図が推察された馬は、一瞬目を閉じると、心を静め、やっと気合いを發して跳躍した。夫人の肩を覗いたのである。だが飛燕のように飛び違った夫人は馬の背後に立ち、その拳は発止と馬の首を打った。眼眩んで倒れながら、馬は心中、嬉しかった。予期以上に勝れた夫人の拳法であった。とても馬には齒の立つ相手では無い。そう思うと馬は元気よく立ち上った。思いつ切り斗ってやろう。全力を尽して斗うのだ。俺が氣を失って倒れる迄。

馬は猛然と夫人に攻撃を開始した。だが何という夫人の早業。彼の拳が未だ一度も夫人の身体に触れない内に、幾度彼は大地に倒された事だろう。華奢な夫人の手脚は、恐ろしい武器となって、彼を打ち倒し、蹴倒した。馬が、最後の氣力を振り絞って立ち上った途端、夫人の膝は脛間を蹴り上げた。馬は苦しげに呷くと、虫のように身を曲げて大地に倒

れた。最早、起き上る氣力も無い馬を、片頬に笑みを含んで見下した香琴夫人は、馬の咽喉首をキッと踏みつけた。小さな鞋がジリジリと咽喉に喰い込む苦痛の中に、馬は華やかな夫人の笑い声を聞いた。それは馬には天上の樂の音とも思われた。曾つて桃樹の下で、夫人の白い足指が彼の咽喉に喰い入った事があった。美しい貝殻を並べたような爪に飾られた細く白い足指が。馬はその時と同じように、甘美な戦慄が全身を襲うのを感じた。

美しい香琴夫人の勇ましい働きを、酔ったように眺めて居た水夫達の口から、驚嘆の声が上った。物語りに聞く、『女俠草上飛』か『楊門の女將軍』を目の当りに見る思いで、彼等の目は尊敬と嘆賞の念に満ちていた。

（註、曾つて澳門に『草上飛』と呼ばれる女俠があった。その走るや、さながら鳥が草原を飛ぶが如くであったので、この名を以て呼ばれた。又、武枝にも勝れ、ある時飯店にて喫食中、二人の暴漢に襲われたが、女俠は少しも騒がず、纖手に持つ細箸が一転すると見るや、暴漢二名は跳ね飛んだと伝えられている。

楊家の六人姉妹は皆武勇の誉れ高く、屢々兵を率いて、故国秦の危急を救った。『楊門

女將』の題下で、今も尚、京劇の当り狂言の一つとなっている）

年明けて一月『香琴号』は再び澳門の港を船出した。船艙には交易の荷は何一つ無かったが香琴夫人の命で、豚五十頭、鶏百羽、白米五十俵が積み込まれた。訝かしげな水夫の眼差しにも、夫人は笑って応えなかった。

## 八、

「香琴号」の朱泥の鳳凰が、再度ゴマントン丘陵の河中にその姿を現わした時、岸边には多勢のカリ教徒達が馳せ集まるのが見えた。拳を荒ら荒らしく打ち振り、口々に声高く、何事かを喚き続けている。素破ツと水夫達は色めき立ったが、香琴夫人は静かにこれを制した。直ちに三隻のサンパンが下ろされ、先ず豚を積み込んだ。今は夫人に心服し切っている水夫達は、夫人の命のまま、身に寸鉄も帯びずサンパンに乗り移った。舳先きにスツクと立つ香琴夫人の姿は、水夫達には河を渡る觀世音菩薩とも思えたのである。

殺ッ氣立って居たカリ教徒も、美しい女と家畜の群れが近附くのを見て、呆氣にとられた様子であった。だが、残酷なる彼等が、如何なる態度で夫人を迎えるか、生か將た死か。馬はそっと夫人を仰ぎ見て感嘆した。神



色変らず、従容として恐るる色は少しも見えなかったのである。

岸に身を翻えして真っ先きに飛び下りたのは香琴夫人である。水夫達をサンパン上に止めたまま、夫人はツカツカと頭立った男の前に立つと一揖して呼び掛けた。

「妾は澳門の廖家の夫人、香琴と申す者。カリ女神への供物を持って参りました。この旨祭司にお伝え下さい」

笑みさえ浮かべた自若たる夫人の物腰に、男は機先を制せられたように、まじまじと夫人を見結めた。疑惑の影は覆うべくも無いが敵意の色は薄らいで行くようであった。使いの者が直ちに祭司の許に送られたが、その間も、『香琴号』の揚陸作業は進められた。教徒の前に五十頭の豚、百羽の鶏、五十俵の白米が並び終えられた頃、女祭司が急ぎ足に来るのが見えた。

丈け高く、五尺八、九寸もあろうか、伸び伸びとした肢体に、白いサリイが優雅にまつわり、川風にハタハタと靡いて美しい曲線を描いていた。軽ろやかな足取りは、印度人がよく喻えて言う如く「彼女の奇麗な足が踏む毎に、大地は喜びに声をあげて歌い出す」ようであった。黒く刺青で隈取った大きな目、

高い鼻、薄く大きな唇、額の護符は血のような真紅であった。

二人の美女は今、相對して立った。香琴夫人は五尺二寸、中国人としては高い方であるが、この女祭司の前ではまるで少女のように可憐に見えた。だが彼女の切れ長な目は、ヒタと女祭司を見つめて、たじろぐ様は無かった。女祭司は合掌した。

「妾の名はパドマ・ナラヤニ。カリ女神に仕える者です。貴女の捧げ物は女神も喜んで受納されるでしょう」

香琴夫人も氏名を名乗ると、率直に来意を述べたのである。

「妾は貴女にお願いの筋があつて、はるばる澳門より参った者です」

パドマのくるくるとよく動く黒い瞳は、香琴夫人から河中に淀泊している、『香琴号』へ、そして再び夫人に視線を戻した。この女祭司パドマは既に夫人の用向きを察した様子であった。

「宜しゅう御座います。其れでは後程、迎える者を差し向けましょう」  
「謝々」

香琴夫人が低く頭を下げて礼を述べると、緊張した空気も解けて、二人の美女は顔を見

合せて微笑んだ。背後に居並ぶ水夫達は思いも寄らぬ友好的なパドマの態度に、ホッと安堵の胸を撫で下した。

其の夜、約束通りパドマからの迎えの使者が来た。香琴夫人は、この日の為にと用意した、白絹の地に赤い牡丹を鮮かに刺繍した、眼も覚めるような長袷を着け、夫人の好きな金釧を額に巻いた。水夫長の頼を始め多くの水夫達が、是非共随行したいと申し出たが、夫人はこれを退け、馬友仁只一人を伴って、迎えの舟に乗った。いよいよ良人湯武の生死を確かめる時が来たのだ。流石に香琴夫人の心も騒ぐのだったが、生きているとは期待もせず、良人の遺骨だけは、何としてでも澳門に持ち帰りたいと、そののみを考え続けるのであった。

## 九、

馬一人を伴につれ、カリ女神の洞穴に入つた香琴夫人は、馬も舌を巻く程平静で、その挙措も全く自然であった。居並ぶ半裸のカリ教徒の中も、静かに歩を運んで些かの動揺も見せなかった。奇怪なカリ女神像の前も、眉一つ動かさず只鄭重に合掌して通り過ぎた。

奥まった祭司の部屋では、パドマは立ち上つて香琴夫人を迎えた。心なしかパドマの頬

には、親しげな笑みが見えるようであった。荒らくれた水夫達を引きつれ、敢然として此の僻地に乗り込んで来た香琴夫人に、女祭司は、我が身に引き較べて好意を抱いたように思われた。

謝辞を述べながらも、香琴夫人の目は訝しげに、パドマの足許に跼まっている人牛を見ている。パドマが手を打つと、入口に巨漢が現われ、跪いて彼女の命を待った。馬は仲間の首が斬り落されたあの夜の儀式を思い出して慄然とした。巨漢は斧を振るった、あの儀への執行者であった。

「廖夫人に人牛を……」

パドマの命に依って、巨漢の索き出して来た人牛は奇怪であった。両手、両脚共に関節部から切断され、全くの畜生同様、四つ足で歩いて来るのだ。長い髭が顔を覆い隠し、人相も判らないが、背に椰子の葉で編んだマットを負い、頭を垂れて歩む姿は、哀れと言うより、ぞっとする厭らしさがあった。香琴夫人の足許まで歩み寄った人牛は、夫人の鞋を目にしたのか、弾じかれたように夫人の顔を見上げたが、口より洩れる声を押し殺して再び頭を垂れると石の如く動かなかった。

香琴夫人は不審気に人牛を見下した。人牛

の四肢は微かに震るえ、嗚咽を押さえる苦しげな呻きが聞こえて来た。

香琴夫人の顔色がサツと蒼ざめた。思わず掌で口を覆い、信じられぬ者を見るように、大きく見開かれた目は人牛を見結んでいた。

パドマの黒い瞳は、二人の様子をじっと見て居たが凡その事情は察したようであった。「お掛けなさい」

去りげ無く、香琴夫人に人牛を指し示すとパドマは足許の男の背に、ゆったりと腰を下ろした。香琴夫人の心中は、千々に乱れて居た。これが愛する良人、湯武だろうか。颯爽として『香琴号』の船首に立っていた、あの湯武であろうか。這い跼った人牛の姿の惨めさに、夫人は思わず顔を反向け眉を顰めた。

カリ教徒に捕えられたと聞いた時、夫人は既に良人の死を覚悟して居た。海を越えて、遠くゴマントンに來たのは、愛する良人の骨を拾う為であった。珍味燕巢を求めて、婆羅の奥地深く分け入り、邪教徒と斗って雄々しく死んだ良人の遺骨を求める為であった。その良人が、目前に惨めな人牛の姿となって、邪教の女の顎使に甘んじ、醜い生を貪っている。香琴夫人はそんな良人を見るに堪えなかった。ましてや、今自分達を眺めている、こ

の傲慢な黒い瞳の女祭司に、醜悪なる人牛が自分の良人であると告げる事は、死ぬより辛い事であった。

キツと唇を引き締めると、香琴夫人は決然として人牛の背に腰を下ろした。これが愛し合った良人と妻の、再会の姿であった。豊かな妻の腰の重味に、人牛の背は激情を抑え兼ねるが如く、ワナワナと震るえた。

「妾に話があるとの事でしたが……」

パドマの問いに、香琴夫人は突嗟に答えられなかった。何の為に來たのか？浅ましい人牛の姿を見て、香琴夫人自身も胸中に自問していたのである。

「妾はカリ女神のお許しを得て、燕の巢を採集したいと思つて参りましたの」

思いも寄らぬ夫人の言葉に、パドマは笑い出した。

「燕の巢ですって？ホホホ。宜しいですとも。何の為かは存じませんが、女神への供物の御礼に、教徒達にも手伝わせましょう」

紅茶とチャパティ（パンの一種）が供される頃、二人の美女は、次第に打ち解けていった。香琴夫人の目が、パドマの人牛に興ありげに注がれるのを見て、女祭司は人牛の頭を打ちながら話し始めた。



「此奴は盜賊でしたの。妾の母を襲い、殺してしまつた憎い敵です。でも妾は此奴を殺さないで、こうして生かせています。此奴の指を切り、腕を斬り、脚を斬り、皮肉を傷つけて血を流させる為です。妾の母が流した血より、もっともつと多量の血を此奴に流させてやりました。これから生きて居る限り、此奴は血を流さなければならぬのです」

話しながらパドマは声をあげて笑つた。その笑いの間にも、パドマの手はピシピシと容赦も無く、人牛の頭を叩き続けた。流石の香琴夫人も、ぞつとして、何やら人牛が哀れに思えた程である。

やがて香琴夫人が礼を述べて辞去せんとした時、パドマは夫人の眞の目的を察知している事を知らせた。

「若しお望みでしたら、その人牛を貴女に差し上げますわ」

虚をつかれた香琴夫人は、思わず腰を上げたが、その面には迷惑つたような表情があつた。喜びの感動が少しも湧いて来ないのである。それ所か、澳門<sup>マカオ</sup>へこの厭らしい人牛を連れ帰つて、良人湯武の成れの果てと、人に見せる気持ちにどうしても成れないのである。夫人は言葉も無く、震るえている人牛の背を

見下しているのみであつた。

だが馬は声をあげて駆け寄り、人牛の肩を力一杯抱き締めた。

「大哥！大哥！さあ帰ろう、澳門<sup>マカオ</sup>へ。俺達と一緒に帰ろう」

人牛の湯武は面もあげず、込みあげる鳴咽を押さえていたが、涙は点々と床に、其の跡を示した。

「香琴も、馬も、よく来てくれた。礼を言うよ。俺も澳門<sup>マカオ</sup>へ帰りたい。眠れぬ夜毎に澳門の夢を、お前達の夢を、幾度見た事だろう。だが、馬！この俺の姿を見てくれ。人間にして人間に非ず、男であつて、男で無い此の浅間しい俺の姿を！何の面目あつて、郷党に見える事が出来よう。馬、帰ったら湯武は死んだと言つてくれ。ゴマントン丘陵の洞穴で湯武は死んだと伝えてくれ」

血を吐くような悲しい言葉だつた。涙に幾度と無く声を途切らせた湯武は、語り終えると号泣した。今は慰めの言葉も無く、馬も湯武と共に泣くのみであつた。香琴夫人は唇を噛み、一言も発せず其の態を眺めていたが、パドマに一礼すると、そのまま、踵を帰して去ろうとした。

人牛は慌ててパドマの足許に這い寄り、そ

の爪先きに口吻けて哀願した。

「願わくは、カリ女神の慈悲により、この夫人の滞在中、人牛として仕える事をお許し下さい」

パドマの黒い瞳は、じつと人牛を見下したが、やがて哀れみの色を浮かべると、足で人牛の頭を押しやった。

「許してやろう。お行き。妾に仕えると同様に、心して夫人に仕えるが宜い」

見ている香琴夫人の心から、良人湯武の面影は完全に抹殺されるようであつた。此の人牛は湯武の顔を有しているが、邪教の女の奴隸、その顎使に甘んずる卑しい人牛以外の何者でも無いのだ。香琴夫人は己が心に、幾度となく、そう言い聞かせるのであつた。

# 十

燕巢の採集には二十日余りを要した。洞穴に、燕と共に無数の野蜂が巣喰つていた。水夫達はその為、全裸で作業に従事しなければならなかつた。カリ教徒の此の忠告が無ければ、下着の中に入り込んだ野蜂が、如何に恐ろしい猛威を振るうか、被害の程は、量り知れなかつたであろう。又、次ぎ次ぎに、吊梯子を洞穴にかけては、さながら猿の如く馳せ登つては馳せ下る、カリ教徒の応援が無けれ

ば、作業は更に多数の日子を必要としたであろう。

其の間、湯武の人牛が、香琴夫人に仕える事、誠に忠実であった。作業の指揮をする香琴夫人を、常にその背に負い、終日、木蔭を追って倦む事が無かった。夫人の繊細な足指が、小石に傷つけられた時、人牛はその足指を数刻も、口に含んでいた。夫人がある必要の為、慌ただしく立ち上った時、人牛は当然の如く、その顔を夫人の足下に差し延べた。流石に顔を赤らめた香琴夫人は、人牛の顔を足で押し退けて、灌木の蔭に走ったが、忽ち毒虫の襲う所となって、這う這うの体で逃げ出さねばならなかった。今は人牛を使用する以外、途は無かった。

香琴夫人は、忠実な人牛の使用に、次第に慣れていった。だがその反面、夫人と別れて一年有余、あの黒い瞳のパドマにも同様に使用されて居たのだと想像すると、嫉妬にも似た怒りがこみ上げて来るのを、抑さえる事は出来なかった。馬と共に見廻りから帰った夫人が、木蔭に転寝ウタタネをしている人牛を見て、思わず烈しい足蹴を以て懲戒を与えるに至ったのも、自然の成り行きと言えよう。

或る夜、馬は夫人の幕舎から洩れる怪しい

物音に、そっと覗き見た事があった。そしてそこに見た香琴夫人の妖しい美しさは、馬の一生を決定せしめる事になった。

幕舎の中は天幕を透した柔らかな微光に包まれて、さながら、水中の如く青く輝いていた。寝台に横たわる香琴夫人の豊麗な裸身は青い微光の中に、雌獣の如く悶え、揺れ、震るえた。噛みしめた唇の間からは、抑え切れぬ喜びの呻きが絶え間なく洩れて来る。そして湯武の人牛は、かつて凝脂を洗うと戯れた夫人の艶やかな下肢の茂みに顔を伏せて、膠着したように動かなかった。夫人の肢体は次第に大きく揺れ動き、やがて硬直して絶叫の声が洩れるや、人牛も顔を挙げて嬉しげに吠えた。二度三度、潮は夫人を襲ったが、夫人の豊かな下肢は、人牛の首を固く捕えて、いつ迄も離さなかった。

この光景は馬に深い感動を与えた。男でも無い人牛が、かく迄も夫人を喜ばせ得るとは信じられぬ程であった。彼は嵐のように荒れ狂う夫人の裸身を見つめつつ、その心に何事か深く期するものがあったようである。

やがて燕巢は『香琴号』の船艙に満ちて、ゴマントン丘陵を離れる日が来た。雄々しい香琴夫人に、一方ならぬ好意を抱いた女祭司

パドマは、黒檀の木に自らの手で彫り上げた二尺余りのカリ女神像を贈って、別れを惜しんだ。

「カリ女神が、貴女を守り、貴女の中に生きられますように」

パドマの好意と援助を深く感謝して、香琴夫人が人牛の背から腰を上げた時、湯武の人牛は突如、物の怪けに憑かれた如く、一声高く叫ぶと見るや、その両膝を以てすくくと立ち上った。背丈け四尺にも満たず、さながら王侯の棺に侍する土偶の如き人牛は、声を限りに吠え続けた。一瞬、息を呑んで其の姿を凝視した香琴夫人は、土偶の両眼より滝の如く涙の溢れるのを見るや、莞爾と笑って、その側近く歩みよった。棒の如き腕に夫人の腰を抱いた土偶は、涙に曇る目に夫人を見上げて只一言、『香琴！』と呟やくと、再び慟哭した。愛する妻と二十日余りも起居を共にしながら、浅間しい己が姿を恥じて、只人牛としてのみ奉仕して来た湯武であるが、今、香琴夫人と別れては、再び逢い見る事の無きを思い、今よりは一生、パドマの人牛として暮す己が身を思い合せ、思わず恋妻の名を呼んだのであろう。その心根の哀れさに、馬は涙ぐまずには居られなかった。



だが香琴夫人は微笑みながら、土偶の頭を軽く愛撫して居た。良人湯武の成れの果てである人牛に、永久の別れを告げると言うよりも、二旬に亘る人牛の奉仕に、満足した事を告げる女主人のように見えた。

やがて腰を揺すって人牛を振り離れた香琴夫人は、振り返りもせず歩み去った。幼児の如く泣き叫ぶ人牛の声は、洞穴内にこだま

## 連続組写真Mフォト

### 二人の女性の餌食

略号「ほや」

大手札三十六枚一組 六〇〇〇円

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名  
M男性……Mモデル志願者M・H氏〕

男性をいたぶることについては定評のある山原清子が他に一名のアシスタントの女性を使って一人のM男性を、こてんこてんに虐じ羞しめる有様を順を追って、刻明に写真化、マゾファンの思わずぞくぞくする場面ばかりを集めました。

この組写真は、写真撮影を第一目的とせず山原清子外一名計二名の若き女性が、Mモデル志願の男性を思いのままに弄ぶ場面を第三者的傍観者の立場からシャッターを切ってゆきましたので、Mプレーのナマの姿がよく把握されていると思います。どうか一度Mムードの醍醐味を味って下さい。

して哀れを誘い、馬は耳を覆って夫人の後を追った。

## 十一、

珍味燕巢を満載して澳門<sup>マカオ</sup>に帰った、『香琴号』は市民に拍手を以て迎えられた。良人の安否を尋ねて、人も恐れる婆羅<sup>ホルネオ</sup>の奥地に分け入り、しかも高貴なる燕巢を持ち帰って来た香琴夫人は、彼等の賞讃の的となった。

馬友仁は、こんな騒ぎをよそに、密かに外科医を訪れて羅切の手術を受けた。ゴマントンの幕舎で、香琴夫人と人牛の密戯を覗き見て以来、彼はこの事を深く決意して居たのである。

羅切した馬が、香琴夫人の足下に跪き、大哥、湯武に代り、人牛となって仕えたいと哀願した時、夫人は高らかに笑って、これを許した。宮廷に於ける宦官の如く、羅切した馬が廖家の奥深く夫人に仕えるのを、世人は怪しまねばかりか、却って其の忠誠を讃えた。

香琴夫人も馬も、再び船に乗る事は無かったが、『香琴号』は二年に一度、カリ女神<sup>ホルネオ</sup>への供物を持って婆羅に渡り、多量の燕巢を澳門<sup>マカオ</sup>に持ち帰った。カリの女祭司パドマの援助を受ける『香琴号』以外の交易船は、この燕巢の宝庫に手を出す事は不可能であった。

数年後、『香琴号』は夫人に宛てた一書を持ち帰った。湯武が口に筆を含んで書いたのであろうか。書体は整ってはいなかったが、筆勢は甚だ雄渾であった。

人牛与人身非相同

澳門与婆羅亦不等

在洞頭口觀一片月

我憫惟香琴君余香

卒読した香琴夫人の面に、一抹哀愁の影が流れたが、腰下の人牛に、その書を示すと、一笑して破り棄てた。今は完全な人牛と化した馬友仁は、聊かの感情の動きも見せず、夫人の豊腰を支えた、その四肢は微動だにしないかった。

(後記) 西暦一八八〇年、野蜂の研究者として有名な英人、R・K・ハードウィック氏は、始めて婆羅<sup>ホルネオ</sup>のキナパタンガン河を遡行し無数の燕と野蜂が棲息するゴマントン丘陵の大洞穴群を発見したと、英本国に報告している。

ハードウィック氏は、キナパタンガン河のキナが支那を意味し、原住民の間では「支那人が来るパタンガン河」と呼ばれて居た事を知らなかったようである。

(終)

## S M 諷刺小説

あ  
る  
ス  
タ  
ー町  
陽  
一

へ女が何だ

神は男を最初に作った

女なんて男の骨じゃないか

男は主人だ

女を従えさせろ

決して美声ではない。黒の皮ジャンパーに  
同じく黒の長靴、色あせたようなジーパン。  
足を拡げて歌うは環<sup>たまき</sup>城一。今、売り出した

ばかりの新人歌手である。

へ女が何だ

この世は男の為のもの

女は付属物、飾りだけ

男は主人だ

女をひっぱたけ

環城一のデビュー曲『女なんか』は荒っぱ  
い歌である。女性から総ボイコットされそう



な歌だ。だが、しかしである。客席の半分は  
若い女性である。それもうっとりした表情で  
舞台の環に視線を注いでいる。

へ女が何だ

女は荒っぽく扱え

そうすりゃ女はついてくる

叩け！縛れ！

素っ裸にひんむけ



勿論発売と同時にNHKも民間放送も要注意レコードに指定し、電波には一切乗らなかつた。だが、町のレコード店での売れ行きは素晴らしかった。ミリオン・セラーを記録するのは時間の問題だと見られていた。以前、矢張り要注意レコードに指定された『トンコ節』や『キュー・キュー節』が特に水商売の世界でもてはやされたことがあった。『女なんか』は、それをさらに上まわるものだった。レコードを買う年齢層も巾広く、レコード会社の調査によると、一番多いのが二十二、三の女性と、三十代後半から四十代にかけての男性だったようだ。

「お疲れさま」

「お疲れさん」

「環さん、Kホテルで記者会見ですよ」

「はいよ」

ショーの終わった楽屋は、ごったがえしていた。だが、場慣れした人々ばかりでは、混雑の中にも一種の秩序があった。

「会見は何時？」

「このままです。遅れてます」

「車は？」

「待ってますよ」

「じゃあ、お先に」

「お疲れさま」

「お疲れ！」

環は、舞台衣裳のまま、楽屋口から姿を消した。

○

「そうすると環さんはサディストですか」

「そうですよ」

大勢の芸能記者に囲まれて環は長い脚を組んだ。大阪で南と呼ばれる繁華街の中心にある高級レストランの一室だ。

「人気商売の貴方が、いわゆる変態性欲者の一人と判れば人気に影響しませんか」

「それは浅い考えというもんじゃありませんか。男は皆サディストですよ。本人が意識しているかどうかは別ですがね。『肉体の門』

って映画がありましたでしょう。あれがヒットしたのは、野川由美子の裸だけが原因でしょうか。勿論、それも一因でしょう。だけど

リンチシーンが大きな役割を果たしていると思うんです。若い女が裸で縛られ、虐められるシーンに息をのんでいたわけですよ。自分に、そういう趣味があることを意識していないかもしれませんね」

「そうすると、環さんは全然隠す必要はないとおっしゃるわけですね」

記者達もいささか毒気を抜かれたようだ。

「勿論ですよ。それにいわゆる文化人の間では、めずらしくないんじゃないですか。むしろ性の昇華した形と考えれば自然でしょう。ここだけの話ですが、O放送のIアナウンサーなんかも、そうですよ。もっとも彼の場合は相手がなくて発散するのに困っているよう

ですがね」

「環さんの場合は困りませんか」

「今の所はね」

「デビュー曲の『女なんか』ですが、あのヒットの原因も矢張り人間の心の奥底にあるそのサド・マゾ性によるものですか」

「それだけでは勿論ないでしょうけれどね」

「要注意曲になりましたでしょう」

「今の世間では無理もないでしょう。とに角現在では変態扱いされているんですからね。だけど何年か先には、きっと正常と認められますよ」

「ファンの方も、そういった……」

「全部が全部そうではありません。まあこれから先はプライバシーに関係しますから止めておきますが……」

「サド歌手と謳っても良いでしょうね」

「悪いって云ったって、名付けるのはマスコ

ミの方々ですからね」

環は殊更作ったような冷い笑いを浮かべて見せた。

○ 「おい環、又来てるで」

大阪郊外のマンションの一室、環城一とマネージャーの長岡が借り切って事務所兼居間にしている。

「又、ですか、嫌だなあ。これで三十人位になりますか」

「うむ、二十六人やなあ、アルバムにはとこか」

「良いようにしといて下さいよ」

長岡は慣れた手付で手紙の封を切ると逆さにした。手紙と一緒に写真がこぼれ落ちた。

素裸の女が後手に縛られている写真。

「手紙読んだらうか」

長岡は隣室の環に声を張り上げる。

「良いですよ」

「まあ聞いてみいな。ええか。『環さん恥しさを押し殺して、これを書いていきます。同封の写真は自分で撮ったものです。今迄こんなことは恥しくて人にも云えませんでした。だけど環さんが堂々と名乗って下さったので気が楽になりました。一度環さんに苛められて

みたいと夢に迄見ます。夢の中で私は環さんに裸にされて……』」

「もう良いですよ」

「そうか。こんなのもあるで。『恥知らず、人非人、鬼、ヘンタイ、環城一』……こら、すごいぞ」

「だから嫌だと云ったんですよ。もともと僕にはサド性なんかありやしない。あるのは長岡さん、あんたの方ですよ」

環は隣室から入って来た。白いトレパンにポロシャツと云ったスタイル。

「そやけど、金はもうけたいのやろ。有名になりたいのやろ」

「それは、そうですが……」

「そやったら、黙ってえな。悪いけどな、顔も、スタイルも、それに歌かて、それ一本で商売にならへんで」

「それは判ってます。だから歌のレッスンを受けて……」

「アホ、ほんまにアホとちゃうか。そんなことしてたら、売り出せるの、いつになるか判れへんで。それに、ものになるかどうかも判れへんのに。ようそんなこというわ。ええか現代はな、何処か変ってれば、ええんや、そしたら売り出せるんや。さあ勉強勉強。はよ

慣れなあかんで」

環は嫌々ながら長岡の横に腰を下ろした。机の上にはアルバムと、K・F・S等の風俗雑誌が置かれてある。

「この娘、ええやないか。十九やで」

長岡は太い指をアルバムの一頁に向けた。素裸の女が胸に縄を巻きつけて座っていた。「そやけど、こうしてみると、ほんまに女てスケベエやな。やっぱし、女はマゾヒストや露出症や」

「そうかな、単なる有名人への憧がれじゃないのかな」

「そらある、それもあるで。そやけど、それだけでこんな写真送ってこられるかいな。こんななん親にも見せられん姿やで。この傾向の人はな、相手に悩むんや、それに一生治らん病氣やで。O放送のIなあ、あれかて、相手に困ってるやろ。そこが芸人とアナウンサーの違いや、アナウンサーで、そんなこと口に出来るかいな。芸人やから、どうにでも出来るってこっちゃ」

電話のベルに話は中断された。環はアルバムや雑誌に目を通しながらも、あまり熱の入らない様子だ。

「ふむ、鈴木道子、よっしや、部屋へ通した



って」

長岡は受話器を置いた。

「又来たで、下の管理人室からや、若い娘やて。しっかりやりや」

腰を上げる長岡に

「あれだったら頼みますよ」

「よっしゃ、まかしとき。いつものようにやりや、いいんや」

長岡はウインクして奥の部屋に入って行った。環は大きく溜息をつくとスターの姿勢に戻った。アルバムの頁を馬鹿にしたような手付で次々とめくる。

「どうぞ」

ノックの音に環は応えた。入って来たのは白のアンサンブルに身を包んだ若い女性。

「鈴木道子です」

「さあ、どうぞ」

道子の座った前には、アルバムが開かれていた。それに視線を走らせた道子は白い頬を赤らめた。

「ああ、皆さんから送って来たものさ」

「あの実際にされた事」

「あるよ」

環は足を組んだ。

「矢張り、あの、裸にして」

「その方が感じがでるだろう。服の上からじや、感覚がにぶくなるからな」

「その、あの、そんなことだけを、するんでしようか」

「サドやマゾは<sup>セックス</sup>性の昇華されたものさ。今迄のような肉体の結びつきは要らないよ」

鈴木道子は膝の上で両手を組んだままうつぶいていた。

「貴女もマゾなんだね」

道子はうつむいたままうなずいた。

「今迄には」

首が少しためらった後で横にふられる。

「してみようか」

今度は縦。

「ぬぎなよ。向うで仕度してくるから、大丈夫だよ、ここは誰も入って来ないし、音も聞こえないからさ」

云い捨てると環は隣室に入って行った。残された道子は、とまどったように椅子に腰を下ろしたままだ。いくら懂がれのスターの前だって、いくら同好の志の前だって、初めての異性の前に、処女の肌を簡単にさらすわけには行かなかった。

「何だ、まだぬいでないのか」

入って来たのはショートパンツ一枚の裸の

男、しかも顔は黒の覆面で包まれていた。

「早くぬぎなよ。ああ、これかい。プレイをする時は覆面をする事にしているのさ。その方が悪魔的だろう」

覆面に覆われた環の声は先程とは違って聞こえた。道子はおずおずと服をぬぎ始めた。白く丸い肩が露わになる。ブラジャーをはずすと小さいが型の良いふくらみが顔を出し、薄紅の蕾が引き締まっている。

「あの、全部ですか」

声はふるえていた。無理もない話だ。

「当り前だよ」

男はいつしかロープを手にしていた。道子は身を小さくして一糸まとわぬ姿になった。それを待ち兼ねるように近寄った男は道子の細い手首を後にねじ上げた。

「ああ」

溜息ともつかない声が、道子の口から洩れた。今迄に何人の女の脂を、吸ったことだろう。白いロープは薄ねずみ色になっている。手首を巻いたロープは、さらに二の腕から胸のふくらみを締めつける。

「ううむ」

せつないような道子の声。初めて受ける本格的な縄目、乙女の肌にそれはかなりきび

しいものに違いない。

この頃、マンションの地下の駐車場から一台の車が滑り出して行ったのには、二人共気づかなかった。

道子は脚も縛り上げられて床に横たわっていた。口には猿轡がはめられているが、口の中につめ込まれているのは、彼女の羞恥心を増すような、彼女の最後の一枚だった。丸い頬に大きな窪みを作って小さな唇をおおっていた。小柄ながら均整のとれた美しい肢体だ。

よく伸びた太ももの横に縦に走る窪みは、脚の曲線をより美しいものにしていた。引き締まった足首、だが、それらの細かい点よりも、彼女の体を引き立てているのは、その肌の美しさだった。健康的な張りのある肌、色白で肌理の細かい肌、縄にくびられた肌は桃色に染まり、血の気を失なった指は細く繊細な感じだった。

○

鈴木道子、十八才、B学園高等部三年、勿論、環にはこんなことを云いもしなかったし云おうとしても環は止めたことだろう。プレイに相手の素性は必要ではない。特にそれ一回きりの場合は、ただ相手が悪意をもってプ

レイするのでなければ良いのだ。

一人娘の道子は幼い時から、こんな性癖があったわけではない。幼い時には男女の別はなく苛めるということも単なる遊びの一つにしか過ぎない。そういった意味で、道子は縛られたこともあったが、それに対して特別の感情はなかった。

道子がMに目覚めたのは中学に入ってからだ。B学園は中学部から短大迄のコースがある女学校だ。女学校でよく問題になる同性愛—Sという関係—が道子をも巻き込んだ。丸い頬で瞳の美しい道子を上級生が放っておくはずもなかった。道子は上原久美子という上級生の家に誘われた。久美子の家は大阪の郊外にある住宅地のはずれにあった。

「この部屋よ道子さん。入りなさいよ。ここは私だけのお部屋。誰も入れないのよ」

明るい感じの良い部屋だった。広い窓からは初夏の陽が一杯にふり注いでいた。

「素晴らしいわ。私もこんな部屋が欲しい」

「そう」

道子の後に久美子が寄り添った。

「私は貴女が欲しい」

「久美子さん」

「貴女は可愛いわ。めっちゃめっちゃにしてみた

い」

「いいわ、どうしてめっちゃめっちゃにするの」

道子の表情は無邪気だった。

「そうね」

久美子は一寸虚をつかれた感じだった。

「縛っちゃおうか」

「縛ってどうするの」

「判らない」

久美子は辺りを見回して、縄とびの縄を見つけた。

「手を後にまわして」

「本当に縛るの」

「そうよ」

「いいわ」

道子は朗らかに云って、くるっと後を向いた。半袖のセーラー服から出た肉付きの良い腕に縄がからみついた。

「これから、どうするの」

後手に縛られたまま、道子はけろっとしていた。縄にくびられて胸のふくらみが一層目立った。

「可愛いわ、道子」

後手にされたまま道子は、ベッドの上に押し倒された。

「嫌、止めて、痛いわ」



興奮した久美子の耳に道子の悲鳴は入らなかった。スカートがまくれ上り白い道子の太ももがつけ根迄露わになった。いくら道子が必死の抵抗をしても体格の秀れた久美子にかなうはずはなかった。しかも両手の自由は奪われている。

ひとときの嵐の後、道子はパンティ一枚の姿にされ、両手を上に挙げてベッドの柱に縛りつけられていた。丸いふくらみ、露わにされた腕の柔らかく薄い蔭、久美子は少女の露わな胸に顔をうずめた。道子は目をとじ、唇をふるわせていたが、その頬は涙で白く光つ

## 限定版グラビア写真集 △美しき縛しめ▽ 第八集

山原清子 大塚啓子  
鈴木晃子

### 女斗緊縛競艶写真特集

一部一〇〇〇円  
略号(美8)

「女性対女性」の激しい女斗場面と女斗美の躍動！  
女性が女性を縛る緊縛プレイの見事なフォト化  
動きのある女性と女性の相互縛り場面の美しい展開

長い間の皆様マニアの御要望に応えて、女性対女性の女斗美、女斗場面、並に女同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって、ここに集大成いたしました。六尺禪或はパンティを着用した美女の裸身が組んずほぐれつ縦横に画面狭ましと展開し筋肉を躍動させておられます。いずれも動きのある連続動作によって三女の裸身の美しさが、いきいきと目の中に飛び込んできます。数十枚の女斗美、女斗写真女性相互の緊縛写真が、この一冊にて、皆様のもとなるのです。この新しい企画はまことに画期的なもので、この機会を逸すると絶対に入手できません。今すぐ、お申込み下さるよう、お待ちいたします。

△内容▽ 啓子の裸身を厳しく括くる清子、あえぐ啓子。緊縛して押さえ込まれる啓子の連続被虐姿態。清子に縛られてゆく過程の連続写真。縛られて身動きできない裸身を清子にいたぶられる啓子。縛られた刺青の裸身をいじめる晃子。晃子が清子に対して猿ぐつわを噛ます連続写真。馬乗りになって清子はいじめる晃子。清子を逆エビに責める晃子。清子白を縛り上げて逆エビに責める啓子。黒禪と禪の清子と晃子の女斗美、女斗シーン。晃子を寝業で押さえ込む清子、晃子の逆転劇。晃子を縛り責める清子。後手縛りの清子が啓子に翻弄される。その他女性と女性の緊縛プレイシーンの数々。

ていた。

「道子、ごめんね」

手首の縄目の跡を撫でる道子に、久美子は目を伏せてつぶやいた。道子は頬を光らせる涙の跡をふきもせず服を身につけると黙って部屋を出ていた。むき出しの腕に縄目の跡が赤かった。

二人の関係はそれで終ったが、道子は何となくその時の事が忘れられなくなり、時が経つにつれて懐しくさえなってきた。だが、再び久美子に近寄ろうとはしなかった。その時の久美子の強引な態度に腹を立て、そんな事件を懐しく思う自分に腹を立てた。だがその後、小説や映画等に表われる被虐シーンが急に道子の注意をひくようになった。もう一度縛られてみたい、苛められてみたいという気持は道子の心の奥底で、どす黒く渦巻いていた。そんな時だった。週刊誌の広告に△サド歌手環城一▽の文字が道子の目に飛び込んで来たのは。慌ててその週刊誌を買い求める彼女の手はふるえていた。

道子が環の部屋を訪れようと決心する迄に大分時間がかかったのは、無理からぬことであつた。

部屋には異状な熱気が満ち溢れていた。道子は若々しい素肌を様々の姿にされて縛り上げられた。今は天井から手首を縛られて吊り上げられていた。一切覆う物のない若々しい裸身、その白い肌には一面に縄目の跡が赤い筋となって残り、鞭跡がみみず腫れになって交叉していた。さらにその上に空気を裂いて男のベルトが乙女の素肌に叩きつけられていた。柔らかなふくらみが鞭の下で悲鳴を上げる度に、均整のとれた乙女の裸体が、美しい曲線を描いて反応を示し、下着で音を殺された悲鳴が道子の口からもれた。

「素晴らしい美しさだ」

男は手を休めて、手首の縄にぶら下っている道子の体を見詰めた。鞭や縄目の跡に彩られているとはいふものの、道子の若々しい肌は素晴らしい張りとしみを見させていた。日頃隠されている部分も、今は汗でびっしりとぬれ、艶やかに光っていた。

「満足したか」

男は道子の顔をのぞき込んだ。

○

この時マンションの下に静かに車がすべり込み、二度、軽やかな警笛を鳴らした。

道子は素裸のまま床に横たわっていた。縄目を解かれ、猿轡もはずされていたが、うつ伏せに横たわっているだけだった。

「大丈夫？」

環が入って来た。覆面はしていない。ショートパンツ一枚の姿だ。環は道子を静かに抱き起して鞭跡を調べた。みみず腫れにはなっているが、出血している所はなかった。

「一寸やり過ぎたようだね」

道子は泣いていた。素肌と素肌がふれ合い初めての男に抱かれても目を開けなかった。

「これを飲んだら、元気が出るよ」

可愛い唇に良い匂いのする飲料が近づけられた。

「環さん」

道子はぱっちり目を開けた。

「さっきの人は誰れ？」

「え、さっきの人って？」

「私を苛めた人。縛って叩いた人」

「あれは僕さ」

「駄目よ。女って敏感なんだから」

道子の声は静かだった。

「貴方はサディストなんかじゃないわ。貴方は普通の人よ。サディストはあの男。私はだませないわ。貴方は裸をさらして、苛められ

ている女を見て、馬鹿な女だと思って、笑っているんでしょ」

あつげにとられている環に背を向けて道子は服を身につけ始めた。

「サドが性の昇華されたものだなんて云っているのは、貴方の宣伝文句ね。女を苛め、女が苛められるにも矢張り愛情が必要よ。恋愛でなくても良いの。好意程度で良いわ。でも良いの、誰にも話さないわ、貴方は矢張りサド歌手で売り出しなさい。その方が良いわ。あの男の人によろしくね」

先程迄、鞭と縄目の下に全裸体をくねらせたとは別人のように静かに道子は部屋を出て行った。

「おい」

「長岡さん」

「ええ娘やったけど、えらい娘やなあ」

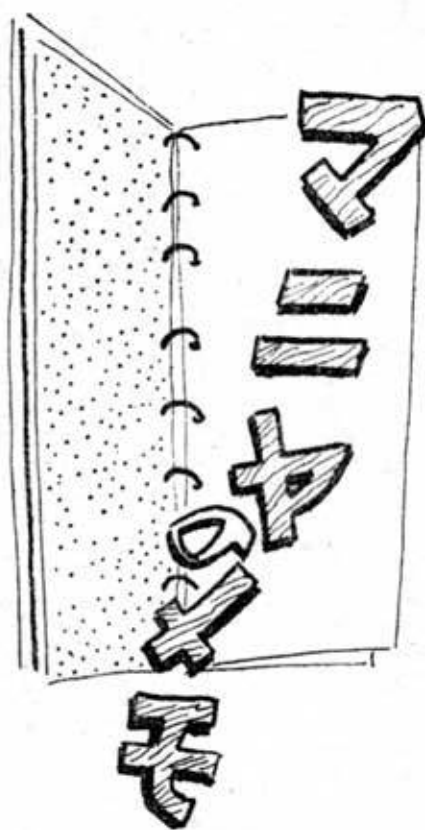
「どうしましょう」

「どうしよういうたかて、しょうがないやないか。まあええで、心配すること、あれへんがな。あの娘は喋れへんて。そんなもんやマゾヒストの女なんて」

環は魂を抜かれたかのようにだった。

(完)





## 映画その他雑感

黒井 珍平

映画みるひまもないサラリーマンですが、  
△花の蛇△の続らしい「骨まで縛れ」とか言  
うのは、(七月号でしたか)団鬼六先生のお  
言葉に従って、がっかりしそうなので止め、  
『続日本拷問刑罰史』が「拷問」なる題で八  
月二十日から封切(関東地方)り予定とのこ  
と。しかし、これも見る気なし。どうせまた  
ずたにカット。第一、時代物はいや。

三カ月まえからS的映画として騒がれてい  
る若松孝二氏の「裏切りの季節」やっと九月  
頃、新宿の何とかいう名画座で、ロードショ  
ーの由。これは映画芸術雑誌が、何カ月前  
から、愚作だ、いや傑作だとさわいでいる作  
品。内容は大変SM的とのこと。同じく若松  
孝二監督のサド綺譚「胎児が密輸する時」。  
これは、もの凄いそうですが、映画芸術、映

画評論九月号、日本読書新聞にも紹介されて  
います。しかし、まだ上映してくれる映画館  
も(みんなことわられ)予定もない由。第一  
陽の目をみたらおなぐさみ。あたかもったい  
なし。映倫、警視庁、めじろ押しに並んで手  
ぐすねをひいていてどうでしょうね。

大島渚先生の△白昼の通り魔△至って優秀  
なるまじめ一方の作品。うやうやしく拝見。  
それはそれとして、我々SM好きがショッキ  
ングだったのは、二時間近いこの映画の一番  
最初のわずか五分。これは<sup>あた</sup>値千金でした。  
あとは私にはSM的の興味はなし。

映画芸術三月号の武田泰淳先生の原作小説  
のその場面(シノと英助の場面)は、△風呂  
場の横の女中部屋へあとずさりする私を押し  
入れ、手首をうしろ手に帯でしばりあげ、出

刃をくるんでいた手ぬぐいで、私の口にさる  
ぐつわをかませた。無言の争いのあいだにス  
カートがまくれあがったので、彼はすぐさま  
私のズロースを脱がせにかかった。だが勝手  
口が近いので、人目についてはまずいと考  
え私の身体をかついで北側の二階にあがった△  
原作と趣きの違うのは、ほとんど細い紐ら  
しいが、よく見えない。手首だけきつく縛っ  
ただけ判るのが大変よろしい。胸にはま  
わしていない。ともかく川口小枝(シノ役)  
というグラマーな美しいぴちぴちしたニュー  
フェイスの圧倒的な魅力一〇〇%発揮される  
のが、この五分間。原作には△出入をくるん  
だ手ぬぐいでさるぐつわ△とあるが、映画は  
真新しい手ぬぐい?がきっちり実と美しい  
(こんな美しいさるぐつわのはめ方は始めて

見た。興味はなかったが)

英助がデラックスなお屋敷を後手にくくったシノを肩にかついで、のっしのっしと二階へ上って行く途中の大きな鏡。シノは後手にくくられて、つけ根からむき出た、つややかな二の腕、肩をじっと見入る。英助も自分と自分のかついでいる、くくったシノを見る。これは実にすばらしい。(どの映画雑誌もこの五分間にふれてはいけません) もっともシノを背負うシーンは、村で源治と一緒に首をつって英助に助けられかつがれたシノの姿とだぶる意味深な所なのですが、つづいて、どつかと後手のままのシノをおおむけに倒す、その全景、そこで奥さんの声が――。

ここでSMの世界とは(五分間のみ)さよならして、大島氏の思想にのめりこむ。

何月号かの「話の特集」で彼が書いたエッセイ、戦争と死がまっているのを知ってしまった人間は、どうすればよいのか。という今の彼の考え方と八白屋の通り魔の思想Vを知りたくて見に行ったのですが。

興味ないといえば、三島先生の「憂国」を始めてみて、何となく英霊の声とか、大日本帝国の至誠の最右翼の魂の美しさに、いささか感謝。ただ、もう、切腹だの血だのとなる

と、小生はアウト、駄目。大体『白日夢』をみた時、カラー部分の赤い血を見たので、その時は目をふさいで、気分悪くなった位ですから。

近頃、梶山季之先生がさかんにSMの場面をむやみやたらと(「非常階段」「畏のある季節」など)扱っておられるが、「おとり」なる作、何度読んでもピンと来ない。つまりこれはMだから、小生の様なS派には、さっぱり楽しくないらしい。しかし、どうも梶山氏がSMにキョーミを持っていているとは、思えない。売れるからでしょう。

吉行淳之介先生は「砂の上の植物群」をお書きになりながら(書くのは悪いとは申しませぬが)さかんに処々方々で、いろんな雑誌で、俺はあくまでノーマルで(その通りまぢがいなし)と変態性欲者の悪口ばかりおっしゃっているのには大変に腹が立つ。そんなにきらいなら、何故、ああいう小説ばかり書くのか。私はたとえ文学のためとはいえ、そこに何らの意義もみとめない。何かでよんだ吉行氏の父君が、昭和初期に現在の奇クの様な雑誌で活躍されたというのも、何かそういう関連があるのかもしれないと思う。

千草氏の「のおと・あと・らんだむ」のい

つかの記事の如く、川端康成、武田泰淳、福永武彦、丹羽文雄といった大先生は(島尾敏尾も大好き)SMなどチャリとも見せないように、しかし大変SMに理解のある方々だということとは、SMを売物にしている梶山、柴錬、吉行氏とは全く対称的です。本物とはそんなに図々しくない。いかに批判はあっても大江健三郎氏の作品はMであり、本質がホモであることは、武田泰淳がSMを立派な芸術として花開かしていることと同じく、正しい文学者の道だと思う。

売物というものは、心の中で赤んべえをしてでも出来るなりわいにすぎないが、理解とか愛情をもつということは、作家にとっても人間の一番大切なことだ。

北原文夫はSM気の一片だにない作家であり正直です。「サド」のものを読めば、私達と違って、はっきり女性の女性的部分すべてに嫌悪を示し、たとえ女性でも後を讃美し、彼自身はむしろMに近く、又同性愛者ではないかと思われる。(渋谷氏の訳業を通じてしか知らないが)これはこれで実に正直ではないか。サドはちっとも嘘を書かなかった。売物のうそと、真面目の本物は知る人ぞ知るだ。



妊娠四カ月の妻のために休暇をとり、息子（六才）をつれて先週木馬座『アラジンと魔法のランプ』明日は『孫悟空』いや忙しい。

奇譚クラブ「骨まで縛れ」すぐ「花と蛇」

の（続）だなどピンとききました。一切新聞紙に広告しない筈の奇クの名が、毎日の映画欄に映画の題名に、奇譚クラブ「骨まで縛れ」と堂々とのるとは（いやはや皮肉）前代未聞でありましょう。鬼六先生ではないが奇クのこういう進出（映画会社のもうけのため）は一向にうれしくない。むしろこわいのです。ブームは一番キケンです。嵐の様に根こそぎにされます。

アイサイクン

我が愛妻君は二度目の妊娠ですが、これが最後でしょう（子供は二人以上ほしくないの）とみに色づき、豊満つややかなる恋女房をうちながめ（三三才ですが）相変らず縛らせてはもらえず、写真などもってのほか。

どうも便秘の様だから浣腸したいわ、などとのたまうから、あらうれしや、いでや、それがしともちかけしに、とんでもない、絶対にいやだわ、自分でやりますと一笑にふされしくやしさよ。完全無欠、PTA、倫理道德ゴスイセン、大良識ノーマル型女房に、せっしゃくわん。

九月号「私も一言」おもだか・しの様の私への反論（首をひねりました。これは反論に非ず、私と同じ考え）私のかきかたが至らなかつたのでしよう。しかし、今一度よんでいただければ判るはずです。特高はなやかなりし頃、奇クの様な雑誌は存在を許されなかつた筈ですし、特高の様なものに日本に復活して彼等だけが楽しみ、SMもプレーとしてではなく、本当の苦しみを国民が味うことを望む奇クの読者が一体何人いるでしょうか。

昨年九・三〇事件以降インドネシアで三万五千人の人が赤の名で後手にくられ虐殺され、子供が人間の耳を手にとって遊んでいたという（朝日新聞）のをきくと、ぞっとします。現に今、ベトナムでも、インドネシアでも、コンゴでも毎日起きているのです。私は右でも左でもない、平和な国でありたいのです。平和な国でこそ、SMが官権だけの一方的悪にならずにすむのです。いずれにせよ、私もSM好きであり、別に健康だの、ノーマルだのと言われるとおかど違いです。「もし興味おありでしたら、昭和二八年12月号に載っている（僕の記録）（黒井珍平）を読んでいただければわかります」

言いかえれば特高からのSMをみちびかれ

たとしても、特高のSMを認めることは、平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象とされを奇クの存在を否定し、自らSMを悪とみとめるというものです。おもだか・しの様のお言葉、真意に苦しみます。何故四面楚歌なのでしょう？

奇クで女高生蒸発事件を八月号24頁であつておられました。週刊紙各様、娘が悪いつとか、この中年男は悪鬼だとか。ただ一つ或る週刊紙で、この男の英文日記にコレクター（とんでもないこじつけ）にヒントを得たとあり、これは大変な間違いだと思います。ウィリアムワイラー（名画「ローマの休日」をとった人）大先生の「コレクター」は何年にも亘って論じられるべきですが（文学界のサド・アポリネールの如く）蝶コレクターが人間の女をコレクションにするという設定はワイラー監督があくまで映画の大先生である偉大さの証明にはなっても、この監督がSM好きなどという結論は全く出てこない。いずれにせよ、女高生を誘拐した男がコレクターをヒントにしたなど、おかど違いも甚しく許されることではない。この人はコレクターの面白さを見間違えたのだ。

侏<sup>こ</sup> 儒<sup>びと</sup> 幻<sup>ふあんたじー</sup> 想

夜 乃 探 郎



「侏儒幻想」という表題を原稿用紙の一行に書いた時、夜尾探郎は深い哀愁に流された。それは久方振りに畸人国放浪が出来る、見世物への憧憬がひめられていたからでもある。

「さあーさ、はいつて御覧、この絵の通り稀代のろくろ首娘だ。孫子の代まで話の種になる娘。それぞれ今返事をする、おーい花ちゃ

んや、花ちゃんやい」

小屋がけの木戸口で囁れ声をしぼっているのは、おなじみの香具師である。すると、声に應じて中からは女の返事がある。

「あーい、あいあい」

極彩色の看板を見ると、美女が慎しく肘掛に凭れて居睡っている。又、その傍らでは侍女らしい女がにゅーっ、ぬるぬるとまるで大蛇のような長い白首をのばして、一軒も先にある行燈の油を赤い舌を出してペロペロと嘗めている。夜は寝静まって正に丑三つ頃の模様である。

黄昏れた七面様の御堂にはかんかんと百目蟬燭が立ち、どんつくどんつく太鼓の音につれて、南無妙法蓮華経の声の喧しい縁日。

——そのろくろ首娘の隣りは、これはカラクリなしの因果物で力持ちと侏儒の組合せである。

急造の舞台では赤いパンツひとつの太ちよの男が重量上げをやっていた。それが終ると侏儒が登場、若い女だった。しかも昔のお姫さまを思わせるような派手な衣裳をまとって居り、裾が動く度にひらかれ緋縮緬の腰のものが、ちらちらとのぞけた。金襴緞子の帯が灯に映え、その締められた上のおあたりはふ



つくりとした隆越が見られた。ポテポテした指で触ったら吸い込まれるようなグロテスクな体を持つ男と、まるで人形その物の小さな女のカップルは、それだけで奇怪な空気をもたしめていた。

「さあーさ。いよいよ初じまり初じまり。コビトのベッピンサンが、この巨人のてのひらで、きれいなおべべをヒラヒラさせて逆立ちをするという曲芸だ、曲芸だ」

香具師が現われて口上を述べた。

「見えるぞ、見えるぞ」

客席からのヤジの中で、その珍芸は初まる。……ベトベトに濡れた大きなてのひらの上で、コビトは蝶かと思うような身軽な動作でトンボを切ったり、片手だけで逆立ちをしたり、それにつれて、すり切れたレコードから流行おくれの歌が追ってゆく。最後は、てのひらがだんだんせばまりコビトの雪チャンが、ぎうっと体をにぎられバタバタしながら黄色い悲鳴をあげる所で終り、お後の交替というわけだ。

夜は更けて、いくつか小屋掛けされている見世物のやぶけ天幕から秋風がしのび込んで

くる。一日首をさらしているろくろ首娘は、むしろが掛けられてある便所に入り心ゆくまでしゃがんでいた。ヒュル、ヒュルという音がいつまでも続くのが哀れに響く。因果物の小屋では、もろ肌ぬきになった雪チャンが、昼間、舞台上で見た可憐な顔付もどこへやら女だてらにあぐらをかき、とんだ姿体を見せていた。

「ねエ、なんといったって、あたいがこの小屋の花形役者さ。おい、デブ公、今日のざまはなんだヨ。へんにヤニさがってさ。お前のゆびがあたいの大事なおちちにふれたよ。このスケベイ」

雪チャンは力持ちのそばにより顔にツバをかけるつもりが足にかかったので、なおさらゴキゲンななめである。

おどろくではないか。象のような肥満体をも世もない風情でちぢめ、そう言っても太っちゃうなデブデブでは、山のような物量には変らないが、「おらあ、どうせ馬鹿なんだ」と、哀願しきりである。このデブ公は雪チャンにホレホレ抜いてるのだから仕方ない。ノミの夫婦という言葉があるが、極大と極小の取合せはまことに珍なるものだ。しかも、毎晩、おお、女王さまよと、雪チャンの前に

土下座し三拝九拝して、はては大粒のなみだを流しオイオイ泣いてしまふのだから始末に置けない。

「さあ、いつもの調教をしてあげる」

雪チャンは、よくしなる愛用の小さい鞭を取出した。

デブ公の体とくらべれば、まるでオモチャのような鞭だが、これがこの男は何よりも恐しい代物なのだ。……鞭先が宙ニオドル。ピシッ／＼ト鳴ル。デブ公が四ツン這イニナッテグルグル楽屋ノ中ヲマワル。

「ホラ、チンチンしな」

雪チャンは背のびして号令をかけた。

デブ公は唇からよだれをたらし、ゴリラのような醜怪な顔に油汗をにじませ、手首をまげ「ウウッ」と吠えた。

「能無しのバカヤロウ」

雪チャンは体に似合わない大声を張り上げた。

「その吠き方はなにさ。犬らしくもって可愛くワンとやりな」

雪チャンはまたもムチを鳴らした。デブ公のダブダブのタイコ腰は波うち、充血した顔からポトポトと汗がゴザの上に垂れる。

「ウ・ウウウ、女王さまさま、もっと……」

「と、ムチをお願いしますだ」

雪チャンは汗一つ見せず立ちはだかつている。やがて、嫣然と笑った。紅い花が開くように笑った。

——ここまで書いて夜尾探郎はニヤリと笑った。雪チャンのように色っぽくないのは男だから仕方ない。八須渾サンお好みの逆転趣味とやらになっているかな。その机の上には奇ク数冊と江戸川乱歩の「影男」だの「グロテスク」昭和四年九月号・見世物特集だの参考資料が頁がひらかれ散らばっている。小娘に片足上げさせションさせるのは十八番だが男のデブチンに犬のマネをけしかけるのはどうもにがてだ。しかし、コビトと巨人の取組は奇抜であることはたしかだ。美少女責めより、この方が「奇譚」かな。そういう、もう一名仲間に入れないと乱歩式にはなるけど谷崎流にはまずいようだ。さてと、親方を出そうか。

親方が用達より帰ってきた。デブ公と雪チャンのプレイを見ると、またやっているなと舌打ちしてドナった。

「いい加減にしないか。まるでチンドン屋そっくりだ。ポンチ絵もよい所だぜ」

雪チャンが紅い唇をとがらして言葉を返した。

「親方、あたいはデブ公が頼むからおなさけでやってあげてるんだ。なにさ、いい気になってドナリやがって、あたいはね、この一座をひとり背おってるお役者さまだ。お客さんはみんな、このあたいの逆立ちを目当てにやってくるのだよ」

親方は困った顔をみせた。デブ公が雪チャンにホレテイルことを知っているのだ。しかもデブ公は親方の息子なのである。ただ、恋は恋でもデブ公のマゾというおまけがつくので意味が判らず、つい、叱かるのである。親から見れば牛だつてクシャミで吹きとばせそうな力自慢のデブ公が、まっばだかでチンチンしている姿はまことに哀れであり、しかもそれを命令しているのが小生意気なコビトときてるんだから腰が立つ。そうかと言って雪チャンのゴキゲンを損じたら商売にも影響するのだ。

「あたいはこの小屋で逆立ちやめた。どこの一座だってあたいたい位になると来てくれってうるさいのさ」

それを知ってるから雪チャンは勝ほこって傲然として赤い気焰をあげる。

「おとっさんよ。早く女王さまにあやまってくれ。そうでないとおらあ、おらあ……」

デブ公は汗とほこりにまみれた体をあおむけにさせジタバタさせて親方に願うのだ。

雪チャンは、楽屋着をぬぐと、お腰ひとつになつて、ピヨコンとデブ公のむねの上に乗った。下はノーパンである。デブ公の醜悪な面に喜悦が走った。

「さア、いつものゴホウビだよ」

雪チャンは立ションをはじめ。体の自由がきく彼女には、そんなポーズは朝飯前だ。注文があるならトンボを切りつつションも出来るかも知れないのだ。

——探郎は煙草に火を付けた。やっと男女の場面にションが出てきたので筆をちょっとやすめる。いつでも、そのくだりになるとペンをとめ、あらぬ空想にわれを忘れるのだ。その場面を進めるよりその方が楽だし、また、ネクタールの千変万化の絵模様は、あまり細密描写ができない。下手するとエロチズムでなく「エロ」になってしまうからだ。読者によるこんでもらうとしてもカットされるし頭の中に書くのは最も無難である。本当はネクタールが序幕で、お後は親方もまぜてダブルキャストの白・黒・黒を開始させたら



珍なる実験風景になり、レスリングの体位もそれこそ科学的に面白い参考になるのだが……、まあ、雑談はやめよう。

○

シヨんな事があってから実質共に小さい体ながら雪チャンは一座の女王さまで、デブ公はいわずもがな、親方も下男になりさがってしまった。逆立ちの曲芸の時は、お客の前でますます世にも可憐な顔付で演技するのだがその他はコロンダ箸も立てにしないという有様だ。はじめの内は商売と息子のためだとガマンしてヘイコラしていた親方も、いつのまにか雪チャンのシヨンをカッ望し、ムチの洗礼でオイオイと泣き声を出し、しわくちや顔を赤黒くさせて「女王さま」さけぶようになったのだから、げに、人間って奇体なけだものである。

雨降りで一座は休み。それで朝から雪チャンはアクビばかりしている。

デブ公が腰を波うたせて、おそろおそろ近づいてくる。

「女王様、たまには黄色い宝石も、下郎の口にお落し下されい」

「今日はアレなんだから駄目よ。あっちに行

きな。むさくるしい」

雪チャンはデブ公に、そっぽをむき舌打ちをした。

「そのバラの雫でもようがす。ひとつわっしにチョウダイさせて下せえ」

親方が楽屋口の幕をあけ顔を出した。雪チャンは一人で楽屋を占領し、デブと親方は便所の前の地面にムシロを敷いてねることになっていた。

○

——大の方を黄色い宝石とは平凡だが、Mensesをバラの雫とは面白いと、探郎は自分のアイデアを自分でホメル。しかし、親方はこんな言葉を使うほど詩人に描写していない。不自然だ。これは筆がすべるといふ事である。気をつけよう。彼は小説を書く場合、作法を無視してペンを走らせる方である。原稿用紙にブツケ本番。書いてる内に、筋が浮んできてその流れにペンをまかせる。だから思いがけない場面が現われ言葉がでることになる。いま、Mensesが出たのも、書いてるうちに、ひょいと間宮氏の「今晚は、間宮です」の文章中、「マニアがグウーンと増える事」と思い、期待している「という menses 礼讃を思い出しサービスに一丁入れてやるか

となったものである。

○

天幕のやぶけた所から雪チャンは外をながめた。

三味の糸のような小雨が降っている。十人並以上の美貌を持つ彼女（か）はコビトであることがとても淋しいのである。お客の中には立派な青年も居り、楽屋までおとずれ、お茶などさそうこともある。そんなとき、小さなハートがドキンドキンとみやくうってポーツと顔を赤らめることもある。しかし、しょせんは好奇心から出た訪問であることが痛いほど承知しているので、かえってわびしいのだ。

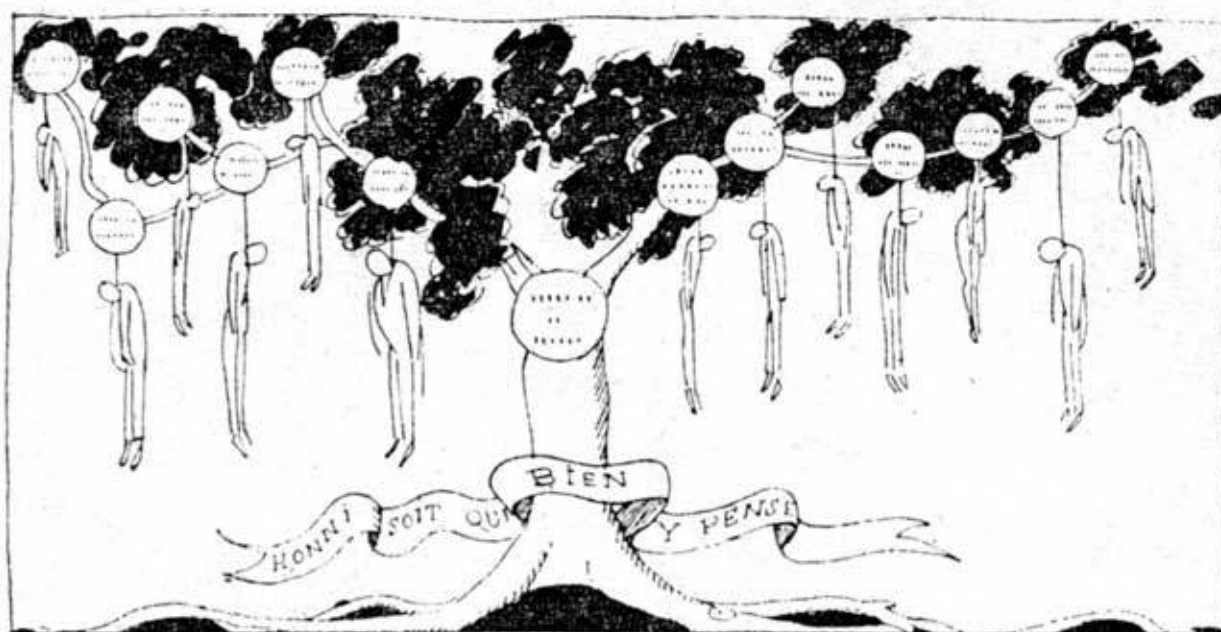
雪チャンも年頃である。不具であっても夢はある。だが、将来は何も無い。あるのは、醜怪なデブ公と親方を土下座させて、うっぷんをはらすという——それだけだ。

「金襴緞子の帯締めながら、花嫁御寮はなぜ泣くのだろう……」

お嫁になれない雪チャンは唄ってる。真珠のような玉の雫を、うるんだひとみから、こぼしながら……。

× × ×

(終)



私は、しばらく、あちらの方に居りましたが、知る人ぞ知る私の性質は変えることができず、手に入れる本はことごとく殺人か処刑に関するものばかり。日本語で書かれたもの

## あちら版殺人小説

黒 田 壽

でさえ想像が入りまじるのに、怪しげな語学力でサワリの部分だけ読むのですから、実際に書かれているものとは、全く異ったものになっていることを、もう一度お断りしておき

ます。

まず手に入れたものは、ゴールドメタル・シリーズと称して週刊誌並の値段の三流誌十二冊、その題名に曰く。

絞首台上の女

死刑独房の女

毒薬の女

殺人アパートの女

緋文字烙印の女

悪魔の家の女

悪夢の家の女

………

等々、実話に取材したもので、パーシィ・トンプソン（絞首刑）ルス・スナイダー（電気刑）アダ・アツプルゲイト（絞首刑）パトリシヤ・ロナーガン（ガス死刑）以下の女死刑囚が登場します。もっとも私は彼女らの犯罪や裁判の経過はどうでもよく、その最期の場面にしか興味はないので、終身刑以下で終ったものは立読みだけで間に合わせました。

このなかにあった死刑宣告文をひとつ紹介しますと

……所長指名の人物の執行のもとに、致死力をもつ電流を体内に通じ、死に致るまで電流を供給し続けることによって死刑に処せら



れる。神よ、被告の魂にあわれみを……

我国で云えばマンガ読本みたいな雑誌に、こんな戯曲がありました。

王「ネル・グインをつれてこい」

家来、声に応じて美しい侍女を伴れてあらわれ王の伽を命じる。そして翌朝、

王「彼女の首をちょん斬れ」

この態度たるや、まるで朝食をもってこいと命令するのとかわらぬ無造作なもの。家来がまた、余程なれているものと見え、平然と彼女を裏庭につれだす。ただ一人おちついていられないのがネル嬢で、蒼白になって泣きわめいたが、その美しい首は一刀のもとに打ち落される。血のしたたる生首は銀盆にのせられて再び王のもとへ。王はごきげん斜めならず、やがて夜がくる。

「ジェーン・シヨアをつれてこい」

家来、彼女をつれてあらわれる。翌朝

「首をちょん斬れ」

そこで哀れにもジェーン嬢の首も斬られてしまう。またその晩

「美わしのロザムンドを呼べ」

美わしのロザムンド嬢、召に応じてあらわれ、翌朝には友達と同じく生首となって一巻の終り、だがある晩

「サユリ・ヨシナガをつれてこい」

翌朝

「王妃の首をちょん斬れ」

題して「ヘンリー八世千夜一夜」例の美女の生首が大好きという王様です。この作の大部分を書いたのは、どうやらマーク・トウェンらしい。

ともかく、ヘンリー八世存世中に首を落された王妃はアン・ボーレンとキャサリン・ワードの二人。貴族級ではサルズベリー伯爵夫人ほか七人、女官侍女に至ってはムリョ八百八人（まさか……だがホントかも知れん）彼女たちが、非業の最期をとげたロンドン塔。その首斬役人の唄を御存知ですか？

## 斧と生首

アンを斬ったはこの刃  
きれいな首がとんだとき  
あんまり早く斬れたんで  
痛みはちっとも感じない

伯爵夫人はあばれてた

日頃のたしなみどうしたの

とうとう斧は首と胴

見事ふたつに断ち割った

当時の死刑で最もいさぎよいとされていたのは、きちんと正座しているところを背後から大刀で首を刎ねるもので、身分の低いものはすべて斧で片附けられた。しかし、この待遇をうけたのはアン王妃だけで、キャサリンもサルズベリーも斧で処刑された。

メリー・スチュアートの如きはすくなくとも女王なのだから、当然刀を使用するものと思っていたのに、斧で斬られると知ってあばれた話がある。もっともそのメリー自身が十八才の前女王ジェーン・グレーをやはり斧で斬首しているのだからやむを得ない。

ジェーン・グレーの最期の言葉は「わが夫が先ならばあとを追おう。われが先ならば夫を待とう」が公式に残っているが、実際には「どうすればよいのです。わたしはどうすればよいのです」であったと伝えられる。

## 悲劇の女王

世界でもっとも美しく

かしこいジェーンの首がとぶ  
こんなかわいい頸なのに  
なんと刃がかけていた

銅版画ですばらしいのは、一七五七年の作で、「内臓をえぐり、首を切断し、四つ裂きにする処刑」でした。おそらく反逆罪に問われたのでしょう。美女の生首はすでに前方にころがり、喉から脚のつけねまで断ちわられた胴体が、更に二人の刑吏によって両脚を大きくひらかれている。もう一人がその間めがけて斧をふりおろそうとしており、四人目の刑吏の手にはぬきとった内臓が高くかかげられている、という場面です。

もう一枚はペルシャで行なわれた鋸引きの刑で、サレンシア女帝を呪い殺そうとした罪で、シメオン姉妹が生きながら四つ裂きにされている絵です。

広場におかれた台の上に二人の美女が横たわり、一人は胴体を横に、もう一人は股間から縦に巨大な鋸をあてられていました。合計八つになった死体は、あとで市内各所の晒し台に吊り下げられましたが、女帝は病氣回復のまじないと称して、その間を何度もくぐりぬけたと伝えられます。

このほか各種の刑具や、それらを使つての惨酷な処刑の模様を画いたものもありましたが、これはのちにゆずります。

しかし、最大の収獲はジョン・スワインの「拷問部屋の快楽」でした。これには西洋、特に英国が主でしたが、世界各国で、どんな拷問や処刑が行なわれたかが書いてありました。このほかコリン・ウイルソンの「殺人犯科帳」などが、これからのタネ本となっております。

米国には「殺人研究家」と称するものがおり、エドモンド・ピアソンに云わせれば「人間十人のうち、八人は殺人に興味をもっている。残り二人のうち一人は偽善者で、内心では同様興味があるのだ。最後の一人のうち何%かは実行する」のだそうです。私はすくなくとも最後の一人ではありませんから御安心ください。

ビッケレイ博士に至っては、「殺人とは最高のビジネスである」とまで、極言しています。奇ク誌上にも拷問だけでなくどしどし殺人を加えたいのですが、皆様は如何でしょうか。これら新しいタネを、刑罰篇と犯罪篇に別けて、何かものにしようと思っております

が、今回は総論的に書きます。

大量殺人、いわゆる「大虐殺」は戦争や宗教が原因となつていますが、古いところでは紀元前三三一年にアレキサンダー大王が一人を殺しています。尚このうち八千人は首を斬られ、二千人はハリツケに処せられたと言われます。

更に幼いイエスを殺すために、ヘロデ王がベツヘルムの幼児すべてを殺す命令をだし、難をまぬがれたもの数名というキリスト受難史の第一ページの話があり、数の多いものは一二六九年のニシャプールで、百七十四万人がジンギスカンに殺されています。

もっとも大虐殺といっても、その数はあてにならず、十倍から百倍位になっているのが普通です。第二次大戦におけるナチス・ドイツのユダヤ人虐殺なども、正確な数はおそらく永久にわからぬでしょう。

ここで、ひとつだけ「大虐殺」の例をあげてみます。それは一七〇三年のニスメの事件で、これは小規模ながら重大な意味をもっています。

というのは、前記ユダヤ人殺しても何年もかけて行ったものであるし、のがれ得たものもあるのに、この例ではただ一日で町の住人



すべてが殺されたのです。

市民たちはズタズタに切り刻まれ、火にあぶられ手足や首を斬り落されて死にました。若い女性たちは、死にもまさる恥ずかしめをうけてから、木や軒先に吊り下げられ、遠くからたわむれに射つ銃の的になりました。それもわざと急所をはずして射つのです。二十一発まで生きていて、二十二発目が狙いが狂ったのか心臓に命中、やっと絶命した貴婦人もありました。

彼女たちの死体は一糸まとわぬ全裸か、或は聖書からちぎった一枚の紙をはりつけただけで街頭に晒されました。結局この日の町に居たもので生きのびたものはなく、ちょうど隣町に行っていた十七才の少女一人を除いて皆殺しになったのです。しかも、この少女も翌日には捕えられ、恐ろしい凌辱にあつてから串刺しにされ、町の曲り角に、そのまま晒されて息絶えました。

処刑に用いる刑具がまた多種多様で、その多くは皆様御承知でしょうが、今度新しい知識を得たので御紹介します。

二枚の扉のついた女性の像があり、これを開いて囚人をなかに押しこめ、扉をしめると

内側についた無数の釘が彼女の肉体、それも両眼、口、心臓といった急所を刺す様になっている。刺殺されたあとの死体は足の下の台がひらいて、そのまま、まっくらな死体置場におちてゆくという刑具。即死することと、断末魔の苦しみが外から見えぬことが、女性にむごかった中世時代のものとして、すぐれているという刑具。

この「アイゼルネ・ユングフラウ」を普通「鉄の処女」と云ってききましたが、これは正確には「鉄の乙女」と訳した方が正しいのだそうです（大場正史氏説）

「鉄の処女」と呼ぶべきものは「アイアン・バージン」と称する処女マリアの木像で、これは逆に短剣の刃が外側に向けて無数についており、その両腕は機械仕掛けで囚人を抱きかかえるようになっています。もだえ苦しむところがよく見えるだけ「乙女」より重刑のようです。

刃を身体じゅうに突きたてられた彼女は悲鳴をあげてもがいたが、もうのがれる道はなかった。数分後腕がもとの位置にもどったとき、美しい女体はどこどころ大きくえぐりとられて横たわり、失った部分は像の刃先きに突き刺ったまま血汐を滴らせていた。

もうひとつ「バーテン・バーテンの処女」というものがあり、これは像の前に落し穴があつて、女囚がその前に近づくと踏板がはずれる仕掛け。底になにかあるかは御想像つくでしょう。彼女たちはたちまち哀れな最期をとげてしまうのです。或るものは槍に串刺しに、或るものは斧に胴を両断されて……。

ウォルター・ベサントが「鉄の乙女」について、この刑をうけた犠牲者が語る形成で書いておりますが、これを黒田寿式に大改ざんしてみましよう。ほかの処刑も皆実際に行なわれたものばかりです。

### 亡霊クローは語る

彼等はわたしを死刑にしました。わたしが反逆をくわだてたと言うのです。わたしの十二人の友達も同じく死刑を宣告されました。こんな若い娘たちが、本当に反逆をしたと考えているのでしょうか。いいえ、わたしは知っています。彼等はただ、若く美しい乙女を死刑にしてみたいだけなのです。

友達次々と処刑されてゆきました。反逆の名を科せられた以上、絞首や斬首のような軽い死刑は許されません。ゆっくりと時間をかけてなぶり殺しにするのです。これはあま

り嬉しくはありません。

わたしは「鉄の乙女」のなかに入れられることになりました。有難いことに、これならすぐに死ぬことができるのです。心の中では喜びましたが、仲間にわるいので表面では恐ろしくてたまらぬように、泣いたりわめいたりしてみせました。

ピアは鉄串に身体をつき刺され、もがくのもかまわずラードをぬられて、火の上をぐるぐるとひっくりかえされています。まるでバーベキューのように。絶命するのをまって首をたたき落し、火を強くすると、二十才の若アユの様にピチピチした肢体が、たちまち黒ずんでゆきました。

アンは油でゆでられる刑です。最初はあまりあつくない温度でいいかげん苦しめてから外に引きあげ、身体にメリケン粉をたっぷりぬってから再び油の中へ……それがやがて煮えたぎってくると……つまり彼女はフライになったのです。魚ならぬ若い女性が……

最も幸運だったのはミッチイで、車裂きになる予定でした。いつ彼女の身体が、ピシリと絶叫もろとも裂けるかと思っていたところ、なんとしたとか車がこわれてしまい、股関節が脱臼しただけ。その結果特に減刑されて

首を鋸で斬り落されただけですみました。

その代りフランソアーズは木馬責めの木馬を斧にかえて処刑されました。刃を上にもつけた斧の上に、おそろおそろまたがった時は無事でしたが、両足におもしろをつけ次第に増量してゆくのです。やがて刃は肉体に食いこんで、遂にはおへソのあたりまで割ってゆきました。ここで背後に立っていた刑吏が一刀をふるって首を刎ねます。ということは、この時まで生きていたのです。

デビーは袋につめて河の中にザンブリと無造作に放りこむだけ。彼女は泳ぎの名手でしたが、これではどうにもなりません。しばらく袋がムズムズと動いていましたが、やがて河の底へと沈んでゆき、二十一年の生涯を閉じるのです。なまじ泳げるだけに、よい口惜しかったでしょう。

ミレーヌはよく乾いた松葉の先をとがらしものを、彼女の身体のあらゆる部分、胸にも腹にも背中にも、いたるところに突き刺してから火をつけました。彼女は火につつまれながらあばれまわりましたが、その恰好がまるでみのおどりの様で、あまりおかしかったので、わたしは思わず笑ってしまいました。次がわたしの番だというのに。

いよいよ死ぬ時がきました。刑吏はわたしを「鉄の乙女」のなかに入れ、まっすぐ立たせると、扉をボタンとしました。それと同時に百五十本の鋭い短剣の刃が、わたしの両眼を、ふたつの乳房を、ふくよかな下腹を、更に背中やその他すべての場所にふかぶかと突き刺さります。しかし、痛い！と感じたのはほんの一瞬で、すぐにわたしは昇天し前の仲間に加わりました。二十六才を一期として……ほかの友達も次々とやってきましたが、彼女たちは気の毒にも、ひどく不愉快な目にあっていました。

即ち、キムは生きたままの皮はぎです。珍しいプラチナ・ブロンドの髪をつけた頭皮からはじめて、そのすきとおる様な美しい皮膚を、すこしづつ下方にむかってはいでゆくのです。それでも多量の出血のため、乳房の皮膚をはいだあたりで彼女は死にました。とみるや、速度を早めて全身の皮膚をはぎ、見事ななめし皮を作ったのです。

ジャクリーヌは両手を縛り、二本の木に頭を下に両脚をひらいて逆さに吊りさげ、鋭いナイフで、身体を切り開き、その傷口に角製の火薬入れをつっこんで、これに火をつけ、愛らしい十七才の処女の肉体を粉々にふっと



ばしてしまいました。わずかに首が残っただけで、その首にも傷がついていたので空しく投げすてられたのです。

デボラは丸裸にされ、頭を両脚の中にはさんだボールの形に縛りあげられて、急な坂の上からゴロゴロと転がすのです。何回かくり

### 山原清子嬢の仕置図

### 入墨女賊拷問刑罰集

キャビネ版印画紙焼付

各組 三枚一組 五〇〇円  
八組 全部にて 三五〇〇円

○女賊仰向け木馬責め

略号 (よひ)

○全裸の入墨女賊折檻

略号 (よせ)

○入墨女賊笞打ち糾問

略号 (よゆ)

○女賊ハリツケ拷問

略号 (よめ)

○凄絶海老責め拷問

略号 (よす)

○全裸四つ這い木馬責め

略号 (よも)

○逆さ吊りのお仕置

略号 (よき)

○大の字磔女賊処刑

略号 (よさ)

かえして息も絶え絶えになってから、坂の下に待ちかまえていた刑事が、このボールを槍でもってズブリと受けとめます。ちようど頸根を深く刺していました。

エレオノラも全裸にして歩かせ、背後から両の耳と手首を斬り落とされました。彼女はこの苦痛に耐えかねて、ひと思いに殺してと願いましたが、なかなか許されず、鼻をそぎ両眼をえぐり、四肢をつけねから斬り放したのち、ようやく頸骨を切断されました。女性として顔に傷をつけられたことを、彼女はひどく怒りながら仲間に加ります。

シルビヤはどこに行行ったのかと思っていたら、これらわたしたちの死体のいっばいしまった大箱のなかに押しこめられていました。結局は窒息して死んだのですが、それでも身体には何一つ傷つかずにすんだのですから、いちばん幸運だったと言えるでしょう。

ナタリーがやってきたのは、かなりの時間がたってからでした。彼女が苦しみから解放されるのには、相当の長い時間が必要だったのです。

まだ十九才の若さといっても、本当の反逆指導者の娘だから止むを得ぬのでしょうが、手足を焰で焼かれ、乳房をまっかに焼けた鉄

でえぐりとり、煮えくりかえる油を背中にかけてひっぱり合うのですが、三時間ほどかかってもまだ手足はバラバラになりません。

逆に群衆が殺到して短刀や棒で、突いたり撲ったりけとばしたり、身体をズタズタに刻み、とうとう若く美しい彼女は何一つ残さず消えてしまいました。

ようやく十三人全部そろったのできたわたしたちは、ちよっと前まで住んでいた肉体をさがしました。ピアやアンは首だけしか残っていません。胴体は食べられてしまったのでしょうか。ズタズタになった身体はもう自分にもわからぬほどで、獄門台に梟けられた生首もずいぶん不足しています。槍先に刺され街頭を行進している蒼ざめた生首はどうやらナタリーらしく、そのあとからも何本かの槍が心臓を焼とりの様に突き刺して続いています。胴体だけが晒し台の上にデンとおかれていますのはエレオノラのでしょうか。乳房が特に強く目を射ます。首と四肢がなく胴体だけ……まるでブタの丸焼きみたい……。

そして、このわたし、クローことクロチルド・ピエトランジェリの死体は、百五十もの傷をつけられて価値を失い、刑場の片隅に投げすてられてありました。

(終)

花<sup>はな</sup>

と

蛇<sup>へび</sup>

団 鬼 六

続編(第二十三回)

## 修 羅 図

小夜子の周囲に陣どり、何時でもガラス管の溶液を注入出来得る態勢をとっているズベ公達は、ギラギラ好奇に光る眼を、田代や森田にいたぶられている静子夫人の方へ向けている。好色な卑劣漢、田代と森田の手は、執拗に静子夫人の豊満な肉体のあちこちを這いずり廻り、切なげに狂おしげに夫人がのたち廻っているのを眼にするズベ公は、全身を包んでくる或る悩ましい性の妖気に、ごくつと唾をのみ、はしたなくも我が手で胸を押さえる者もいた。

「どうお嬢さん。あんたのお師匠さん、ずいぶんと悦んでいるじゃない。ごらんよ。両肢をモジモジさせてさ」

銀子は、深く頭をうなだれ、肩を震わせ鳴咽しつゞける小夜子のあごに手をかけて、その美しい顔を正面にこじあげる。

「あ、ああ」

小夜子は、ふと眼を開いた途端、身体全体を燃えるように熱くし、はっと顔を横へそらせてしまふのだった。

うら若い女性が一秒として正視出来るものではない修羅図、まして、深窓に生れ、おんば日傘で育った小夜子にしてみれば、魂が凍りつくばかりの光景であったに違いない。

田代も森田も川田も、いわば、情事の幾山河を踏み越えて来た、海千山千の手練手管師だ。むしろ、並の女より、こうした深窓の令夫人の方が、この道に踏みこんだ場合、実にもろく、崩れやすいものだという事を熟知している。それに静子夫人は、数々の調教によって女の悦びを感知する肉体になっているし燃え上らせることはお手のものであった。それに、歳も二十六、脂が乗って、熟れきった女盛りだ。

さあ、どうでもして、と静子夫人の方も、腹をすえてかかっているの、田代と森田もほくほくした思い、互に呼応するように、猫がねずみをいたぶるよう、誘ってはいなし、



いなしては誘い、かと思うと、急に激しく、柔軟な背中の中程にきびしく縛り合わされている両手首から腕、肩から乳房、臍から太腿へと執拗に矢玉を集中するのである。

耳たぶ、うなじのあたりを川田に吸われるに及んで、静子夫人は、キリキリ歯を噛み鳴らし、身も心も、バラバラにされた思い、肉体は更に火柱のように燃えさかった。

夢中になって、いわゆる色責めというやつを始めている三人の男を銀子と朱美は、くすくす笑い合っていて見たが、

「何だか、あたい達も変な気分になってきたわ。ね、そろそろ肝心の所を責めたら、どうなの。こちらのお嬢さん、待ちくたびれて、お尻をモジモジさせているわよ」

美女二人の前と後を同時に責めようという悪魔ならではの思いつかない残酷な責め、しかもそれだけで満足出来ず、こうした責めは静子夫人の要求のもとに行っているという形にし、夫人がこの世界に酔いしれ、歓喜していることを小夜子の眼の前で展開させるとともに、夫人自らの力で小夜子の教育をさせようという邪悪な計算を立てているのであった。

朱美が、ふと腕時計に眼をやる。

「まあ、あと三十分で十二時よ。大変な時間

を食っちゃったものね」

「え、もうそんな時間なの」

銀子が顔をしかめた。

美女達の調教にも規定というものがある。

それは、鬼源の提案で、スター達に充分睡眠だけはとらせなくてはならぬ故、どのような事情があるにせよ、調教は夜の十二時には終えなくてはならない規則を作ったのであった。そのあと、看板スターである静子夫人や京子などは、入浴させるなり、美容食を食べさせるなり、とにかく今夜は、明日のショーにそなえて、スターの肉体に気を配るようにと鬼源は、銀子と朱美にいい含めている。「ねえ、鬼源さんのいいつけで、調教は十二時で、ストップしなくちゃならないのよ。少し、急いでよ」

朱美は、川田に声をかけた。

文夫と美津子の調教にかかっている鬼源も十二時には、それをすませて、ここへ戻ってくるだろうし、調教ではなく、酒の肴として静子夫人や小夜子を面白半分にしたぶっている自分達を見て、彼は口をとがらすかも知れない。そんな意味のことを銀子は川田にいうのだった。

「よし、それじゃ、そろそろ本番といくか」

川田は、艶やかな、乳白色のうなじを大きく見せて、切なげに眼を閉じ、大きく息づいている静子夫人の耳もとに、口を寄せる。

「さ、奥さん、調教の時間は、あと三十分だそうだから、少し、急ぐぜ」

静子夫人は、そっと眼を開き、何か妖気を含んだうるむ瞳を物悲しげに細めて、前の小夜子を見つめるのであった。

男達が、自分に対し、そのおぞましい道具を使い始めれば、小夜子は、ズベ公達の手によって、同時に――。

浣腸責めというものが若い娘にとって、どれほど苦しい、恐しい邪悪な責めであるかは夫人が一番よく知っている。

まして、世のけがれを知らぬ、裕福な家庭に育った箱入娘の小夜子が、その残忍な責めを前にしての辛さ、羞しさを思うと、静子夫人は自分の命に換えても何とか救ってやりたという血走った気持になるのだった。

銀子と朱美は、ガラス管を小夜子の眼の前へちらつかせ、哄笑しながら、再び小夜子のうしろへ身をかがめ、いよいよその態勢に入り出すのであった。

「あっ、嫌っ、嫌っ、誰か、誰か助けて！」  
けたたましい小夜子の悲鳴を聞くと、ズベ

公達は、どっと笑い出した。

「誰か助けて、はよかったわね」

小夜子のせっぱつまった悲鳴が、滑稽なものに聞こえたのだろう。義子や悦子達は、くすくす笑いながら、狂おしく悶え泣き、八の字に固定された両肢を揺すりつづける小夜子の乳房や臍を指ではじきながら、

「一体、誰に助けてもらおうってのさ。笑わせないでよ」

そして、小夜子の号泣や悲鳴には頓着せず朱美は強引に可愛い豊麗な尻を両手で割り始める。

絹を裂くような小夜子の悲鳴。やる方ない苦痛のうめき。

「まあ、可愛いいわね。これ」

銀子に指でつつかれるに及んで、小夜子は気が狂ったように暴れ出し、激しく尻を振るのだった。

「いいかげんにおしよ。往生ぎわが悪すぎるわよ！」

小夜子の狂乱ぶりに、かっとして、義子が眼をつりあげ、いきなり、小夜子の頬を平手打ちする。ピシヤリ、ピシヤリ、と往復ビンタを食わされた小夜子は、美しい顔をひきつけ、憎悪のこもった瞳で、義子を睨むのだ。

った。

「何よ、その顔。何時までも大家のお嬢さんぶってると承知しないわよ。スターとして舞台に立てるよう、あたい達が磨きをかけてやるうってのに、どこまでも、さからう気なのかい」

義子は、そういつて、そんなみじめな恰好にされている小夜子の上から下まで、しげしげ見つめて、フンと鼻に小じわを寄せ、  
「いくら大家の御令嬢か知らないけど何さ、その恰好。何もかも丸出しにしてるくせに、一人前の口をきくんじゃないよ」

小夜子は、その美しい顔や首筋に、一層の紅を散らして、もうどうしようもなくなったように首を垂れてしまふのであった。

「ああー」

再び小夜子は、うなだれた顔をのけぞらせるようにあげ、キリキリと歯を噛み鳴らす。

銀子と朱美が、冷たい先端を、そっと当てがったのだ。

「ああ、先生——」

小夜子は、体の内部から突き上げてくる屈辱と羞恥、いや、もっと烈しい、全身がバラバラに飛び散るのではないかと思われるような狂おしい衝動に、筋肉という筋肉をつっぱ

らせ、助けを静子夫人に求めるのである。

「小、小夜子さん」

静子夫人も、寄せては返し、返しては寄せくる卑劣な男達のマッサージを全身に受け、くらくらくと頭は燃え、胸はつまり、身も心もズタズタにされてしまった思いの中で、きれぎれに小夜子の名を呼ぶのである。

ガラス管の中の溶液を一気に小夜子の体内に注ぎこむべく、朱美がポンプを押そうとすると、あわてて銀子がそれを止める。

「駄目よ。奥さんの方と一緒に始めなきゃ」  
そして、銀子は、川田に向かって声をかける。

「ね。こちらのお嬢さん、何時まで待たせる気なのよ」

へへへ、と川田は、いやらしく口元を歪めて、身をかがめて、夫人の麗わしい太腿、内腿に口吻しつづけている田代の肩をつつくのであった。

川田にそれを手渡された田代は、あえぎつづけている静子夫人の美しいうなじを下から見上げながら——。

「ま、待って、待って下さい」

静子夫人は、その瞬間、渾身の力を、ゆるみ切った全身に入れ、腰をひねってそらせる。



「おい、さからう気なのかよ」

川田は、舌打ちして、静子夫人の見事な双曲線を持つ尻を、うしろからピシャリと平手うちするのだった。

「そんな、せっかちな嫌ですわ」

静子夫人は、ぴったりと両腿を閉じ合わせその切長の美しい瞳に、初々しい羞恥の感情をにじませて田代を見下し、初花のようなえくぼをわざと作って見せるのだった。

調教時間は、もう三十分もない。たとえ、一時的ではあるにせよ、何とか小夜子のこの場の危機を救うには、鬼源や川田達から教えこまれた色気ある演技を逆用し、時間を稼ぐことだと熱病に冒されたような頭の中で、夫人はふと思いついたのである。

「どうしろというのかね」

田代はニヤニヤしながら、妖艶なばかりにきらめき始めた夫人の容貌を見上げている。

「まだ、それを使うのは早過ぎますわ」

静子夫人は、鼻を鳴らすようにいい、うつとりと眼を閉じ合わせ、そっと顔を横へそらせるのであった。

「だがよ。そう、ゆっくりもしてられねえんだ。調教時間に制約がついたのね」

森田は、夫人の見事な乳房をうしろから抱

きかかえるようにしながら、夫人の耳に口を当てていう。

「いや、いや」

静子夫人は、甘えかかるように首を振り、「静子の口から、おねだりするまで、それを使っちゃ嫌」

静子夫人は、胸を憐れせながら、羞らいのこもった風情で、身をくねらせ、必死な思いになっている。

そして夫人は、悪魔達から、あと何分かの邪悪な調教時間を奪いとるため、更に悲痛な決心をして、小夜子の方へ視線を向けるのであった。

「ねえ。小夜子さん。貴女もその内、この世界がどんな素晴らしいものであるか、きとおわかりになると思うわ。殿方にさからっちゃ駄目。一日も早く、舞台に立つ事が出来るよう努力して下さいね」

そんな風に、静子夫人が小夜子に対して教示し始めたことは、田代や森田にとって、不平であろう筈はない。自分の方から、そのように持ちかけ出した夫人を、ホクホクした思いで見つめながら、

「そうだよ、奥さん。小夜子は、あんたにとっちゃ日本舞踊の愛弟子だ。これからは秘密

ショーの愛弟子にしたつもりで、みっちり仕込んでくれなきゃ困るぜ」

森田は、そういつて、再び、毛むじらの手で見事な二つの雪山をつかみあげ、ゆっくりと揉み始める。

「さ、奥さん。弟子と仲良く天国をさまよわせてあげるぜ」

田代がそれを当てようとすると、静子夫人は、眉を八の字に寄せ、額には脂汗を流して絶体のピンチに立たされながらも、必死に尻を揺り動かして、右に左にそれをさけるのであった。

「おい、どうしたんだよ」

つい先程まで、鬼源や銀子達の調教を柔順に受け、幾度も果物を切って落した静子夫人が、今度は、妙に身体を揺り動かして、田代の矛先を避けようとするようなので、川田もふと小首をかしげるのだった。そして、腕時計に眼をやり、もう調教の時間がギリギリの所まで来ているのに気づいて、舌打ちするのだったが、急にキラリと眼を光らせ、静子夫人の耳たぶをいきなり激しくひっぱった。

「この阿女、小夜子をかばう気でいやがる」え、何だって、と、小夜子の方に陣どっているズベ公達は、眼をつりあげた。先程から

ズベ公達は、小夜子の尻に先端を押し当てたまま、モタモタしている男達の方に不快な眼を向けていたのであるが、静子夫人が、小夜子をかばおうとしているという川田の言葉にいきり立ち、

「そりゃ、どういう事なんだよ」

と、川田につめ寄るのだ。

「時間切れを狙ってやがるんだ。何のかんと俺達の責めを遅らしながら、調教時間を使わせようとしてやがる」

吐き出すように川田がいうと、

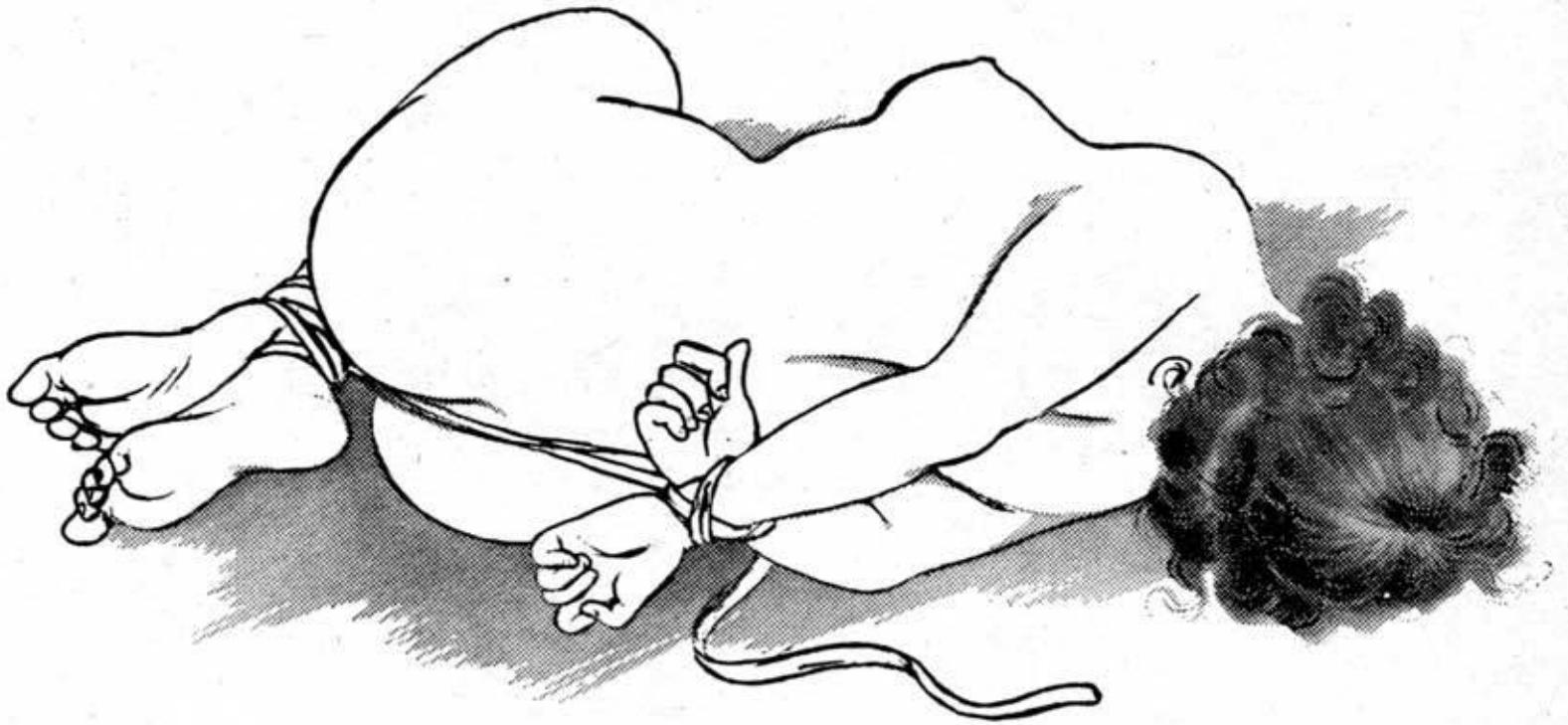
「色仕掛けでだまそうってわけね。なかなかの知能犯じゃないの」

銀子は、そういつて、眼を固く閉ざしている静子夫人の美しい横顔を憎々しげに見つめその高貴な感じのする鼻を指でつまみあげるのだった。

「ち、ちがいます！」

静子夫人は、激しく首を振って、銀子の手を避けながら叫ぶのだった。川田に本心を見抜かれ、狼狽した夫人は、何とかこの陰險な場面を切り抜けようと懸命になり出す。

「皆様のおかげで、静子がどんなに女の悦びを知る事が出来たか、それを小夜子さんに教えようとしたのです」



必死になって夫人は抗弁するのであった。時間を稼ぐために浅墓な演技をしたということがわかれれば、鬼畜に等しい川田や銀子達は自分だけではなく、小夜子にまで、もっと淫虐な別の責めを考え出すかも知れない。

「ほんとかね。奥さん」

田代は立上って、夫人の頬をつつく。

たとえ、今夜の調教から小夜子が逃れる事が出来たとしても、明日は明日の邪悪な拷問や調教が待っている。だが、その間に、奇蹟が起って、小夜子がこの地獄屋敷から逃亡出来るという事もあり得るのだ。はかない、悲しい望みでも、静子夫人は、それを信じたかったのだろう。

「ほんとですわ。社長」

静子夫人は、口のまわりに妖艶な微笑をうかべ、必死な思いで媚態を演じるのである。「そんな、何の経験もないお嬢さんを責めたって、面白くないじゃありませんか。ねえ。今夜は静子だけを、うんといじめて下さいませんか？」

「だがね。小夜子の方も、そろそろ調教にかからなきゃならないんだよ」

「ですから、静子がどんなに殿方に可愛がって頂いているか、それを小夜子さんにはつき



り見せてあげたいの。これだって調教の一つ  
と思いますわ」

なるほど、と田代は口元を歪めた。

「まず師匠が見本を弟子に示すってわけか」

「そうですわ。ですから、その浣腸は静子に  
して下さいまし」

よかろう、と田代はうなずき、川田や森田  
も同意して、朱美の方へ眼くばせをしたので  
浣腸器は小夜子の身体から引き抜かれた。

「——せ、先生！」

小夜子は、涙を一杯に浮かべた美しい双眸  
をあげ、何かいおうとしたが言葉にならず、  
再び、がっくり首を垂れ、肩を震わせて鳴咽  
するのだ。

静子夫人が我が身を犠牲にして、自分を救  
おうとしている——小夜子は夫人の心情がわ  
かって、顔も心も涙で一杯になった。

「先生っ、ど、どうして、私達は、こんなひ  
どい目に合わされなければならぬのです。  
ね先生！」

小夜子は、泣きじゃくりながら、叫ぶのだ  
った。

そんな小夜子の艶やかな黒髪を朱美は横  
からわしづかみにし、片手をあごの下へ入れ  
て、ぐいと顔を正面に向けさせる。

「ブツブツいわず、先生の方を見るのよ。あ  
んなのために、先生は見本を示して下さいさ  
るんだから」

## 失心する小夜子

——小夜子さん、お願い、静子を、静子を  
笑わないで頂戴——と、静子夫人は、美しい  
切長の瞳を物悲しげに細めて、じっと、小夜  
子の視線に合わせている。

そんな静子夫人の周囲を、取巻く卑劣漢達  
は、その前と後のどちらを先に責めるかをニ  
ヤヤ協議しているのだ。

「この両方を同時に使ってやろうか。え、奥  
さん」

森田と田代は、その各々が手に持つものを  
静子夫人の眼の前へ突き出すようにして、せ  
せら笑う。

「お——と、ケツの——を、同時に責められ  
りゃ、こたえられねえぜ。どうだい」

森田は、空虚な冷淡さを顔に表して、じっ  
と前を見ている静子夫人の頬を指でつつく。

「よ、返事しろよ」

川田が乳首を指ではじく。

静子夫人は、ぼんやりと川田の方へ視線を

向け、淋しげな微笑を口元に浮かべて、  
「お好きなようになさって下さいまし。お任  
せしますわ」

よしきた、と川田は、小夜子の足の下に置  
かれている洗面器を取り上げ、夫人の方へ運  
んでくる。

「小夜子嬢と違って、ベテランスターだから  
ね。もう少し、量をふやさなきゃあ」

銀子は、森田が手にしている浣腸器を取り  
それにたっぷり石けん水を注ぎこむのであ  
った。

田代は、静子夫人の豊かな乳房の一つ一つ  
を両手でやさしくするようにして、熱い口吻をし  
てから、

「いいね、奥さん。約束通り、小夜子に女の  
悦びというものを教えるのだよ」

静子夫人は、耳元に口を押しつけるように  
して、そんなことをいう田代に、ふと、柔か  
い、艶めかしい視線を向け

「わかりましたわ。でも、一つ御約束して」

「何だね」

「ずいぶんと長く調教をお受けしたので、静  
子、くたくたに疲れましたの。ですから、こ  
れがすんだら、小夜子さんも私も休ませて頂  
きたいのです」

「勿論だよ。明日は大切な日だからね」

そして、田代は、膝まづくようにし、夫人の麗わしい太腿からスベスベした胫のあたりまで激しく接吻の雨を降らす。

森田も銀子からガラス管を受取ると、先程と同じく、そっと夫人の背後へ廻り、ふくやかな乳白色の肩から、艶めかしい、したたるような首筋あたりをむさぼるように吸いながら、切なげに眉を寄せ、顔を横に伏せた静子夫人の美しく緊まった高貴な感じの鼻すじを眼を細めて眺めるのだった。

「今夜の調教は、これで打ち止めだ。だからさ、遠慮せず、見事に……して、小夜子嬢に見せてやるんだぜ」

森田は、夫人の耳たぶを軽く噛みながら、小さくささやくのだった。

「だって」

静子夫人は、身をよじり、顔をそむけ、鼻を鳴らすように小さくいう。

「それは、田代様や森田様の、リード次第でございますわ」

段々と赤味を増してきた美しい容貌に、はじらいのこもった微笑を作り、静子夫人は、頬から頸へかけての妖しいまでに艶々しい皮膚を次第にくっきりとさらし出し、熱い吐息

を吐くのであった。

田代は、静かに、……始めた。

「あ、ああ」

静子夫人は、小さく唇を開き、真珠のような歯並びをのぞかせて、一層、顔をのけぞらせる。

川田は、指で自分の鼻をこすりつつ、ふと小夜子の方へ好奇の眼を向ける。

朱美に、あごを持たれて、眼を夫人の方へ無理やりに向けられている小夜子の顔からは血の気がひき、額には、べっとりと脂汗が浮かんでいる。たまらなくなつて、眼を閉じると、銀子がいきなり、ピシヤリと小夜子の頬をぶつのであった。

「あんたの先生が、女の悦びつてものを、あんたに教える気になっているんじゃないの。ちゃんと、大きく眼を開いて、見学するんだよ」

つづいて朱美が、

「しっかり眼を向けていないと、この毛を引き抜くからね」

いきなり、カミの毛を引っぱられて、小夜子は悲鳴をあげ、再び、泣き濡れた瞳を開いたが、それは、深窓に生れ育った令嬢の、一秒として正視出来ぬ地獄図であった。思わず

体が火のように熱くなり、左右に開けて縄止めされている肢を激しく閉ざそうとして、身を震わせる小夜子である。

「どうしたい、お嬢さん。お前さんも、あんな風にしてほしくなつたんじゃないか」

川田は、ニヤニヤして、小夜子に近づき、縄に上下をしめ上げられているふくらした乳房の、赤い可憐な乳首をそっと指で押す。

ビクッと、身体を痙攣させながらも、小夜子は、

「お願いします。先生を、先生を許してあげて下さい！」

と、川田に対し、精一杯の哀願をするのだった。

「許してあげるも何も、ありや、静子夫人の希望でしてやってるんだぜ。どうしても見るに忍びねえというなら、お前さんが浣腸を希望するんだな」

ふと、それを耳にした静子夫人は、火柱のように燃えさかっている身体を揺る揺るしながら、声を震わせて叫ぶのだった。

「小、小夜子さん。私の事はかまわないで。こ、この浅ましい静子の姿を、黙って見ていて頂戴！」

声をふり絞るようにしていった静子夫人は



激しく……始めた田代の仕事に協力を示すかのように軽く……出すのであった。

なまじ小夜子が自分の身を思い、悪魔達に哀願し出せば、その気持を悪魔達は、巧みに利用し、身も心もズタズタに引裂くような責めを加えるに極まっている。それを静子夫人は知っているから、小夜子が川田に哀願し始めようとした事を必死になって、たしなめたのである。

「この人達がいう通り、静子は、静子は、こうされる事が、とても嬉しいの」

静子夫人は、小夜子の気持を自分から突っぱなそうとして、わざとそう叫び、涙を振りはらうように艶やかな黒髪を左右へ振ると、

「ねえ、社長」

何かにとり憑かれたように仕事をしている田代を見下して甘ったるく声をかけた。

「どうしたい。フフフ」

田代は、静子夫人の上気した美しい顔を見上げ、

「そろそろ、こいつを使うかね」

と、左手に持っていたものを右手に持ちかえ、その先端で、夫人の臍を軽く突つくのだった。

静子夫人は、その美しい顔も艶やかな首筋

も一層燃えるように赤くして、

「お受け致しますわ」

と、蚊の鳴くような声を出し、のけぞらせるように真っ赤な顔をそむけるのであった。

「じゃ、こっちの方もいいね」

森田の声が背後でし、夫人の量感のある尻を冷たいガラス管がピタピタたたいている。

「どうなんだ。はっきり返事しなよ」

「お、お受け致します」

静子夫人は、ひどく狼狽したようにブルブル尻まで震わせて、うなずくのであった。

言語に絶する同時責め、そして、その落花無惨の姿を、小夜子の世の汚れを知らぬつぶらな瞳に、はっきりと目撃させねばならぬのだ。

だが、今の静子夫人には、そうした懊悩や苦悩もない。すでに年増男の手練手管の術中にはまっていたから、羞恥や屈辱という備えも忘れて、半分、攻め手の中へ引っ張りこまれてしまっていたのだ。

当てがわれる。はっと腰をひく。だが、そうした拒否的な姿態は、知らず知らずのうちに夫人がとっている責め手の官能を揺さぶるためのポーズともいえるのだ。

「お願い、足も縛って」

静子夫人は、両腿を抱きかかえるようにして、……こもうとする田代に対していうのだった。

「小夜子さんが見えている前なので、自然に肢が羞しがって固くなりますの。お仕事がやりやすいように、しっかり縛って下さいまし」

「よし、わかった。いい度胸だぜ、奥さん」川田が、足枷にするための青竹とロープを持ちこんで来ると、田代の横に身を低めて、さ、奥さん、と夫人の白い脛について、催促する。

静子夫人は、今や、眼前の小夜子に対する羞恥の衣まで全く脱ぎ去ってしまったよう、うっとりとして眼を閉ざし、自分で静かに……始めるのである。

田代と川田は、いそいそとして、夫人の足首を青竹の両端にロープでつなぎ始める。その間、静子夫人は、ふと、顔をよじらせたりそむけたり、拒否にあらざる甘い否定のポーズをとっているが、ベテランの川田や田代の眼には、責め手の官能をくすぐるための意識的な羞恥行為を、夫人がとっていると映ずるのであった。

衆人環視の中で、まして、自分を日舞の師匠として見ていた小夜子の前で、言語に絶っ

する同時責め——それは、静子夫人にとって耐えようもない羞恥であるに違いないが、愛する人より受ける愛撫刺戟として、その大脳において受けとるべく、静子夫人は必死な努力をしている、という風に、先程からだまって、この光景を眺めている千代は感じるものであった。

と同時に、夫人をむきになって責める男達にせよ、女にせよ、憎いとか、腹が立つ、とかいう事だけで、それを行っているのではない。可愛さあまって、憎さが百倍、つまり、この屋敷に巣くうやくざやズベ公も、一様に美しい静子夫人に恋してしまっているのである。恋する故に責め、それも、夫人が一番羞恥を感じる部分に対して執拗に行うのだ。

幾度もくりかえす浣腸責めなど、ともすれば、責める方が、その醜悪化した女体を見て辟易するような場合もある筈だが、男が女を本当に恋した時は、その女性に不潔な部分など考えられないのである。

愛する美しい女性に対して浣腸器を使って、排便させるというのも、いわば、愛情による浄化作用だとしているのが、責め手の心理かも知れない。その美しさに対する試みという気持もあった。そして、責め手が、思い

知らされたことは、如何に、いじめても、泣かせても、美しいものは、やはり美しいという事であった。

天性の美貌を持つ静子夫人は、満座の中で排尿させられ、排便させられても、絶世の美女とうたわれた令夫人のイメージは、そこなわれないのである。いや、それどころか、邪悪で、異常な、地獄屋敷内の幽囚生活に浸ることにより、むしろ、静子夫人の美しい容貌や肉体には、一層のきがかけられ、一段と光彩を放ち出した感がある。と同時に、女としての肉と精神が、激しい調教と飼育の結果、根本的に、今までとは、うって変った別個の形へ移り変っていったのだ。

田代と森田が、各々の武器をそっと当て始めた。

「小、小夜子さん！」

静子夫人は、うっと首をのけぞらせると、救いを求めるように、小夜子の名を呼んだ。

落花微塵とすべりこむ。

その瞬間、小夜子は思わず悲鳴をあげて、眼を閉じた。くらくらとして、全身から血がひく思い、深い穴に吸いこまれていくように小夜子は意識を失ってしまった。

## 悪の部屋

冷たい空気に、頬をなせられ、ふと、小夜子は眼を覚した。

薄暗い牢舎の中である。氣を失っている間に、再び、ここへ運びこまれたものらしい。金網の張られた小さな窓から、ぼんやりと朝の光りが差しこんでいる。

はつきりと正氣に戻って、小夜子は上体を起した。縄は解かれていたが、布切一枚許されていない。小夜子は、本能的に両手で乳房を抱き、両肢をひいて、体をちぢませる。そして、昨夜、自分の眼の前で行われたことは果して、この世の出来事なのかと、荒むしろの上に額を押しあて、体を小刻みに震わせるのであった。

ああ、これが夢であってほしい、と齒を噛み鳴らしながら、すすり泣きを始めた時、誰かが階段を降りて来る気配。はっとして、小夜子は泣き濡れた顔をあげる。

鬼源と銀子であった。

「ずいぶんとよく眠っていたわね。もうお昼近くなのよ」

銀子は格子の中から小夜子をのぞいて、白



い歯を見せた。

小夜子は、胸を必死に抱くようにして、後ずさりし、呪いとも、恨みともつかぬ瞳を銀子に向けるのだ。

「へへへ、昨夜は、ずいぶんと面白いものを見学したそうじゃねえか。大いに勉強になったろう」

鬼源がそういつて笑うと、

「一番面白い場面で、このお嬢さん、気を失ってしまったのよ。馬鹿ね。人がせつかく、いい所を見せてやろうと思ったのに——」

銀子はそういつて、鍵を差しこみ、牢舎の錠前を外しにかかるのだった。

「ち、近寄らないで、お願いです！」

小夜子は、ひきつったような顔して叫ぶのだった。

「何いつてんのよ。静子夫人やその他のスタッフは、もう一通り、朝の調教をすませてしまったのよ。一番おくらしているあんたが、のんきに朝寝なんかしていちや困るじゃないの。それに、今夜は、関西の大物がお越しになるんだからね」

銀子と鬼源は、ずかずか牢舎の中へ入って来ると、石のように身を硬化させる小夜子の肩に手をかけ、引き起すのだった。

「さ、来るんだよ。昨夜、あれだけのものを見せてもらえば、少しは度胸がついたろう」  
銀子と鬼源に引きずられるようにして小夜子は牢舎から出て行く。

「嫌っ嫌っ、ああ、お願い！」

小夜子は、駄々っ子ののように、首を振り、腰を振り、牢舎の扉にしがみつくようにして泣きじゃくるのであった。

調教するという事は、どういう事なのか。それは、昨夜、嫌というほど思い知らされた小夜子である。

屠殺場へ引き立てられるのを、こぼむ小羊のように小夜子は、泣き、わめき、悶えるのだったが、

「わざわざ俺が出向いて来てやったのに、手数をかけるとは何事だ」

鬼源は持前のガラガラ声をはりあげ、ぴしやりと、小夜子の白い頬をひっぱたくのである。

それで小夜子は、一気に体中の力が抜けてしまったよう鬼源や銀子に背を押されるとフラフラと夢遊病者のような足どりで、地下の階段を上り始めた。

鬼源と銀子が、小夜子を押し立てて行った所は、二階の廊下を二つほど曲った所の、一

番奥にある小さな部屋であった。恐らく、以前女中部屋として使用されていたものである。広さは四畳半、畳はすり切れ、天井も壁もどす黒く、長く使用されな粗末な空部屋であった。

それだけに小夜子は、その部屋に足を踏み入れた途端、何か、ぞっとするような陰惨な恐怖を感じて立ちすくんでしまうのだった。

「さ、ぐずぐずせずに入ったり、入ったり」

鬼源は、妙にとりすました顔つきで、小夜子を押しこむ。

「+体、な、なにをなさるおつもりなの」

小夜子は、両手を交叉するように胸の前で組み、両腿をびったり閉じ合わせて、その場へ身をかがめるのだった。そして、黒眼がちの美しい瞳に、恐怖と憎悪の色を一つにして浮かべ、歯を喰いしばった表情で、鬼源を見上げる。

鬼源も銀子も、しばらく何もいわず、ただニヤニヤとして、新鮮な気高い美しさをもつ深窓の令嬢を見下していたが、やがて、ポツツリ、

「ここで、女になってもらうぜ」

その意味がわかって、令嬢の美しい顔から一気に血の気が引く。

「社長は、なるだけ処女のままにしておく方が値打ちがあるとおっしゃるんだが、俺は反対だ。生娘のままだと、色々と調教がやり難いんだよ」

次に銀子が口を開いた。

「それにね。今朝方、貴女にとっては、すばらしいお婿さんが現れたのよ」

津村義雄——という名を銀子の口から聞いた途端、小夜子は、あっと声をあげ、ますます青ざめるのだった。

元、父親の会社にいた社員で、時価五百万円の宝石類を持逃げした男である。その事件の起る前から、義雄は、社長令嬢小夜子の美貌に心ひかれ、身の程知らず、恋文を出したり、小夜子のピアノのレッスンよりの帰りを待ち受けて、いい寄ったりする破廉恥な男であつた。勿論、小夜子にしても虫ずの走る思いで、そんな事を父親に告げ、父親も会社内で義雄に対し、その行為をいしめたのであるが、彼が会社の宝石を盗み出し、逐電したのも、そうして事に原因があるようである。

その津村義雄は、以後、大阪へ逃げ、岩崎親分の世話で、偽名を用い、金融ブローカーとして独立している、と銀子は、おろおろする小夜子の顔を面白そうに見て話し、

「岩崎親分一行の先発隊として、今朝、早くここへお着きになったのよ。親分が遊びに立廻る先の下見役といったところね。それで、貴女が、ここに居るのを知って、びっくり仰天、フッフ、どうしても貴女の最初の男にしてくれと、田代社長に頼み出したわけ。わかつたでしょ」

百万円からするダイヤを義雄から贈呈されれば、欲の皮の突っぱつて田代は、ウンといわねばならなくなったのだ。

「見知らぬ土地に長い間さまよつて暮らしていても一日とて、貴女の事、忘れた事はないといつてたわ。そういう人に与える事ができるというのは女として幸せじゃない」

銀子が、口を歪めてそういと、小夜子は、わつとばかりに、畳に顔を押しつけ、黒髪を左右へ振つて泣きじゃくるのだった。

「嫌です、そ、そんな事になる位なら、私、死、死んだ方が——」

「馬鹿野郎」

いきなり大声でどなった鬼源は、泣き伏している小夜子の所へ歩み寄り、足をあげて、小夜子のふくよかな尻を蹴り飛ばす。

「おめえの弟の文夫なんか、今じゃ、生まれ変わったような氣になつて、稽古にはげんでい

るんだぜ。その相方の美津子って娘は、おめえも知つてゐるだろうが、まだ女子高校生。花も羞じらう十八の乙女さ。それが、昨夜は、俺の徹底した調教を真夜中まで受けてよ、嬉し涙を流すところまで進境してゐるんだ。おめえ一人、何時までも強情はつてると、こつちにも考えがあるぜ」

と、蛇のような眼つきになり、威猛高にいうのであつた。

銀子が押入れを開けて、真新しい麻縄と水色の長い布を取り出す。

「間もなく、ここへ義雄さんがお見えになるのよ。さ、用意しましうね」

銀子は、泣き伏している小夜子のスベスベした白磁の背を指でつつく。鬼源は、それとは対照的に、メソメソした小夜子に業を煮やしてか、再び、大声をはりあげるのだった。

「メソメソせず、ちゃんと胸を張つて、両手は、しっかりうしろへ廻しなッ」

そして、小夜子の柔かい肩に手をかけ、ひっぱるようにして上体を起させる。

「早くしねえかッ」

再び、叱咤され、頬をたたかれ、小夜子は泣きじゃくりながら、乳房を抱いていた手をうしろへ廻し始めるのだった。



なれた手さばきで、鬼源は、小夜子の裸身に、ひしひしと縄をかけていく。

ああ、神様——と小夜子は、赤らんだ顔をねじ曲げるようにし、固く眼を閉ざすのであった。

水々しい白桃のような乳房の上下に数本、鬼源流のきびしい後手に緊縛された小夜子は二人に抱き起されるようにして、窓ぎわに立っている一本柱——それは、鬼源が、義雄の希望を聞いて、畳一枚をはがし、打ちつけておいたもので——それを背に、小夜子は、立位のまま、固くつなぎとめられてしまうのであった。

さてと、銀子は、水色の長い布を手にして

「久しぶりで対面する義雄さんの眼に、最初から何にもかも丸出しにさせておくのは可哀そうね。だから今日は特別サービス。お禪をしめさせてあげるわ」

小夜子は、びくっと体を痙攣さし、頑<sup>かたく</sup>なに両腿をぴたりと閉じ合わせる。

「あら、お禪は嫌いな。丸

出しの方がいいというのね」

小夜子は、可憐なくらいに、顔も首も燃えるように赤くしモジモジ身をもんでいる。

「じゃ、そのままにいるがいいわ。その方が手間がはぶけて、義雄さんも喜ぶと思うわ」  
せせら笑って、銀子が布を押入れにほりこもうとすると、

「お、お願いです」

小夜子は、眉を寄せた顔をねじるようにして、そらせながら、

「そ、それを——」

「しめたいというの？」

小夜子は、嫌や嫌やと首を振りながら、

「お、お腰に、巻いて下さい。お願いです」

と、蚊の鳴くような小さい声を出すのであった。

「馬鹿いうねえ。禪というもんは腰に巻くもんじゃねえ。ぴったりとしめるもんだ」

鬼源は、銀子から、布を受取ると、小夜子の横に立つ。

「さ、俺がしゃんとしめてやるぜ。少し、アソコを開いてみな」

と、鬼源は、小夜子の腰を平手打ちする。

「何も恥ずかしがる事はないじゃないの。静子夫人だって、禪をされると、とても喜ぶのよ」



銀子もそんな事をいい出し、鬼源と一緒に強引に禪をあてがう。

「あ、ああ——」

小夜子は、それが股間をくぐり始めると、再び、全身を包み出した屈辱感に、わなわな唇を震わせ、美しい額には、べっとりと脂汗をにじませている。

「まあ、よく似合うわよ、お嬢さん」

ようやく、小夜子の腰に、ぴったりと禪をしめあげた銀子と鬼源は、愉快そうに、腰がかがて眺めるのであった。

白露に育まれて造りあげられたような白磁の裸身、その処女雪のような新鮮な美しさとカーブをもつ下半身に、色あざやかな水色の禪が、腰もくびれよとばかり、キリキリと結びあげられたのである。

「どうでい、お嬢さん。禪のしまり具合は」

鬼源は、出歯をむき出して笑い、天然真珠のような輝きをもつ深窓の令嬢の全身を改めて、しげしげと見つめるのであった。

小夜子は、もう逃げも隠れもできないといった風情で、美しい眉を寄せ、固く眼を閉ざし、血の出るほどに唇を噛みしめている。

「義雄さんも、お嬢さんの禪姿を見て、きつと大喜びすると思うわ」

銀子は浮き浮きした調子でいい、部屋の隅にあった椅子を取って、それを小夜子の前に置くのだった。

「これから、この椅子に義雄さんが腰かけ、お嬢さんを、しみじみ口説くというわけよ。義雄さんは、岩崎親分の世話になったとはいえ、やくざじゃないんだからね。暴行というような形で、好きな女をものにしたくないとおっしゃる。納得の上、お嬢さんを女にした、という意向なの。どう、なかなかの紳士じゃないの」

そんな事を銀子がいった時、ノックの音。「津村義雄ですよ。もう入ってもいい頃だと思っんですが——」

かん高い声がドアの外から響いてきた。はっと小夜子は、全身を鋼鉄のように硬直させ、顔を横へそむける。

「どうぞ、お入りになって」

と、銀子がいうよりも早く、津村義雄はドアを押し開いて入ってきて、

「おお、小夜子さん」

と両手を広げ、まるで、三文オペラの役者のような仕草をするので、鬼源も銀子も顔を見合すのだった。

動作にしても、口のききかたにしても、お

かまのような所があり、実のところ、鬼源や銀子にとっては、あまり感じのいい男ではなかった。だが、会社の宝石をかすめ取ったり、関西方面へ逃走してからでも、詐欺、横領、インチキ賭博、それだけではなく、三四人のコルガールのひもになり、随分と女も泣かせてきたという前歴の持主であるから、一見薄馬鹿に見えるそうした動作や口のききかたは、自分の本性を隠すための欺瞞行為かも知れなかった。

「まあ、あられもない。お禪などはかされちゃって。お可哀そうに」

義雄は、小夜子の前に立つと、大仰に驚いて見せ、その次には、声を立てて笑い出す。「でも仕方がないわね。三年前、僕を袖にした罰が当たったわけよ。それにしても、何という美しいおっぱい、それに、このきれいな肢——」

美雄は、唾をのみこむようにして、小夜子の肌を手を触れようとする。

たまり兼ねたように、小夜子は激しく全身を揺さぶって、

「津、津村さん！」

悲痛な眼つきをして、小夜子は、義雄を睨むのだった。



「義雄といってよ。津村なんて、他人行儀な呼び方はやめて」

義雄は鼻に小じわを寄せて笑うのだった。

英国製のグレーの背広に、蝶ネクタイ、鼻の下にはチョビ髯を生やし、それで色男ぶっているつもりであろう。年は三十二三、青白んだ皮膚に外人のようなワシ鼻、赤い好色な感じの唇、どちらかといえば、美男の部類に入るのだろうが、それだけに、一層いやらしい虫ずの走るような感じがする。奇妙な女言葉やチョビ髯などが一層その感を深め、小夜子ならず銀子まで、嫌な顔をして義雄の方を眺めているのであった。

義雄は、ふと、戸口の所に突っ立っている鬼源と銀子の方を向いて、

「ここは僕達、さっきいったように水入らずでお話しがしたいのよ」

「ハイハイ、邪魔者は退散致しますわ」

銀子は鬼源をうながして、部屋を出ようとする。それを、義雄は、ちょっと、と呼び止めて、ポケットの中から、小さな真珠の指環を出すのであった。

「これね。つまらないものだけど、ほんの僕の気持」

そして、鬼源には、アメリカ製だという銀

色のライターを――。

「こりゃ、どうも――」

二人は、えびす顔になり、ペコペコ頭を下げ始める。

「あの、寝床をお作りしておきましょうか」

銀子は、ニコニコして、押入れを開け、夜具を鬼源と一緒に引っ張り出す。

「こういう事は、もっと、上等のお部屋でなさるべきだと思いますけどね」

銀子は、夜具を部屋の中央に敷きながら義雄の顔を見る。

「いや、こういう大金持のお嬢さんはね。充分贅沢にはなれているし、むしろ、こういう殺風景な部屋を寝室にした方が、大いに燃えて下さるものなのよ」

「へえ、そんなもんですかね」

薄い夜具の上には、赤い枕と青い枕が、ぴたり並んで置かれている。

ふと、それを眼にした小夜子は、キリキリと唇を噛みしめ、憎悪のこもった瞳を義雄に向けるのだった。

「じゃ、何か御用がありましたら、そのボタンを押して下さい。わっし達のいる溜り場のブザーが鳴るようになってますから」

と、鬼源は、揉み手するようにしている。

「では、悪いけど、一つ、先に用事を頼んでおこうか。持ってきて欲しいものがある」

義雄は、鬼源の耳に口を当てて何かさやき始める。

「へい、承知致しました」

鬼源はうなずいて、銀子と一緒に出て行きかけたが、ふと、小夜子の方に眼をやって、

「あまりお手数をかけるんじゃないねえぜ。今日の夕方、岩崎親分がお見えになるまでには、一人前の女になっておくんだ。わかったな」

鬼源と銀子がようやく部屋を出て行くと、義雄はほっとしたように、小夜子の前に置かれている椅子の上に腰をおろす。

「義、義雄さん。私を、私を、どうなさるつもりなの！」

「とぼけちゃ困るわよ。何もかも、小夜子さんは承知してる筈じゃないの。子供じゃあるまいし」

義雄は、夜具の上に並んだ枕を指さして、

「この意味がわからない程、小夜子さん。おネンネじゃないでしょ」

小夜子は、艶々した黒髪を狂ったように左右に振り始めた。

「後生ですっ、それだけは、それだけは、許して！」

「何いってんの。僕は、ここの社長に百万円からする宝石を差上げて、小夜子さんの体を今日の夕方まで貰い受けたのよ」

「お金なら、小夜子が、パパにお願いして、いくらでも——」

ハハハ、と義雄は、小夜子の泣き濡れた美しい瞳をのぞくように見て、笑い出す。

「一体、いくら僕に下さるというの。一千万それとも二千万。いっとくけど、僕は、ここにいる田代社長や森田親分なんかよりは、少しは頭が切れるわよ。貴女のパパは少くとも二億の資産は持っている。僕はその半分の一億、それだけは、どうしても頂戴するつもりなの」

そういう義雄の眼には、底知れぬ残忍なものが浮かんでいる。

小夜子は、慄然として、身を硬化させたまま、ペソをかくのを、必死でこらえるような表情で、義雄に視線を向けていた。

「それにはね。貴女の身柄を人質にして、ゆるするような子供じみた方法は駄目。貴女と僕とが結ばれて、つまり、結婚して、それをはっきり貴女のパパに承認させるのよ。そうすりゃ、貴女を熱愛しているパパは、何でも僕のいいなりにならねばなくなる。さしず

め僕は村瀬宝石商会の副社長といったところだわね」

ぬけぬけと、そんな事をいった義雄は、どんなもんだといわんばかりの顔つきで、煙草を口にするのであった。

小夜子は、義雄に対するたまらない憎悪感と嫌悪感で、火の玉のようなものがど元にこみあがってくる。

「は、はっきり申しますわ。私、貴方のような卑劣な人は大嫌い、顔を見るのさえ虫ずが走ります」

小夜子は、義雄の顔に唾でも吐きかけたい衝動にかられ、体を揺さぶるようにしていった。

だが、義雄は、それには答えず、のっそりと椅子から立上ると

「でも、小夜子さんの禪をしめたスタイル、可愛いなあ。内村病院の春夫君に一度見せてやりたいよ」

・内村病院の春夫とは、院長の息子で、自分も内科部長を担当している青年医師である。小夜子とは、三年にわたる交際、それが実り近く婚約か、という事がある週刊誌に出ていたのを義雄は読んでいたし、また、以前、小夜子と春夫が共にスポーツカーに乗り、楽し

く交際していたのを目撃していた。眉目秀麗の好青年で、白百合のように美しい小夜子とは似合いのカップルだったが、義雄がそれを見て、邪悪な嫉妬の炎を燃やした事は当然である。

春夫の名を義雄が口にしたので、小夜子はふと痛い所を突かれたような感じになって顔を伏せるのだった。

「ねえ、小夜子さん。こうなった今でも、やっぱり、内村春夫を愛している？」

義雄は、意地の悪い笑いかたをして、そして、小夜子の白い肩に手を乗せる。

嫌っ、と小夜子は身をよじらせ、精一杯の反抗を表情に出していった。

「あ、貴方には関係ない事ですわ。でも、はっきり申します。私、春夫さんを自分の夫に選ぶつもりです。貴方の指図は受けたくありません」

「馬鹿ね。御自分の置かれている今の状態をどう思っているの」

はっと小夜子は、顔をそむけ、口惜しげに唇を噛むのだった。

義雄のいう通りだ。自分は、今、この地獄屋敷に捕われの身、赤鬼青鬼のあく事を知らぬ責め拷問に、身を焼き亡ぼしていかなければ



らないのだ。

ハハハ、と義男は勝ち誇ったように笑う。

「僕が今、小夜子さんの肉体だけを奪うとしたら、そりゃ赤児の手をねじるより簡単よ。

僕の目的は、そんな飢えた狼のようなものじゃない。何とかして小夜子さんを、この地獄屋敷から救い出してあげたいのよ」

「そうした話し方をするのが義雄は得意なのであろう。自分は、小夜子だけではなく、この屋敷に捕われている美女達、それに文夫、その全部を救い出したいのだという意味の事を鼻をピクピク動かして、小夜子に話すのであった。

「文夫は、文夫は一体、どんな目に——」

小夜子は、気弱な眼差しを義雄に向けて、ふとためらいながら口を開くのだった。

何か弟の文夫の身に恐いことが起っている、それは周囲の空気から感じられたが、実際にそれを知らされるといふ事も小夜子は恐ろしいのである。悪魔達という調教という意味の恐ろしさ、それは昨夜、静子夫人に対する悪魔達の行為を見て、それが、この世の出来事とは思えぬぐらい惨憺なものであることがわかり、気を失ってしまったのであるが、文夫もそれに類似した残酷な責めを受けてい

るのではないかと想像できる。

「おや、文夫君が今、どういう調教を受けているのか、小夜子さん、知らないの」

義雄は、ニヤニヤ口元をくずして、ポケットから、数葉の写真をとり出す。

「昨夜、調教中、鬼源さんが撮ったものよ。あんまり、素ばらしいフोटなので五、六枚分けてもらったんだけどね」

義雄に鼻先へ押しつけられたその一枚へふと眼を向けた小夜子は、あっと声をあげ、電気に触れたように首をのけぞらせた。恐ろしい衝動に全身が揺さぶられ、吐き気さえ覚える小夜子である。

細いロープで、きびしく後手に縛りあげられている文夫が、マットの上に足を投げ出すようにして坐っている。その上に、これも、後手に縛りあげられている美津子が、ぴたりと乗っかり、その白い柔かそうな両肢は、文夫の胴をはさむようにしっかりと巻きつけて文夫の背で足首を交錯させているのだ。しかも、二人は、互にうっとり眼を閉ざし唇と唇を触れさせている。勿論、そこも、ぴたりと連結し、カメラのレンズにはっきりと収められているのだ。

「こういうのは、専門的というと、対向男女

坐位型というのだけど、こんな美男美女のものは始めて見たね。両方とも、縛られたままで演じてるってのも珍らしいけどさ」

「嫌っ、も、もう見せないで！」

義雄が、更に写真を小夜子の眼に近づけようとすると、小夜子は、狂ったように首を振り、遂に声を立てて泣き出してしまふのだった。

「文夫、ああ、文夫ちゃん」

文夫と美津子が、このような残忍な方法で日夜責められていたとは、小夜子は想像もしてなかった。正に、ここは、この世の地獄なのだ。

「今更、何も驚く事はないわよ」

義雄は写真をポケットにしまいながら、  
「文夫君も、美津子とかいう可愛い娘さんも、これからは秘密ショーのスター、秘密写真のモデルとして、今の鬼源という調教師に飼育されることになったのよ。どう。小夜子さんの決心一つで、僕は、この屋敷に捕われている人達全部を救い出す事が出来るんだけどな」

「——義雄さん」

小夜子は、美しいうるんだ黒眼を悲しげにしばたき、義雄の顔を見た。

「お願いです。遠山さんの奥様を始め、この屋敷に捕われている人達を救って上げて下さい。小夜子の一生のお願いです」

「では、僕の要求は聞き入れてくれるのね」

小夜子は、がっくりと首を垂れ、再び、肩を震わせて、すすり泣くのだった。

「お嫌なら、お嫌でもかまわないのよ。僕は自由を奪われている小夜子さんの体を散々おもちゃにし、あとは、この屋敷の人々に任すだけだから。小夜子さんは、弟の文夫君と一緒にスターの道を歩いていく事になるわけ」

義雄の要求を受け入れても、拒否しても、所詮、狼の餌食になる事には変りないのだ。

「小夜子は、小夜子は、一体、どうすれば、いいのですの」

小夜子は、うなだれたまま、涙声になっていうのだった。

「だから、いつてるじゃないの。小夜子さんは僕と正式に結婚するのよ。僕に対し、妻として、小夜子さんは永遠の愛を誓うのよ」

小夜子を妻にする——それは、自分を横領犯人として告訴した小夜子の父に対する復讐という意味もあるのだろう。義雄は、表情に闘魂のようなものをきつと浮かべ、すすり泣く小夜子の美しい横顔を睨んだが、すぐに顔

の筋肉を緩めて、

「こう見えても僕は紳士。暴行なんていう形で、小夜子さんを自分のものにしたくはないの。互に納得し合い、愛し合い、楽しい夫婦プレイに入りたいと思うのよ」

そして、義雄は、腕時計に眼をやって、

「さ、はつきり返事するのよ。僕の妻となつて、この屋敷から抜け出すか、それとも、このまま奴隷として暮すか。二つに一つ。もうすぐ鬼源さんが様子を聞きに、もう一度、こへやってくるのよ」

「もし、もし、小夜子が、貴方の妻になる事を、承知すれば——」

小夜子は、声を震わせながら、一体、どのようにして、この屋敷の捕われ人を救出するのです、と義雄に聞くのである。

「フフフ、ちゃんと聞いておかないと心配だつていうのだね。そんな事、簡単じゃない。

小夜子さんが僕の命ずる通りのことを柔順に行い、ここで、僕と夫婦の契りをしっかり結んでくれたなら、僕は田代社長に一千万のお金を積み、貴女を買いとってこの屋敷から一緒に出て行く。それから、電話で警察に知らせ、この田代一家は一斉検挙を受けるといわけよ」

義雄は、自分は小夜子のために、今まで、

危い橋を渡って稼いだ全財産を投入するだけではなく、田代社長を始め、今まで世話になった関西の岩崎親分まで裏切るのだ、と悲壮な覚悟をしたようないい方で、盛んに、かき口説くのであった。

「義、義雄さん」

小夜子は、光を失った空虚な瞳を開き、悲しげに義雄の方を見る。

「承知してくれるんだね。小夜子さん」

「そ、そのかわり——お願い、約束だけは、約束だけは——」

小夜子は、わなわな唇を震わせて、幾度も静子夫人や文夫、美津子達の救出を頼み、念を押す。

自分が犠牲になれば、日夜、地獄の苦しみを受けている静子夫人や美津子達全部を救う事が出来るのだと、小夜子は、屈辱の口惜し涙を流しつつ、悲痛な決心をしたのだ。恩を受けた遠山夫人や愛する弟を助けるために悪魔の生贄になる、きつと神様も哀れんで、大きな罪を犯す小夜子をお許し下さるに違いない。そう思うと、たまらなく胸がこみあげて来、涙はいくらでも眼からあふれ出る。

「僕だって男。約束は守るわよ。では、承知



してくれるのね、小夜子さん」

小夜子は、消え入るように、小さくうなずくのであった。

「おお、何たる感激、小夜子さん」

義雄は、大きく手を開けて、立縛りにされている小夜子を激しく抱きしめ、遮二無二、頬といわず、首筋といわず、乳房といわず唇

を当て、

「この柔かいおっぱいも、可愛いお臍も、美しい肢も、今日かぎり全部僕のもののよ。そ  
うだね、小夜子さん」

義雄は、齒の浮くような女性語を使いながら、唇を移向していき、ふっくらした両尻に手を廻して、優しく愛撫しながら、水色の布

## 現在発売中『限定版グラビア写真集』在庫案内

特アート紙或は上質紙に対する極鮮明なグラビア印刷の限定版写真集です。すべて未発表の文献的価値豊かな迫力のある傑作写真ばかりを集めました。印刷紙焼付のものが欲しいが、値段がかさむとおっしゃる方は、何をおいても、この限定版をお求め下さい。

女体緊縛グラフ集

〔豊満と清楚〕

一部一〇〇〇円（送共）略号「限二」

緊縛美女八十態〔美しき縛しめ〕 第四集

一部一〇〇〇円（送共）略号「美4」

〔女性刑罰拷問特集〕

日本版

一部一〇〇〇円（送共）略号「美5」

山原 清子『刺青の魅力を探ぐる』

一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

二女緊縛“女斗緊縛競艶写真特集”

一部一〇〇〇円（送共）略号「美8」

「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇

一部一〇〇〇円（送共）略号「美9」

写真集 〔責められる美女百態〕

一部一〇〇〇円（送共）略号「美10」

M写真集「女王様に飼育される日々」

一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎右に広告しました△限定版グラビア写真集△は、一般書店にては一切販売いたしません故どうか直接発行所の天星社宛代金を添えてお申込み下さるようお願いいたします

の上から口吻するのだ。

「あっ、嫌、嫌よ、義雄さん！」

小夜子は、不意をつかれたように狼狽し、逆上したが、義雄は、信じられない程の力で小夜子の腰を押さえこみ、激しい、熱い口吻を続けるのであった。

舌足らずの悲鳴をあげ、小夜子も、信じられないような力で腰を振り、義雄の口吻を振り切ろうとする。水色のややふくらみをもった布が義雄の唇をすりつける。それは義雄にとって、風に揺れる生あたたかな、分厚い花びらのような感触であった。

義雄は、あわてずにゆっくり吸いつづけ、やがて、静かに口を離すと、小夜子の、屈辱に歪んだ顔を面白そうに眺めながら、背後へ廻り、布の結び目をとき始める。

「こんな邪魔なものは、取っちゃおうね。小夜子さん」

「ああ—— 義雄さん」

小夜子は、耳たぶまで燃えるように赤くし嫌々と首を振ったが、支えを失った水色の布は、小夜子がびったりと閉じ合っている太腿の表皮をくすぐりながら、ズルズルと落下していくのであった。

（続く）